
深 谷 市

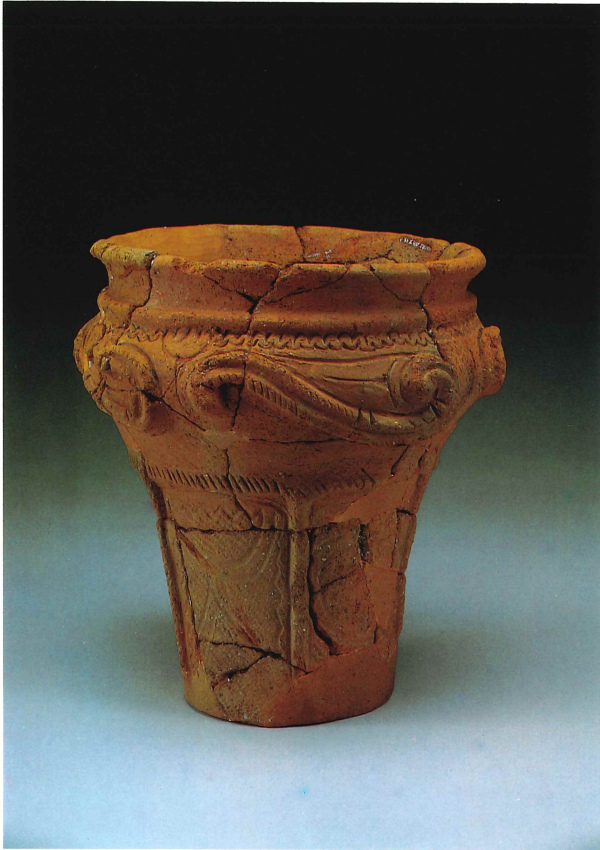
堀 東 / 城 西 Ⅱ

福川河川改修事業関係埋蔵文化財発掘調査報告

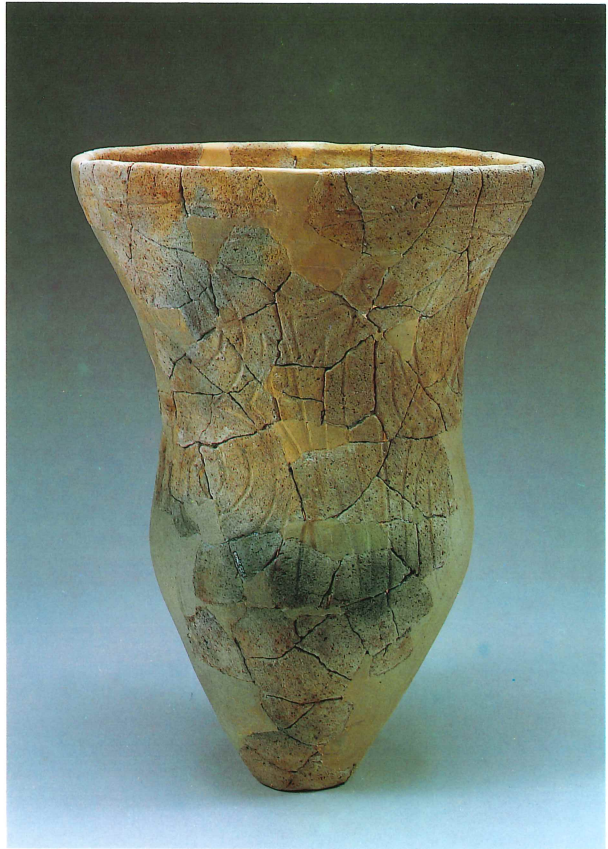
— Ⅲ —

2 0 0 0

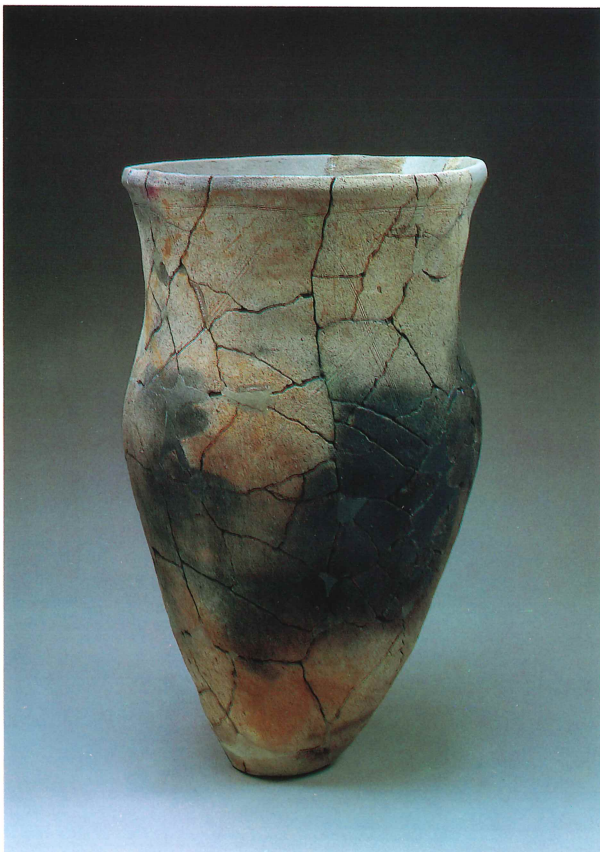
財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



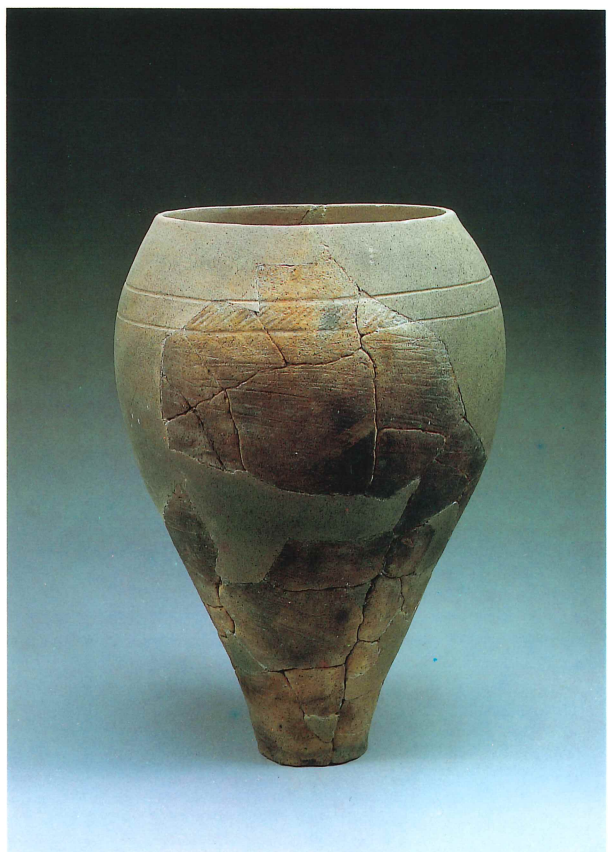
堀東遺跡第1号集石出土土器



堀東遺跡第7号住居跡出土土器



堀東遺跡第20号土壙出土土器



堀東遺跡O-38グリッド出土土器



堀東遺跡第1号集石遺物出土状況



堀東遺跡第20号土壙遺物出土状況

序

岡部町岡を源流とする福川は、櫛引台地の北縁を東流し、深谷市街の北から妻沼低地を経て、行田市酒巻で利根川に注ぎます。田園地帯を流れる立地から、流域の田畑を潤すかんがい用の水資源として活用されてきましたが、川幅の狭い小河川であるため、大雨の際には、しばしば洪水の災禍がもたらされました。

埼玉県では、水環境の保全・再生、水資源の開発と確保などととも、災害に強い地域づくりをめざす総合的な治水対策を推進しています。その一環として、この福川においても河川改修事業が実施され、水害の未然防止が図られています。

堀東遺跡と城西遺跡は、事業予定地内事前試掘調査によって所在が確認されました。取扱いについては、関係諸機関が慎重に協議を重ねた結果、記録保存の措置が講じられることとなり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整に基づき、埼玉県土木部河川課の委託を受けて、当事業団が発掘調査を実施しました。

その結果、堀東遺跡では、縄文時代中期から後期にわたる住居跡・土壇・集石などの遺構と多くの遺物、また弥生時代前期末から中期にかけての遺物が発見されました。堀東遺跡における発見は、低地における縄

文時代集落の実態を明らかにすると共に、関東における初期弥生時代究明に、新たな資料をもたらしました。

また、城西遺跡では、平安時代の住居跡・掘立柱建物跡などの遺構が検出され、平成5年度の調査で発見された集落址の広がりが確認されました。

本書は、これらの成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また、埋蔵文化財の普及啓発の参考資料として、広く活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書の刊行にわたり、多大な御指導、御協力をいただいた埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、埼玉県土木部河川課、深谷市教育委員会、並びに地元関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成12年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井 桂

例言

1. 本書は、埼玉県深谷市に所在する堀東遺跡と城西遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番および発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

堀東遺跡（HRHGS）
深谷市大字伊勢方133番地他
平成9年2月10日付け教文第2-198号
平成9年4月1日付け教文第2-7号

城西遺跡（JNS）
深谷市大字原郷536番地他
平成10年11月2日付け教文第2-131号
3. 発掘調査は、福川河川改修工事にもなう事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県土木部河川課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 本事業は、第I章の組織により実施した。本事業のうち、堀東遺跡の発掘調査については、平成8年12月1日から平成9年3月31日までを黒坂禎二、新宅輝久が、平成9年4月1日から平成9年6月15日および平成9年11月1日から平成10年3月31日までを金子直行、佐々木健策が担当し、実施した。城西遺跡の発掘調査は、磯崎一、石坂俊郎が担当し、平成10年11月1日から平成10年3月31日まで実施した。
5. 基準点測量および航空写真撮影は株式会社日成プランに委託した。巻頭写真は小川忠博氏に委託した。
6. 発掘調査における写真撮影は、各担当調査員が行い、遺物写真撮影は大屋道則が行った。
7. 出土品の整理および図版の作成は石坂が行い、縄文土器は金子直行が、石器については上野真由美が分担した。本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、Ⅲ-1・2・3・4、Ⅳ-2のうち縄文土器に関する記述とV-1を金子、同じく石器については上野、その他は石坂が行った。
8. 本書の編集は、石坂があたった。
9. 本書にかかる資料は、平成12年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。
10. 本書の作成にあたり、弥生土器については、青木克尚、安藤広道、石川日出志、大島慎一、書上元博、谷口肇の各氏から多くの御教示をいただいた。また墨書土器の文字解釈にあたっては、宮瀧交二氏に御協力いただいた。記して謝意を表するものである。

凡例

1. 挿図中のX、Yによる座標表示は、国家標準直角座標第IX系に基づく座標値である。方位は、すべて座標北を指す。
2. グリッドは国家標準直角座標に基づいて設定し、10×10m方眼である。
3. 遺構の表記記号は次のとおりである。
S J…住居跡 S B…掘立柱建物跡 S C…集石
S K…土壇 S D…溝跡 S T…墳墓 P…ピット
4. 本書の遺構番号は、調査時に使用したものと異なるものが多い。堀東遺跡については、欠番を整理した上で分布に沿って順列を整えた。また城西遺跡については、平成5年度調査からの連番に改めた。新旧番号の対照については、Ⅲ-2・3・4、Ⅳ-2において、名称のあとに<新番号(旧番号)>の様式で表記した。

5. 挿図の縮尺は、以下を基本とする。例外もあるの
で表示されたスケールに注意されたい。

遺構図 1/60

遺物図 1/4、1/3

6. 挿図中のスクリーントーンは、以下の各事項を表す。



地山



燃烧面

7. 遺物の色調は、新版標準土色帳（農林水産省水産技術会議事務局監修1994年版）に準じて記述した。
8. 第3図作成にあたっては、以下の地図を使用した。
国土地理院1/25000地形図「本庄」・「深谷」

目次

口絵

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	(1) 竪穴住居跡	83
1. 調査に至るまでの経過	1	(2) 土壌	83
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	(3) 溝跡	86
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	3	(4) 古墳時代遺物集中部	89
II 遺跡の立地と環境	5	(5) 遺構外出土の遺物	90
III 堀東遺跡	8	5. 遺構外出土の石器	96
1. 遺跡の概要	8	IV 城西遺跡	105
2. 1～6区の遺構と遺物	15	1. 遺跡の概要	105
(1) 竪穴住居跡	15	2. 遺構と遺物	109
(2) 集石	18	(1) 竪穴住居跡	109
(3) 土壌	32	(2) 掘立柱建物跡	111
(4) 溝跡	34	(3) 火葬墓	116
(5) 遺構外ピット	36	(4) 溝跡	116
(6) 遺構外出土の遺物	37	(5) 土壌	119
3. 7～11区の遺構と遺物	40	(6) 遺構外ピット	120
(1) 竪穴住居跡	40	(7) 遺構外出土の遺物	123
(2) 土壌	47	V 調査の成果	124
(3) 遺構外ピット	58	1. 堀東遺跡の縄文時代について	124
(4) 遺構外出土の遺物	59	2. 堀東遺跡出土の弥生土器について	134
4. 12～18区の遺構と遺物	83		

挿 図 目 次

第1図	埼玉県の地形	5	第36図	第5号住居跡出土遺物(2)	44
第2図	周辺の関連遺跡	7	第37図	第5号住居跡出土遺物(3)	45
第3図	堀東遺跡の範囲と調査区位置図	9	第38図	第6号住居跡と出土遺物	46
第4図	調査区配置図(1)	10	第39図	7~11区土壌	50
第5図	調査区配置図(2)	11	第40図	7~11区土壌出土遺物	51
第6図	調査区詳細図(1)	12	第41図	第17~19号土壌周辺遺物	52
第7図	調査区詳細図(2)	13	第42図	第17号土壌出土遺物	53
第8図	調査区詳細図(3)	14	第43図	第18号土壌出土遺物	54
第9図	第1号住居跡	15	第44図	第19号土壌出土遺物	55
第10図	第1号住居跡出土遺物	16	第45図	第17~19号土壌周辺遺物	56
第11図	第2号住居跡と出土遺物	17	第46図	7~11区遺構外ピット	58
第12図	集石分布図	18	第47図	7~9区遺構外出土遺物(1)	60
第13図	第1号集石と出土遺物	19	第48図	7~9区遺構外出土遺物(2)	61
第14図	第2号集石と出土遺物	20	第49図	7~9区遺構外出土遺物(3)	62
第15図	第3号集石と出土遺物(1)	21	第50図	7~9区遺構外出土遺物(4)	63
第16図	第3号集石出土遺物(2)	22	第51図	11区遺構外出土遺物(1)	65
第17図	第3号集石出土遺物(3)	23	第52図	11区遺構外出土遺物(2)	66
第18図	第4号集石と出土遺物	24	第53図	11区遺構外出土遺物(3)	67
第19図	第5号集石と出土遺物	25	第54図	11区0-38グリッド弥生土器出土状況	70
第20図	第6号集石と出土遺物(1)	26	第55図	11区遺構外出土遺物(4)	73
第21図	第6号集石出土遺物(2)	27	第56図	11区遺構外出土遺物(5)	74
第22図	第7号集石と出土遺物	28	第57図	11区遺構外出土遺物(6)	75
第23図	第8号集石(1)	29	第58図	11区遺構外出土遺物(7)	76
第24図	第8号集石出土遺物(2)	30	第59図	11区遺構外出土遺物(8)	77
第25図	第8号集石出土遺物(3)	31	第60図	11区遺構外出土遺物(9)	78
第26図	1~6区土壌と出土遺物	32	第61図	11区遺構外出土遺物(10)	79
第27図	第1号土壌出土遺物	33	第62図	11区遺構外出土遺物(11)	80
第28図	第1~3号溝跡	35	第63図	11区遺構外出土遺物(12)	81
第29図	第4号溝跡	36	第64図	11区遺構外出土遺物(13)	82
第30図	1~6区遺構外ピット	37	第65図	第7号住居跡と出土遺物(1)	84
第31図	1~6区遺構外出土遺物(1)	38	第66図	第7号住居跡出土遺物(2)	85
第32図	1~6区遺構外出土遺物(2)	39	第67図	12~18区土壌	86
第33図	第3号住居跡と出土遺物	41	第68図	20・23区土壌出土遺物	87
第34図	第4号住居跡と出土遺物	42	第69図	第5~7号溝跡	88
第35図	第5号住居跡と出土遺物(1)	43	第70図	古墳時代出土遺物	89

第71図	12～14区遺構外出土遺物（1）	92	第86図	第7・8号住居跡と出土遺物	110
第72図	12～14区遺構外出土遺物（2）	93	第87図	第4号掘立柱建物跡	112
第73図	15～17区遺構外出土遺物（1）	94	第88図	第4・5号掘立柱建物跡	113
第74図	15～17区遺構外出土遺物（2）	95	第89図	第6・7号掘立柱建物跡	114
第75図	遺構外出土石器（1）	98	第90図	第8号掘立柱建物跡と掘立柱建物跡出土遺物	115
第76図	遺構外出土石器（2）	99	第91図	第1号火葬墓	116
第77図	遺構外出土石器（3）	100	第92図	第4・6号溝跡	117
第78図	遺構外出土石器（4）	101	第93図	第3・5・7号溝跡	118
第79図	遺構外出土石器（5）	102	第94図	土壌	119
第80図	遺構外出土石器（6）	103	第95図	第3号土壌出土遺物	120
第81図	遺構外出土石器（7）	104	第96図	遺構外ピット	122
第82図	城西遺跡の範囲と調査区位置図	106	第97図	第15号ピットおよび遺構外出土遺物	123
第83図	調査区配置図	107	第98図	堀東遺跡地点別時期別分布図	125
第84図	西調査区詳細図	108			
第85図	第6号住居跡と出土遺物	109			

図 版 目 次

図版1	8～10区全景（北から）	第1号集石完掘状況
	15～18区全景（北から）	第2号集石
図版2	1区全景（東から）	図版10
	2・3区全景（西から）	第3号集石
図版3	4・5区全景（西から）	第4号集石
	6区全景（東から）	第6号集石最上面
図版4	7区全景（西から）	図版11
	8～10区全景（北西から）	第6号集石第2面
図版5	11区全景（西から）	第6号集石第3面
	15・16区全景（北西から）	第6号集石第4面
図版6	第1号住居跡	図版12
	第2号住居跡	第6号集石完掘状況
	第3号住居跡	第1号溝跡
図版7	第5号住居跡	第4号溝跡
	第5号住居跡	図版13
	第6号住居跡	第5・6号溝跡
図版8	第6号住居跡埋甕炉	4区噴砂
	第7号住居跡	11区遺物出土状況
	第1号集石	図版14
図版9	第1号集石	11区弥生土器（第55図－194）出土状況
		11区弥生土器（第56図－195）出土状況
		16区古墳時代遺物集中部
		図版15
		第17号土壌遺物出土状況
		第18号土壌遺物出土状況
		第18号土壌周辺遺物出土状況

図版16	第1号土壙	F-31グリッド (第49図-74)
	第2号土壙	O-38グリッド (第56図-203)
	第4号土壙	O-38グリッド (第57図-206)
	第5号土壙	N-37グリッド (第57図-207)
	第6号土壙	O-38グリッド (第64図-592・591)
	第7号土壙	図版23 第1号住居跡 (第10図)
図版17	第9号土壙	第1号住居跡 (第10図)
	第8号土壙	図版24 第2号住居跡 (第11図)
	第10号土壙	・第3号住居跡 (第33図)
	第12号土壙	第4号住居跡 (第34図)
	第13号土壙	・第6号住居跡 (第38図)
	第14号土壙	図版25 第5号住居跡 (第35・36図)
図版18	第15号土壙	第5号住居跡 (第36図)
	第17号土壙	図版26 第7号住居跡 (第65・66図)
	第18号土壙	第3号集石 (第15・16図)
	第19号土壙	図版27 第4号集石 (第18図)
	第20号土壙	第5号集石 (第19図)
	第21~24号土壙	・第6号集石 (第20図)
図版19	第5号住居跡 (第35図-2)	図版28 第8号集石 (第24図)
	第6号住居跡 (第38図-1)	第8号集石 (第24・25図)
	第3号集石 (第15図-1)	図版29 第1号土壙 (第26図)
	第3号集石 (第15図-2)	・第8・9・14号土壙 (第40図)
	第3号集石 (第15図-3)	・第10号土壙 (第45図-39)
	第6号集石 (第20図-1)	第12号土壙 (第40図)
図版20	第8号集石 (第24図-2)	図版30 第13・15号土壙 (第40図)
	第8号集石 (第24図-1)	・第19号土壙 (第44図)
	第1号土壙 (第27図-1)	第17号土壙 (第42図)
	第1号土壙 (第27図-2)	図版31 第18号土壙 (第43図)
	第17号土壙 (第42図-1)	・第20・23号土壙 (第68図)
	第18号土壙 (第43図-1)	1~6区遺構外 (第31図)
図版21	第18号土壙 (第43図-3)	図版32 1~6区遺構外 (第31図)
	第18号土壙 (第43図-4)	1~6区遺構外 (第32図)
	第18号土壙 (第43図-5)	図版33 7~9区遺構外 (第47図)
	第19号土壙 (第44図-1)	7~9区遺構外 (第47図)
	第19号土壙 (第44図-2)	図版34 7~9区遺構外 (第48図)
	第19号土壙 (第44図-4)	7~9区遺構外 (第48図)
図版22	B-14グリッド (第31図-18)	図版35 7~9区遺構外 (第49図)

	7～9区遺構外 (第49・50図)		遺構外出土石器 (第75～77図)
図版36	第17～19号土壌周辺遺物集中部 (第45図)	図版51	遺構外出土石器 (第79・80図)
	11区遺構外 (第51図)		遺構外出土石器 (第76図)
図版37	11区遺構外 (第51図)	図版52	第1号集石出土土器展開写真 (第13図-1)
	11区遺構外 (第52図)		第7号住居跡出土土器展開写真 (第66図-6)
図版38	11区遺構外 (第52図)	図版53	城西遺跡空中写真
	11区遺構外 (第53図)		西調査区全景 (西から)
図版39	12～14区遺構外 (第71図)	図版54	第4号掘立柱建物跡
	12～14区遺構外 (第71図)		第5号掘立柱建物跡
図版40	12～14区遺構外 (第72図)		第6号掘立柱建物跡
	15～17区遺構外 (第73図)	図版55	第6号住居跡
図版41	15～17区遺構外 (第73・74図)		第7号住居跡
	15～17区遺構外 (第74図)		第8号住居跡
図版42	11区遺構外 (第55図-192)	図版56	第6号住居跡掘り方
	11区遺構外 (第55図-193・第56図-195・201)		第7号住居跡完掘状況
図版43	11区遺構外 (第56図-200)		第8号住居跡完掘状況
	11区遺構外 (第58図)	図版57	第3号溝跡
図版44	11区遺構外 (第58・59図)		第4号溝跡
	11区遺構外 (第59図)		西調査区 (南から)
図版45	11区遺構外 (第59図)	図版58	第5号溝跡
	11区遺構外 (第60図)		第6号溝跡
図版46	11区遺構外 (第60図)		第7号溝跡
	11区遺構外 (第61図)	図版59	第1号火葬墓
図版47	11区遺構外 (第61図)		第3号土壌
	11区遺構外 (第62図)		第4号土壌
図版48	第5号住居跡出土石器 (第37図)		第5号土壌
	第3号集石出土石器 (第16・17図)		第6・7号土壌
図版49	第5・6号集石出土石器 (第19・21図)		第8号土壌
	遺構外出土石器 (第75図)	図版60	第15号ピット遺構外 (第97図)
図版50	遺構外出土石器 (第81図)		第4号掘立柱建物跡出土刀子 (第90図)

I 発掘調査の概要

1. 調査に至るまでの経過

埼玉県では、「環境優先・生活重視」、「埼玉の新しいくづくり」を基本理念として、豊かな彩の国づくりを推進するため、種々の施策を講じている。水環境の保全・再生に関しても河川流域を一つの圏域とした総合的な水環境の整備を進めている。また、まち・安全・彩の国の実現に向けて、氾濫を防ぐ河川整備の推進に努めている。

不慮の水害から人命及び財産を守るために治水対策を進める必要があり、福川の河川改修もこうした治水事業の一環として計画されたものである。

福川の河川改修に先立ち、埋蔵文化財の所在及びその取扱いについて、文化財保護課長あて照会があった。それに対し、平成5年3月29日付け教文第1361号で、次の埋蔵文化財包蔵地の所在等について回答した。

名称 (No)	種別	時代
八日市遺跡 (60-259)	集落跡	古墳～平安
城西遺跡 (60-260)	集落跡	古墳～平安

城西遺跡第1次調査は、平成5年度に実施された。

次いで、平成6年5月10日付け河第78号で、埋蔵文化財の所在及びその取扱いについて、照会があった。それに対して文化財保護課は、平成6年6月20日付け教文第311号で、概ね次のように回答した。

1 埋蔵文化財の所在

名称	種別	時代	所在地
深谷市 No. 144遺跡 (60-144)	集落跡	古墳・奈良 平安	深谷市田谷
深谷市 No. 146遺跡 (60-146)	集落跡	縄文	深谷市伊勢方
岡部条里遺跡 (60-122)	集落・水 田跡	古墳・奈良 平安	岡部町普濟寺樋詰

2 取扱い

上記の埋蔵文化財包蔵地は現状保存することが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状変更する場合は、事前に文化財保護法第57条の3の規定に基づき、文化庁長官あての発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施してください。

なお、発掘調査の実施については当課と別途協議してください。

福川河川改修についても調整を重ねたが、事業の計画変更が不可能であることから、造成地区について記録保存の措置を講ずることとした。文化財保護課ではやむを得ず発掘調査する部分について、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団に発掘調査を依頼した。

調査は平成8～10年度の3年にわたって行われた。財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団から文化財保護法にもとづき、文化庁長官あてに埋蔵文化財発掘調査届が提出され、それに対する指示通知及び発掘調査期間は以下のとおりである。

堀東（平成8年度）

調査期間：平成8年12月1日～平成9年3月31日

指示通知：平成9年2月10日付け教文第2-198号

同（平成9年度）

調査期間：平成9年4月1日～6月15日

平成9年11月1日～平成10年3月31日

指示通知：平成9年4月1日付け教文第2-7号

城西（2次）（平成10年度）

調査期間：平成10年11月1日～12月31日

指示通知：平成10年11月2日付け教文第2-131号
(文化財保護課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査

堀東遺跡の発掘調査は、平成8年12月1日から平成9年6月15日、平成9年11月1日～平成10年3月31日にかけて実施した。調査区は福川の両岸に沿って18地点に分かれ、西から順に1～18区と呼称する。調査面積は6150m²である。

平成8年度は、戸森前遺跡の調査に引き続き、田中橋の工事に先立ち6区から着手、次いで7区を精査しこれを終了した。

平成9年度は、1区を皮切りに順に東に向かって調査を進めた。5月は4区の集石群を精査し、同区の調査後、調査区への浸水が恒常化する農繁期を避けるため、6月15日に前半の予定を終えた。後半は11月1日から開始し、5区の調査に着手、1月は8区、2月は11区の遺構を精査した。3月には最も東に位置する16～18区を精査し、3月18日、委託による航空写真撮影を実施した。発掘・記録作業を終了後、3月末日をもって調査を終了した。

城西遺跡の発掘調査は、平成10年11月1日から平成10年12月31日にかけて実施した。調査面積は1500m²である。

11月当初現場事務所を設置し、城西橋北詰の西調査区から重機による表土掘削を行った。表土除去後、人力による遺構確認を行い、並行して委託による基準点測量を実施した。

11月中旬から、竪穴住居跡、掘立柱建物跡等の遺構を発掘するとともに、実測、写真撮影等の記録作業を行い、下旬には、並行して東調査区についても精査に着手した。

発掘作業に目処がついた12月4日、委託による航空写真撮影を実施した。

12月下旬、記録作業終了に伴い除去した表土を現場に戻し、重機で填圧しながら整地した。同時に現場事務所の撤収と器材の伴出を行い、12月末日をもって現地調査を終了した。

整理・報告書刊行

整理事業は、平成11年7月1日から平成12年3月31日まで実施した。

平成11年7月上旬、遺物の水洗・注記・遺構図面の整理を開始した。遺物については、水洗・注記が済み次第、順次接合、復原、実測を行った。

9月上旬、遺物の復原、実測と並行して、遺構・遺物図面のトレースを開始した。

10月上旬、挿図の版組を行い、同月下旬からは並行して割付けと原稿執筆を行った。

12月3日、遺物の委託写真撮影を行い、同月下旬には他の遺物について写真撮影を行った。

平成12年2月上旬、入札を経て、校正作業を行い、3月末に本書を刊行した。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査 (平成8年度)

理 事 長	荒 井 桂	主 任	菊 池 久
副 理 事 長	富 田 真 也	庶 務 課 長	依 田 透
専 務 理 事	吉 川 國 男	主 査	西 沢 信 行
常務理事兼管理部長	稲 葉 文 夫	主 任	長 滝 美智子
理 事 兼 調 査 部 長	小 川 良 祐	主 任	腰 塚 雄 二

管理部

庶 務 課 長
主 査
主 任
主 事
専門調査員兼経理課長
主 任
主 任
主 任

依 田 透
西 沢 信 行
長 滝 美智子
菊 池 久
関 野 栄 一
江 田 和 美
福 田 昭 美
腰 塚 雄 二

調査部

調 査 部 副 部 長
調 査 第 三 課 長
主 任 調 査 員
調 査 員

今 泉 泰 之
浅 野 晴 樹
金 子 直 行
佐々木 健 策

(平成10年度)

理 事 長
副 理 事 長
常務理事兼管理部長

荒 井 桂
飯 塚 誠一郎
鈴 木 進

調査部

調 査 部 副 部 長
調 査 第 一 課 長
主 任 調 査 員
調 査 員

高 橋 一 夫
坂 野 和 信
黒 坂 禎 二
新 宅 輝 久

管理部

専門調査員兼経理課長
主 任
主 任
主 任
庶 務 課 長
主 査
主 任
主 任

関 野 栄 一
江 田 和 美
福 田 昭 美
菊 池 久
金 子 隆
田 中 裕 二
長 滝 美智子
腰 塚 雄 二

(平成9年度)

理 事 長
副 理 事 長
専 務 理 事
常務理事兼管理部長
理 事 兼 調 査 部 長

荒 井 桂
富 田 真 也
塩 野 博
稲 葉 文 夫
梅 沢 太 久 夫

調査部

調 査 部 長
調 査 部 副 部 長
調 査 第 一 課 長
統 括 調 査 員
主 任 調 査 員

谷 井 彪
水 村 孝 行
井 上 尚 明
磯 崎 一
石 坂 俊 郎

管理部

専門調査員兼経理課長
主 任
主 任

関 野 栄 一
江 田 和 美
福 田 昭 美

(2) 整理・報告書刊行 (平成11年度)

理 事 長	荒 井 桂
副 理 事 長	飯 塚 誠一郎
常務理事兼管理部長	広 木 卓

管理部

管理部副部長兼經理課長	関 野 栄 一
主 任	福 田 昭 美
主 任	腰 塚 雄 二
主 任	菊 池 久
庶 務 課 長	金 子 隆
主 査	田 中 裕 二
主 任	江 田 和 美
主 任	長 滝 美智子

資料部

資 料 部 長	高 橋 一 夫
専門調査員兼資料部副部長	石 岡 憲 雄
専 門 調 査 員	市 川 修
主 任 調 査 員	石 坂 俊 郎

II 遺跡の立地と環境

堀東遺跡、城西遺跡が所在する深谷市域は、市街地を含む南一帯が櫛引台地、その北部一帯は妻沼低地に含まれ、北限は利根川に接している。

櫛引台地は、荒川により形成された荒川扇状地が侵食されてきた標高50～80mの洪積台地である。寄居町域を扇頂とし、二つの段丘面すなわち西の櫛引面と、一段低い東の寄居面から成る。その中間を唐沢川が流れている。

妻沼低地は利根川、荒川によって形成された沖積低地である。自然堤防と荒川新扇状地に由来する微高地、後背湿地と旧河道から成り、東は加須低地に続く。

両遺跡は、この2大別される地形の境界付近に位置しており、堀東遺跡は低地の微高地上、城西遺跡は台地縁部から末端にかけて立地する。

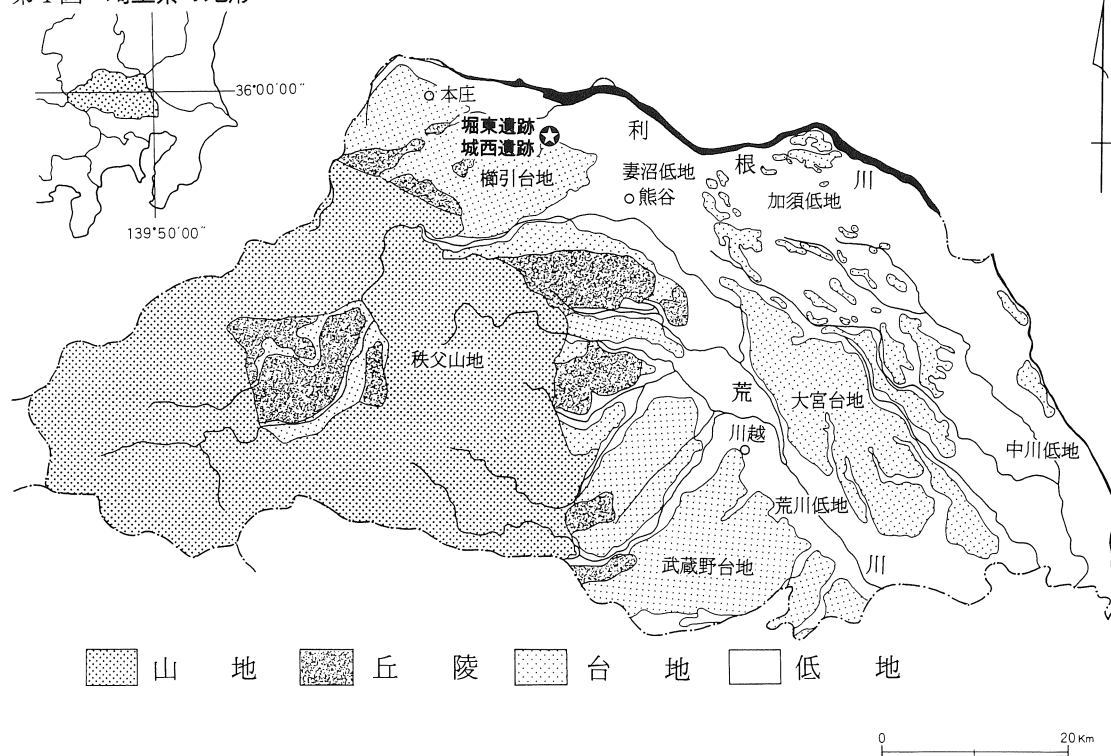
両遺跡周辺には「大塚島」、「矢島」などの地名が分布し、低地中に微高地が島のごとく散在する景観を思い起こさせる。

もっとも一帯にかけては、19世紀末以来のレンガ生産にともなう粘土採取、あるいは土地改良事業など農・工にわたる開発によって、台地縁部と微高地は広範に削平を被っている。今日の低平で単調な風景は、より起伏を残していたであろう本来の自然地形とは、やや異なるものとみるべきだろう。

周辺の遺跡分布については、堀東遺跡の内容に関連して縄文時代中期から後期、弥生時代、古墳時代前期、城西遺跡に関連して奈良・平安時代に関連するものを重点的にとりあげて概観したい。

深谷市域の台地上では、縄文時代中期後半から後期前半にかけて遺跡数が増大することが知られており、分布は谷筋から縁辺部に集中する傾向がうかがえる。それらのうち最大規模とみられるのは小台遺跡（14）である。深谷市教育委員会等によって数次にわたり発掘調査が実施されており、中期中葉から後期前葉を主体とする、一帯における中核的集落のひとつと位置づ

第1図 埼玉県の地形



けられている。また同遺跡の周辺には、分布調査によって中期から後期の遺跡が密に分布する状況が明らかにされている。台地上では、桜ヶ丘組石遺跡（13）が比較的早くから知られているほか、出口遺跡（7）、萱場松原遺跡（8）、根岸遺跡（15）などで住居跡が発見され、集落の一部が明らかになっている。

一方低地では、明戸東遺跡（16）で後期前葉から中葉の住居跡9軒が発見されているほか、本郷前東遺跡（12）、原遺跡（19）、上敷免遺跡（11）などで遺構、遺物が確認されている。

弥生時代前期末から中期前半にわたる、関東における初期弥生土器の出土が知られる遺跡は、現状では妻沼低地一帯から群馬県南西部にかけての一帯に集中的に分布している。

深谷市域周辺では、前期に遡る遺跡として岡部町四十坂遺跡（1）が著名である。また、上敷免遺跡では、包含層からではあるが縄文時代晩期末から弥生時代初頭の土器が多量に出土しており、その中から遠賀川式土器と推定される壺破片が見出された。初期弥生遺跡の分布に特徴づけられる当地域の歴史的環境を象徴する事例となっている。

中期前半では、再埋葬が発見された遺跡として上敷免遺跡、熊谷市横間栗遺跡（23）、同飯塚南遺跡（26）が知られており、妻沼町飯塚遺跡（25）も、掘削作業時の不時発見だがその可能性が指摘されている。堀東

遺跡の東2 kmに位置する上敷免森下遺跡（9）でも土器が出土している。中期後半にかかる遺跡としては、宮ヶ谷戸遺跡（17）、清水上遺跡（21）などがあり、上敷免遺跡、熊谷市関下遺跡（24）では住居跡が発見されている。

後期の遺跡について付言しておく。遺跡数は少ないのが現状だが、明戸東遺跡では吉ヶ谷式土器を伴う16軒の住居跡が発見され、低地部における吉ヶ谷式集落の実態が明らかにされた。妻沼低地が吉ヶ谷式集落の主体的分布域に含まれる可能性を示唆しており、今後発見例の増加が期待される。

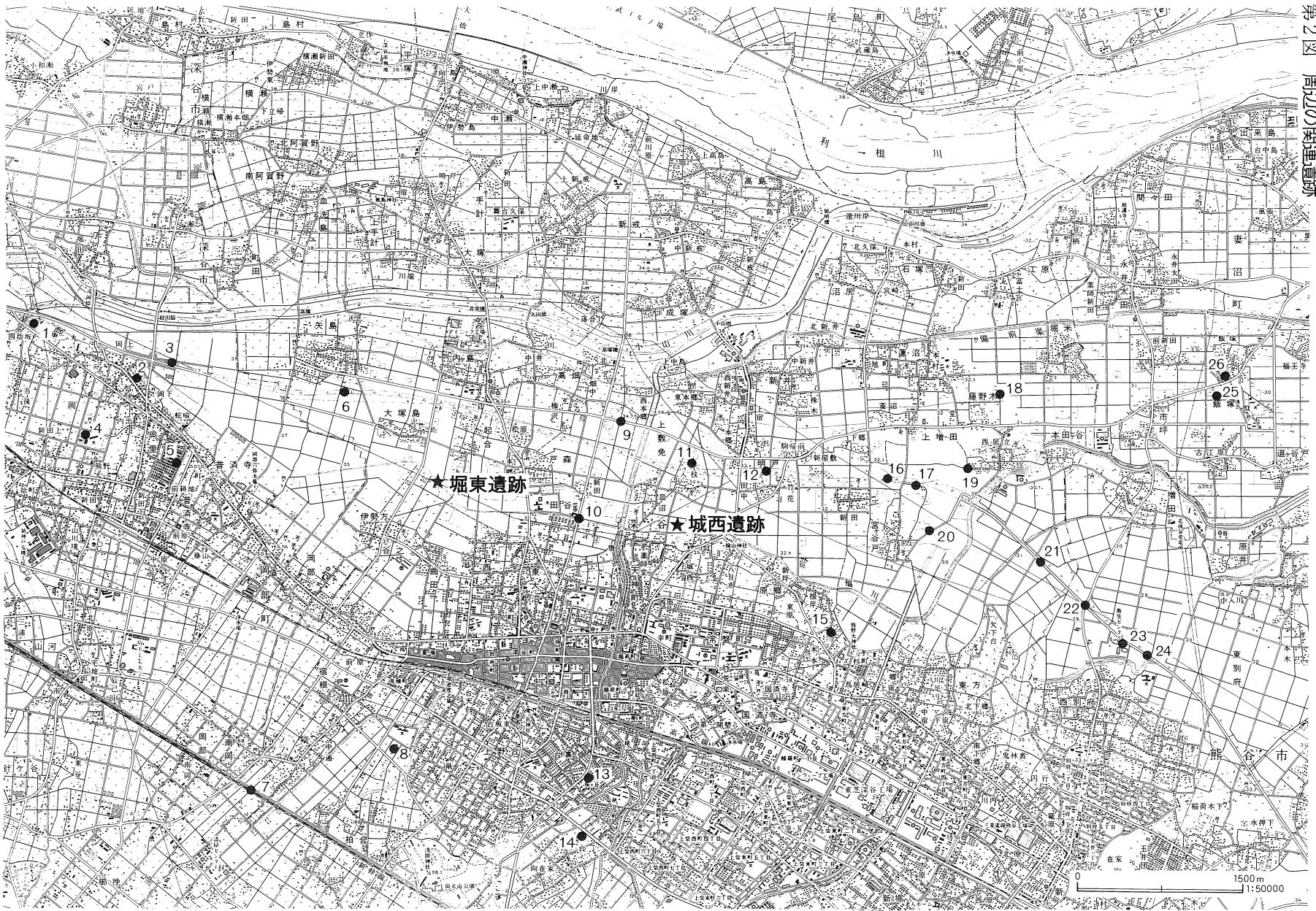
古墳時代前期の遺跡は、堀東遺跡周辺の微高地上に展開している。矢島南遺跡（6）、明戸東遺跡、戸森前遺跡（10）、清水上遺跡、根絡遺跡（22）などで集落の一部が発見されており、墳墓は上敷免遺跡、東川端遺跡（20）で発見されている。

中期から後期にかけて遺跡数は急激に増大し、その具体的背景が注目される。

奈良・平安時代の遺跡としては、台地縁辺部の岡部町熊野遺跡（4）、同白山遺跡（5）、旧榛沢郡の正倉跡と推定される同中宿遺跡（2）などが著名な存在だが、低地部微高地上にも集落が展開し、砂田前遺跡（3）、上敷免遺跡、宮ヶ谷戸遺跡、柳町遺跡（18）などでその遺構が確認されている。

1 四十坂遺跡、2 中宿遺跡、3 砂田前遺跡、4 熊野遺跡、5 白山遺跡、6 矢島南遺跡、7 出口遺跡、8 萱場松原遺跡、9 上敷免森下遺跡、10 戸森前遺跡、11 上敷免遺跡、12 本郷前東遺跡、13 桜ヶ丘組石遺跡、14 小台遺跡、15 根岸遺跡、16 明戸東遺跡、17 宮ヶ谷戸遺跡、18 柳町遺跡、19 原遺跡、20 東川端遺跡、21 清水上遺跡、22 根絡遺跡、23 横間栗遺跡、24 関下遺跡、25 飯塚遺跡、26 飯塚南遺跡

第2図 周辺の関連遺跡



Ⅲ 堀東遺跡

1. 遺跡の概要

堀東遺跡の所在地は、深谷市大字伊勢方133番地他である。JR高崎線深谷駅から北西へ約2km、深谷市街からさほど遠くない台地縁部に位置し、現状は田園地帯のただ中である。北は妻沼低地、南は櫛引台地が広がり、遺跡の立地は両者の境界付近にあたる。城西遺跡からは福川の上流にあたり、約2km西に隔たっている。

遺跡の範囲は、東西850m、南北250m、面積約137000㎡である。大半は福川右岸の櫛引台地寄りであるが、東半は左岸にかけて広がっている。標高は35m前後で概ね平坦である。

調査区は福川に沿って18地点に分かれ、東西約700mにかけて設定された。本報告書においては、その名称を西から順に1～18区とする。調査面積は、6150㎡である。

遺構は、黒褐色土に掘り込まれていたため上層での確認は困難であったが、検出された遺構は、縄文時代後期竪穴住居跡7軒、縄文時代中期集石8基、縄文時代後期を主体とする土壇24基、溝跡7条、遺構外ピット10基である。このほか、遺構は確認されなかったが、弥生時代中期前半を主体とする遺物包含層が11区で確認された。

今回の調査範囲は、遺跡の範囲を東西にはほぼ縦断する長大なトレンチに等しく、遺跡に包蔵された遺構、遺物の内容と分布の実態が、おおよそ明らかになったといえる。すなわち遺構、遺物の分布は均一でなく、まとまりと空白が入り組みながら地点ごとに異なる様相を呈している。次章Ⅳにおける詳細報告に先立ち、その状況を調査区単位で通観しておきたい。以下、縄文時代の遺構、遺物については、同一語の頻出を避け、原則として「縄文時代」を省略し時期区分のみ記すものとする。

1～3区にかけては遺構分布が希薄である。1区で

中世以降の溝2条、時期不明溝1条、2区で後期土壇1基があるにすぎない。

4～6区では、4区西半に中期集石8基、後期住居跡1軒などが集中し、集石周辺では中期土器が多数出土した。4区東半以東は再び希薄だが、6区東半では後期住居跡1軒、同土壇2基などがあり、7・8区に後期の遺構が集中的に分布するのに関連する状況である。

7・8区は後期の遺構が密に分布する。7区で柄鏡形住居跡1軒、土壇1基、8区で住居跡1軒、土壇9基がある。

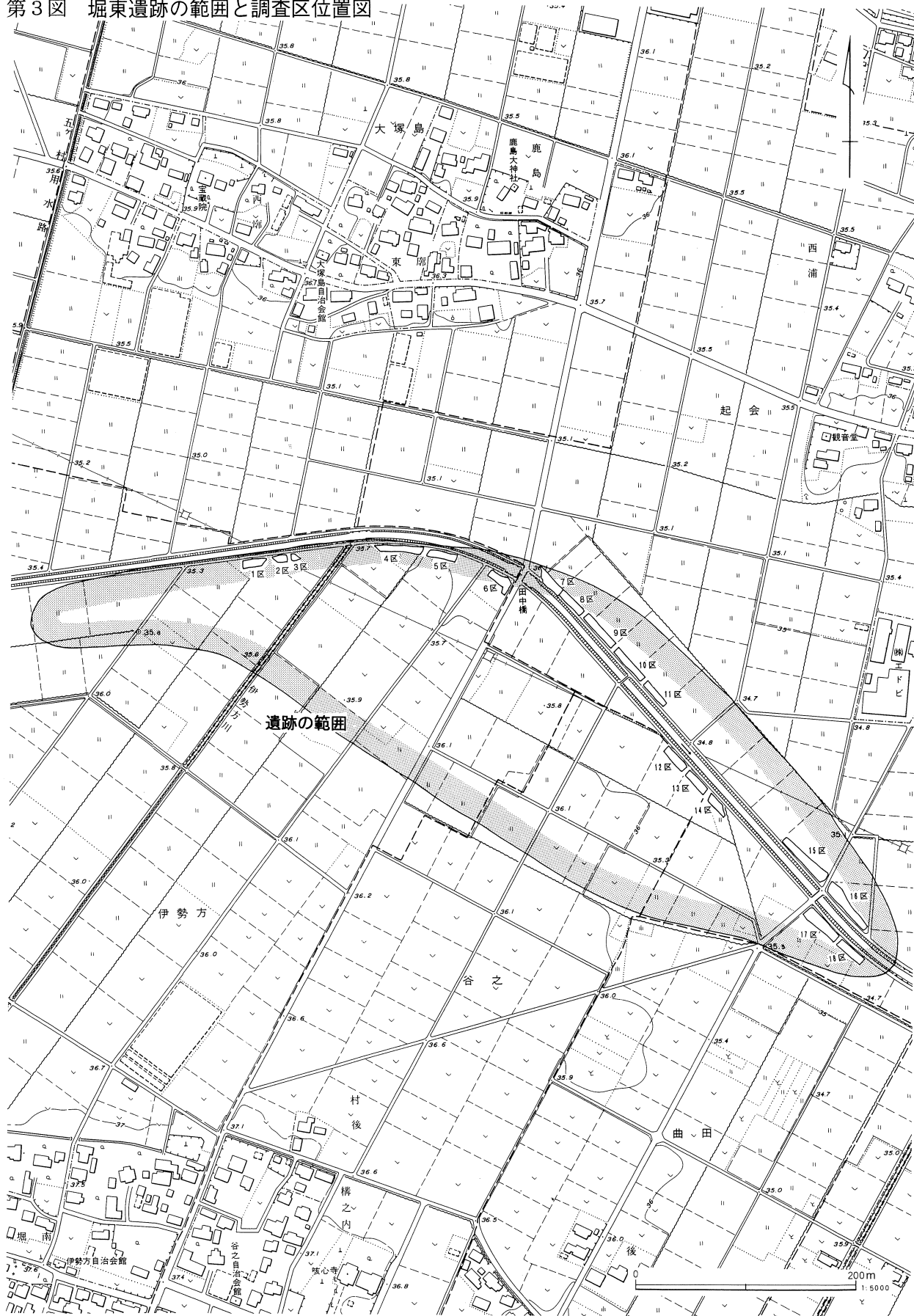
9・10区は遺構分布の空白域である。

11区は、後期の遺構がふたたび密に分布する。柄鏡形住居1軒を含む住居跡2軒、大型深鉢を伴う土壇3基がある。土壇は相互に近接し、周囲から土器片が集中的に出土した。調査時には住居跡と認識される状況であった。また、その上層からは、0～38グリッドを中心に、弥生時代中期前半を主体とする多数の弥生土器と2点の玉類が出土した。遺構は確認されなかったが、該期の遺跡が新たに確認されるとともに豊富な資料がもたらされる結果となった。

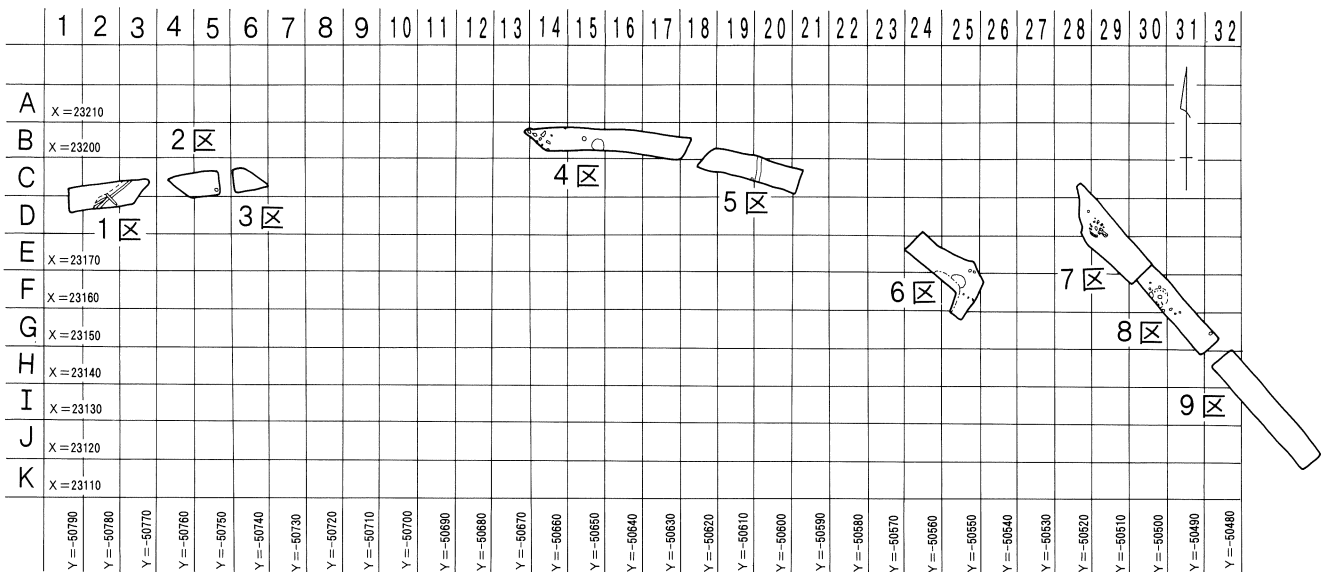
14区以東は遺構分布が散在的だが、注目されるものが含まれる。14区では完形の大型深鉢を伴う後期土壇1基、15区では、後期1基を含む縄文時代土壇4基と近世以降の溝3条、16区では古式土師器が落ち込みに伴い出土した。17区では後期住居跡1軒が確認され、ほぼ全容がうかがえる称名寺式の大型深鉢が出土した。18区では遺構は確認されなかった。

次章においては、以上のような地点ごとに一様でない遺跡内容がより理解されやすいよう、18の調査区を1～6区、7～11区、12～18区の3地区にまとめ、それぞれを各節とする構成をとった。

第3図 堀東遺跡の範囲と調査区位置図



第4図 調査区配置図(1)



縄文土器の分類

堀東遺跡出土の縄文土器を、説明の都合上以下のように分類し、記述を行う。

第Ⅰ群土器

前期の土器群を一括する。

第1類

前期中葉で、胎土に繊維を含む、黒浜式土器、及びそれに併行する土器群を一括する。

第2類

前期後半で、胎土に繊維を含まない、諸磯式土器を一括する。

第Ⅱ群土器

中期の土器群を一括する。

第1類

中期中葉の阿玉台式系土器群を一括する。いくつかの細分型式を包括する。

第2類

中期中葉の勝坂式系土器群を一括する。いくつかの細分型式を包括する。

第3類

第1・2類土器以外の系統の中期中葉土器群を一括する。

第4類

中期後葉の加曾利E式系土器群を一括する。いくつかの細分型式を包括する。

第Ⅲ群土器

後期初頭から前葉の土器群を一括する。

第1類

後期初頭の称名寺式系土器を一括する。

第2類

後期前葉の堀之内1式系土器を一括する。

第3類

後期前葉の堀之内2式系土器を一括する。

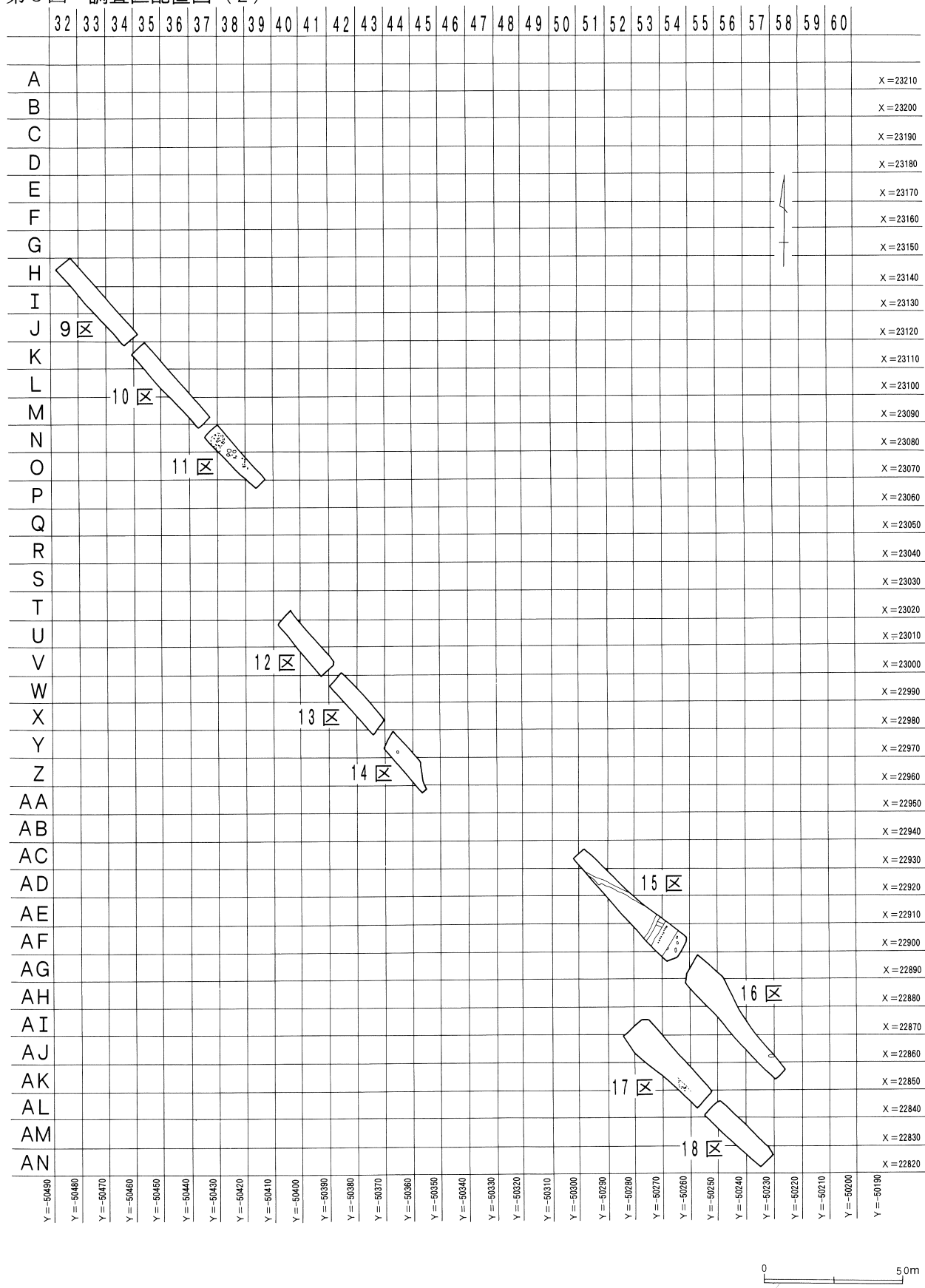
第4類

第2・3類土器以外の系統の後期前葉土器群を一括する。

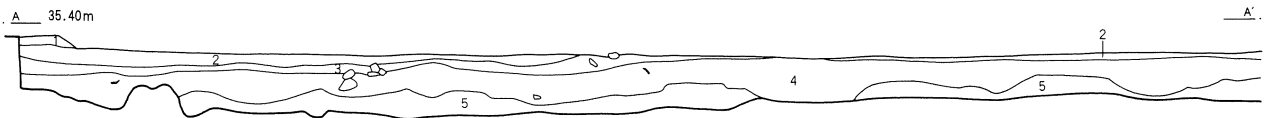
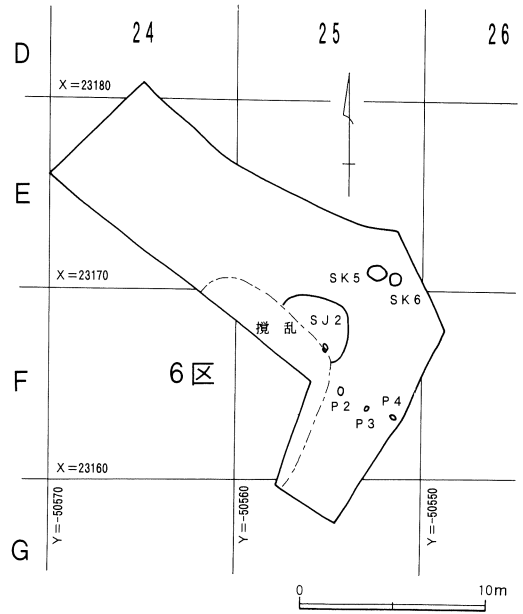
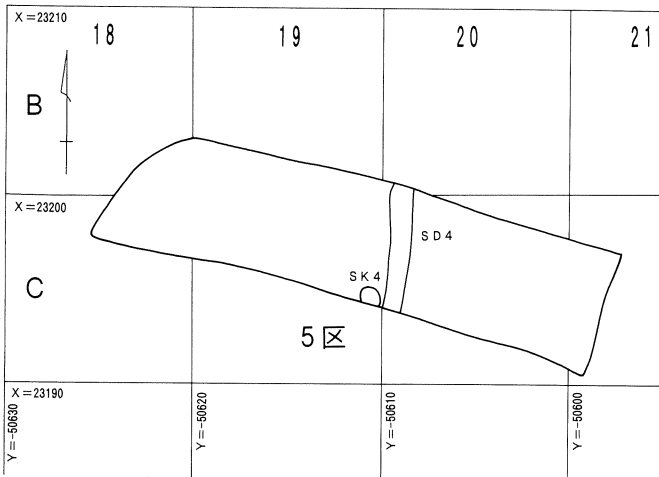
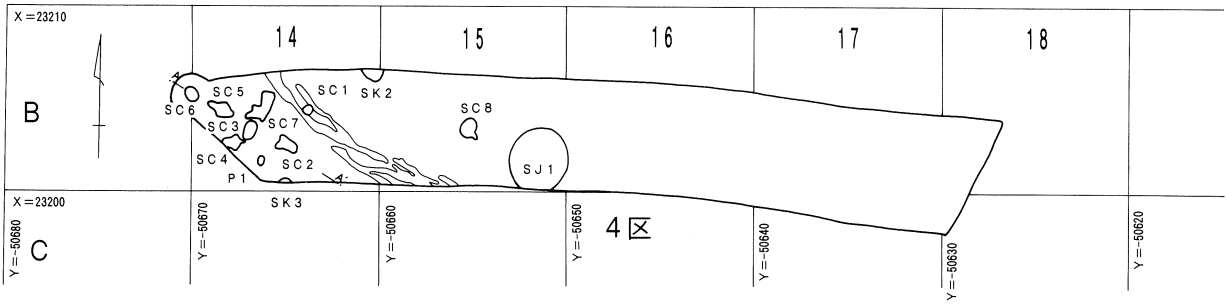
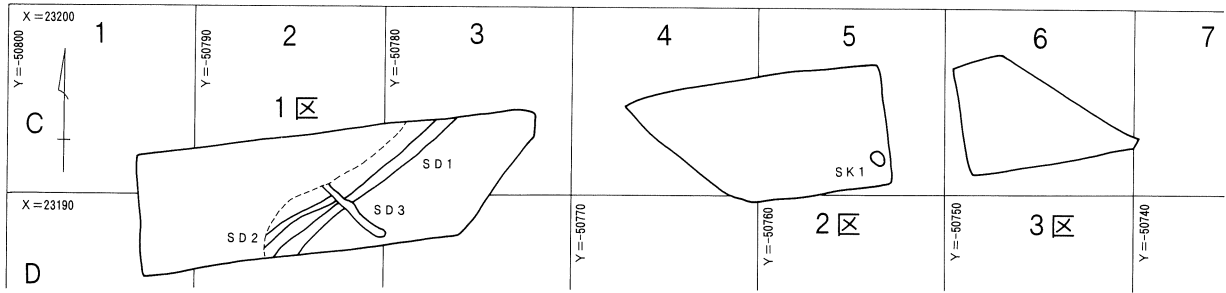
第5類

後期後半の土器群を一括する。

第5図 調査区配置図(2)



第6図 調査区詳細図(1)



4区

B 14グリッド

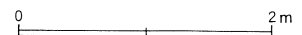
1 黒褐色土：耕作土

2 茶褐色土：粘土質。現代の盛土。しまりやや有

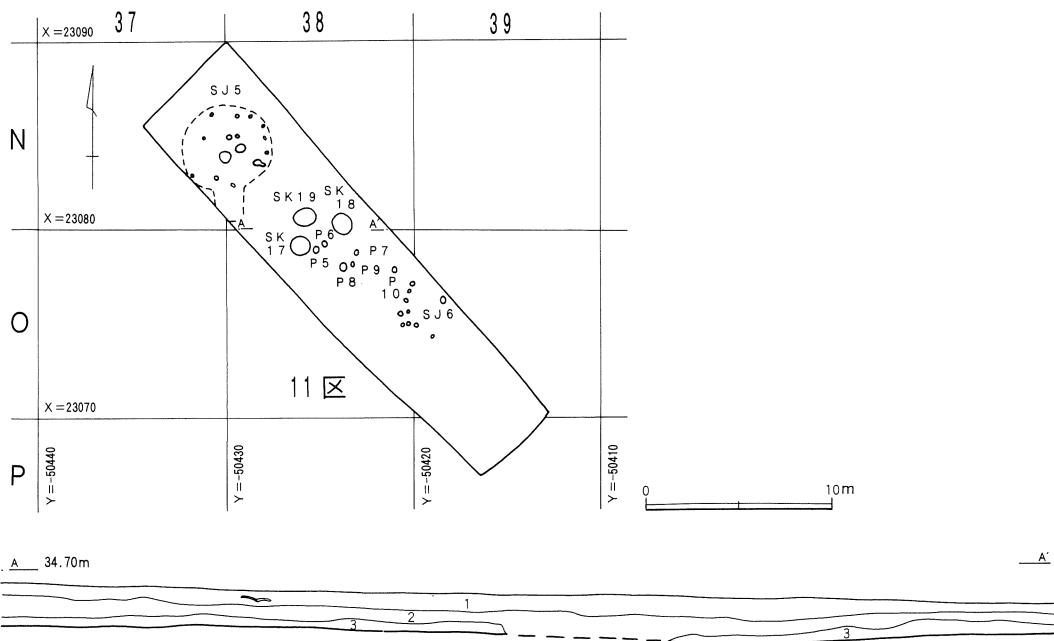
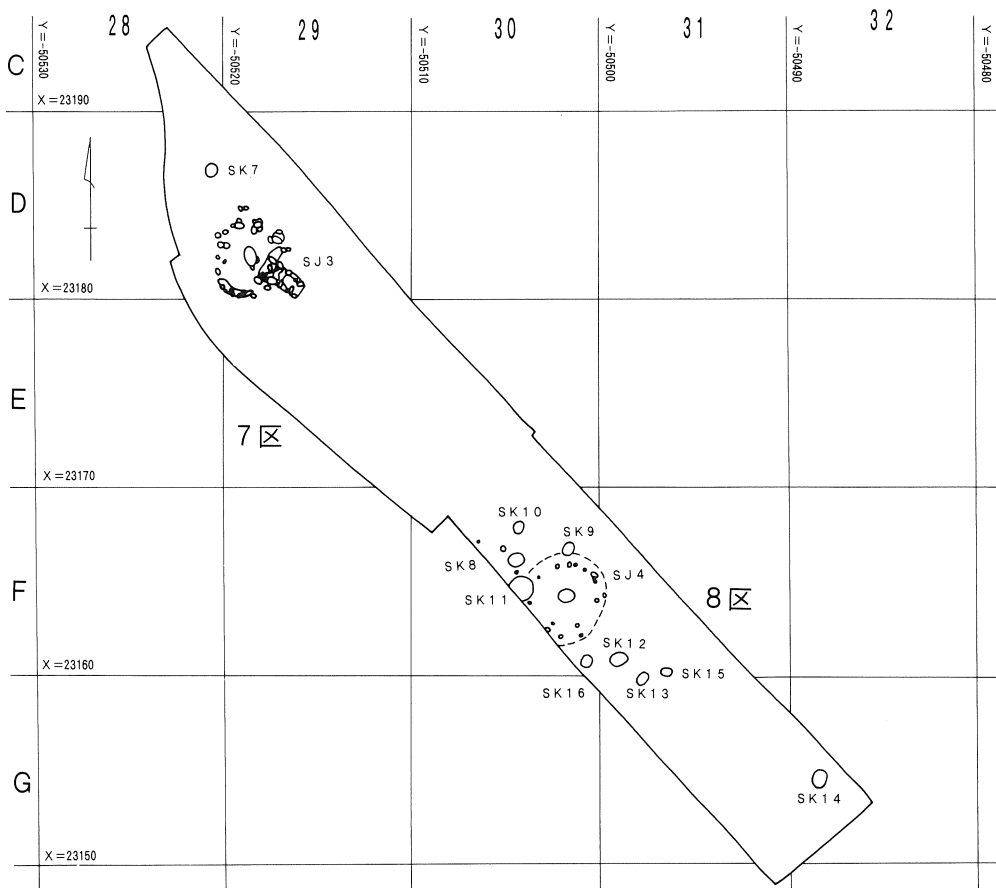
3 灰色土：粘土質。しまり有

4 黒褐色土：シルトまじり粘土質。φ1cm弱のロームブロックを若干含んでいる。SX1の1層に同じ
浅間A軽石と思われるものが混じっている。よくしまり硬質

5 褐色土：粘土質シルト。鉄分及び炭化物の微粒子を少量、ローム粒を多量、ロームブロックを含む。SX1の3層に近い



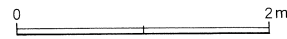
第7図 調査区詳細図(2)



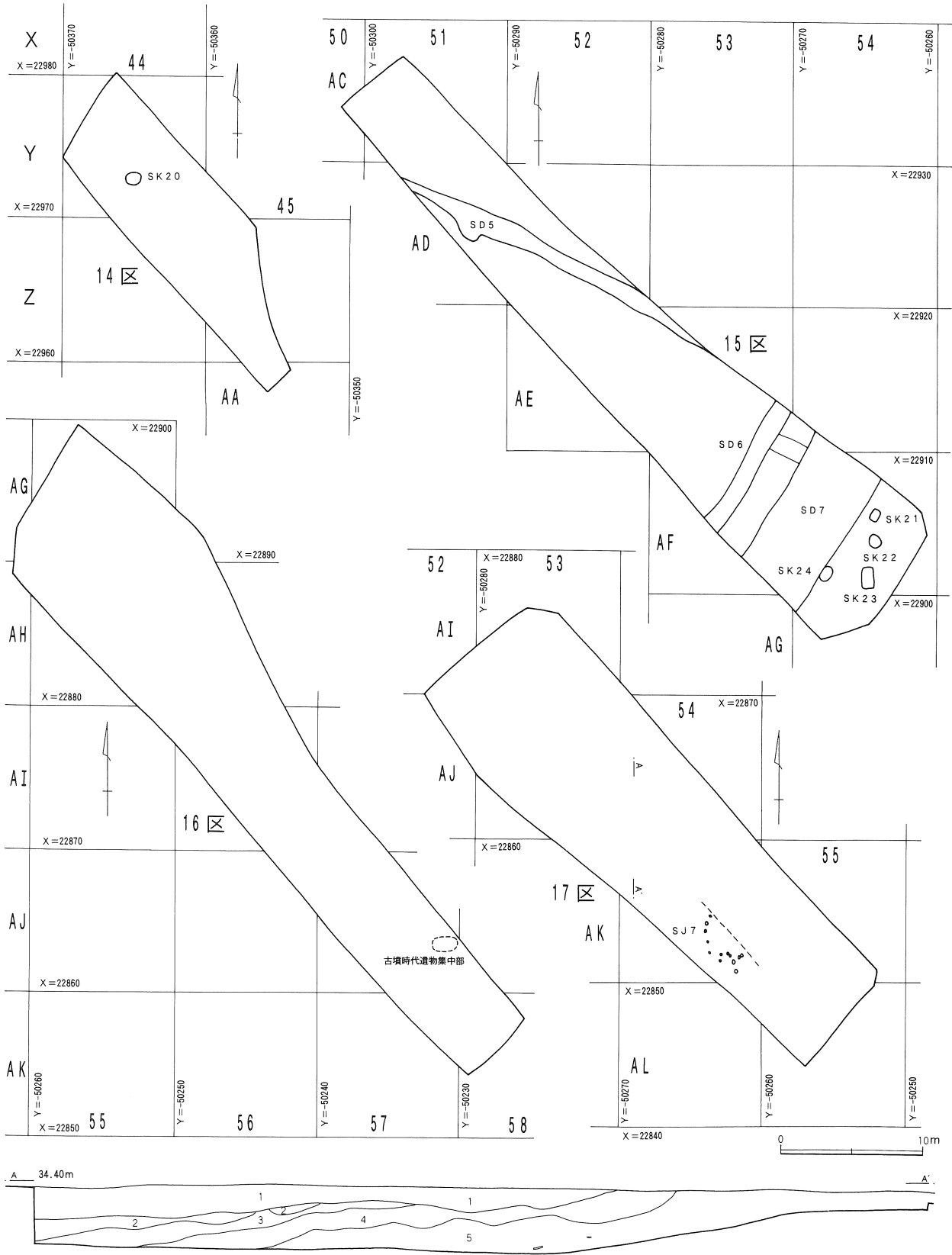
11区

038・39グリッド

- 1 黒褐色土：炭水化物を少量含む。しまり強い。弥生土器を含む
- 2 暗褐色土：粘土ブロックを少量含む。しまり、粘性強。縄文後期の土器を主体的に含む
- 3 灰褐色土：ローム・粘土ブロックを含む。土器を少量含む。しまり、粘性きわめて強



第8図 調査区詳細図(3)

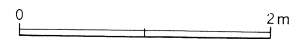


17区

AJ 54 ~ AK 54 グリッド

- 1 黒褐色土：浅間火山灰を含む。しまり有。シルト質
- 2 黄褐色土：粘土質。下層に明黄白色土層がある。しまり有

- 3 灰色土：粘土質。最下層に炭化物の堆積がある。しまり有
- 4 黒色土：粘土質。遺物を含む。しまり有
- 5 灰褐色土：しまり有



2. 1～6区の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡<S J 1 (旧S J 3)> (第9・10図)

位置は、4区B-15グリッドである。

平面形は直径約3.4mの円形で、床面中央部は、さらに径1.5mの円形に掘り込まれている。壁周辺の深さは約0.3mで、中央部は約0.8mである。柱穴とみられるピットは、壁周辺に認められた。

遺物は、縄文土器片約120点である。

第Ⅱ群第1類と第2類土器が出土している。1、2、4～24は第1類の阿玉台系の土器群で、胎土に雲母を多く含んでいる。1は耳状を呈する把手部分で、半截竹管による2列の結節沈線を施す。2はやや外反する角頭状口縁で、内面に稜を持つ。4は口縁部から頸部にかけての破片で、口縁部の上端区画が押圧を施す隆帯で区画され、その区画線から弧状に連なる2列の結節沈線を施文し、横位小波状の結節沈線で頸部を区画する。5は断面が三角の低隆帯で、楕円区画を上下に配する構成を採り、隆帯が接する部分で連結する。楕

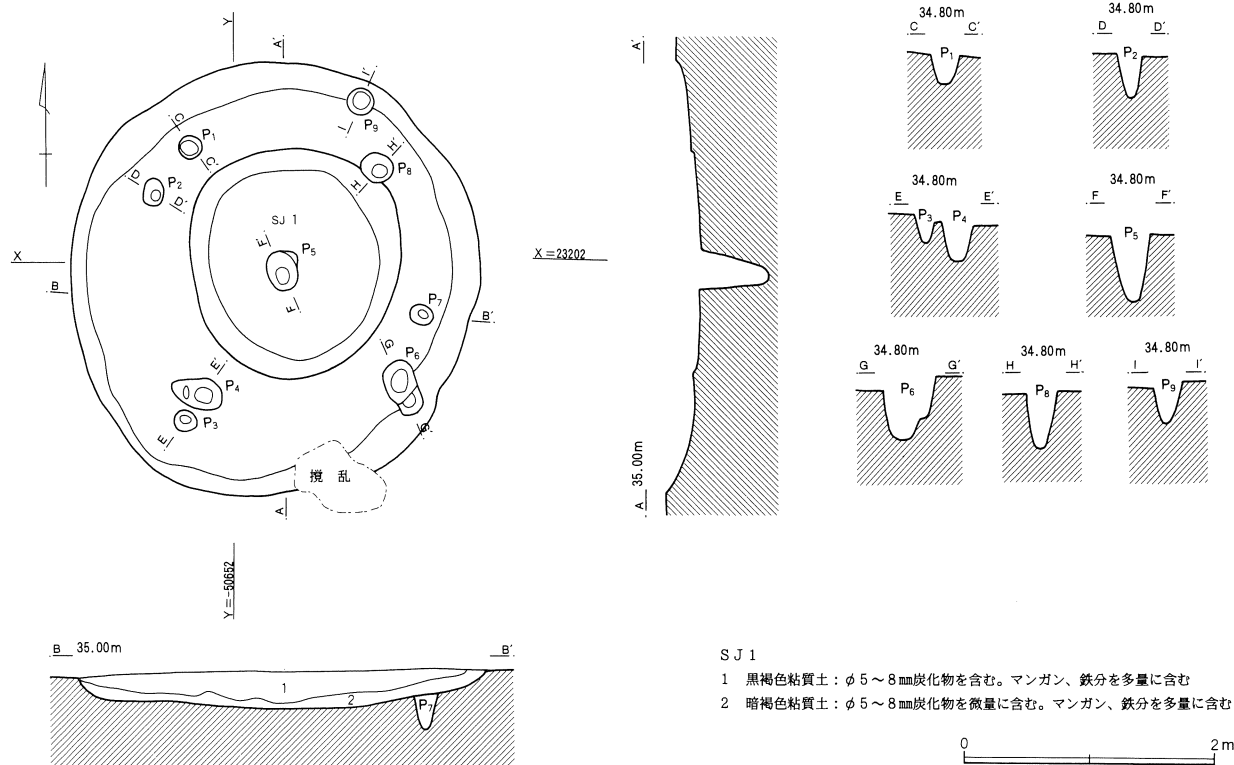
円区画内は隆帯に沿って、2列の結節沈線文を施す。

6は口縁部から頸部にかけての破片で、断面がやや丸い隆帯で、楕円形か三角形の区画文を施す。隆帯に沿って細かな2列の結節沈線文を施す。

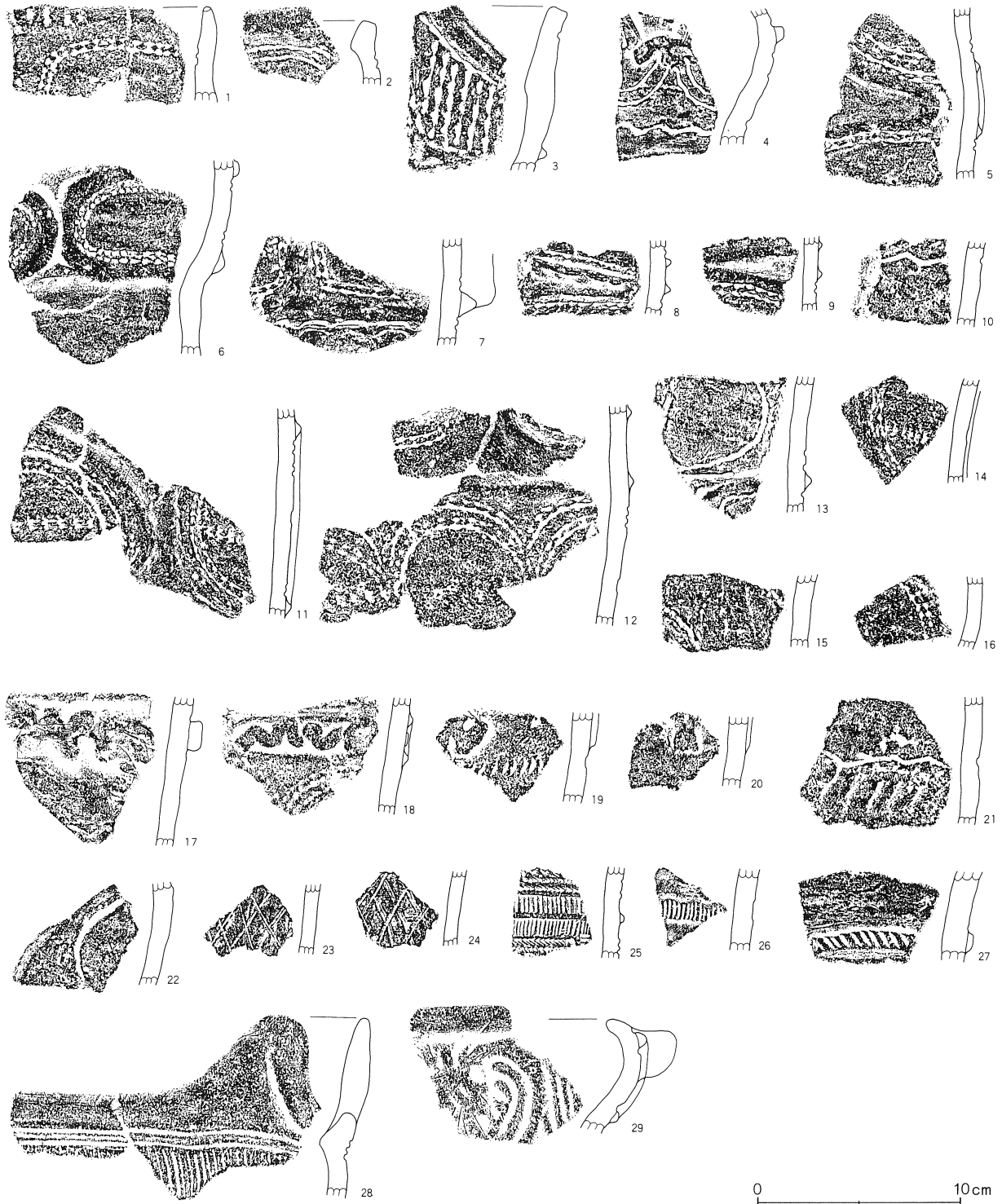
7～16は同一個体と思われる破片で、口縁部は背の高い隆帯で区画し、さらに高い隆帯を垂下して分割し、楕円か三角の区画文を構成するものと思われる。胴部は断面三角状の隆帯で楕円区画文を配し、その下部に連弧状の連続刺突文を施して、更に横位の刺突文列を施す。隆帯脇には2列の連続刺突文を施し、楕円区画文内にも横位の刺突文列を施文している。やや薄手の土器であるが大形の土器と思われ、1が口縁部の把手になる可能性が高い。

17～20は横位の狭い区画帯の中に、扁平の蛇行隆帯を施文し、18は2列の結節沈線、19は爪形文を施す。20は胴部下半で、扁平隆帯を垂下する。21は波状沈線文下に、襞状の整形痕を残す。22は沈線の曲線文、23、

第9図 第1号住居跡



第10図 第1号住居跡出土遺物



24は格子目文を描く。

25～28は第2類系の土器群で、25は断面三角の隆帯で区画し、幅広の角押文とペン先状の三角押文を交互に施す。26は幅広の角押文を施す。27は胴部区画隆帯上に刻みを施すもので、28は双頭の波状把手を持ち、

口縁部の沈線区画内に、集合沈線文を充填する。

29は第3類土器で強く内湾する口縁部に突起が付き、突起を起点に隆帯と沈線が曲線のモチーフを構成する。

遺構の帰属時期は、縄文時代中期前葉である。

第2号住居跡< S J 2 (I B S J 1) > (第11図)

位置は、6区F-25グリッドである。

南半が破壊されているが、平面形は3.7×3.4mの隅丸方形と推定される。深さは約0.1mである。床面上のピットは、南東隅寄りで確認された。

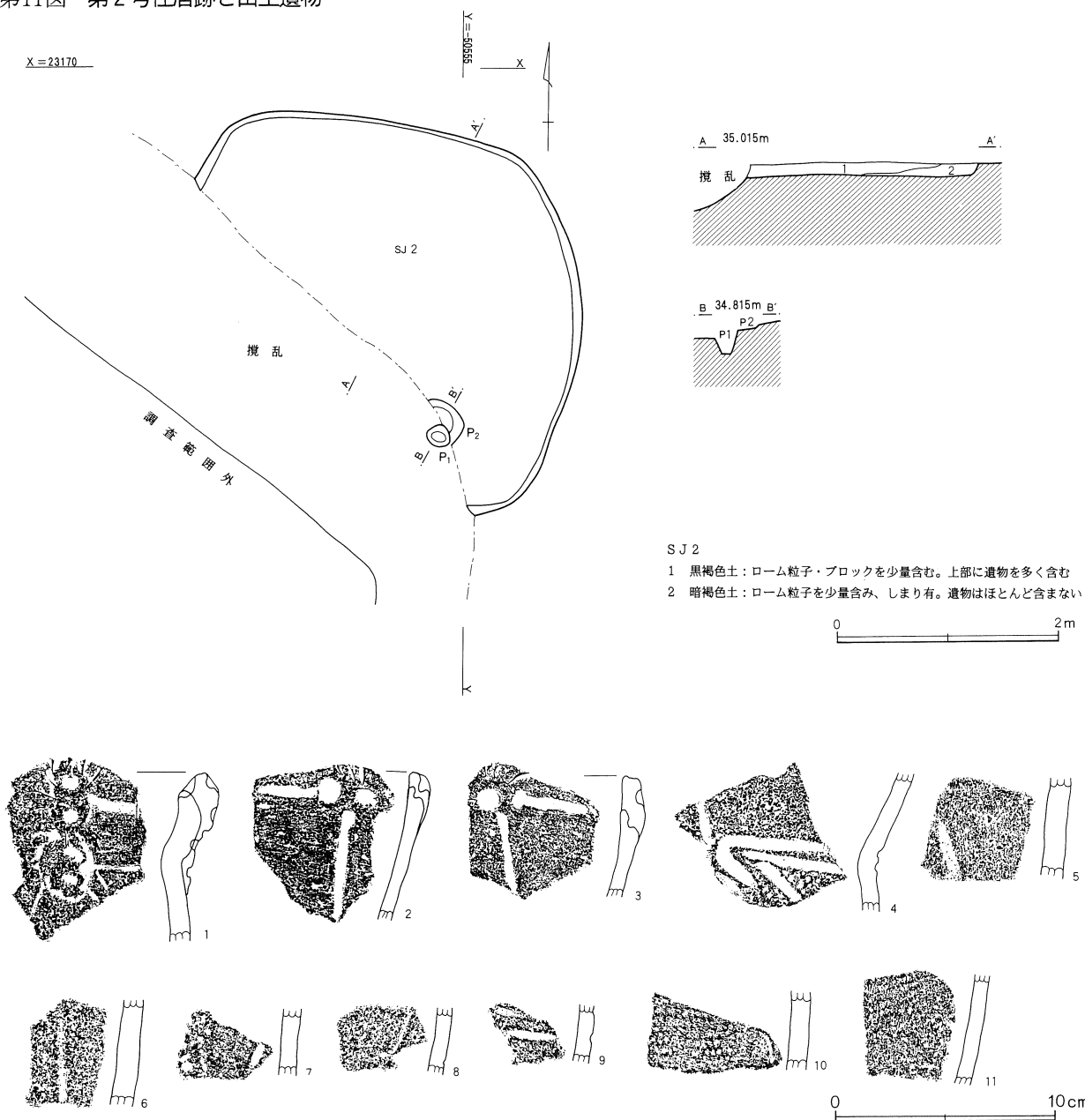
遺物は、縄文土器片約60点である。

出土土器は全て第Ⅲ群第2類土器で、1は小波状口縁で頸部が括れる器形を呈し、波頂部とその下に八字状貼付文を2連で施し、波頂部裏には盲孔を施す。口

縁部と頸部に沈線が巡り、貼付文を起点に対の沈線文を八字状に施文する。2～4は同一個体で、無文帯の頸部が括れる器形であり、口縁部と胴部に沈線文を巡らし、口縁部の小突起から沈線文を垂下する。小突起下には3個の盲孔を設け、これを起点にして下部に胴部の文様が展開する。5～11は沈線と縄文が施文されるが、器面の風化が著しく、詳細は不明である。

遺構の帰属時期は、縄文時代後期前葉である。

第11図 第2号住居跡と出土遺物



(2) 集石

第1号集石<SC1 (旧SX1)> (第12・13図)

位置は、4区B-14グリッドである。

噴砂により変形しているが、掘り込みの平面形は径0.7mの略円形、深さは0.4mと推定される。礫の個数は49個、重量分布は、0.5kg未満100%、総重量は1.7kgである。

遺物は、上層から1が破碎された状態で出土した。

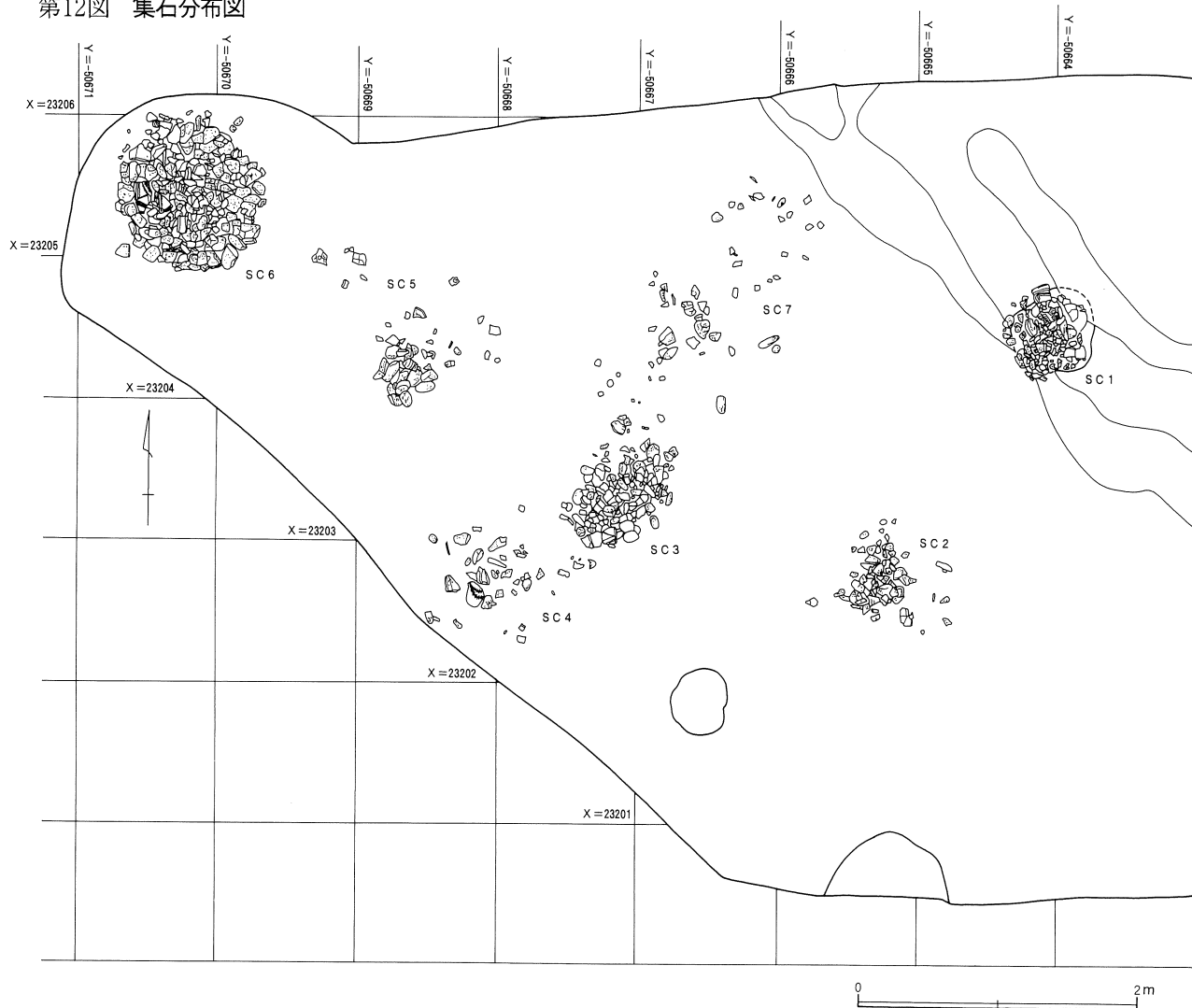
1は底部を欠損するが、ほぼ完形の第Ⅱ群第2類土器である。口唇部が外反して立ち、内湾の強い口縁部が緩く開き、筒形の胴部へと移行する器形を呈する。口縁部文様帯は隆帯で区画し、上端はコンパス文状の刺突文を沿わせ、下端の隆帯上には刻みを施す。口縁部には背割れ隆帯の横S字状文を4単位に配し、モ

チーフ間に3本沈線、弧状文と沈線文の組み合わせだった、小S字状隆帯などのそれぞれ異なった文様を挟んで連結する。横S字状文の余白には三叉文や円形竹管文等を組み合わせて、それぞれ異なるモチーフを充填する。胴部は刻みを施す垂下降帯で5単位に区画し、平行沈線による弧状、山形、菱形、円形文等を組み合わせ配し、区画内に同じ文様を繰り返さない様になっている。胴部は地文に、単節LRを縦位施文する。口径24cm、現存高27cmを測る。

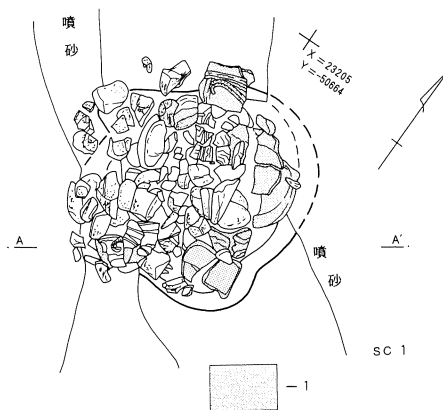
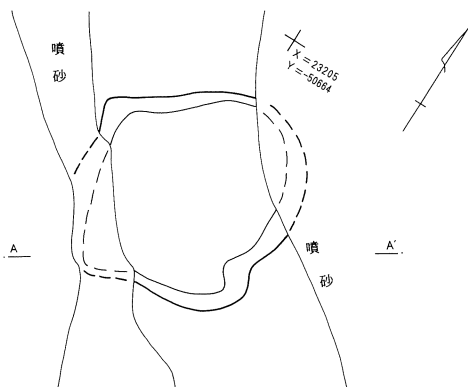
2は幅広の隆帯に沿って、単列のペン先状三角押文を施文するもので、3は単節RLを横位施文する胴部破片である。

遺構の帰属時期は、縄文時代中期中葉である。

第12図 集石分布図

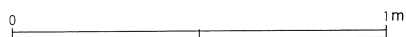


第13図 第1号集石と出土遺物

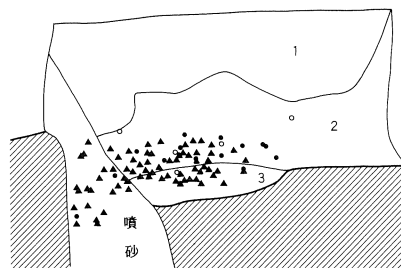


SC 1

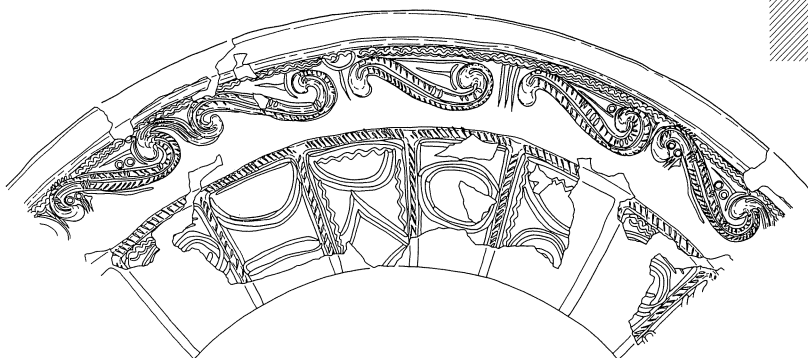
- 1 灰褐色土：シルト混じり粘土質。やや硬質
下層に浅間A軽石若干混入。しまり有
- 2 黒褐色土：粘土質。鉄分及び炭化物の微粒子を少量含む
ロームブロックは、大きくても小指頭大、ごく少ない。ややしまる
- 3 黒色土：シルト混じり粘土質。遺物の間に炭化物、鉄分を含む。粘性強い



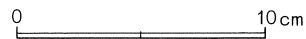
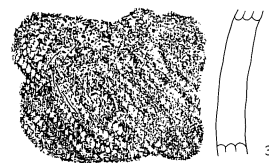
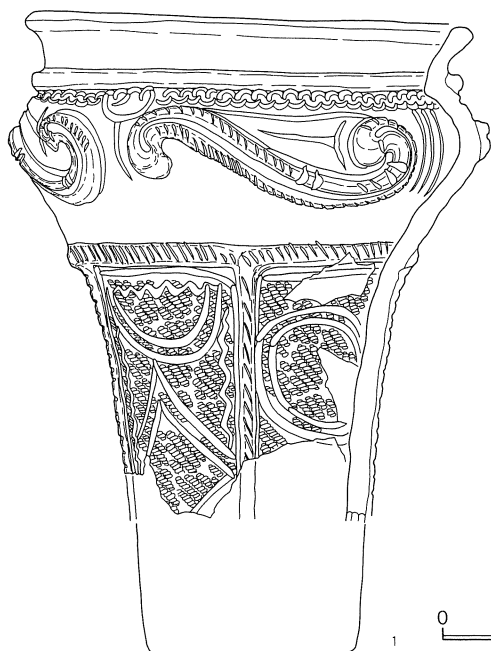
A 35.20m A'



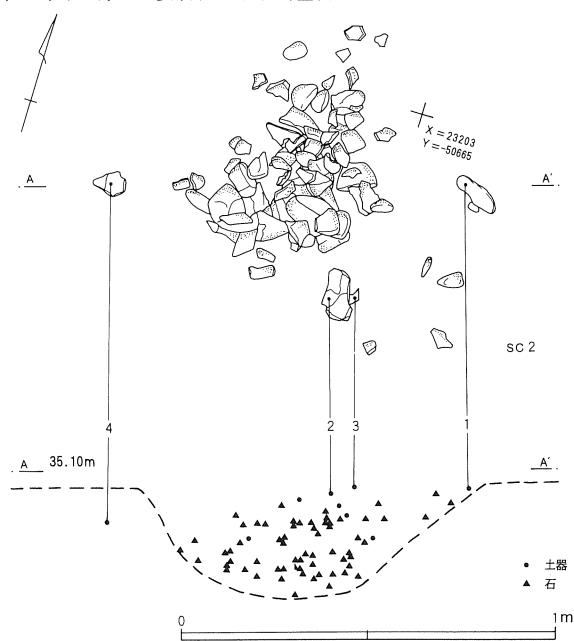
- 1
- 固不掲載土器
- ▲ 石



1:8



第14図 第2号集石と出土遺物



第2号集石<SC2 (旧SX2)> (第12・14図)

位置は、4区B-14グリッドである。

掘り込みは黒褐色土層中であつたため確認できなかったが、礫の分布から推定すると、平面形は径0.9mの円形、深さは0.3mである。礫の個数は65個、重量分布は、0.5kg未満88%、～1kg 8%、～1.25kg 4%、総重量は13.5kgである。

遺物は、縄文土器片約20点である。

出土土器は全て第Ⅱ群土器で、1は第2類の浅鉢の胴部破片であり、屈曲する胴部文様帯の下端部に刻みを施す隆帯が廻る。2は地文縄文のみ施文する胴部破片で、縄文は単節RLを縦位施文する。3は刻みを施す隆帯で渦巻文を描く破片で、第2類の胴部破片と思われる。地文に単節RLを縦位施文する。

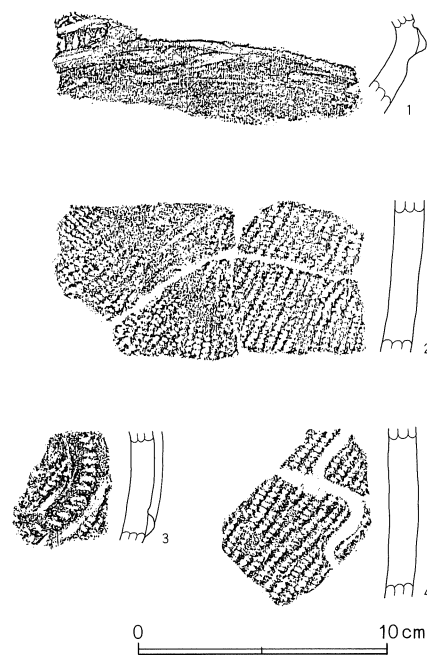
4は第4類土器の胴部破片で、単節RLの縦位施文の後、蛇行懸垂文を垂下する。

遺構の帰属時期は、縄文時代中期中葉である。

第3号集石<SC3 (旧SX3)> (第12・15～17図)

位置は、4区B-14グリッドである。

掘り込みは黒褐色土層中であつたため確認できなかったが、礫の分布から推定すると、平面形は1.2×0.9mの楕円形、深さは0.4mである。礫の個数は約124個、



重量分布は、0.5kg未満92%、～1kg 7%、～1.25kg 1%、総重量は22.2kgである。

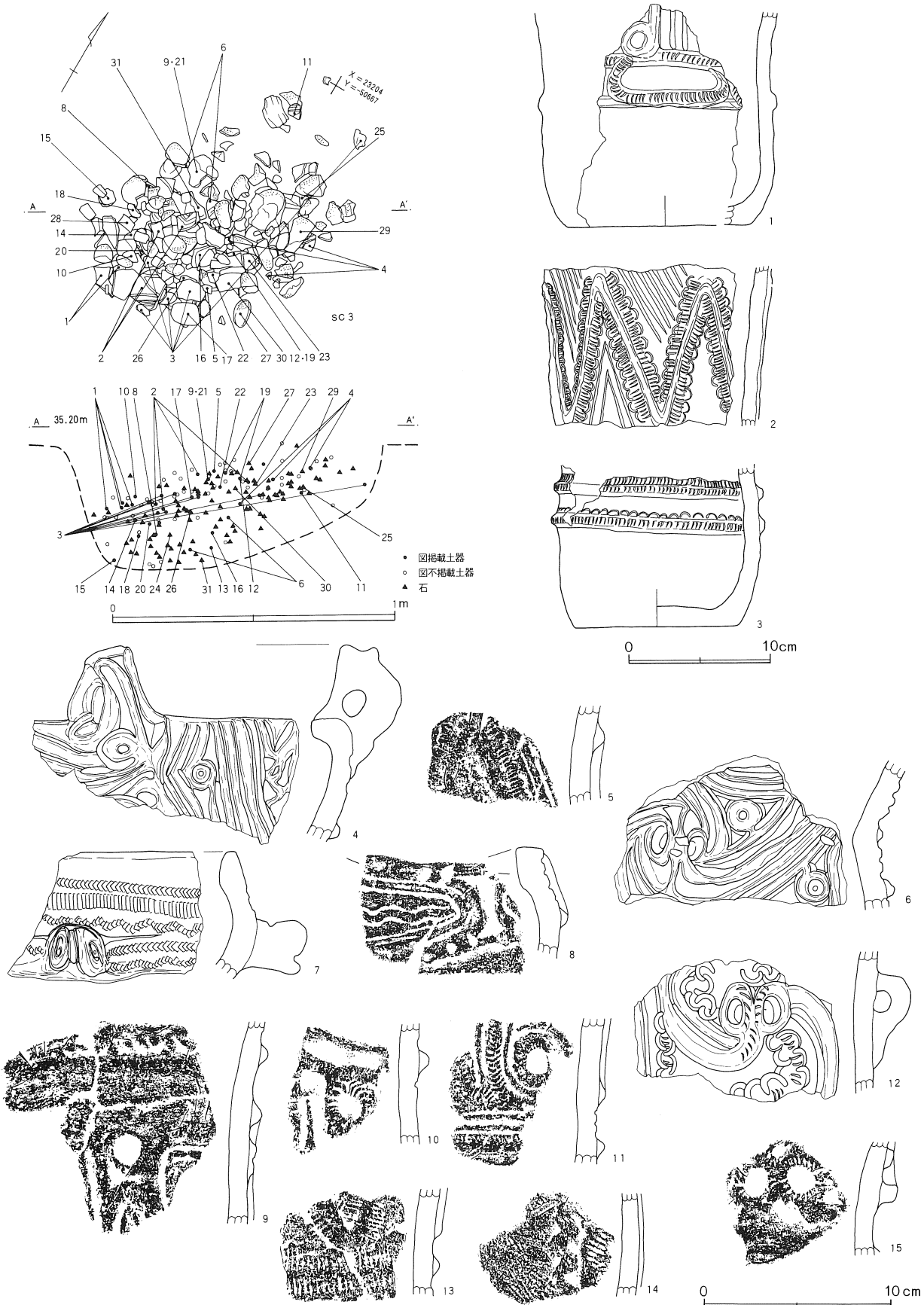
遺物は、大型破片を含む縄文土器片約170点と石器で、集石群中比較的豊富である。

出土土器は、全て第Ⅱ群土器である。1は楕円区画文帯で文様帯の下端を区画しており、胴部は隆帯とそれに沿った沈線文が垂下して文様を構成する。推定底径12.8cm、現存高14.8cmを測る。2は円筒状の胴部破片で、蓮華文状刺突文の沿う隆帯による鋸歯状区画を施し、余白に集合沈線文を施文する。風化が著しく、区画内のモチーフが不明瞭な部分が多い。5、12は同一個体と思われる。最大径20.5cm、現存高14.5cmを測る。3は底部付近を2本の隆帯で区画し、隆帯上に刻み、隆帯脇に幅広の爪形文と、半円形の連続刺突文を施文する。底径11.5cm、現存高10.8cmを測る。

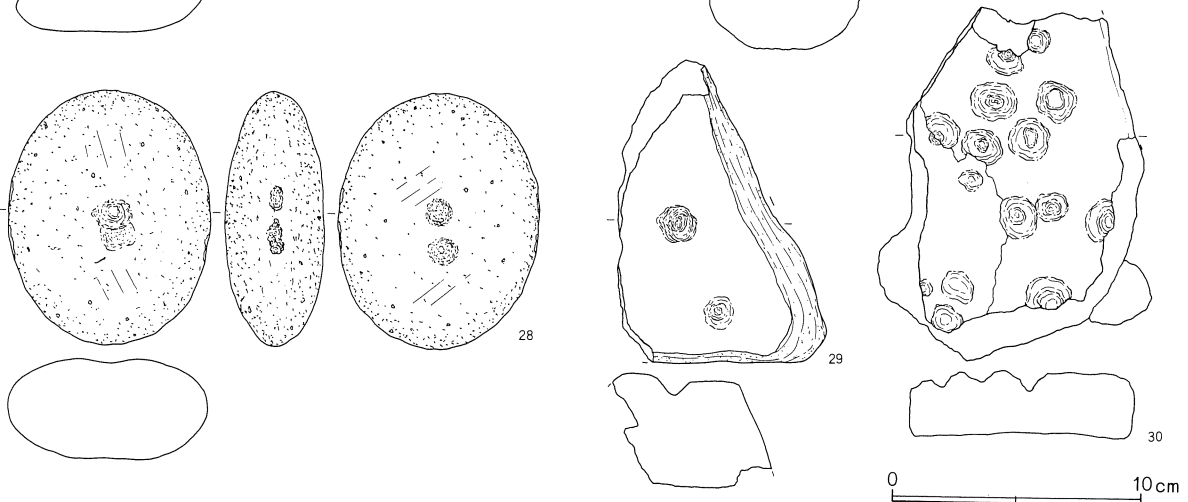
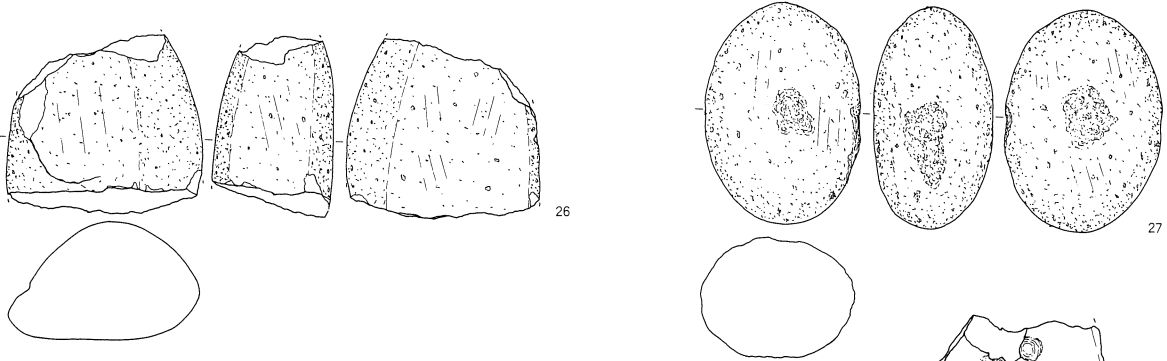
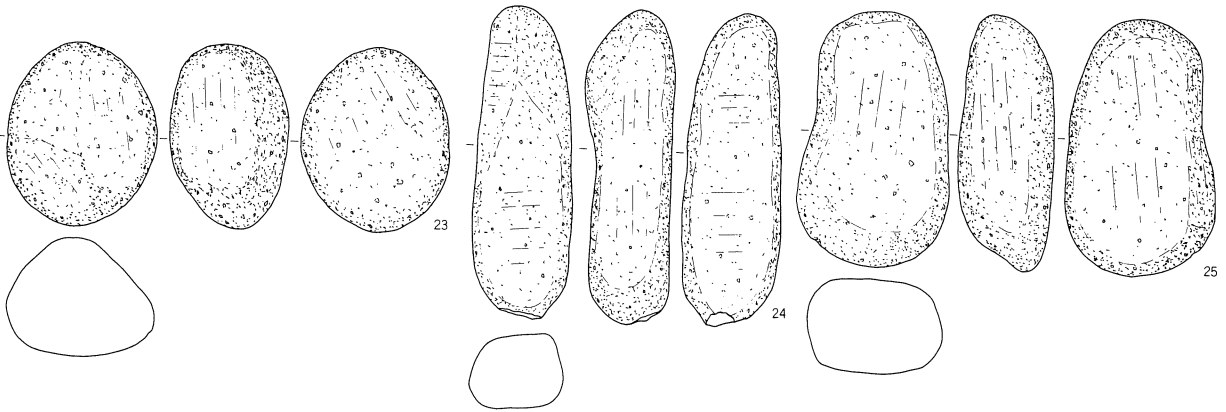
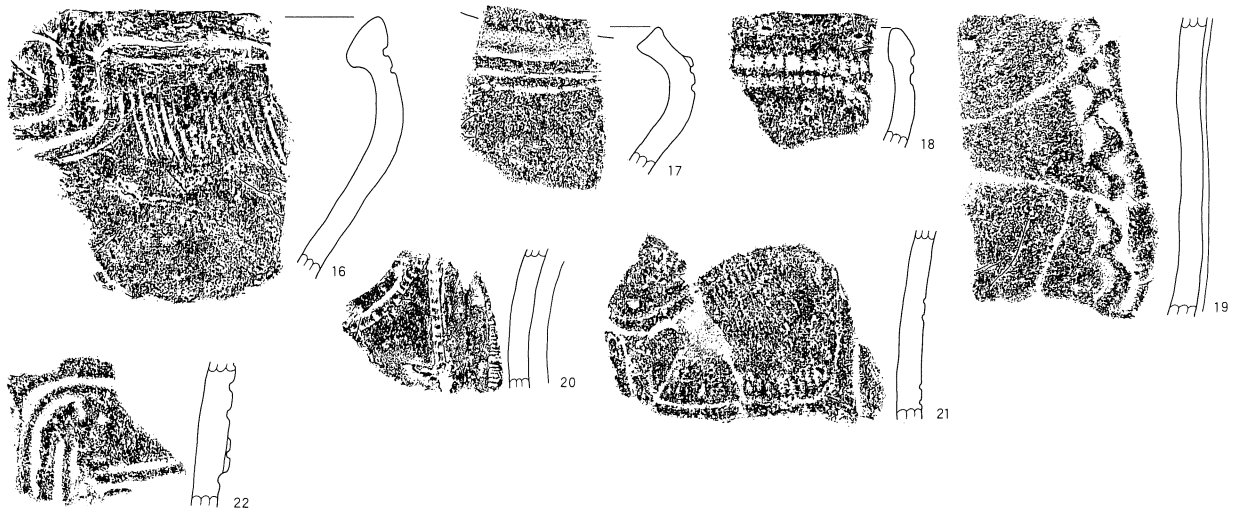
4、6は第3類土器で、同一個体である。口縁部に橋状の把手が付き、口縁部から隆帯と半肉彫り状の沈線文で流下するモチーフを描き、胴部ではメガネ状突起を起点に反転するモチーフを描く。

7は内湾してやや開く器形の第2類土器で、文様帯下端に鰓状に張り出した突起を持つ。非常に細かく精緻なペン先状連続刺突文と、キャタピラ文を交互に配して文様帯を区画し、突起にはひねりを加え、側面に

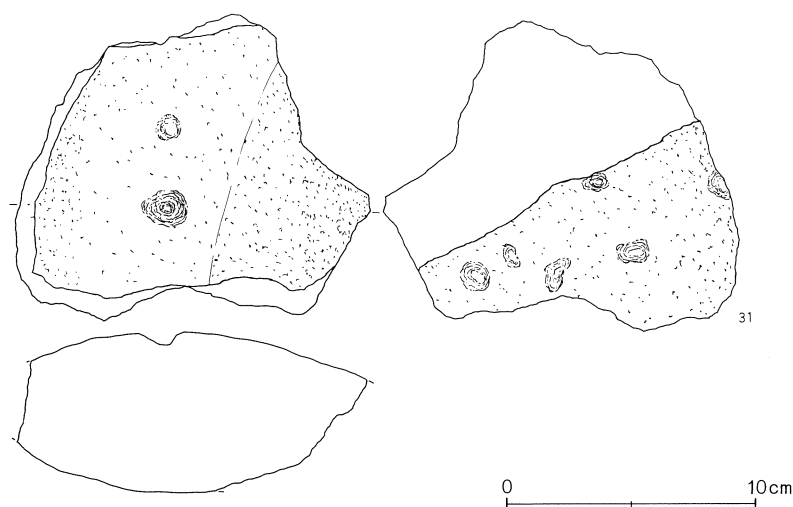
第15図 第3号集石と出土遺物（1）



第16図 第3号集石出土遺物（2）



第17図 第3号集石出土遺物(3)



沈線渦巻文を施文する。8は第1類土器で、波状口縁を呈し、口縁裏に稜を持つ。口縁部には隆帯で三角区画を施し、隆帯脇に2列の刺突文列、区画内に横位の鋸歯状刺突文列を施す。隆帯上には押圧状の刻みを施す。

9～15は隆帯で文様を描く第2類土器で、12、15はメガネ状突起を中心にモチーフを展開し、コンパス文状の刺突文が隆帯脇に沿う。9～11は円形モチーフが部分的に施される。いずれも、隆帯上には刻みが施される。14は縄文地文上に蛇行隆帯を垂下し、隆帯上にも縄文を施す。18は無地文上に蛇行隆帯を垂下する。

16～18は口縁部で、16はクランク状隆帯を垂下し、口縁部に縦位の集合沈線を充填施文する。17、18は口縁部を刺突列で区画し、17は楕円区画文を持つ。20は波状口縁部に背の高い隆帯を垂下し、隆帯脇に細かなキャタピラ文を施す。22は沈線の区画文に沿って幅広の爪形文を施し、20は隆帯区画に沿って半肉彫り状の平行沈線文が施文される。20は施文の特徴から、16は口縁部の形態から第3類土器と思われるが、他は大半が第2類土器である。

遺構の帰属時期は、縄文時代中期中葉である。

23～27は磨石で、23は長さ7.3cm、幅5.9cm、厚さ4.7cm、重さ226g、石質は安山岩である。24は長さ12.2cm、幅3.9cm、厚さ2.9cm、重さ230g、石質は安山岩である。25は長さ10.1cm、幅6.1cm、厚さ3.8cm、

重さ340g、石質は安山岩である。26は残存する長さ7.0cm、幅7.7cm、厚さ4.8cm、重さ348g、石質は石英閃緑岩である。27は長さ8.3cm、幅6.2cm、厚さ4.7cm、重さ325g、石質は安山岩である。28～30は凹石で、28は長さ10.1cm、幅8.0cm、厚さ3.4cm、重さ426g、石質は安山岩である。29は残存する長さ12.0cm、幅8.2cm、厚さ4.3cm、重さ480g、石質は結晶片岩である。30は残存する長さ13.9cm、幅10.5cm、厚さ2.6cm、重さ455g、石質は結晶片岩である。31は石皿の一部で、残存する長さ11.5cm、幅14.0cm、厚さ6.4cm、重さ990g、石質は安山岩である。

第4号集石<SC4(旧SX4)>(第12・18図)

位置は、4区B-14グリッドである。

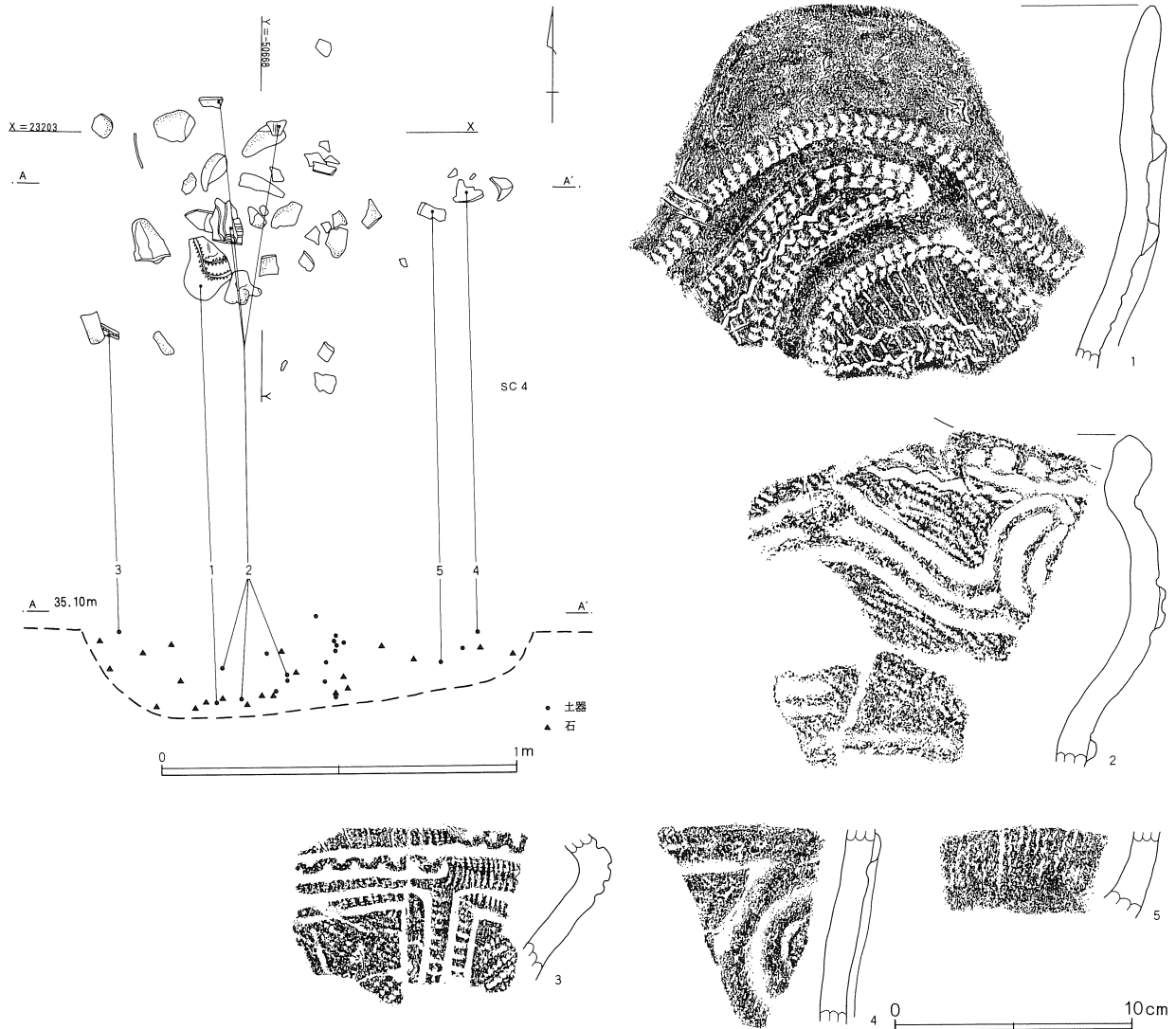
掘り込みは黒褐色土層中であつたため確認できなかったが、礫の分布から推定すると、平面形は径0.9mの円形、深さは0.3mである。礫の個数は21個、重量分布は、0.5kg未満100%、総重量は3.7kgである。

遺物は、縄文土器片約20点である。

出土土器は、全て第Ⅱ群土器である。1は大形の波状口縁で、区画や巻きながら垂下する隆帯脇に2列の刺突文列が沿い、区画内には集合細沈線や、小波状沈線文を施文する第1類土器である。

2の口縁は突起などが付いて波状を呈するものと思われるが、押圧を加えた口唇部が立ち、丸みの強い幅

第18図 第4号集石と出土遺物



広の口縁部を形成し、地文縄文単節RL上に2本隆帯の渦巻文を横連結するモチーフを描く。3は強い屈曲のある器形を呈し、屈曲部を交互刺突文や沈線文で区画し、胴部にはパネル状の区画文を施す。地文に単節RL縄文を施し、区画の低隆帯上には貝殻の押し、及び回転によると思われる擬縄文を施す。2、3は第3類土器である。

4は隆帯で区画、モチーフを描く土器で、隆帯脇には沈線文が沿う第2類土器である。5は底部付近の破片で、地文に撚糸Lを施す第4類土器である。

第5号集石<SC5 (旧SX5)> (第12・19図)

位置は、4区B-14グリッドである。

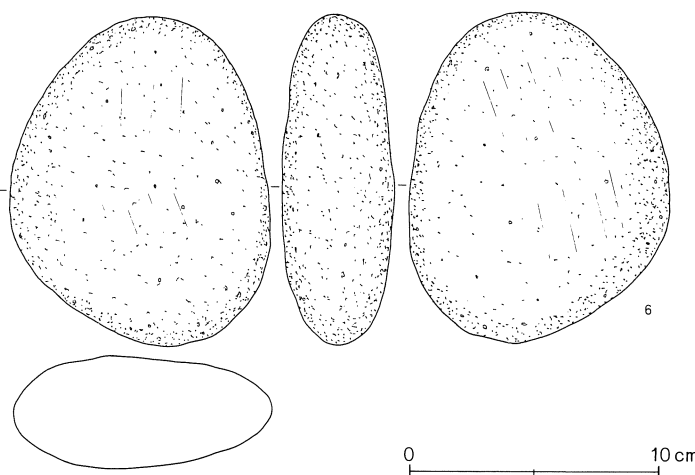
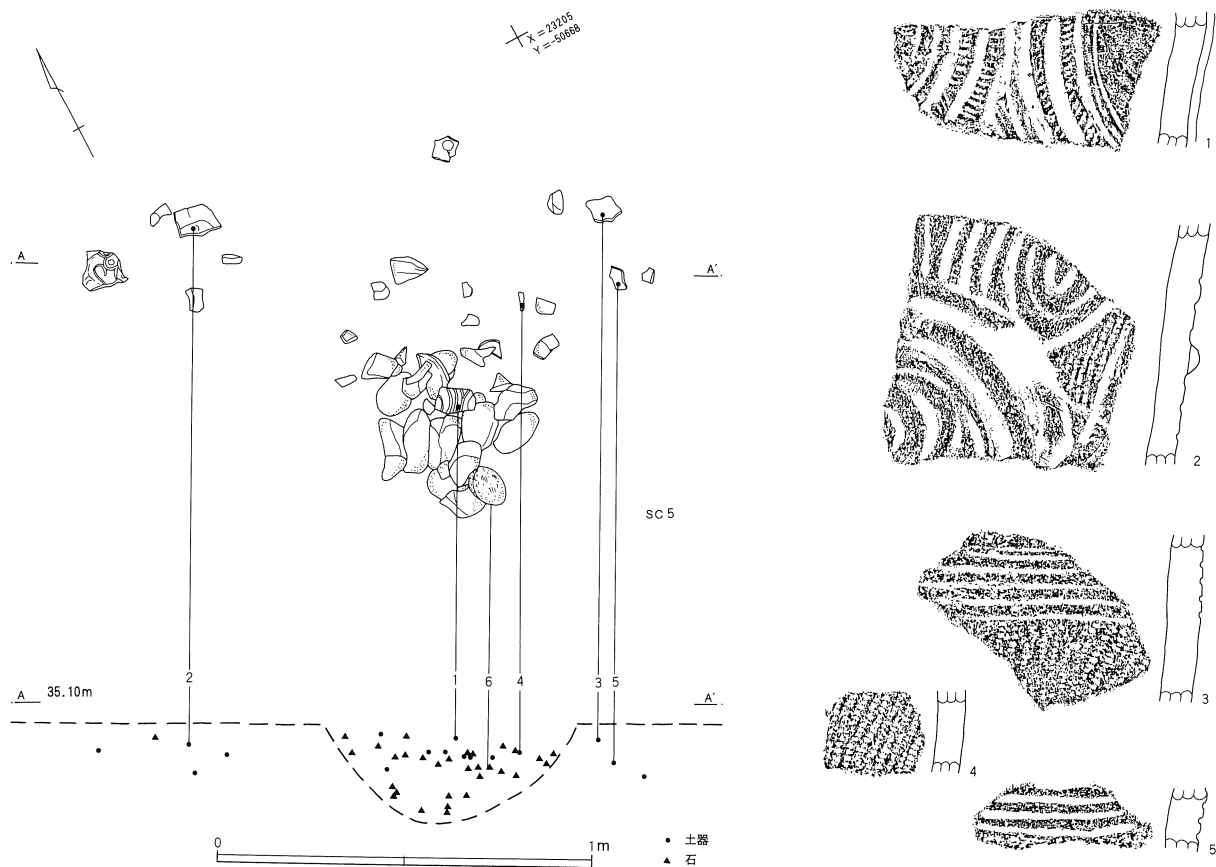
掘り込みは黒褐色土層中であつたため確認できなかったが、礫の分布から推定すると、平面形は径0.9mの略円形、深さは0.25mである。礫の個数は約30個、重量分布は、0.5kg未満60%、~1kg20%、~1.5kg10%、~2kg7%、~3kg3%、総重量は16.2kgである。

遺物は、縄文土器片約20点と石器である。

出土土器は、全て第II群土器である。1は2本隆帯で曲線のモチーフを描くもので、隆帯上に刻みを施す。2も同様に2本隆帯で曲線モチーフを描くが、地文に縄文を施文し、余白に半肉彫り状の集合沈線文を施文する。1は第2類、2は第3類土器である。

3、5は胴部を横位の集合沈線文で区画し、胴部に0段多条縄文を施文する第2類土器である。4も同様に、

第19図 第5号集石と出土遺物



条がやや縦走する様に施文されている。

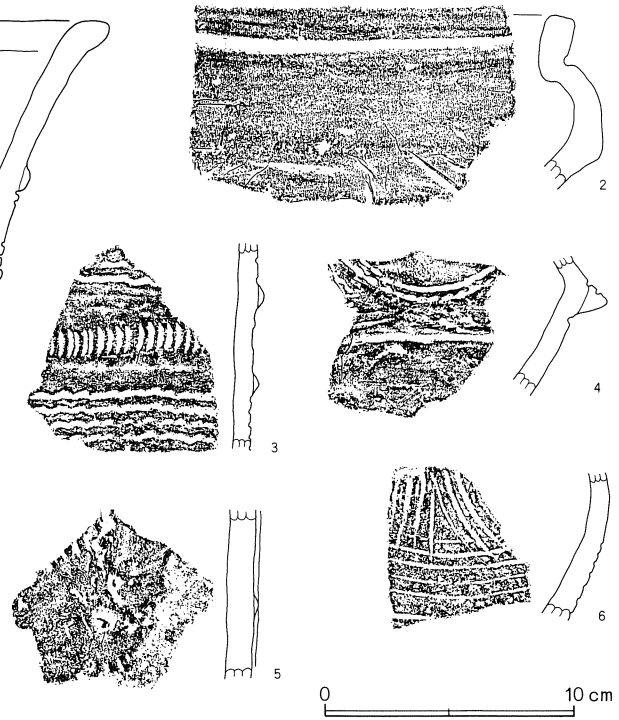
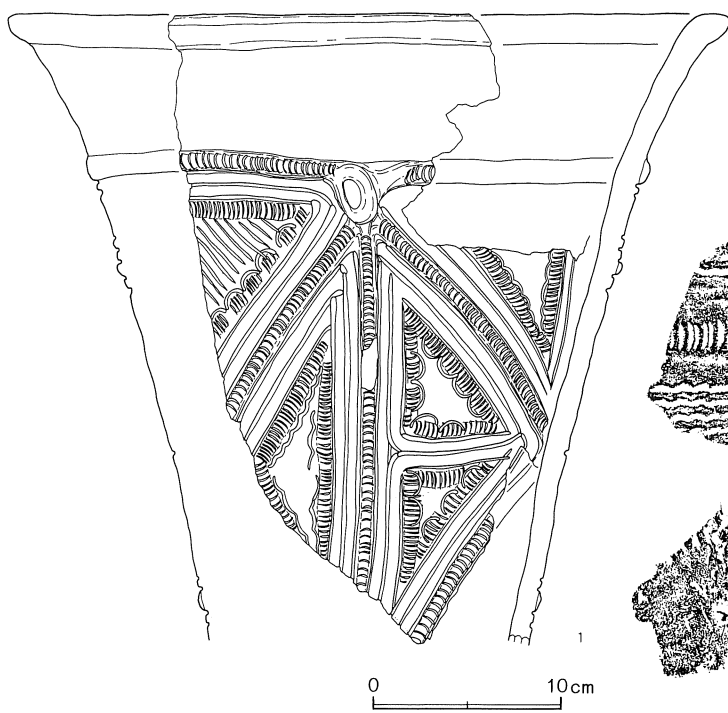
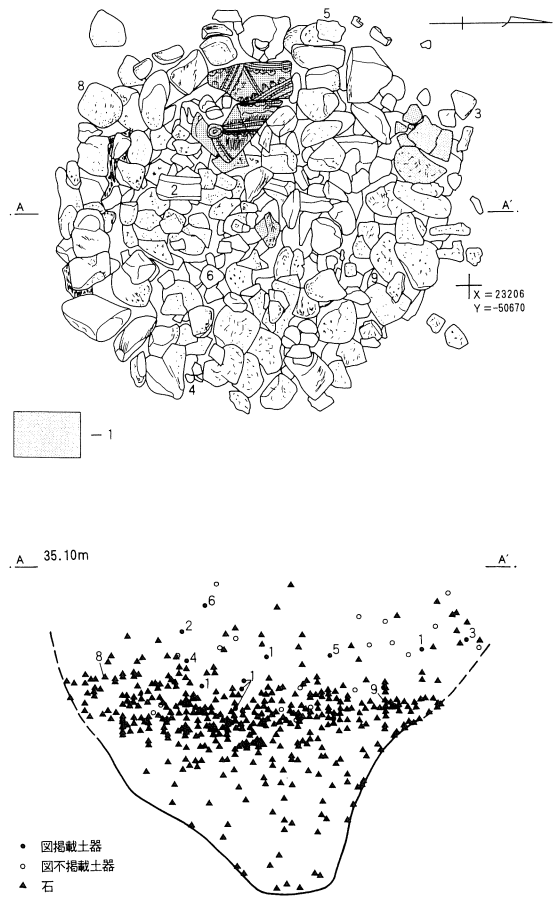
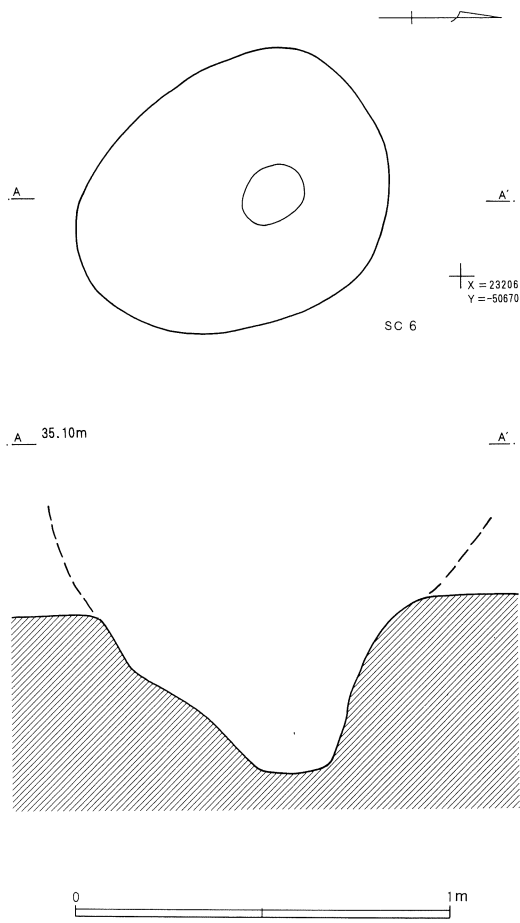
石器は6の磨石が1点出土した。6は、平らな面を持つ表裏の両面を、磨面として使用されているもので、側縁の一部には敲打の痕跡が認められる。器面は、部分的に黒色化している。計測値は、長さ13.0cm、幅

10.4cm、厚さ4.5cm、重さ832gである。石質は安山岩である。遺構の帰属時期は、縄文時代中期中葉である。

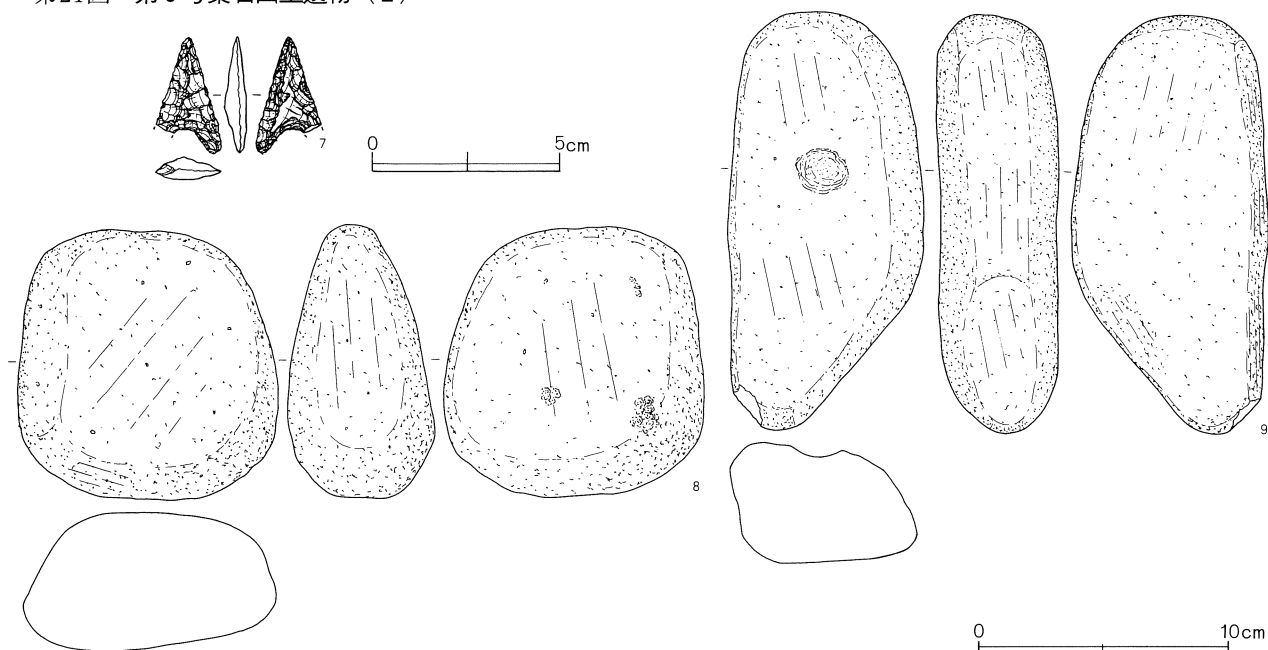
第6号集石<SC6 (旧SX6)> (第12・20・21図)

位置は、4区B-13・14グリッドである。

第20図 第6号集石と出土遺物(1)



第21図 第6号集石出土遺物(2)



確認された掘り込みの平面形は0.9×0.7mの楕円形、深さは0.4mであるが、上層の黒褐色土層に含まれる礫の分布からみて、平面形は径1.2mの略円形、深さは0.8mと推定される。規模は集石群中最大で、礫の個数は約670個、重量分布は、0.5kg未満80%、～1kg8%、～1.5kg3%、～2kg4%、～3kg1%、～3.5kg1%、～4kg1%、～4.5kg1%、～5kg1%、最大は4.9kgである。総重量は224.3kgである。

遺物は、大型破片を含む縄文土器片約40点と石器である。

1は無文の口縁部が開く深鉢形土器で、胴部に三角形を基本にした区画文を、刻みを施す隆帯で施文する。隆帯脇には沈線文が沿い、区画内には沈線文に沿って蓮華文状の刺突文を配する。推定口径38.6cm、現存高33.2cmを測る。2は胴部がコ字状に屈曲する浅鉢形土器である。1、2とも第Ⅱ群第2類土器である。

3～5は雲母を含む第1類土器で、3は断面三角の隆帯による胴部区画内に幅広の爪形文列を施し、小波状の結節沈線文列を施文する。4は屈曲の強い胴部に隆帯を貼付して区画し、隆帯に沿って2列の刺突文列を施文する。5は無地文上に、やや蛇行する断面三角の低隆帯が垂下する。

6は第Ⅰ群土器で、薄くて堅緻な器面に集合平行沈線文を描くもので、第2類の諸磯b式である。

石器は3点出土した。7は石鏃で長さ3.1cm、幅1.7cm、厚さ0.6cmで、石質はチャートである。8は磨石で長さ10.6cm、幅10.3cm、重さ890gで、石質は石英閃緑岩である。9は凹石で長さ16.4cm、幅7.8cm、厚さ4.8cm、重さ965gで、石質は安山岩である。

遺構の帰属時期は、縄文時代中期中葉である。

第7号集石<SC7 (IBSX7)> (第12・22図)

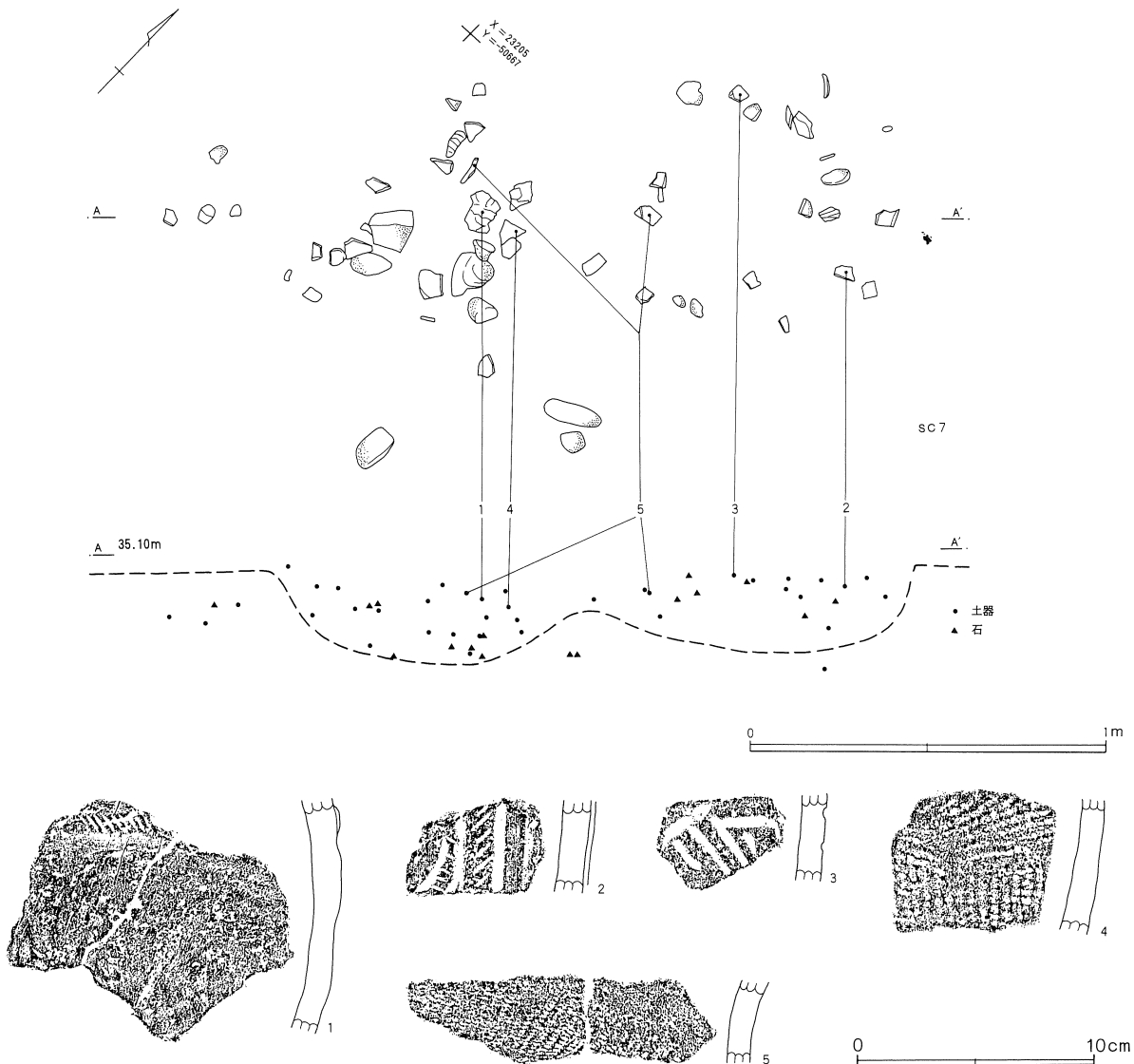
位置は、4区B-14グリッドである。

掘り込みは黒褐色土層中であつたため確認できなかった。礫の水平分布は2.0×1.0mの楕円形、垂直分布は0.3mだが、分布の偏りからみて、2単位の遺構が重複している可能性が高い。ここでは一括しておくが、礫の個数は18個、重量分布は、0.5kg未満77.7%、～1kg16.6%、～1.25kg5.55%、総重量は4.3kgである。

遺物は、縄文土器片約40点と石器である。

出土土器は、全て第Ⅱ群土器である。1は刻みを施す隆帯で胴部を区画し、2は刻みを施す隆帯でモチーフを描く。3は地文に縄文を施文し、区画内に沈線文を充填施文する。4、5は地文縄文のみの破片で、4

第22図 第7号集石と出土遺物



は単節RL、5は0段多条縄文RLを施文する。いずれも第2類土器であろう。

遺構の帰属時期は、縄文時代中期中葉である。

第8号集石<SC8 (旧SX8)> (第12・23~25図)

位置は、4区B-15グリッドである。

掘り込みは黒褐色土層中であつたため確認できなかったが、礫の分布から推定すると、平面形は径1.0mの円形、深さは0.2mである。礫の個数は約83個、重量分布は、0.5kg未満95%、~1kg 4%、~1.25kg 1%、総重量は15.5kgである。

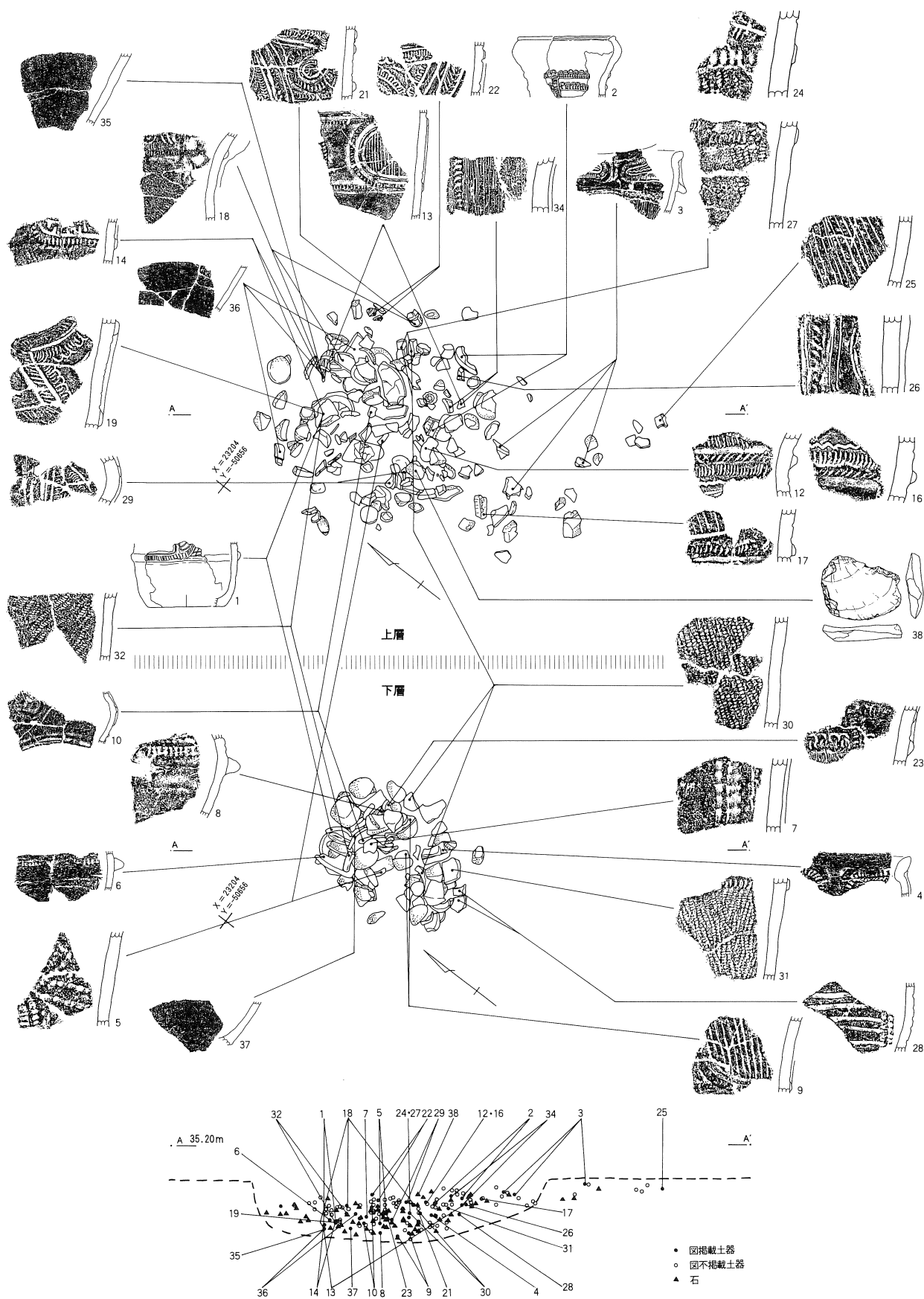
遺物は、大型破片を含む縄文土器片約400点と石器

で、SC3と並び比較的豊富である。

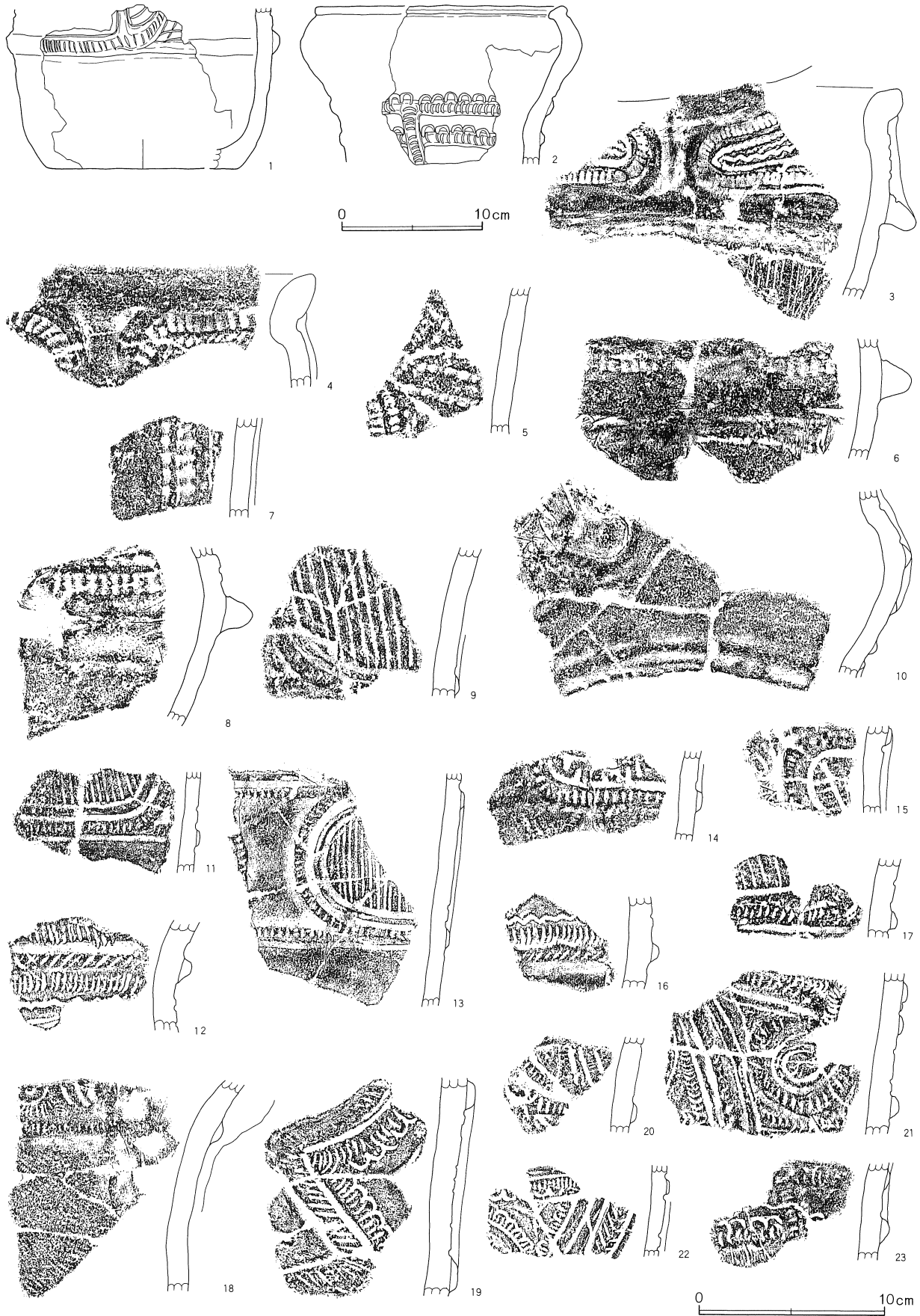
出土土器は、全て第II群土器である。1は刻みを施す隆帯で文様帯の区画及びモチーフを構成し、隆帯脇に沈線文を施す。底径13.6cm、現存高11.2cmを測る。2は無文の口縁部が内湾して開く器形を呈し、刻みを施す隆帯で胴部を区画し、隆帯脇には半月形の連続刺突文を施す。推定口径18.2cm、現存高11.5cmを測る。両者とも第2類土器である。

3~8は胎土に雲母を含む、第1類土器である。3は波状口縁に三角形の区画文を配し、隆帯脇にキャタピラ文と刺突文列を沿わせ、横位の鋸歯状沈線文を充填する。背の高い隆帯で、鰓状の顎の張る器形を形成

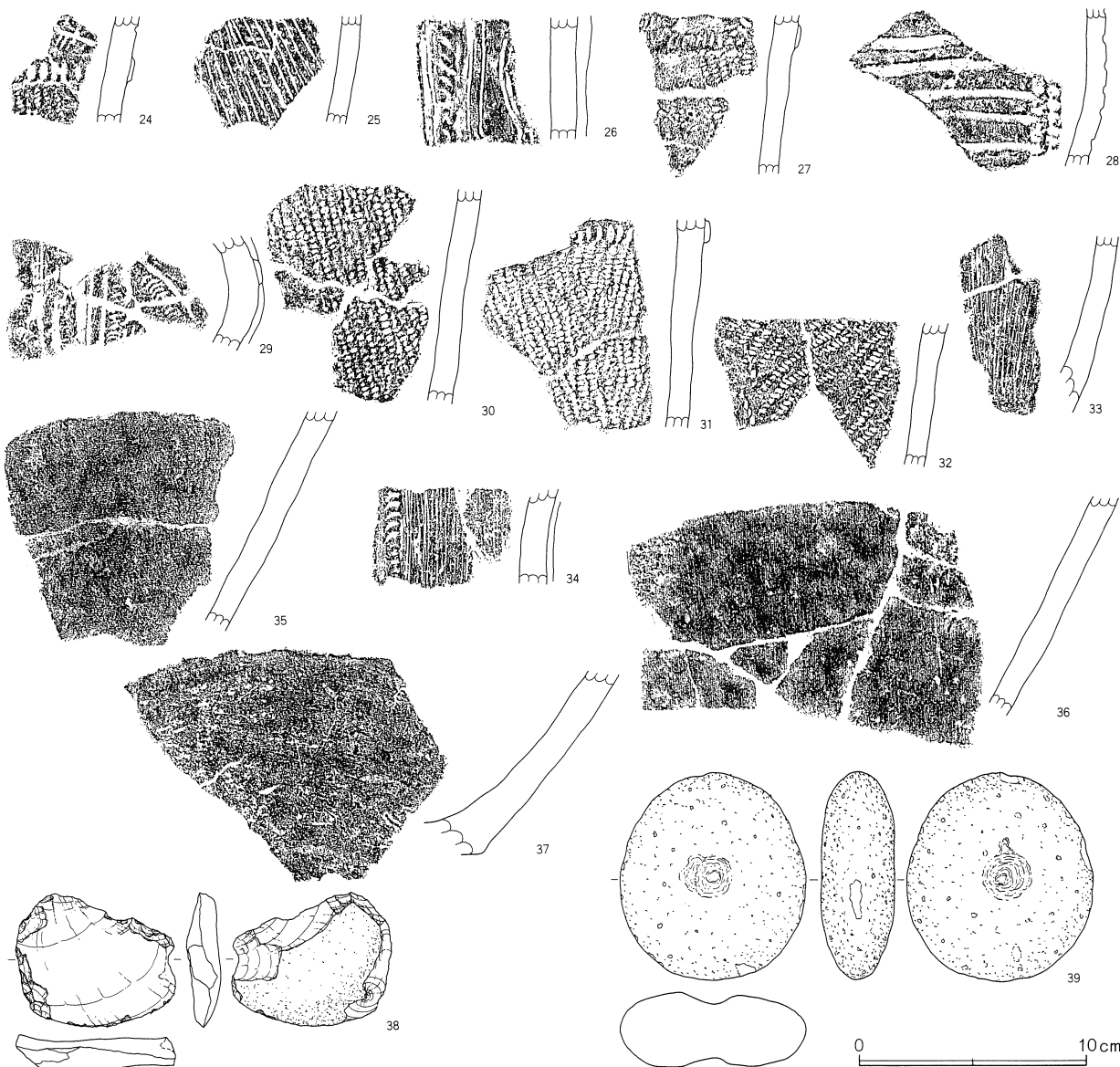
第23図 第8号集石(1)



第24図 第8号集石出土遺物(2)



第25図 第8号集石出土遺物(3)



する。胴部は縦位の条線文を施す。4は楕円の区画文を配し、5はキャタピラ文と刺突文を組み合わせた描線でモチーフを描く。7は垂下する隆帯脇に、5列の刺突文列が沿う。6、8は3と同様な器形を呈し、鯉の張った器形となる。

9～37は第2類土器である。10は口縁部が内湾して開く器形であるが、風化が著しく、詳細は不明である。文様は刻みを施す隆帯で構成し、隆帯脇には爪形文、蓮華状刺突文、沈線文を沿わせるのが一般的である。9、11～17は楕円区画文を構成し、区画内に集合沈線文を充填する。18～29は三角区画や渦巻文等のモチー

フを描き、区画内に三叉文等を充填する。28は縦位の刺突文と横位の沈線文の構成を採る。30～32は0段多糸縄文で、33、34は条線を地文にする。35～37は浅鉢の底部付近である。

遺構の帰属時期は、縄文時代中期中葉である。

石器は2点出土した。38は搔器で、剥片の縁辺を刃部としてそのまま使用するもので、調整はほとんど加えられていない。長さ5.6cm、幅7.0cm、厚さ1.9cm、石質は凝灰岩である。39は両面に凹部を持つ凹石で、長さ9.0cm、幅8.1cm、厚さ3.2cm、重さ223gである。石質は安山岩で、風化が著しい。

(3) 土壌

第1号土壌<SK1 (旧SK6)> (第26・27図)

位置は、2区C-5グリッドである。

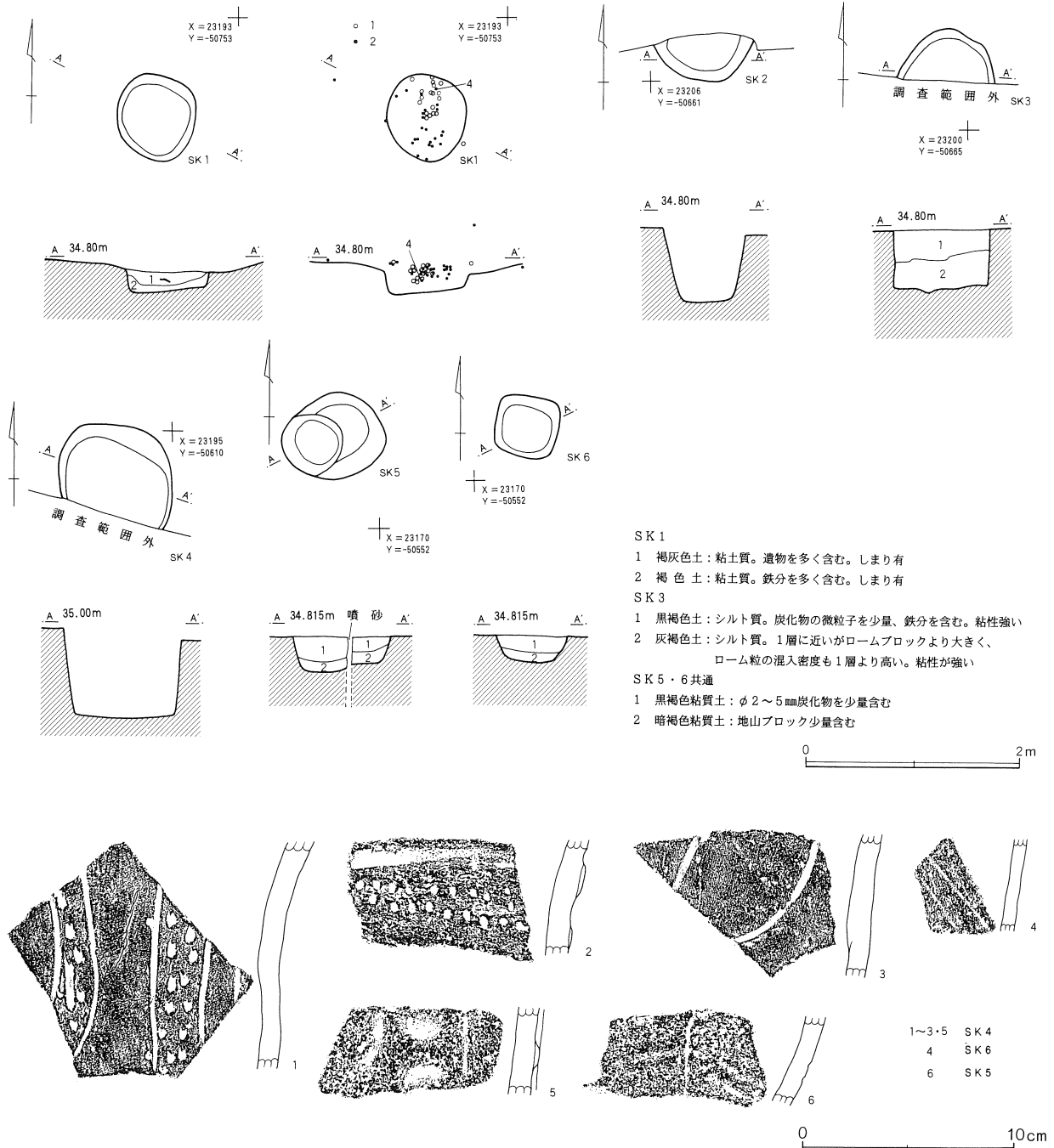
平面形は直径約0.9mの略円形で、深さ0.2m。

遺物は、同一個体の大型破片を含む縄文土器片約60点である。

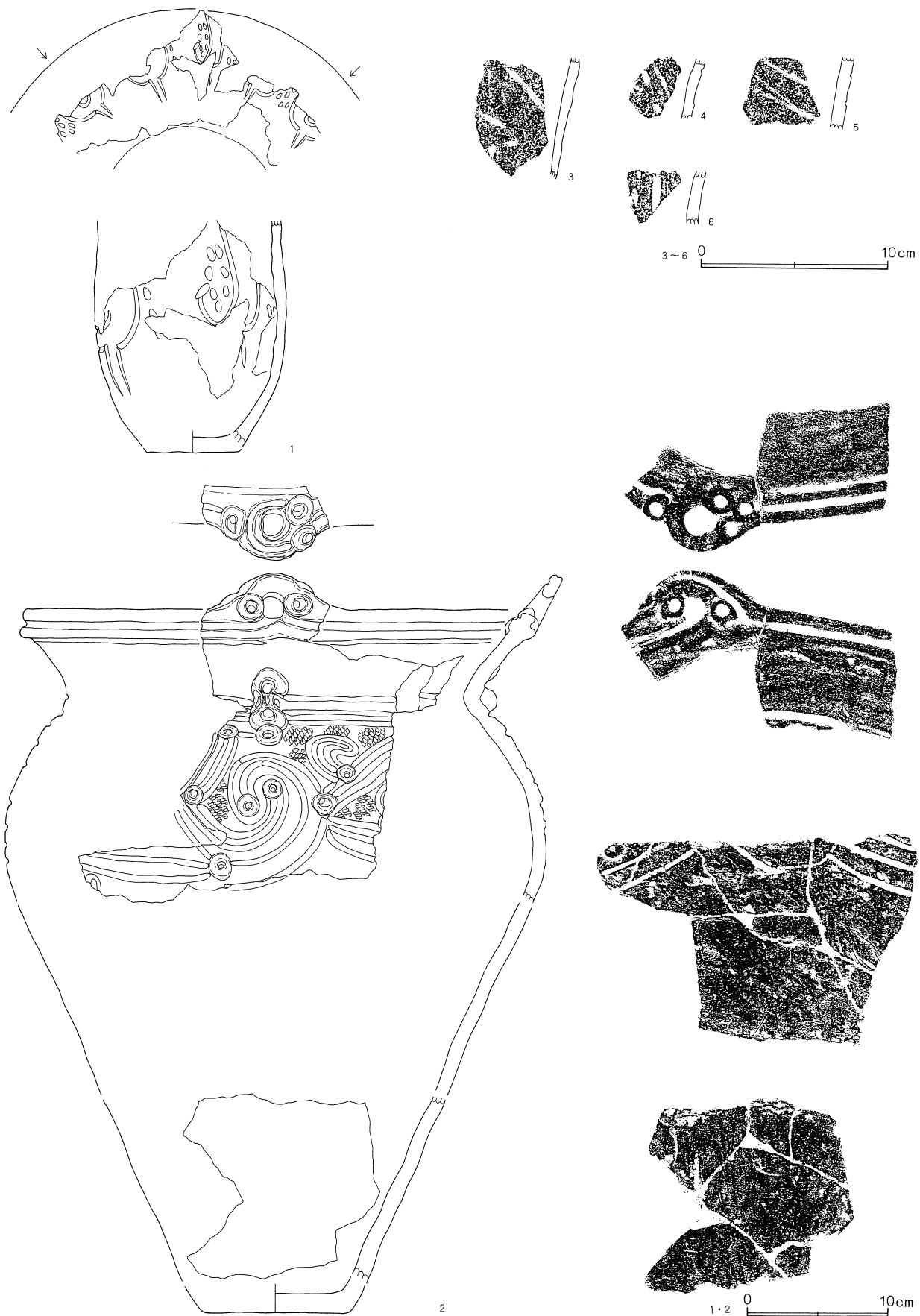
第Ⅲ群土器である、復原個体が2個体出土している。

1は口縁部を欠損するが、胴部に沈線のJ字状区画を4単位に配する構成が把握される。J字状区画下端からは2本沈線が垂下し、下端は閉塞しない。1箇所のJ地文の構成が乱れているが、他は区画外の余白に兩垂れ状の刺突文を施文する。現存高16cmを測る。3～6は2本沈線文でモチーフを描き、沈線間に刺突文列

第26図 1～6区土壌と出土遺物



第27図 第1号土壙出土遺物



を施文するものである。1、3～6は第Ⅲ群第1類の称名寺系要素を持つが、第2類段階に分類される土器群である。

2は頸部が括れ、胴部が大きく張る器形の深鉢形土器である。口縁部には円孔を持つ把手が少なくとも2箇所につき、口縁部に沈線文が巡る。把手には盲孔を伴う扁平の円形貼付文を周囲に配し、貼付文間を沈線で繋ぐ部分がある。頸部は3本沈線で区画し、把手下に背の高い8字状貼付文を配する。胴部は、円形貼付文を起点にそれぞれを繋ぐ沈線3本が入組んで、渦巻文を横連結するモチーフを構成する。結果的には、3本沈線でモチーフを描く。余白には単節LRの充填縄文を施している。モチーフ以下は、無文になっている。推定口径36.5cmを測る。第2類段階であるが、第4類に分類される。

遺構の帰属時期は、縄文時代後期前葉である。

第2号土壙<SK 2 (旧SK 7)> (第26図)

位置は、4区B-14グリッドである。

過半が調査範囲外にあたるが、平面形は径約1mの略円形と推定される。深さ0.7m。

遺物は縄文土器片2点で、時期不詳だが縄文時代の遺構と推定される。

第3号土壙<SK 3 (旧SK 8)> (第26図)

位置は、4区B-14グリッドである。

南半が調査範囲外にあたるが、平面形は径1mの円形と推定される。深さ0.6m。

時期不詳だが縄文時代の遺構と推定される。

(4) 溝跡

第1号溝跡<SD 1 (旧SD 2)> (第28図)

位置は、1区C・D-2・3グリッドである。

約12mにわたり検出された。SD 3と直交するが、新旧関係は不明である。ほぼ直線的で、方向はN-50°-Eである。幅0.5m、深さ0.4m、断面形は箱形である。

第4号土壙<SK 4 (旧SK 11)> (第26図)

位置は、5区C-19グリッドである。

南半が調査範囲外にあたるが、平面形は径約1.2mの略円形とみられる。深さ0.8m。

遺物は、縄文土器片13点である。

5は器面の荒れが著しいが、H状の隆帯区画文を垂下することから、第Ⅱ群第4類土器と思われる。

1は2本沈線間に刺突文を施文する沈線文帯でモチーフを描くものであり、第Ⅲ群第1類に分類される。2は低隆帯で区画され、隆帯に沿って刺突列が施されている。3は無文地上に、曲線の沈線モチーフを描く、第3類土器である。

遺構の帰属時期は、縄文時代後期前葉である。

第5号土壙<SK 5 (旧SK 2)> (第26図)

位置は、6区E・F-25グリッドである。

平面形は径1.0mの略円形で、深さ約0.3m。

遺物は、縄文土器片11点である。

6は器面の荒れ著しく、横位の2本の沈線文が僅かに確認されるのみで、時期不詳である。遺構も同様。

第6号土壙<SK 6 (旧SK 1)> (第26図)

位置は、6区E・F-25グリッドである。

平面形は径0.7mの方形で、深さ0.3m。

遺物は、縄文土器片3点である。

4は2本の沈線文が確認されるのみで、詳細は不明であるが、第Ⅲ群第2類土器と思われる。

遺構の帰属時期は、縄文時代後期前葉である。

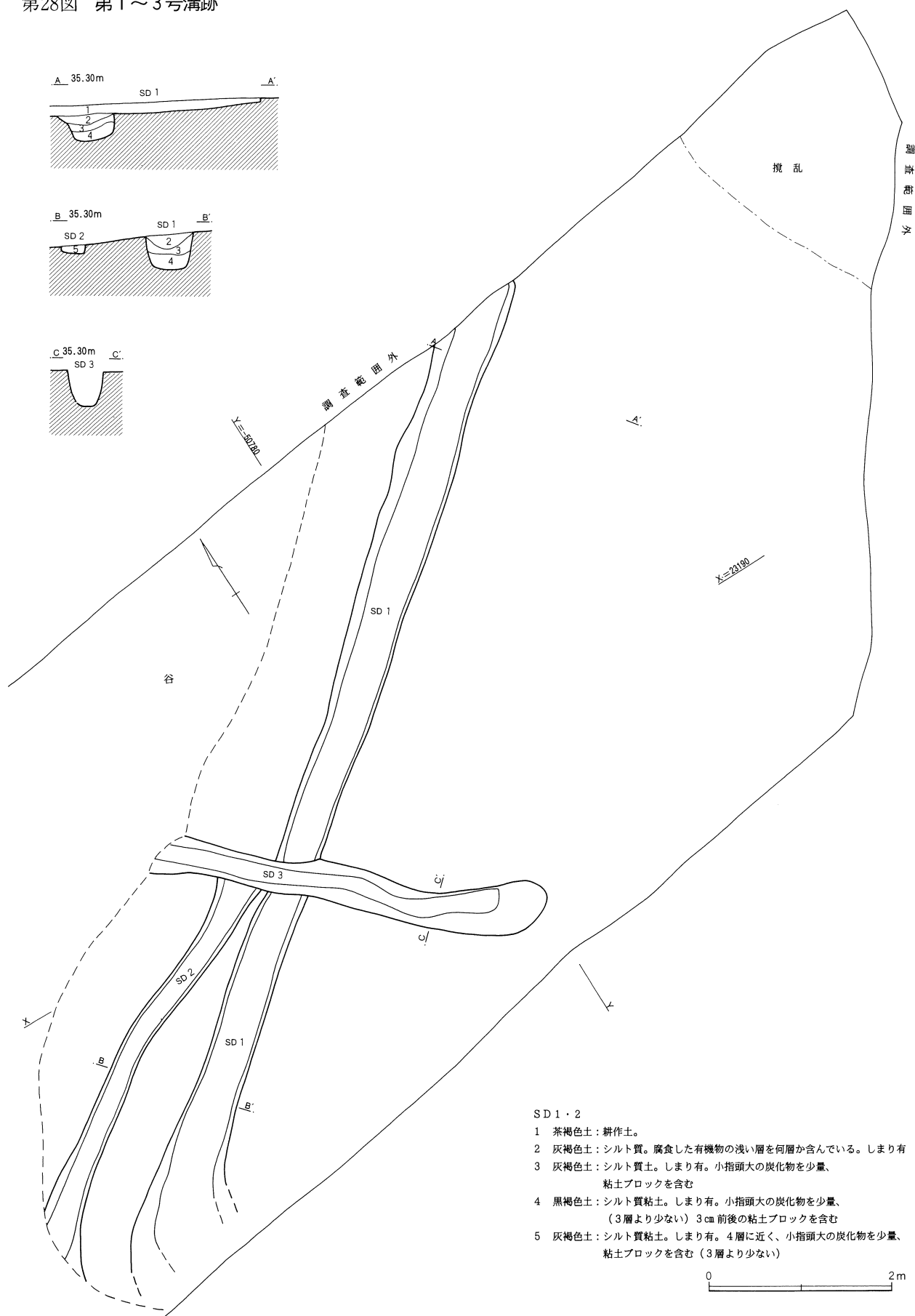
遺物は土器片等10点で、中世以降の遺構と推定される。

第2号溝跡<SD 2 (旧SD 3)> (第28図)

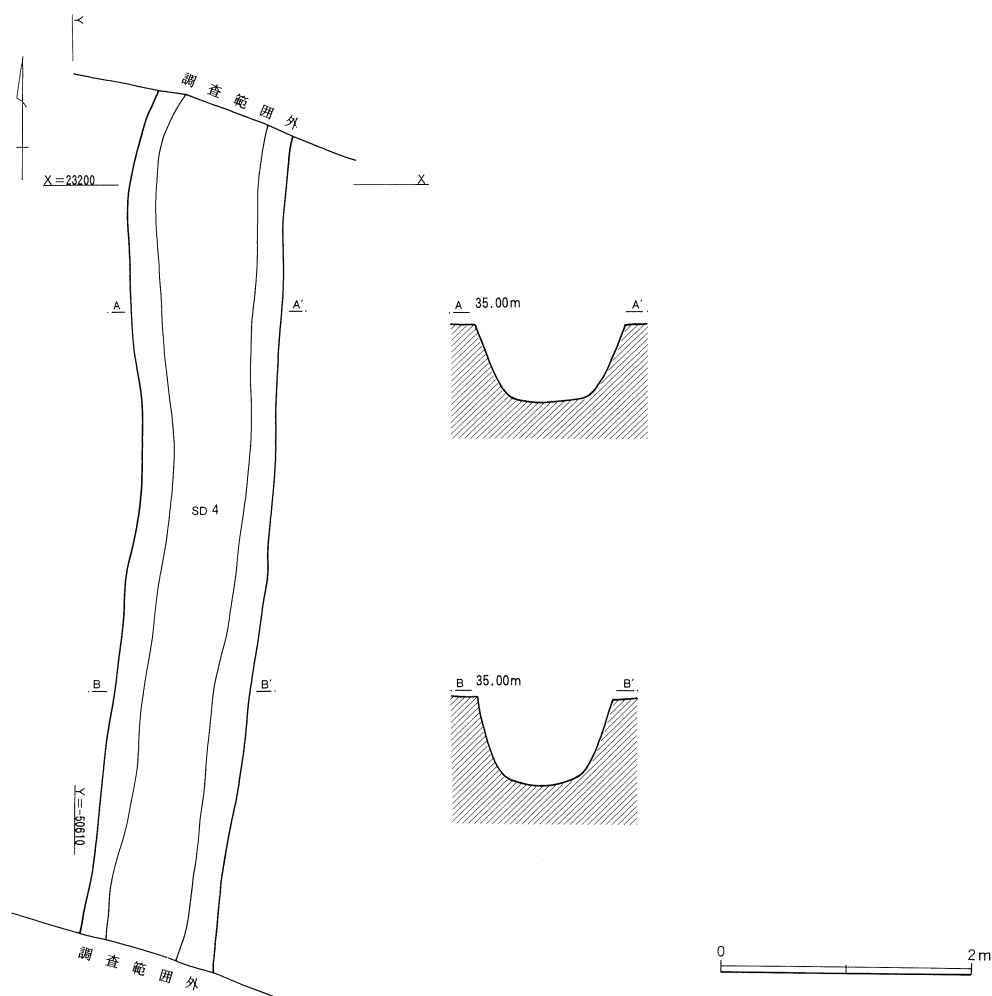
位置は、1区C・D-2・3グリッドである。

4.5mにわたり検出された。近接するSD 1にはほぼ

第28図 第1～3号溝跡



第29図 第4号溝跡



平行する。SD 3に直交するが、新旧関係は不明である。ほぼ直線的で、方向はN-110°-Wである。幅0.3m、深さ0.1m、断面形は浅い箱形である。

遺物は土器片7点で、中世以降の遺構と推定される。

第3号溝跡<SD 3 (旧SD 5)> (第28図)

位置は、1区C・D-2グリッドである。

4.4mにわたり検出された。SD 1・2に直交するが、新旧関係は不明である。ほぼ直線的で、方向はN-50°-Wである。幅0.4m、深さ0.4m、断面形はU

字形。

遺物は土器小片10点で、遺構の帰属時期は不明である。

第4号溝跡<SD 4 (旧SD 9)> (第29図)

位置は、5区B・C-20グリッドである。6.7mにわたり検出された。ほぼ直線的で、方向はN-10°-Eである。幅1.1m、深さ0.7m、断面形は逆台形である。

遺物は、混入とみられる縄文土器を主体とする土器小片約80点で、遺構の帰属時期は不明である。

(5) 遺構外ピット

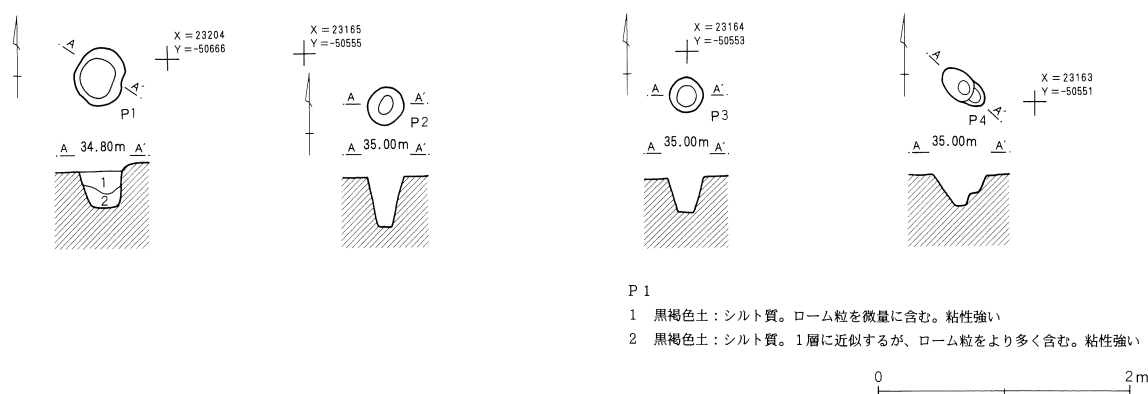
第1号ピット<P 1> (第30図)

位置は、4区B-14グリッドである。平面形は径0.4mの円形で、深さ0.3m。縄文時代の遺構と推定される。

第2号ピット<P 2> (第30図)

位置は、6区F-25グリッドである。平面形は径0.3mの円形で、深さ0.4m。縄文時代の遺構と推定される。

第30図 1～6区遺溝外ピット



第3号ピット<P3> (第30図)

位置は、6区F-25グリッドである。平面形は径0.3mの円形で、深さ0.3m。縄文時代の遺構と推定される。

(6) 遺構外出土の遺物

1～6区遺構外出土遺物

1～6区からは、第Ⅰ群、第Ⅱ群、第Ⅲ群土器が出土しているが、遺構との関連で中期中葉の第Ⅱ群土器が目立つ。また、第Ⅰ群土器もこの区間のみ出土している。

第Ⅰ群土器 (1～17)

いずれも胎土に繊維を含む第1類土器で、黒浜式もしくはそれに併行する土器群である。1は爪形文で、2～5は併行沈線文でモチーフを描く。6～17は羽状縄文を施文する。

第Ⅱ群土器

第1類 (19～25)

胎土に雲母を含む阿玉台系の土器群である。19は襷状整形痕を残し、20は爪形文を施文する。21、25は2列の結節沈線文でモチーフを描く。22、23は幅狭の胴部区画文帯内に楕円区画文を構成するもので、22は区画間に蛇行隆帯が、23は区画内に幅広の爪形文を施文する。24は断面三角の隆帯区画脇に、2列の結節沈線文が沿う。

第2類 (18、26～41)

勝坂式でも終末の土器群を中心としている。刻みを施す隆帯で区画し、隆帯に沿ってキャタピラ文 (35)

第4号ピット<P4> (第30図)

位置は、6区F-25グリッドである。平面形は約0.5×0.25mの楕円形で、底部に段差がある。深さ0.25m。縄文時代の遺構と推定される。

や蓮華状刺突文 (28)、沈線文 (31～33) を配するものが多く、地文縄文の上に沈線文でモチーフを描くもの (30、39) もある。26は双頭の把手を持つ波状口縁と思われ、把手部分の円形モチーフを中心に、円形刺突文や交互刺突文、爪形文を施文する。28、29は沈線のモチーフに沿って貝殻と思われる押引状の爪形文を施文し、弧状の刺突文で縁取る。18は円形の刺突文と沈線文でモチーフを描く、小型の壺形土器である。ほぼ完形で、口径5.6cm、底径4.6cm、器高7.6cmを測る。41、42は浅鉢形土器で、41は口縁部がコ字状に屈曲する器形で、隆帯の楕円区画を施し、斜めの隆帯で連結する構成を採る。区画内には集合沈線文を充填施文する。42はく字状に屈曲する器形で、集合沈線の対弧状モチーフを描く。

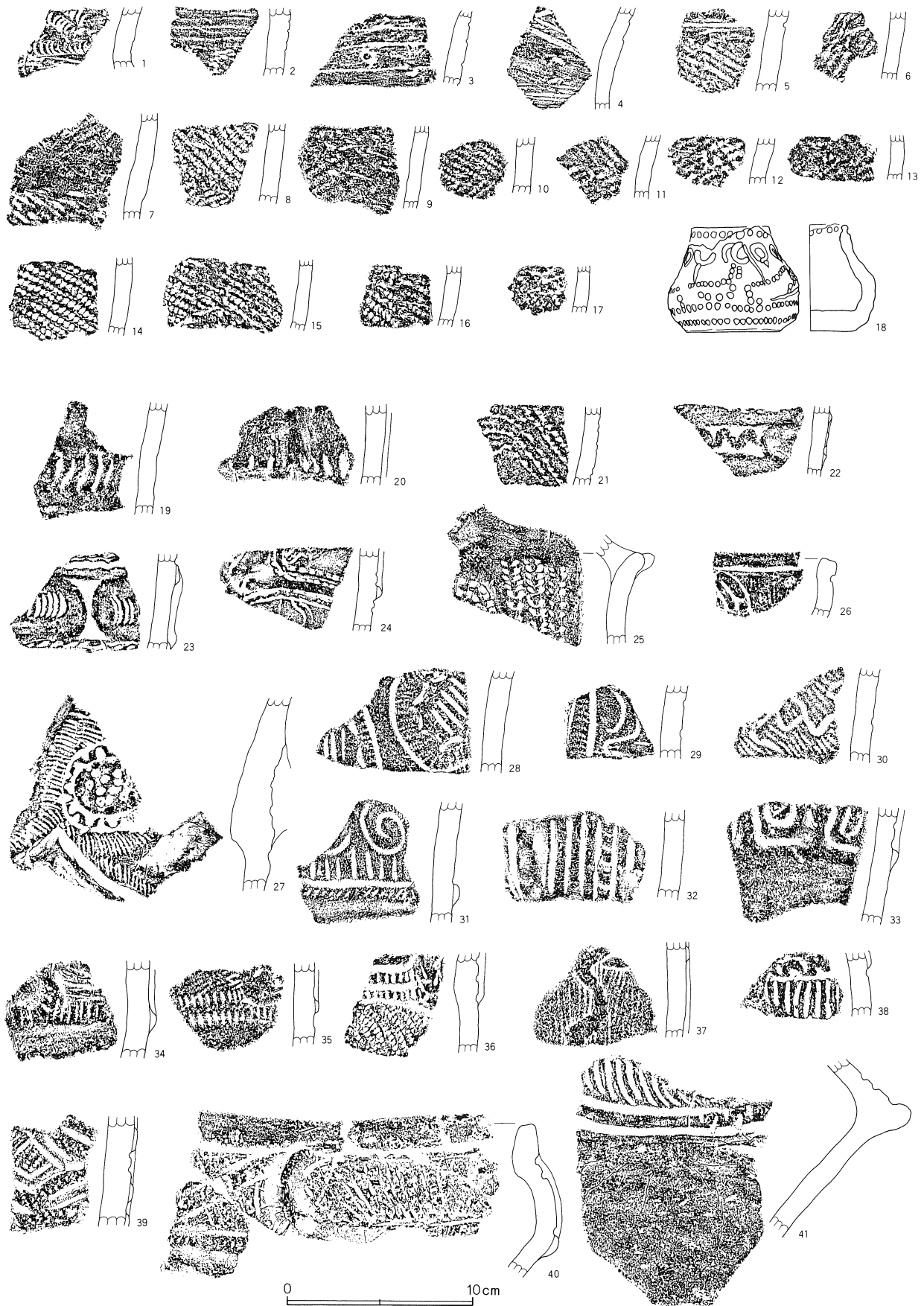
第3類 (42)

42は口縁部が屈曲して大きく開き、胴部が張る器形を呈する。口縁部に隆帯のモチーフを配して文様帯を形成し、口縁部から流下した隆帯が胴部で文様を展開する構成を採る。大木系的な構成であり、胴部には地文縄文単節RLを施文する。

第4類 (43～47)

加曾利E系の土器群で、43は口縁部に2本隆帯のS

第31图 1~6区遺溝外出土遺物(1)



第32図 1～6区遺溝外出土遺物(2)



字状文を施文する、やや古い段階の土器である。44は頸部無文帯と胴部の区画に沈線文を施文する。46は屈曲の緩い口縁部で沈線で区画する。45は胴部に磨消懸垂文を垂下する。47は無文の鉢形土器の口縁部と思われる。

第Ⅲ群土器

第2類 (49～55)

口縁部に沈線を巡らせて、口縁部文様帯を構成する堀之内1式土器である。49、50、54は2本沈線が、51、53は1本の沈線が口縁部に巡り、49、52は沈線で胴部を区画する。52は称名寺系のモチーフ内に、刺突文を充填する。55は隆帯の円形モチーフに沿って、盲孔状の円形刺突文を施す。52は胴部に縦位の沈線文を施文するが、第3類土器に近い。

第3類 (56)

56は直線的に開く器形で、口唇裏に沈線が巡る。器面の荒れが著しいが、磨消縄文によるモチーフが施文されていたものと思われる。

第4類 (48)

隆帯を巡らせて口縁部無文帯を区画し、円形貼付文を繋ぐC字状隆帯を垂下する綱取系の土器である。隆帯上には盲孔を繋ぐC字状の沈線文を施文し、C字状文は口縁部の区画隆帯下までくいこむ。

第5類 (57～62)

口縁部に多条の平行沈線文を施文する加曾利B式土器で、58は幅広の口唇部に沈線文を巡らせ、細かな刻みを施す。60は細沈線の柁子目文を施し、口縁裏に沈線文を巡らせる。

3. 7～11区の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

第3号住居跡<S J 1 (旧S J 2)> (第33図)

位置は、7区D-28・29グリッドである。

壁は確認されなかったが、炉、ピット等の配列から、平面形は円形の主体部に長方形の張り出し部が伴う柄鏡形と推定される。中心軸方向は、N-123°-Eである。主体部は、壁際にあたとみられるピットが直径約4mの環状に並ぶ。張り出し部は2.5×1.2mで、長辺両側にやはりピットが並ぶ。第33図下半に炉、ピット等と遺構検出面の比高差を示したが、掘り込みの深さは0.2～0.3mが主である。

炉は中央部に設置されていた。地床炉で、1.0×0.7mの楕円形、深さは0.2mである。

遺物は、縄文土器片約30点である。

全て、第Ⅲ群土器である。1、2は第2類土器で、1は内折して開く口縁部に、円形貼付文が付き、2は口縁部に太い沈線文が巡る。3は口縁部が直線的に開き、条線文を斜位施文する。口縁裏に沈線を巡らす。4は張る胴部に、多重の沈線文を施文する。5、7は深鉢形の胴部破片で、沈線の三角区画を施す。6は壺か注口土器で、胴部区画沈線間に刺突文を施文する。3～7は第3類土器である。

遺構の帰属時期は、縄文時代後期前葉である。

第4号住居跡<S J 4 (旧S J 4)> (第34図)

位置は、8区F-30・31グリッドである。SK11と重複し、SK8・9・16と近接する。

壁は確認されなかったが、炉、ピット等の配列から、平面形は直径約4.5mの円形で、南西部は調査区外にあたと推定される。本来壁際に並ぶとみられるピットは多数確認された。深さにはばらつきがあるが、北半部では、相対的に深いピットが1.2～1.5mの間隔で認められる。

炉は中央部に設置されていた。地床炉で、1.1×0.8mの楕円形、深さは0.4mである。

遺物は、縄文土器片約280点である。

1は屈曲して開く口縁部に、縦位2連の盲孔を施し、沈線文で連結する。2～4は口縁が開く器形の深鉢形土器で、胴部に磨消縄文で区画文を描く。2の口縁裏には沈線が巡り、4は円形状のモチーフを磨消縄文で描く。5は算盤玉状の器形で、磨消縄文のモチーフを描く、注口土器と思われる。6は無文の口縁が開く深鉢形土器で、口縁部に沈線文が巡る。7は胴部の区曲が強い器形で、8字状貼付文を施す。8は非対称の波状口縁で、波頂部分の表裏面や側面に盲孔状の刺突文を施す。1、6、8は第2類、他は第3類土器と思われる。

遺構の帰属時期は、縄文時代後期前葉である。

第5号住居跡<S J 5 (旧S J 5)> (第35～37図)

位置は、11区N-37・38グリッドである。

壁は確認されなかったが、炉、ピット等の配列と遺物の分布状況から、平面形は、円形の主体部に長方形の張り出し部が伴う柄鏡形と推定される。中心軸方向は、N-180°-Wである。主体部は、壁際にあたとみられるピットが直径約5mの環状に並ぶ。張り出し部に掘り込みは認められないが、長1.8m程とみられる。

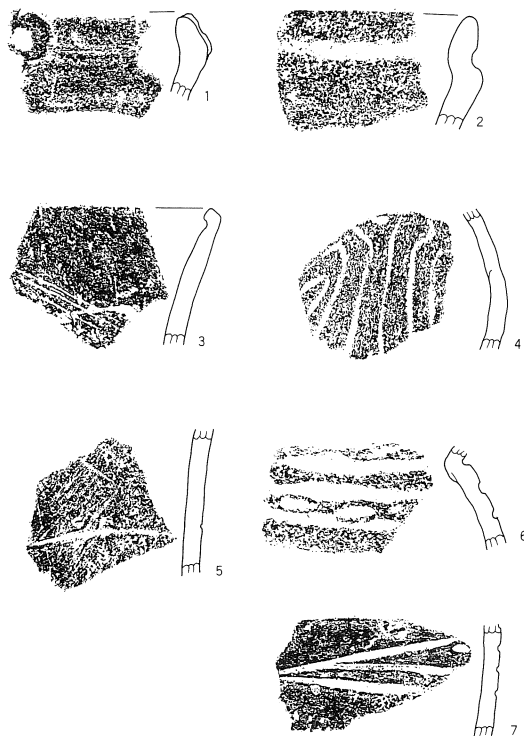
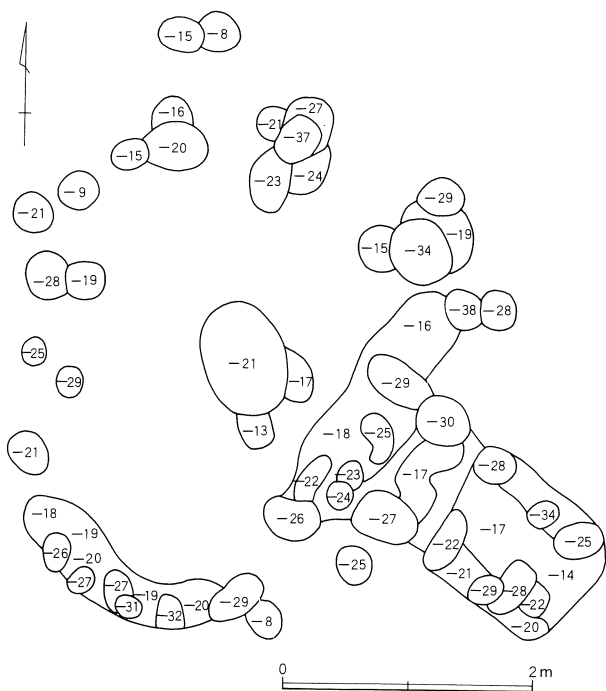
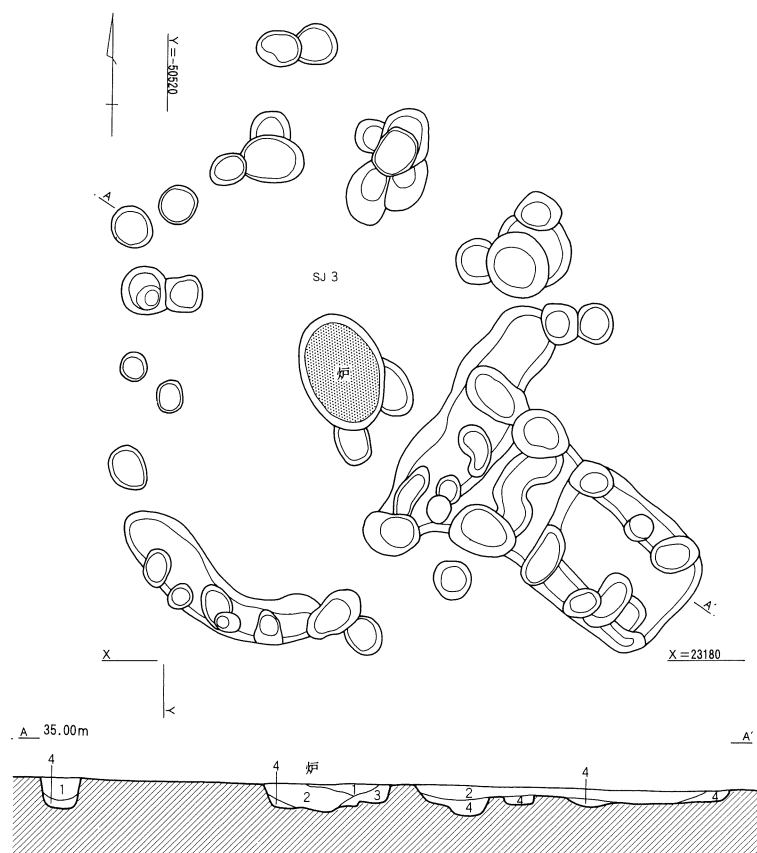
炉は中央部に設置されていた。地床炉で、径0.7mの円形、深さは0.2mである。

遺物は、縄文土器片約100点と石器である。

第Ⅲ群第1類土器を主体とする。3は第Ⅱ群第4類系土器であるが、口唇部が三角状となり、後期段階の可能性が高い。

1、4～17は第Ⅲ群第1類土器であり、磨消縄文でモチーフを描くもの(4、6、7)と、沈線間に刺突文を施す沈線文で描くもの(1、5、8～16)とがある。1は口縁部の大形破片で、推定口径42.4cm、現存高21cmを測る。4は緩い波状口縁を呈し、波頂部に盲孔を施す。10は隆帯が垂下し、16は渦巻き状の曲線的なモチーフ構成を採る。17、18は3本沈線で、円形状のモチーフを連結する構成を採り、第2類に分類されようか。

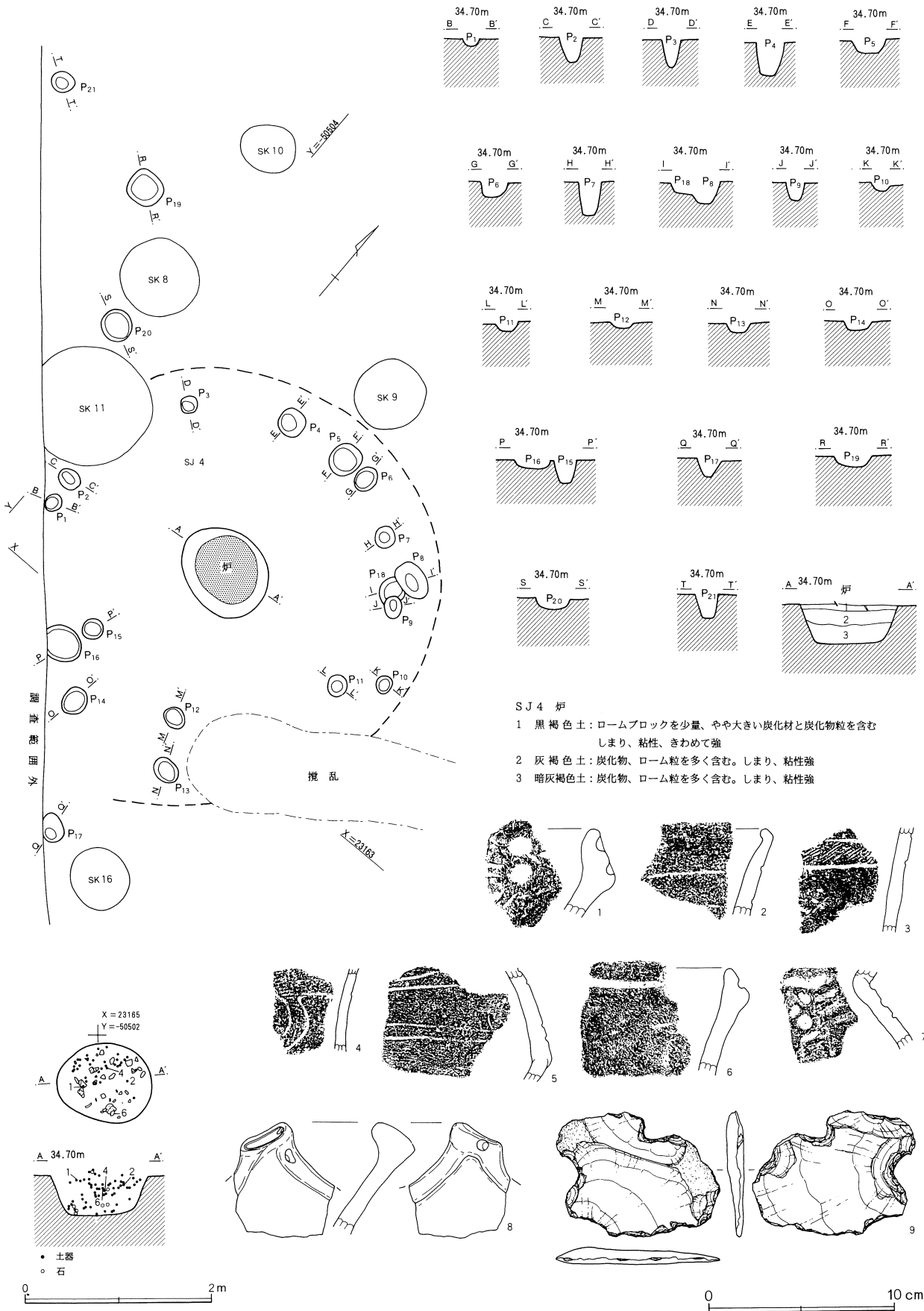
第33図 第3号住居跡と出土遺物



SJ 3

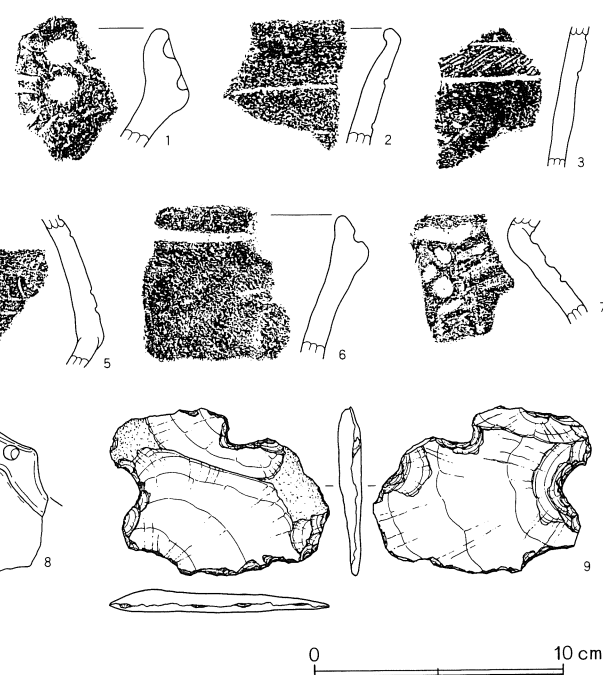
- 1 暗褐色土：焼土ブロック、焼土・炭化物粒を含む。粘性強
- 2 暗褐色土：4層土ブロックを含む。焼土・炭化物粒を少量含む。粘性強
- 3 暗褐色土：2層より色調暗い。4層土ブロック、焼土・炭化物粒ごく微量含む。粘性強
- 4 淡黄褐色土：2層土ブロック多く、炭化物を少量含む。粘性強

第34図 第4号住居跡と出土遺物



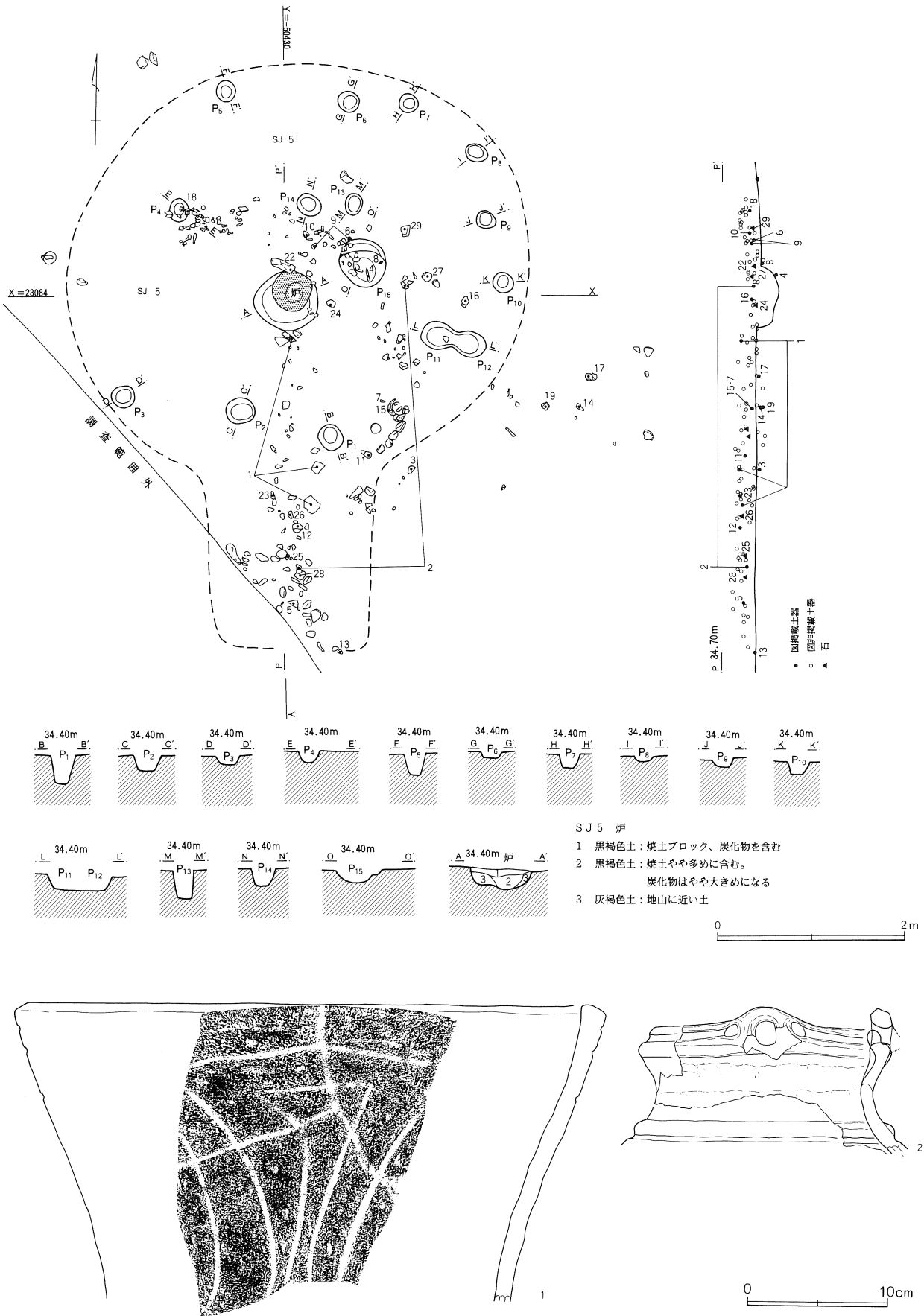
SJ4 炉

- 1 黒褐色土：ロームブロックを少量、やや大きい炭化材と炭化物粒を含む。しまり、粘性、きわめて強
- 2 灰褐色土：炭化物、ローム粒を多く含む。しまり、粘性強
- 3 暗灰褐色土：炭化物、ローム粒を多く含む。しまり、粘性強

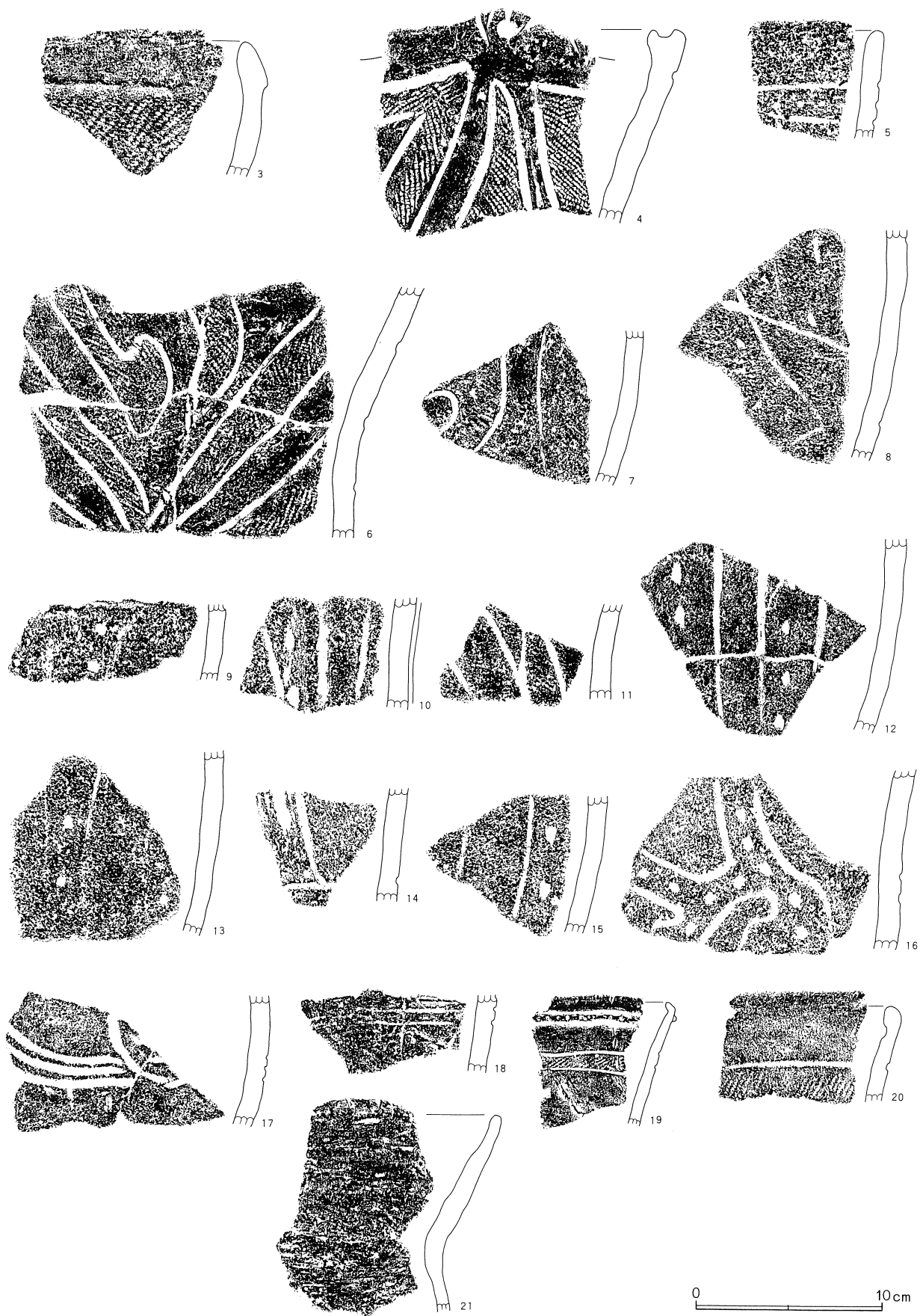


● 土器
○ 石

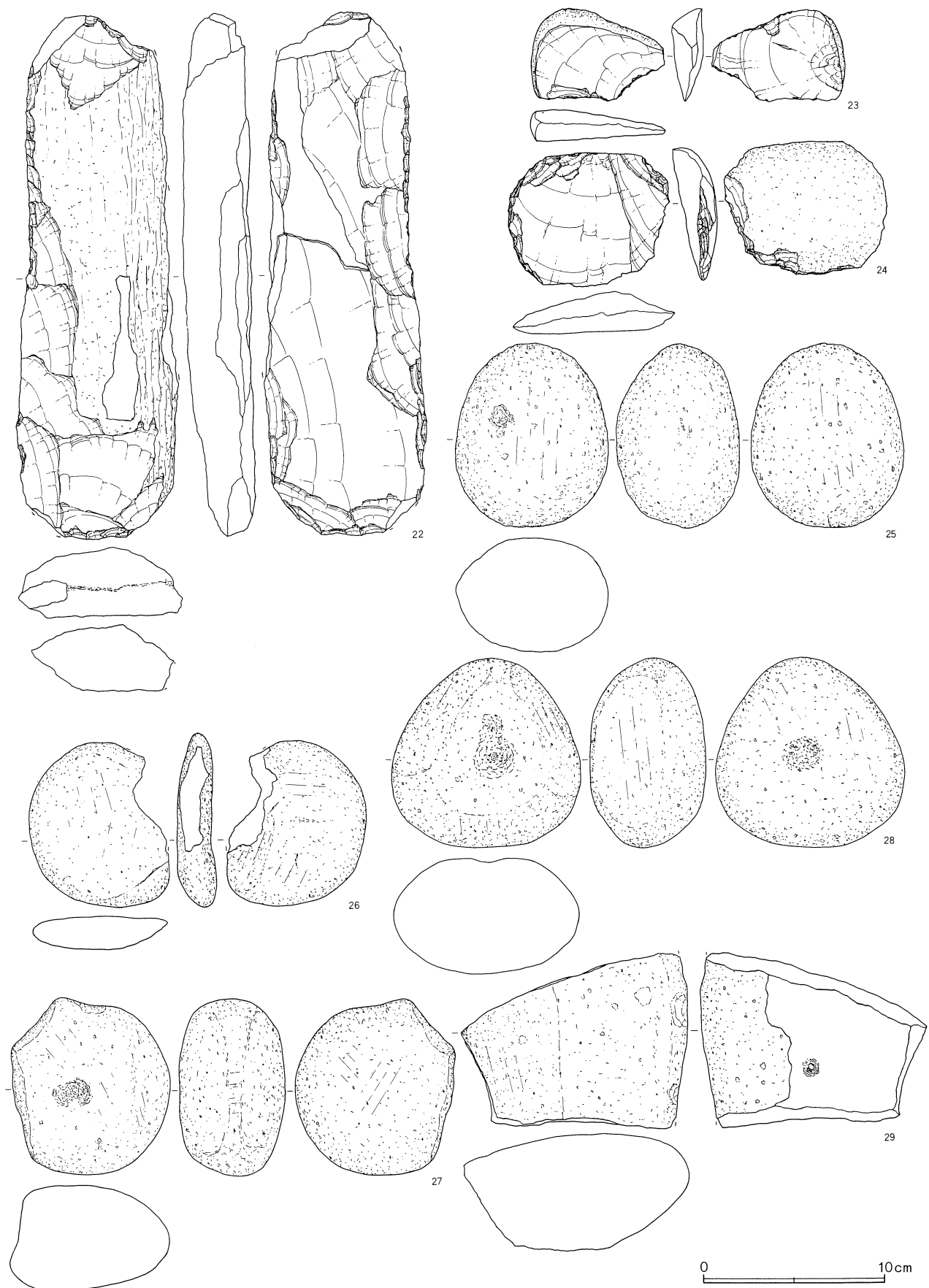
第35図 第5号住居跡と出土遺物（1）



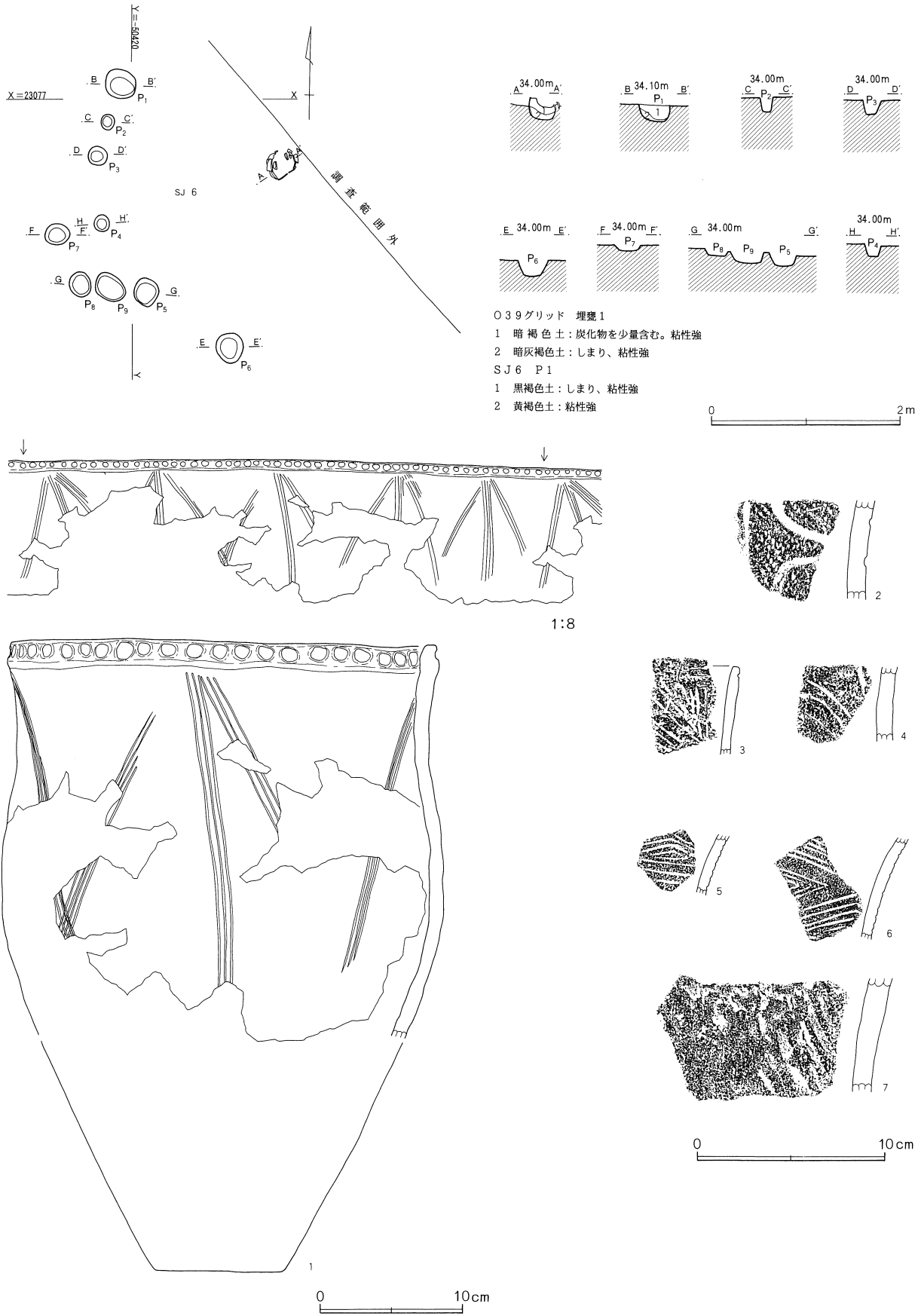
第36图 第5号住居跡出土遺物(2)



第37図 第5号住居跡出土遺物(3)



第38図 第6号住居跡と出土遺物



2は頸部が括れ胴部の張る壺形土器と思われるが、頸部以下を欠損する。口縁部は円孔を持つ突起が2箇所につき、円孔両脇の盲孔を起点として沈線文が口縁部に巡る。胴部は隆帯で区画するが、口縁部内側は受け口状となる。推定口径16cm、現存高10cmを測る、第2類土器である。

19～21は第3類土器である。19は口縁部に刻みを施す隆帯が巡り、以下磨消縄文で区画を行う。20は口縁部に隆帯はなく、磨消縄文帯で区画を行う。口縁裏の沈線文はやや下位に施される。21は頸部の括れる無文土器で、粗製土器である。

遺構の帰属時期は、縄文時代後期前葉である。

第6号住居跡<S J 6 (旧S J 6)> (第38図)

位置は、11区O-38・39グリッドである。

壁は確認されなかったが、炉とみられる埋甕を取り巻くように、ピットが弧状に配列される。この状況から、平面形は、埋甕炉を中央部にもつ径5m程の円形とも推定されるが、東半は調査範囲外にあたっており不確定である。

埋甕炉は、径0.3m、深さ0.2mである。

遺物は、炉体土器を含む縄文土器約70点である。

1は炉体土器であり、ほぼ上半部が現存する。頸部が緩く括れて口縁部がやや開き、胴部に最大径を持つ器形を呈する。口縁部には盲孔列が巡り、口縁部文様帯を形成する。胴部は条線状の沈線文を垂下して5分割し、それぞれの沈線を斜線で連結する。部分的には

(2) 土壇

第7号土壇<S K 7 (旧S K 3)> (第39図)

位置は、7区D-28グリッドである。

平面形は直径0.7mの円形で、深さ0.1m。

遺物は縄文土器片3点で、縄文時代の遺構と推定される。

第8号土壇<S K 8 (旧S K 1 2)> (第39・40図)

位置は、8区F-30グリッドである。

格子目状の構成となる。第Ⅲ群第2類土器で、口径30.4cm、最大幅31.4cm、現存高27.8cmを測る。

2は蕨手状の沈線文を垂下する第2類土器で、地文に単節RL縄文を施文する。3～7は第3類土器と思われ、3は口縁部から多条沈線でモチーフを施文する。5、6は同一個体で、磨消縄文の菱形モチーフに沿って、多重の細沈線を施文する。7は粗い整形痕を残す無文土器である。

遺構の帰属時期は、縄文時代後期前葉である。

第4号住居跡から石器が1点出土している。9は石匙で素材の形を利用するもので、長さ6.5cm、幅8.1cm、厚さ0.9cm、重さ50g、石質は泥岩である。

第5号住居跡から石器は8点出土している。22は石斧などの未製品と考えられる。長さ28.4cm、幅9.9cm、厚さ3.7cm、重さ1280g、石質は絹雲母片岩である。23、24は搔器で、23は長さ4.9cm、幅7.3cm、厚さ1.7cm、重さ55g、石質は凝灰岩である。24は長さ7.2cm、幅8.6cm、厚さ1.9cm、重さ140g、石質は凝灰岩である。25～27は磨石で、25は長さ10.0cm、幅8.3cm、厚さ6.7cm、重さ478g、石質は安山岩である。26は長さ8.9cm、幅7.4cm、厚さ2.1cm、重さ175g、石質は砂岩である。27は長さ9.5cm、幅8.6cm、厚さ5.8cm、重さ700g、石質は安山岩である。28は凹石で、28は長さ10.3cm、幅10.3cm、厚さ6.3cm、重さ950g、石質は安山岩である。29は石皿の破片で、残存する長さ9.5cm、幅12.3cm、厚さ6.3cm、重さ1003g、石質は安山岩である。

平面形は直径0.8mの円形で、深さ0.15m。

遺物は、縄文土器片約30点である。

1は内折して開く口縁部に沈線文が巡り、下端部に刻みを施す。胴部は弧状の沈線文で区画を施す。2は幅広の口縁部を隆帯で区画し、隆帯上には盲孔を繋ぐC字状沈線文を施文する。3は盲孔を抱く突起が口縁部に付き、盲孔を取り囲んで横C字状の沈線文を施す。沈線文は、それぞれ盲孔を起点とする。4は太い3本

の沈線文を斜位に施文する。全て第Ⅲ群第2類土器である。

遺構の帰属時期は、縄文時代後期前葉である。

第9号土壇<SK9 (旧SK13)> (第39・40図)

位置は、8区F-30グリットである。

平面形は直径0.8mの円形で、深さ0.2m。

遺物は、縄文土器片約40点である。

1は内折して立つ口縁部に、2本の沈線文を巡らせ、沈線間に刺突文を施す。口唇部は先細り状を呈する。2は多条の沈線が垂下するが、地文に縄文の痕跡が観察される。1は第Ⅲ群第2類、2は第3類の可能性がある。

遺構の帰属時期は、縄文時代後期前葉である。

第10号土壇<SK10 (旧SK14)> (第39・45図)

位置は、8区F-30グリットである。

平面形は直径0.6mの円形で、深さ0.3m。

遺物は縄文土器小片約20点で、時期不詳だが縄文時代の遺構と推定される。

39は半分を破損する打製石斧で、側縁に大きく抉りが入る分銅形となるものと考えられる。残存する長さ6.0cm、幅6.5cm、厚さ1.9cm、重さ80gで、石質はホルンフェルスである。

第11号土壇<SK11 (旧SK15)> (第39・40図)

位置は、8区F-30グリットである。

一部が調査範囲外にあたるが、平面形は直径1.3mの円形とみられ、深さ0.1m。

遺物は、縄文土器片約10点である。

1は口縁部破片と思われるが、風化が著しい。口縁部下の盲孔を起点に、3本沈線が弧状に連結する。第Ⅲ群第1類と思われる。

遺構の帰属時期は、縄文時代後期初頭である。

第12号土壇<SK12 (旧SK16)> (第39・40図)

位置は、8区F-31グリットである。

平面形は径0.8mの円形で、深さ0.6m。

遺物は、縄文土器小片125点である。

全て、第Ⅲ群第2類土器である。1～3は口縁部に2本の沈線を巡らせ、1は沈線間に刺突文を施す。4は無文の口縁部が開く器形で、胴部に細沈線文で区画文を施すが、器面が荒れているため詳細は不明である。5、6は口縁部の盲孔を沈線文で繋ぎ、5は口縁部に接して沈線文が垂下する。6は波状口縁で、波頂部の盲孔を頂点に、両脇にそれぞれ盲孔を施す。7、8は頸部で括れ、胴部が張り、2本沈線文で区画を施す。9は3本沈線を垂下して器面を分割し、方向の異なる斜めの沈線文で連結する構成を採る。10は地文縄文単節LR上に蛇行沈線文を垂下する。12は地文縄文RL上に斜位の隆帯を配し、隆帯状に刺突を施す。11は張る胴部に、3本沈線を弧状に施文する。13は無文土器で、直線的に開く器形を呈する。

遺構の帰属時期は、縄文時代後期前葉である。

第13号土壇<SK13 (旧SK17)> (第39・40図)

位置は、8区F・G-31グリットである。

平面形は直径0.9mの円形で、深さ0.2m。

遺物は、縄文土器小片21点である。

全て、第Ⅲ群第2類土器である。1は波状口縁の把手部分で、扇形の把手の中央に円孔を抱き、把手上面に盲孔を繋ぐ弧状沈線を施文する。円孔を中心にして、左右、下部の3箇所盲孔を穿ち、左右の盲孔を重弧状の沈線で囲み、下部の盲孔からは隆帯が垂下して頸部を縦位区画する。把手から続く口縁部には、2本の沈線文を巡らす。2は2本沈線の胴部区画線上に円形貼付文を施文する。3は地文条線文上に、沈線文を描く。4は口縁部に盲孔列を巡らし、胴部に沈線のモチーフを描く。5は頸部が大きく括れ、胴部が張る器形を呈し、口縁部が緩やかな波状となる。口縁の波頂部に盲孔を2箇所に開け、それを繋ぐ沈線を巡らす。胴部を3本沈線で区画し、波頂下に8字状貼付文を施文する。

遺構の帰属時期は、縄文時代後期前葉である。

第14号土壙<SK14 (旧SK18)> (第39・40図)

位置は、8区G-32グリットである。

平面形は直径0.9mの円形で、深さ0.4m。

遺物は、縄文土器小片12点である。

1のみの出土であるが、口縁部破片で、口縁裏に僅かな窪み状の沈線が見られる。口縁部を沈線で区画する深鉢形土器で、第Ⅲ群第3類土器である。

遺構の帰属時期は、縄文時代後期前葉である。

第15号土壙<SK15 (旧SK19)> (第39・40図)

位置は、8区F-31グリットである。

平面形は直径0.5mの円形で、深さ0.3m。

遺物は、縄文土器小片26点である。

1は口縁部が大きく開く器形で、緩やかな波状を呈し、太い沈線文を巡らす。2は頸部がく字状に屈曲し胴部が張る壺形土器と思われ、頸部内側は受け口状を呈する。口縁部には把手が付くようである。3は無文の口縁部が開く器形で、口縁裏に沈線文が巡る。4は2本沈線で区画を行う。1、2、4は第Ⅲ群第2類、3は第3類土器であろう。

遺構の帰属時期は、縄文時代後期前葉である。

第16号土壙<SK16 (旧SK20)> (第39図)

位置は、8区F-30グリットである。

平面形は直径0.7mの円形で、深さ0.1m。

遺物は縄文土器片約10点で、時期不詳だが縄文時代の遺構と推定される。

第17号土壙<SK17 (旧SK21)> (第39・41・42図)

位置は、11区O-38グリットである。

平面形は径1.0mの円形で、深さ0.1m。

遺物は、略完形の大型深鉢を含む縄文土器片約200点である。遺物集中部に関連する。

1は頸部が緩く括れ、胴部が張り、小さな底部へと移行する器形の無文土器で、内外面にナテ整形を施す。ほぼ完形品であり、口径46cm、器高50cm、底径11cmを測る。

他の土器は破片で、ほぼ第Ⅲ群第3類土器である。2～13は口縁部が直線的に開く深鉢形土器で、磨消縄文の区画文を描く土器群である。2は口縁部に隆帯を巡らす。3は口唇下に刻みを施す隆帯を配し、口唇上から8字状貼付文を施す。4は口縁部の隆帯を施文せず、裏面沈線を口唇下にやや間隔を開けて施す。5は口縁部の隆帯脇に沈線を巡らせ、口唇部が外反する形状となる。6は口唇部の屈曲が強く、内折部分が裏面沈線文の代わりとなる。口縁部を区画する隆帯は太く、刻みを施す。7、8は内折した口端部に更に沈線を施すもので、裏面沈線と合わせて、2本の沈線が口縁裏に巡る。7は口唇外端部にまで区画隆帯が迫り上がり、8は同じ部分に、隆帯を省略するが、刻み列を施している。9～13は磨消縄文の三角区画を基本にしているが、9は描線がやや曲線化する。14は天地逆であるが、注口土器で、円孔の開くタイプである。

15は地文沈線文上に3本沈線文を施文する、第2類土器である。16は口縁部がやや肥厚するが、沈線等施文せず、胴部を2本沈線で区画する。17、18は無文の口縁が開く器形で、口縁部に沈線文を施す。17は口縁部裏面に板状の隆帯を貼り付けて口縁部の屈曲を形成するもので、裏面沈線は隆帯裾部分を撫で付けて施されるものである。19～21、25は無地文上に集合の沈線文を施文する。22、23は垂下する沈線文と曲線文を組み合わせて、縦位構成のモチーフを描くものである。23は第2類から第3類にかけての土器であろう。24は単節LRを施文する、縄文土器である。

遺構の帰属時期は、縄文時代後期前葉である。

第18号土壙<SK18 (旧SK22)>

(第39・41・43・45図)

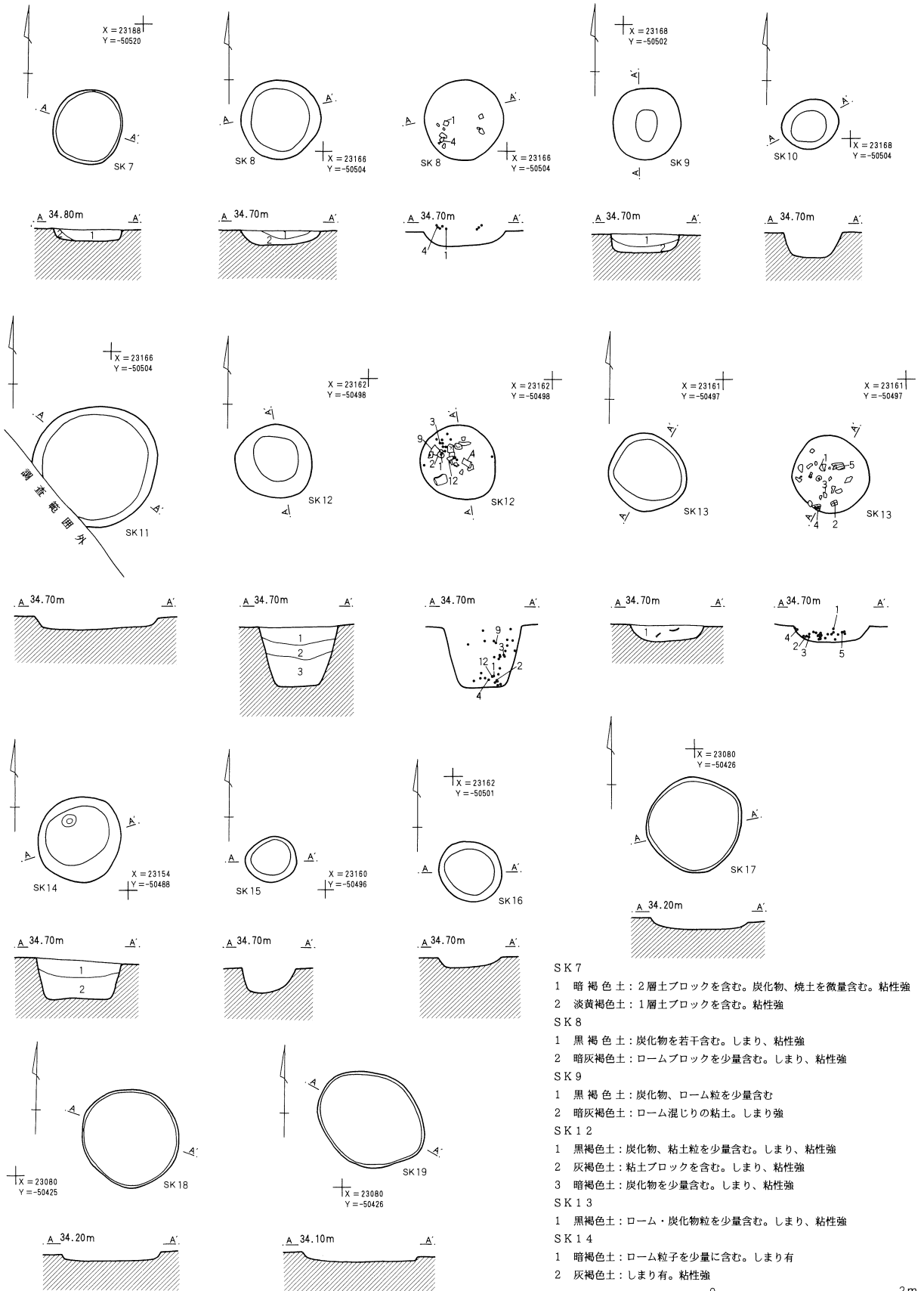
位置は、11区N・O-38グリットである。

平面形は直径約1.0mの円形で、深さ約0.1m。

遺物は、大型土器片を含む縄文土器片約300点である。遺物集中部に関連する。

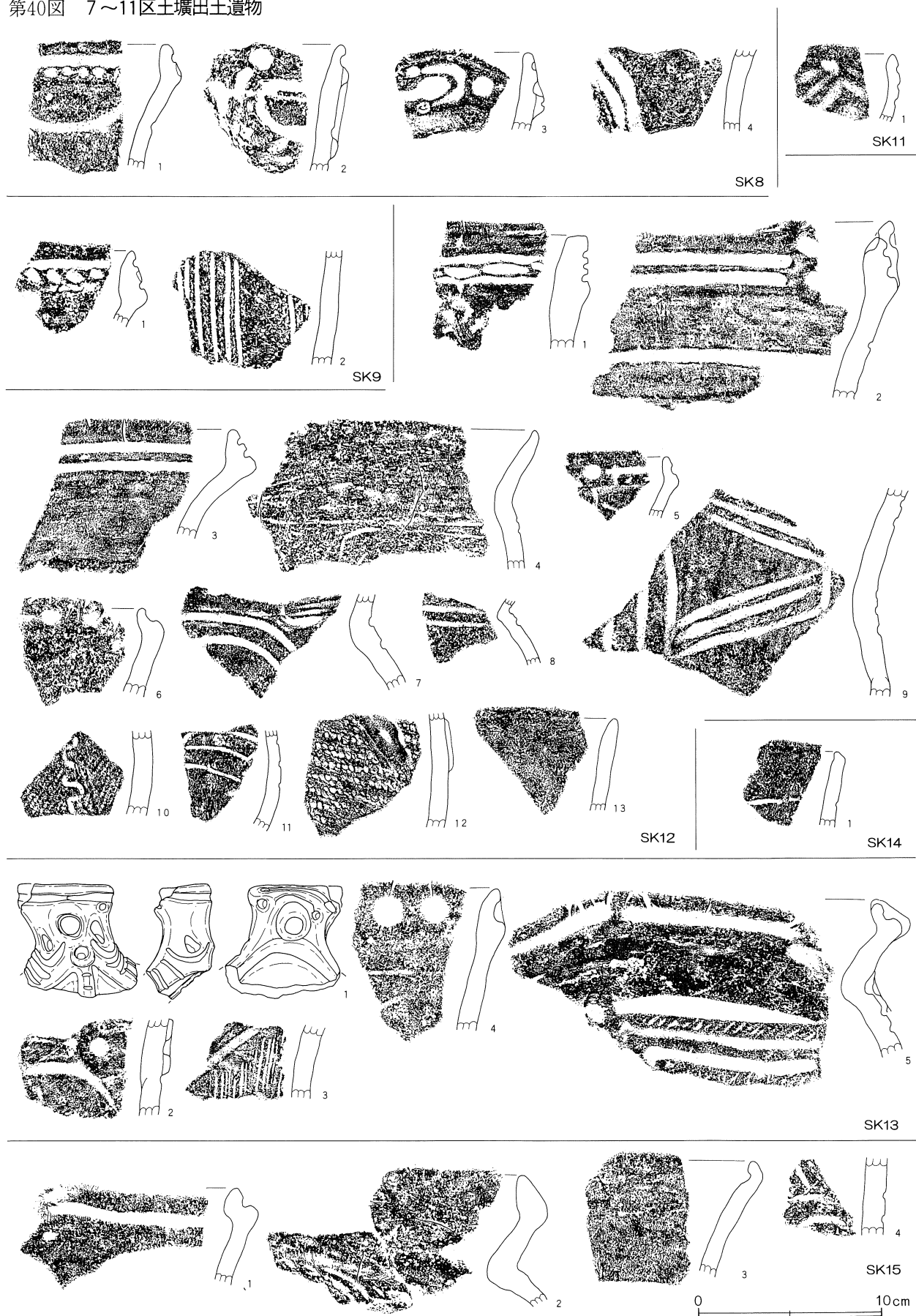
出土土器は全て第Ⅲ群第3類で、5個体の器形が復

第39図 7~11区土壌

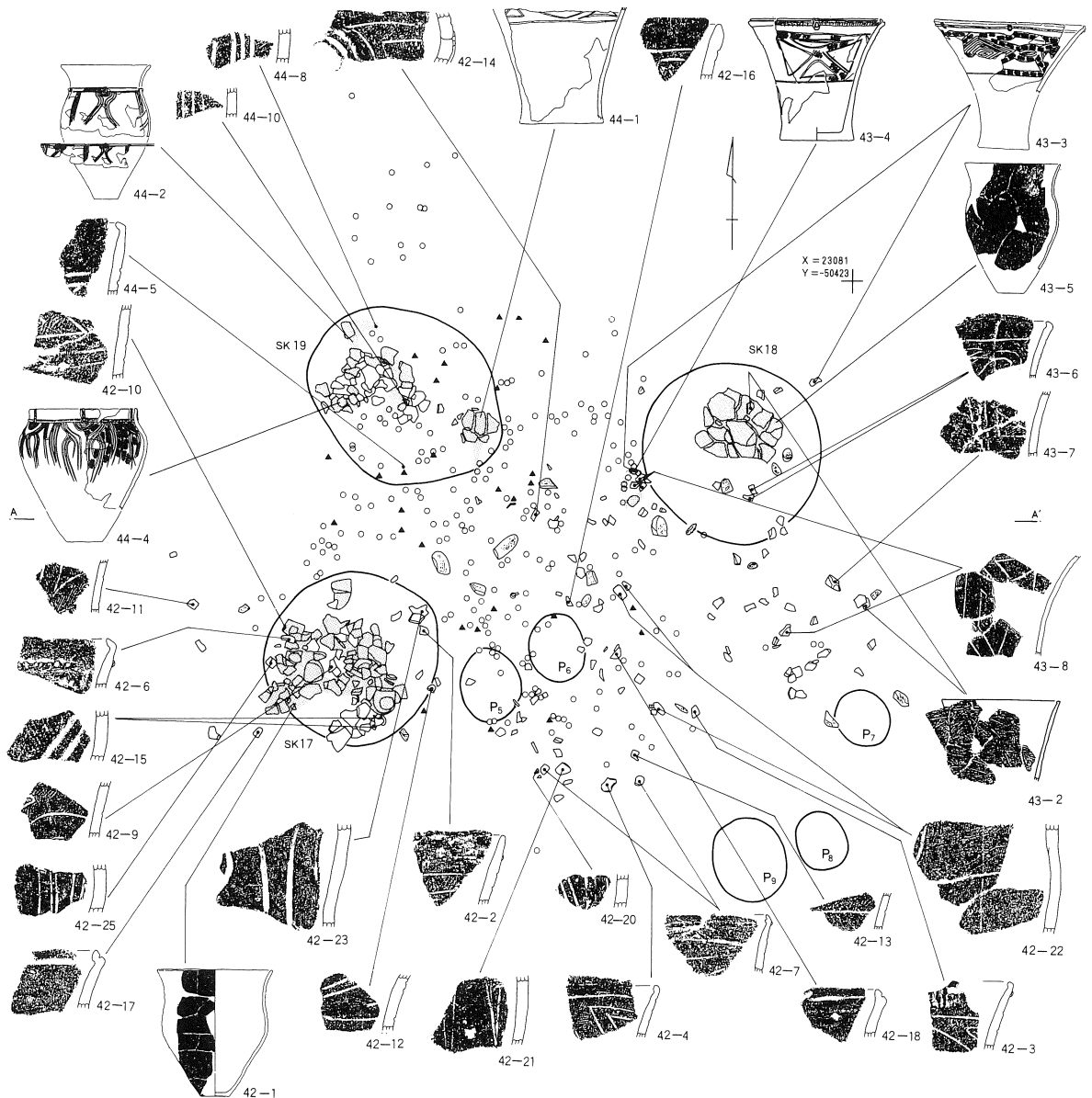


- SK 7
 1 暗褐色土：2層土ブロックを含む。炭化物、焼土を微量含む。粘性強
 2 淡黄褐色土：1層土ブロックを含む。粘性強
- SK 8
 1 黒褐色土：炭化物を若干含む。しまり、粘性強
 2 暗灰褐色土：ロームブロックを少量含む。しまり、粘性強
- SK 9
 1 黒褐色土：炭化物、ローム粒を少量含む
 2 暗灰褐色土：ローム混じりの粘土。しまり強
- SK 12
 1 黒褐色土：炭化物、粘土粒を少量含む。しまり、粘性強
 2 灰褐色土：粘土ブロックを含む。しまり、粘性強
 3 暗褐色土：炭化物を少量含む。しまり、粘性強
- SK 13
 1 黒褐色土：ローム・炭化物粒を少量含む。しまり、粘性強
- SK 14
 1 暗褐色土：ローム粒子を少量に含む。しまり有
 2 灰褐色土：しまり有。粘性強

第40図 7~11区土壌出土遺物

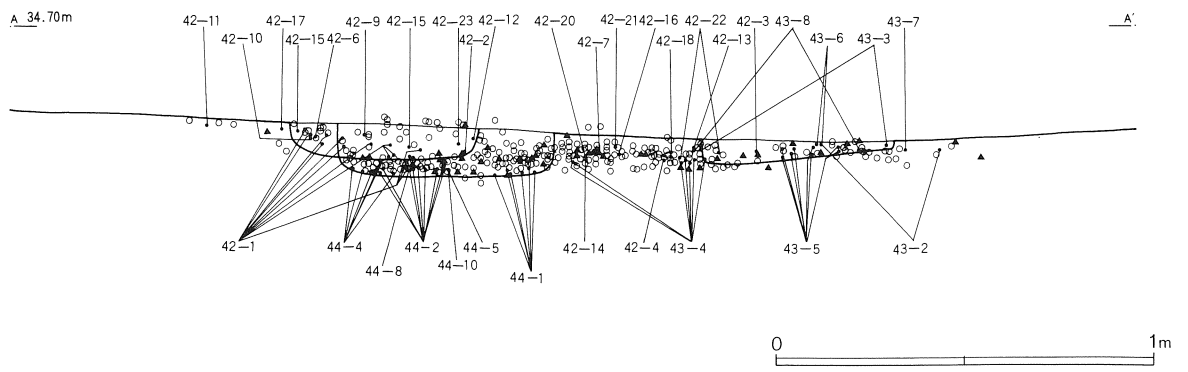


第41図 第17~19号土境周辺遺物

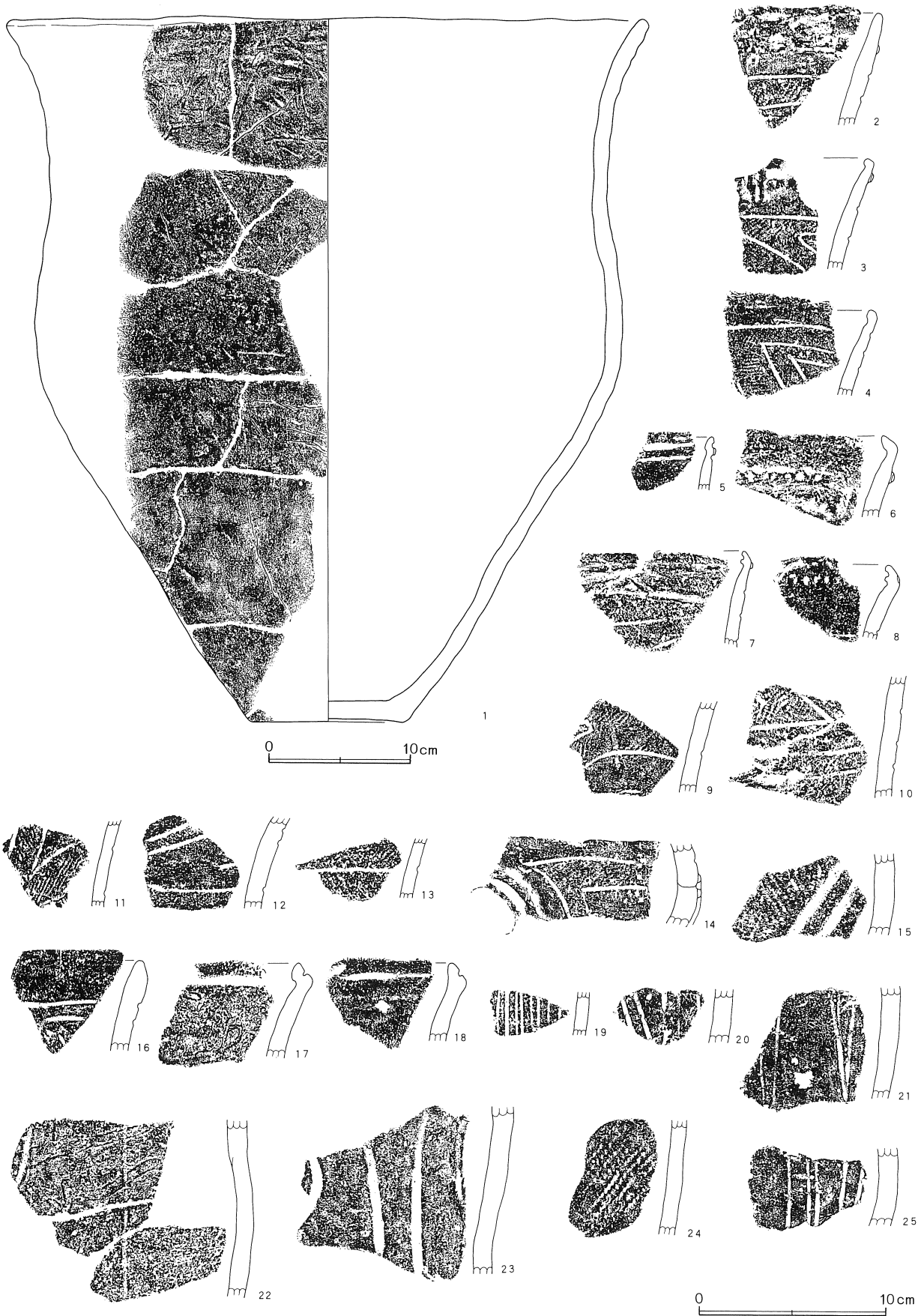


SK19は44-1・2・4 SK18は43-5
SK17は42-1の分布を表す。

● 図掲載土器
○ 図掲載土器
▲ 石



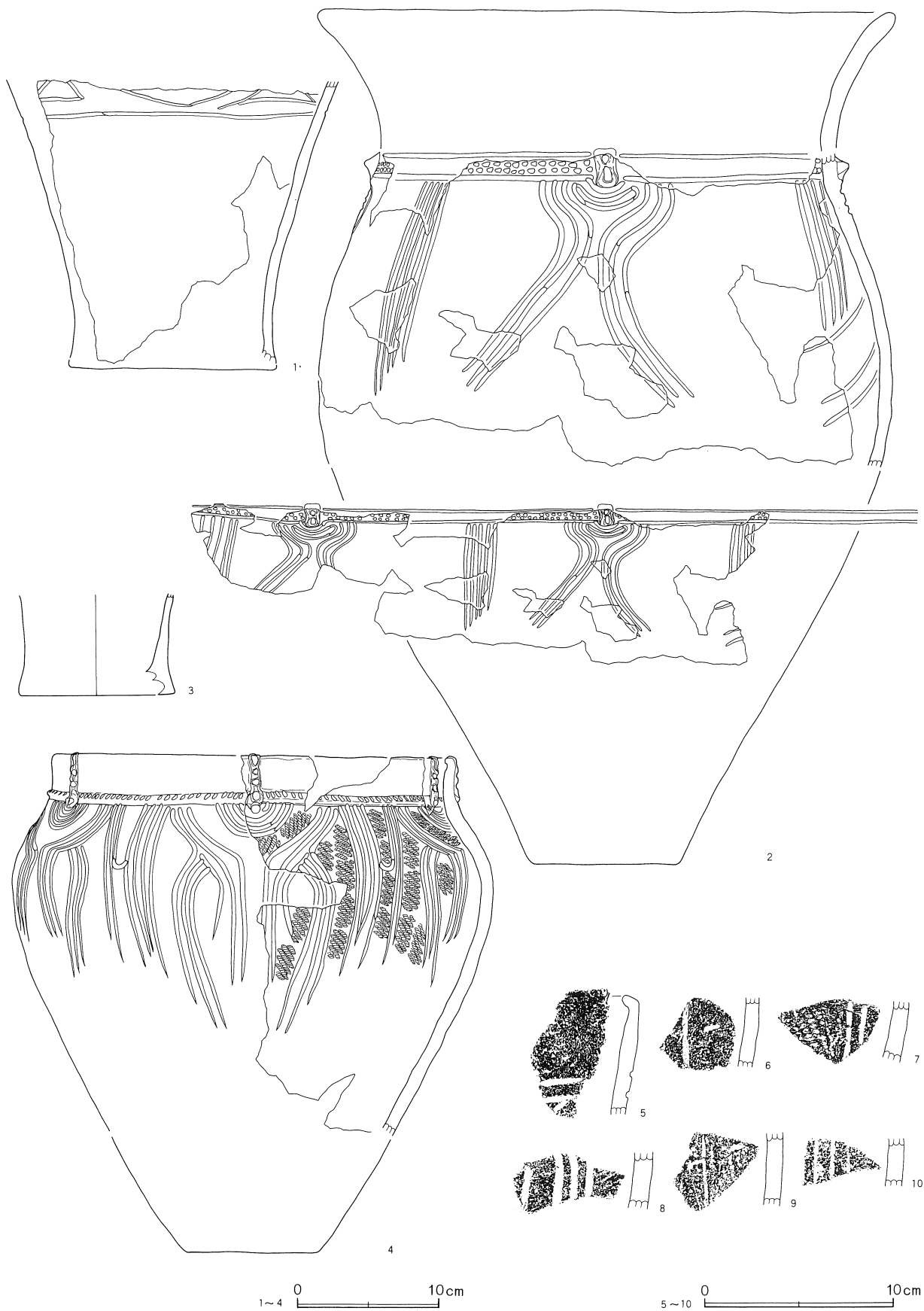
第42図 第17号土壙出土遺物



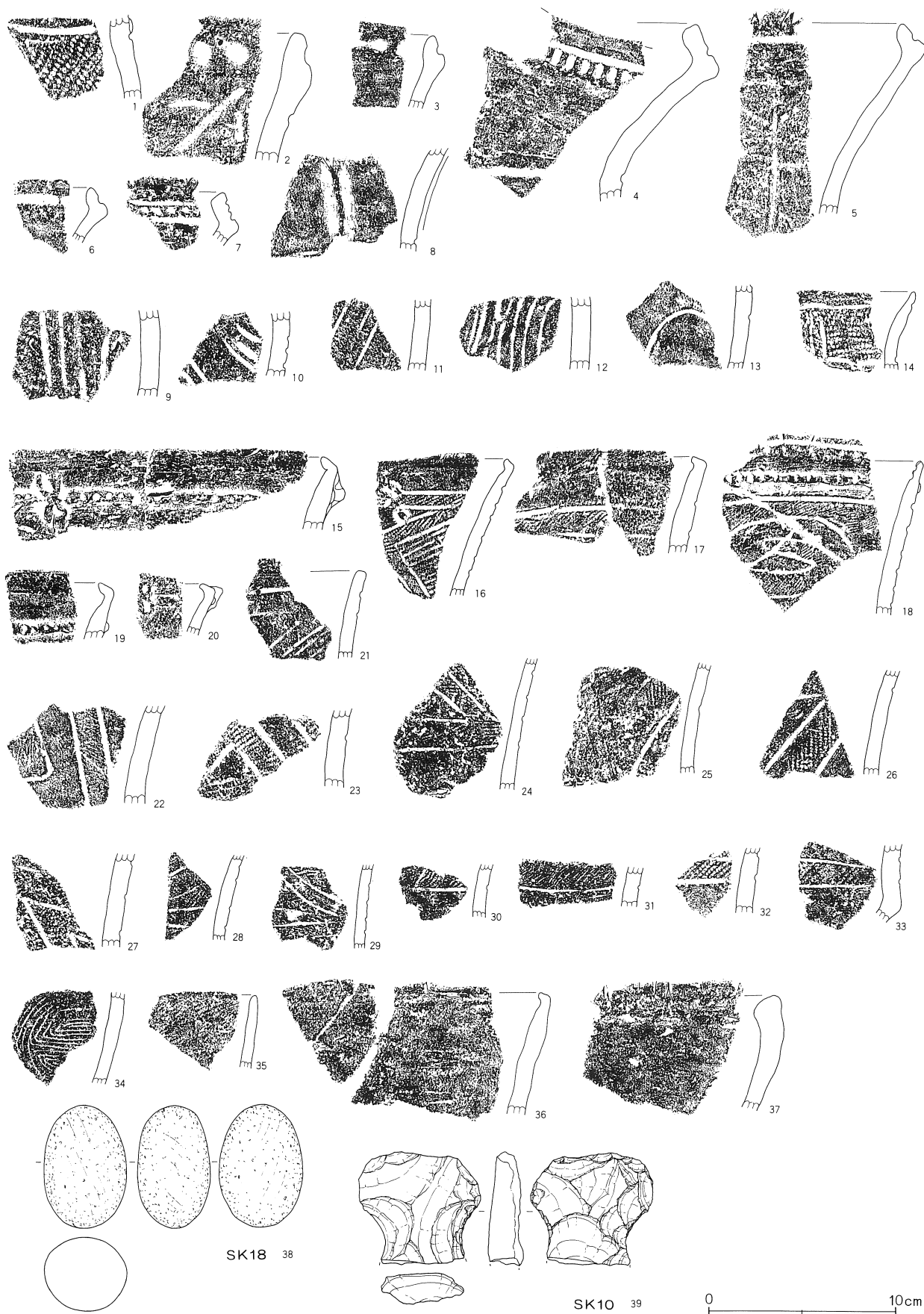
第43図 第18号土壇出土遺物



第44図 第19号土壙出土遺物



第45図 第17~19号土境周辺遺物



原された。1～4は口縁の開く深鉢形土器で、磨消縄文の幾何学文を描く。1は口唇下すぐのところに刻みを施す隆起線を巡らして区画する。口唇外端部に沈線を巡らせ、口唇部上に細かな刻みを施す。口縁裏は鋭い沈線が巡り、内端は角頭状を呈する。8字状貼付文は口唇上から、区画隆起線上に垂下し、この貼付文を中心として胴部文様が展開される。胴部は磨消縄文の三角区画文と渦巻文を連結する複雑なモチーフを描く。推定口径36.8cm、現存高23cmを測る。2は風化が著しい破片で、沈線による菱形状の区画が辛うじて判断される程度の破片である。口縁裏に沈線を巡らす、口縁部に隆帯は見られない。推定口径15cm、現存高10cmを測る。3は口縁部に隆帯を巡らせ、隆帯上に8字状貼付文を施文する。胴部は磨消縄文の楕円形文を放射状に繋ぐモチーフと、その間に多重沈線の菱形文を交互に配する構成を採る。菱形文は、渦巻文を多重化する描出法で描いており、楕円区画内のレンズ状文も渦巻状の手法で描いている。推定口径33.8cm、現存高15.5cmを測る。4は底部まで現存する小型の土器である。口縁部に隆起線状の隆帯を巡らせて口唇部を形成し、口唇上と裏面に沈線を巡らす。口唇外端は縦位の鋭利な刻みが施され、口縁部を区画する隆帯の代用をしている様である。8字状貼付文は口唇部上から、この外端部にかけて施文する。胴部はクロス状の磨消縄文区画に合わせて、上下左右に頂部向かい合わせの三角区画を施しており、左右の三角区画は縦位の区画線を兼ねている。推定口径17.2cm、器高15.2cm、底径9.4cmを測る。6～8も口縁部の開く深鉢形の器形で、6は隆帯の区画はないが、磨消縄文の曲線的なモチーフを描く。7、8は三角及び菱形のモチーフを描くもので、縦位の区画線が見られる。

5は頸部がやや括れ、胴部が張る器形の無文土器で、口縁部に横位方向の、胴部に斜位から縦位の強いナデ整形を施す。推定口径41.8cm、現存高46.5cmを測る。

遺構の帰属時期は、縄文時代後期前葉である。

38は磨石で、被熱のため表面がやや赤色化している。丸い素材で表面全体を使用している。長さ6.5cm、幅4.4cm、厚さ4.0cm、重さ160g、石質は安山岩である。

第19号土壙<SK19 (旧SK27)> (第39・41・44図)

位置は11区N-38グリットである。

平面形は直径約1.1mの楕円形で、深さ約0.1m。

遺物は、大型土器片を含む縄文土器片約100点である。

出土土器は、全て第Ⅲ群第3類土器である。1は口縁部の開く深鉢形土器で、底部付近しか現存しないため詳細は不明であるが、沈線の三角区画を施している。現存部分では、区画内に縄文施文は認められない。現存高19.5cmを測る。3は同器種の底部である。

2は口縁部と胴部下半を欠損する土器で、刺突を施す隆帯で頸部を区画する。この区画隆帯上に背の高い8字状貼付文を配し、この貼付文を中心にして、取り囲む様な左右対称形の垂下文が展開する。胴部モチーフは3本沈線を基本にした多条沈線文で描いており、貼付文間には5本を単位とした懸垂文を垂下する。地文はない。最大径40.8cm、現存高22.5cmを測る。

4は無文の幅狭の口縁部が立ち、肩が張る広口壺形の土器である。口縁裏には沈線文が巡り、口唇上から押圧を施す短隆帯が、口縁部区画隆帯上まで垂下する。胴部のモチーフは、2同様にこの短隆帯下に展開され、左右対称形のモチーフが、3本沈線を基本にした多重沈線で描かれる。短隆帯の下端は8字状貼付文文化しており、それを取り囲む形での半円状の弧線文や、取り囲みながら垂下するモチーフを描く。モチーフの余白には、単節LRの充填縄文を施す。推定口径28.8cm、最大径34.2cm、現存高26.5cmを測る。

5は無文の口縁部が開く深鉢形土器で、口縁裏に沈線を巡らし、胴部を2本沈線文で区画する。6～10は胴部に沈線文を垂下する破片で、7、9は充填縄文を施し、8、10は多重沈線化する。

遺構の帰属時期は、縄文時代後期前葉である。

遺物集中部<旧SJ7> (第41・45図)

遺物集中部出土土器は、第17～19号土壌が存在する地域で、土壌に隣接して出土した土器群のことであり、まとまりを持って出土した土器群である。

1～8は、第Ⅲ群第2類土器である。1は頸部の括れる器形で、頸部を2本沈線で区画し、円形もしくは8字状貼付文を施すものである。地文に単節L R縄文を施文する。2は肥厚する口縁部に盲孔列を施文し、頸部を沈線で区画、胴部に沈線文を施文する深鉢形土器である。3、6は口縁部に盲孔を繋ぐ沈線を施文する。4は内折して大きく開く口縁部が波状を呈し、口縁部に沈線文を巡らす。口縁部下端の屈曲部には刻み列を施し、沈線で胴部を区画する。5は沈線を巡らす口縁部を持ち、胴部に縦位の沈線を垂下する。7は口縁部に2本の沈線が巡り、沈線間に刺突文を施す。8は頸部に隆帯が垂下する破片で、胴部は沈線で区画する。9～12は多条沈線文を施文するもので、9は充填縄文が見られる。9、10が第2類、11、12が第3類と思われる。13は第3類土器で、放物線状に沈線文を垂下する。14は外反する口縁部を沈線で、頸部を2本沈

線で区画し、口縁部から3本沈線を垂下して分割する。地文に縄文を施文する。口縁裏には凹線状の窪みが巡る。

15～34は口縁部が開く深鉢形土器で、磨消縄文による区画文を施文する第3類土器である。15、18、19、20は口縁部に隆帯を施文し、15は隆帯上に背の高い8字状貼付文を施す。20は口端部に8字状貼付文を施文し、隆帯直下から縄文を施文する。16は隆帯の区画はないが、磨消縄文の菱形区画内に、多条沈線文を充填施文する。17、21は口縁部の区画隆帯がなく、磨消縄文の三角区画を施すが、21の口縁裏には沈線が見られない。22～33の胴部破片は、三角区画文を主体とする。34は円形モチーフの中に、上下対向する台形状のモチーフが多条沈線で施文される。33は文様帯下端部分で、屈曲する器形を呈する。

35～37は無文土器で、35は括れがなく、先細り状の口縁部が立つ器形であると思われる。36は口縁裏に沈線を持ち、37は肥厚する口唇部が内湾しながら開く器形を呈する。

(3) 遺構外ピット

第5号ピット<P5> (第46図)

位置は、11区O-38グリッドである。

平面形は直径約0.4mの円形で、深さ約0.1m。

平面形は直径約0.4mの円形で、北側に落ち込みをもつ。深さ約0.3m。

第6号ピット<P6> (第46図)

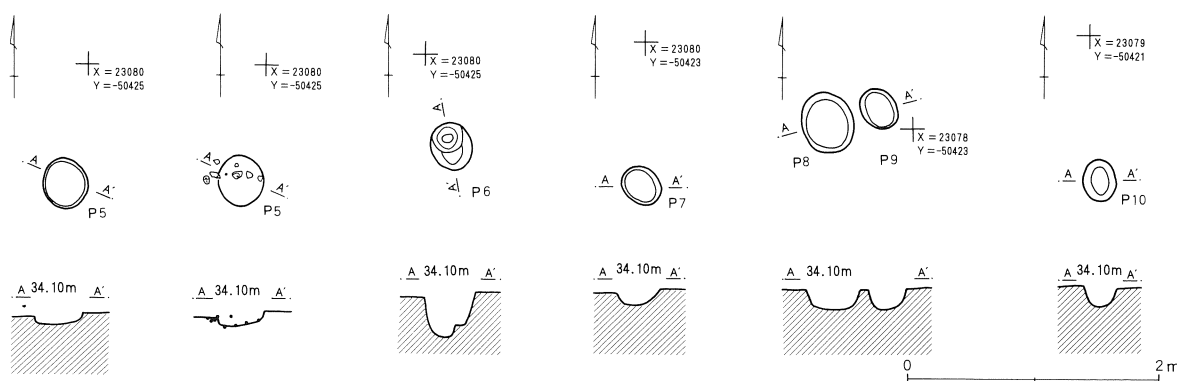
位置は、11区O-38グリッドである。

第7号ピット<P7> (第46図)

位置は、11区O-38グリッドである。

平面形は直径約0.3mの円形で、深さ約0.1m。

第46図 7～11区遺構外ピット



第8号ピット<P8> (第46図)

位置は、11区O-38グリッドである。

平面形は約0.4×0.6mの楕円形で、深さ約0.2m。

遺物は、土器片が1点である。北東側でP9に近接する。

第9号ピット<P9> (第46図)

位置は、11区O-38グリッドである。

平面形は直径約0.3mの円形で、深さ0.2m。

第10号ピット<P10> (第46図)

位置は、11区O-38グリッドである。

平面形は約0.4×0.3mの楕円形で、深さ0.2m。

(4) 遺構外出土の遺物

8区と11区は、間に遺物を殆ど出土しない地点が存在するため、それぞれ地点別の遺跡であると思われるため、出土土器も分けて説明を加える。

7～9区遺構外出土遺物 (第47～50図)

8区を中心とした北側寄りの調査区から出土した、地域的に纏まりのある土器群である。この付近には、第3号、第4号住居跡が存在する。

第II群土器

1は微隆起線区画の中に、充填縄文を施す加曾利E系の土器で、第4類に分類されるが、後期段階に下る可能性もある。

第III群土器**第1類 (2)**

2は内湾して開く波状口縁部で、口縁部無文帯を低隆帯で区画し、2列の円形刺突文列を施す。口唇部がやや角ばることから、第1類称名寺系の関沢類型の土器と思われる。

第2類 (5～79)

5～27は口縁部文様帯と胴部文様帯から構成される深鉢形土器で、口縁部には沈線文や盲孔列が巡り、胴部に縦位展開の沈線モチーフを描く土器群である。5は口縁部に隆帯を貼付して区画し、隆帯上に刻みを帆施す。6、7は肥厚する口縁部文様帯下端部に刻みを施し、6は口縁部に沈線文と刺突文を巡らす。11は下端部の刻みの下に2本の沈線懸垂文を垂下する。8は口縁部に刻みを施さないが、下端を浅い沈線で区画し、胴部に半截竹管の刺突文を充填施文する。9は口縁部2連の盲孔を繋ぐ沈線を巡らせ、口縁部下端を沈

線で区画し、盲孔下に2本沈線を垂下して区画を行い、刺突文を充填施文する。12、13は胴部の2本沈線モチーフ間に刺突文を施文する。10は上下2連の盲孔を繋ぐ沈線2本が口縁部に巡り、盲孔下に2本沈線の区画文が垂下する。14～19は頸部の区画沈線を持たずに、称名寺系のモチーフ等を縦位施文するもので、14は口縁部に加飾がなく、15～17は盲孔を繋ぐ沈線文を施文する。18、19は盲孔列を施す。20、21は頸部区画沈線を持ち、区画線から懸垂文が垂下する。口縁部は盲孔列を施す。22～27は口縁部直下に沈線懸垂文を垂下するもので、22は盲孔列、23、24は沈線、25～27は2本沈線を巡らす。

28～40は頸部で括れ、胴部が張り、無文の頸部が開く器形を呈し、内折する口縁部文様帯を持つ土器群である。28は突起部に盲孔を繋ぐC字状沈線を施し。口縁部に盲孔を起点とした沈線を巡らす。29、30は肥厚した口縁部に盲孔列を施し、31、32は盲孔を繋ぐ沈線文を巡らす。33～40は口縁部に2本沈線を施すもので、35は沈線間に刺突文を、36～38は盲孔を配する。39、40は縦位対弧状の多条沈線文を施文するもので、縦位沈線文は上下2連の盲孔を境とする。

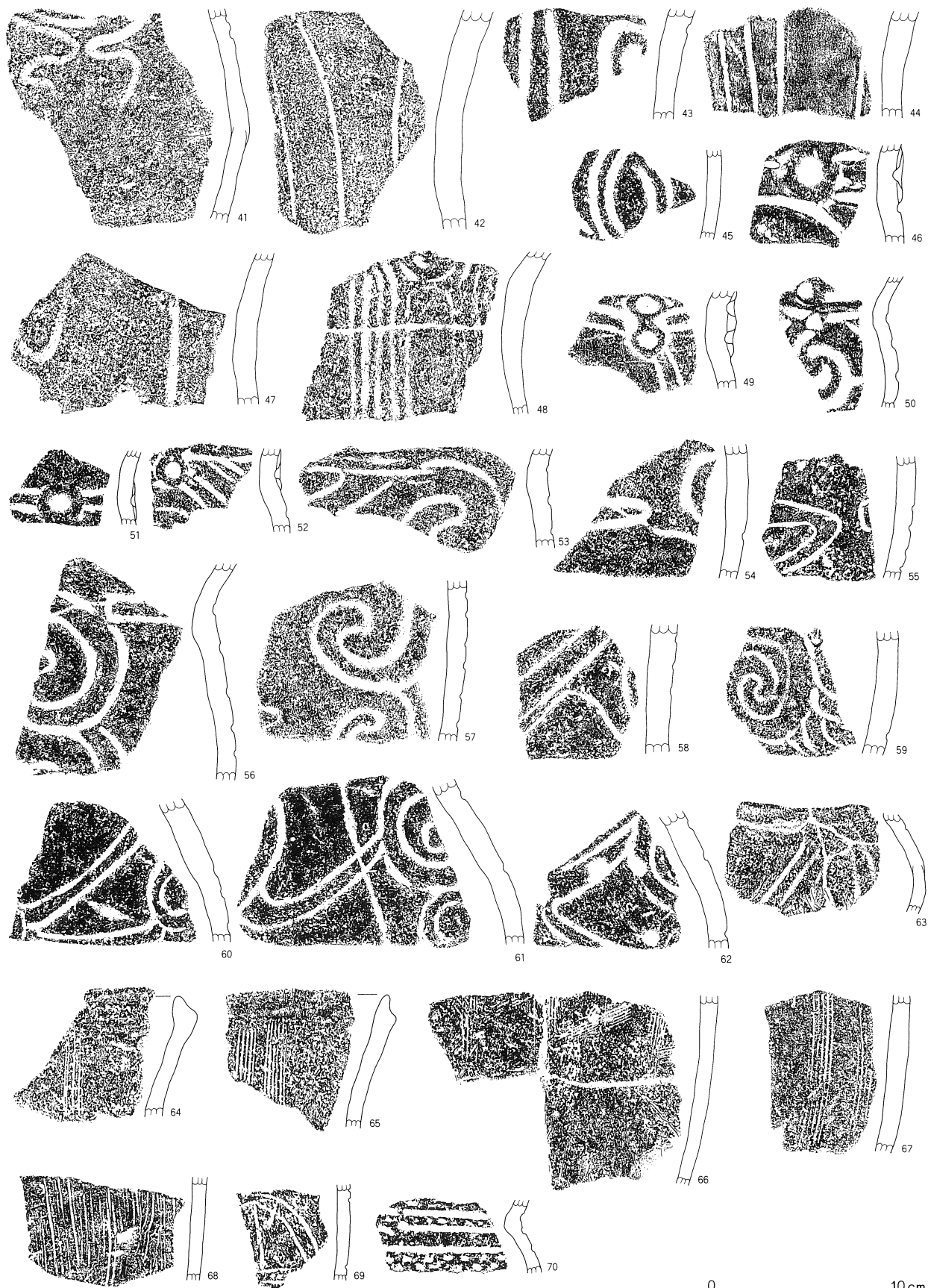
43、44、47、48は縦位構成の沈線モチーフを胴部に施文するもので、48は多条沈線化する。44は2本沈線で、入組み状対向弧線文を施文する。沈線の起点には盲孔が存在しているよう。

46、49～59は頸部を沈線で区画し、胴部に渦巻文等を連結するモチーフを描くものである。区画沈線上に円形貼付文や8字状貼付文を配し、貼付文下に展開する

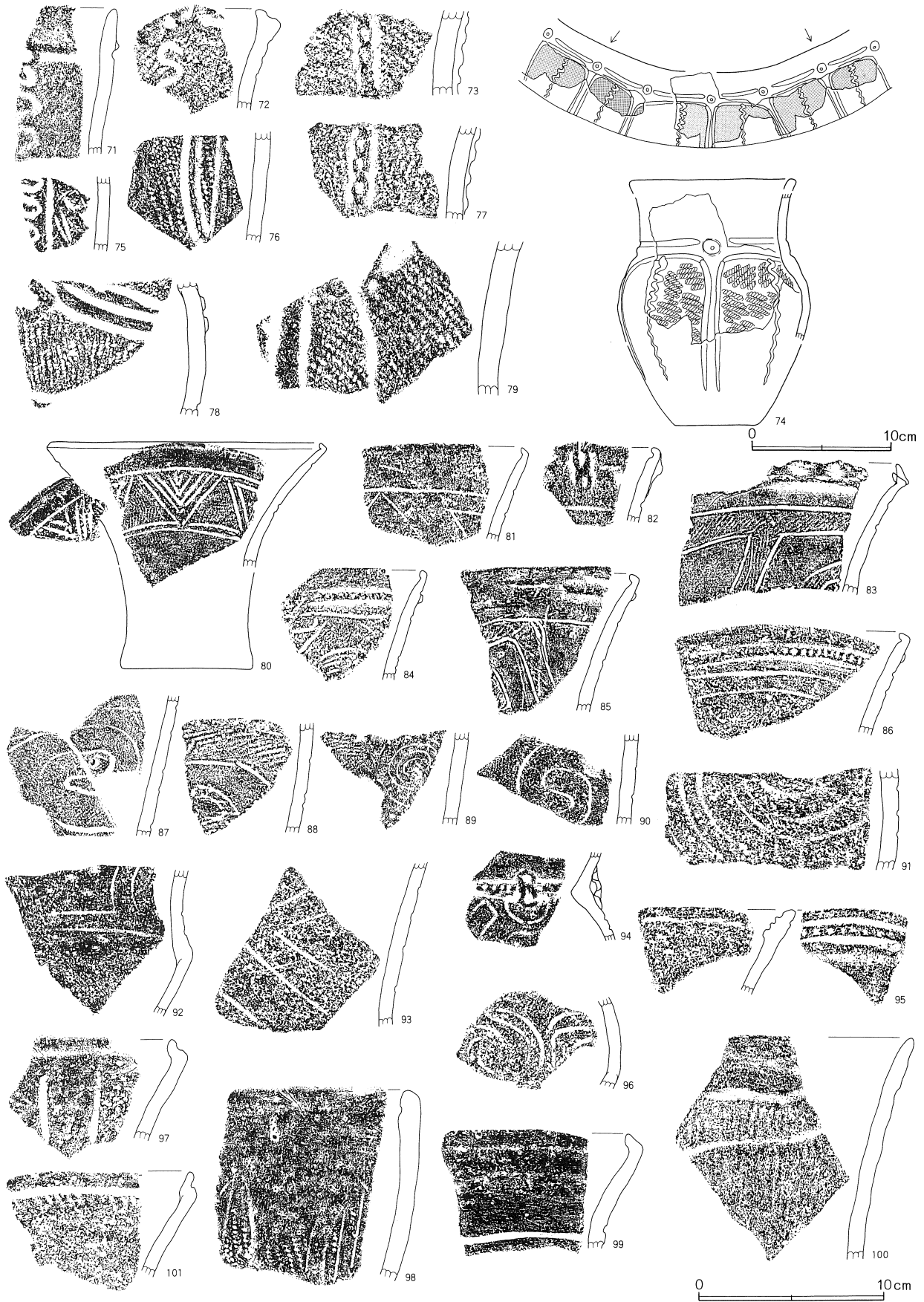
第47图 7~9区遺構外出土遺物(1)



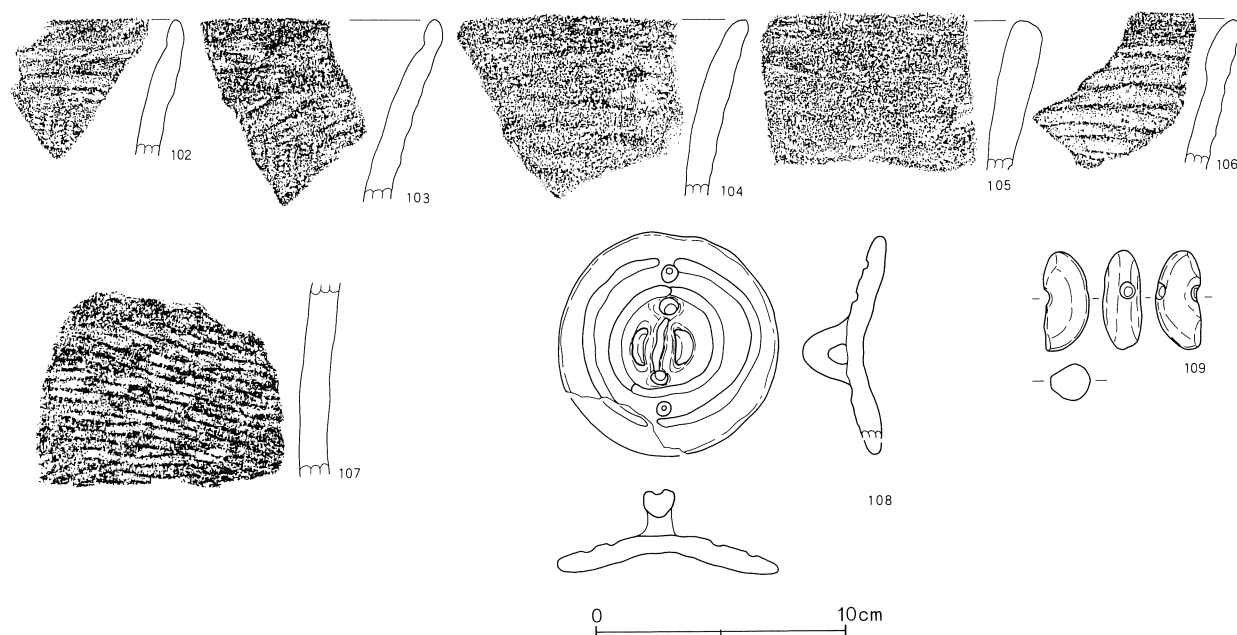
第48図 7～9区遺構外出土遺物(2)



第49図 7～9区遺構外出土遺物（3）



第50図 7～9区遺構外出土遺物(4)



2本沈線のJ字状渦巻き文を、上下左右に連結する構成を採る。

60～63は胴部が算盤玉状を呈する注口土器で、渦巻き文を上下左右に連結する構成を採る。

64～68は条線を施文する土器群で、64、65は口縁部直下から間隔を開けて条線文を垂下し、66は垂下条線文間を方向の異なる斜线条線で連結する。

69は2本沈線で半円状のモチーフを描き、縦位区画線も見られる。70は胴部を、刺突文を挟む2本沈線文で区画する。

71～79は地文に縄文を施文する土器群である。71、72は蛇行沈線文を垂下するもので、71は沈線を伴う隆帯で口縁部無文帯を区画し、円形貼付文下に蛇行沈線を垂下する。地文縄文は、単節LRである。72は緩やかな波状口縁を呈し、波頂部の盲孔を繋ぐ沈線文を巡らす。75は2本沈線間に挟まれた蛇行沈線文を垂下する。76は地文縄文RL上に、縦位のレンズ状モチーフを描く。73、77は押圧を施した連鎖状隆帯を垂下する。78は3本沈線区画上に円形貼付文を配し、単節RLを充填施文する。79は単節縄文RL上に、2本沈線文を垂下する。74は胴部のみが現存する壺形土器で、無文の口縁が開く器形を呈する。頸部は円形貼付文を連結

する2本沈線で区画するが、下側の沈線文は、胴部に垂下して縦位分割する沈線と一体化している。胴部は4単位に分割され、単節LR縄文を充填施文する。

第3類 (80～107)

80～90、92、93は口縁部が開く深鉢形土器で、胴部に磨消縄文の幾何学的区画文を施文する土器群である。80は口縁部に隆帯を持たず、沈線で胴部を区画し、その沈線から直接三角区画文を描出する。三角区画は上下に対向する形を採り、下向き部分では多条沈線を区画沿って充填施文する。沈線文を充填しない部分では2本沈線で区画し、区画内に縄文を充填施文する。81～83は口縁部に隆帯区画線を持たず、82は口唇直下に8字状貼付文を配する。83は内折する口縁部の幅が広く、口縁部に押圧を施して小波状を呈する。胴部には曲線的なモチーフを展開する。

84～86は、口縁部に隆帯区画を持ち、84、85共に曲線的な区画文を施文する。87～90、92は磨消縄文の入組み渦巻き文を施文するもので、93は菱形の区画文を施文する。92は文様帯下端で屈曲する器形である。

91、94、96は胴部で括れる器形の土器であり、91は胴部に多条沈線による重弧文を施文する。94は刻みを施す隆帯で頸部を区画し、区画隆帯上に8字状貼付

文を施文する。この貼付文を中心にして、胴部に半円文を描き、左右に対称的な沈線モチーフを描く。96は胴部に渦巻文を配するが、連結はしていない様である。95は口縁部が開く器形で、口縁部内面に刺突文列を挟む2本の沈線文を巡らす。外面には弱い沈線を施す。

97は口縁部が内折して開く器形で、口縁部に沈線文を巡らせ、口縁直下に2本沈線文を垂下施文する。地文は単節LRを充填施文する。101は口縁部裏面に板状の隆帯を貼り付けて口縁部を形成しており、口縁部下端に刻みを施す。98は口縁部が内湾気味に立つ器形で、口縁部に区画されない無文帯を置き、胴部の地文縄文上に縦位のレンズ状文を施文する。99は無文の開く口縁部を隆帯で区画するもので、口縁部に加飾はない。100～107は粗製土器で、100～103は口縁部に無文部を設けて、胴部に縄文のみ施文する土器群である。102、103は口縁裏に弱い沈線が巡る。104～106は無文土器で、口縁部が開く深鉢形土器である。106は横位の強い整形痕が残る。107は縄文のみ施文される胴部破片である。

第4類 (3、4、41)

3は口縁部を隆帯で区画し、口唇部直下から区画隆帯上にかけて円形貼付文を繋ぐC字状隆帯を施文する。貼付文には盲孔を、隆帯上には沈線を施文する。C字状隆帯からは、刻みを施す隆帯を胴部区画線まで垂下するようである。4、41は同一個体である。隆帯を巡らせて口縁部を形成し、隆帯脇に沈線文を沿わせる。この沈線の一端が口縁下に円形文を構成し、円形文の下部に閉塞しないスペード文を垂下する形で描く。地文に縄文を施文する様であるが、器面の荒れが著しく不明瞭である。

以上、堀之内1、2式とも、新旧の様相を持つ土器群が含まれている。

土製の蓋 (108)

1点のみ出土した。ほぼ完形品で、橋状の摘みを持つ円形、皿状の蓋で、摘みの両側に盲孔を穿つ。盲孔を起点として、摘みを囲むように対弧の弧線文が円形に施文される。径は約9cm、摘みは中心をやや外して

いる。

土製勾玉 (109)

鏢節状を呈するが、側面から中央部に向けて円孔を穿つ。縦4cm、横1.8cm、厚さ1.5cmを測る。

11区出土土器 (第52～64図)

第II群土器 (110)

110は緩やかな波状口縁がやや内湾しながら開く器形を呈し、口縁部無文帯を微隆起線で区画する。口縁部区画下は、単節RL縄文を縦位施文する。第4類土器の加曾利E系土器で、後期初頭に下る可能性もある。

第III群土器

第1類 (111～119)

111は緩い波状口縁を呈し、波状の片側口唇上に沈線を施文する。口縁部は沈線文の規矩形区画を施し、区画内に縄文を施文する。112～119は沈線文でモチーフを描出するものであり、112、115、116は端部の丸いR状のモチーフを施文し、112～114、117、119は2本沈線間に刺突文を施す。称名寺系土器でも、最終末の様相を持つ土器群である。

第2類 (120～139)

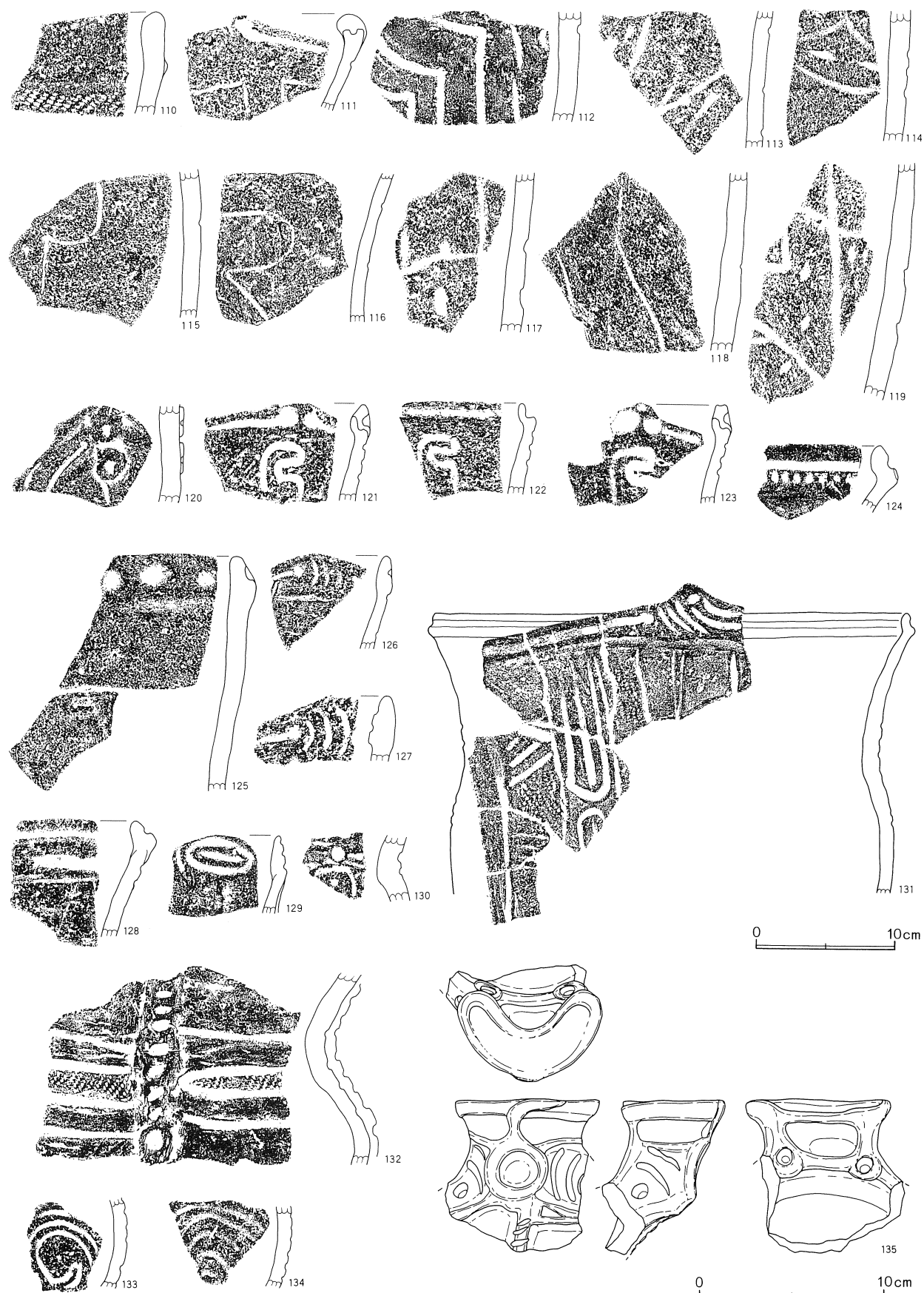
120は胴部に8字状貼付文を施文し、貼付文を起点に弧状のモチーフが展開する。

121～123は同一個体と思われる、地文縄文上に蕨手状懸垂文を垂下する土器である。口縁部は突起を中心に緩い波状を呈し、突起下に2連の盲孔を穿ち、盲孔を繋ぐ沈線を巡らす。121の突起上面にも盲孔を施す。地文縄文は器面が荒れているため不鮮明であるが、単節LRと思われる。

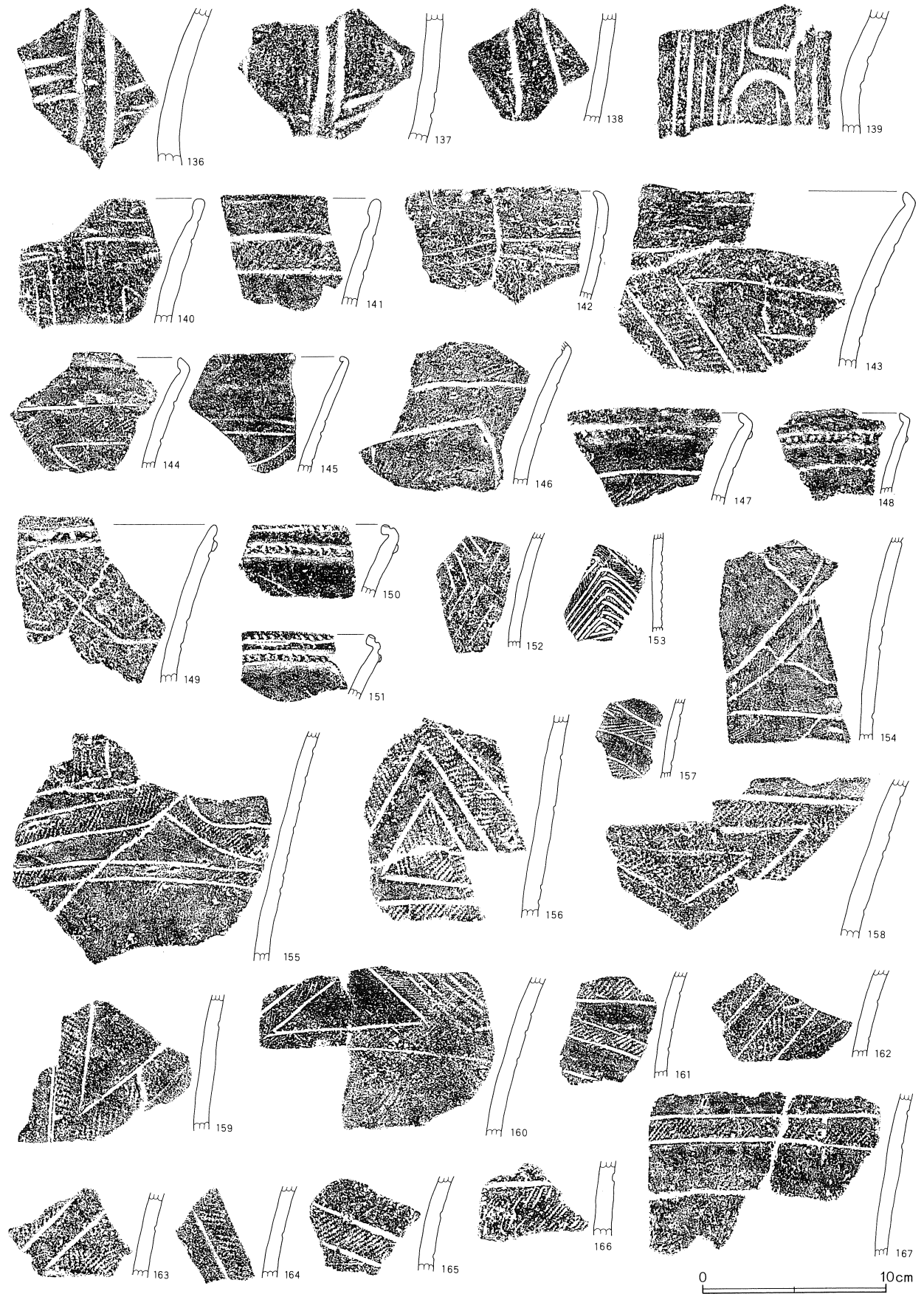
124は内折した口縁部が開く器形で、口縁部は沈線が巡り、口縁部下端に刻みを施す。125は肥厚する口唇部に盲孔列を巡らせ、胴部は無文となる。

126、127は口縁部文様帯の突起下に、盲孔を中心とする縦位の多条弧状沈線を施文するもので、127は口縁部裏面にも杵状の沈線文を施す。128は肥厚内湾する口縁部に沈線を施し、胴部を沈線で区画する。129は口縁部文様帯に楕円区画文を施すもので、楕円区画を囲むように弧状沈線文を配する。

第51図 11区遺構外出土遺物(1)



第52図 11区遺構外出土遺物(2)



第53図 11区遺構外出土遺物(3)



130は胴部区画線上に盲孔を施文し、その下部に曲線モチーフを展開する。133、134は多条沈線で渦巻文を描く。

132、133は同一個体と思われる。133は箱状の把手を持つ波状口縁で、把手上面を平坦に整形する。側面には盲孔を中心とした弧状の沈線文を施文し、正面の円形貼付文から放射状に隆起線を繋げている。円形貼付文からは刻みを施す隆帯が、132にみられる胴部文様帯まで貫いて垂下する。胴部は強く屈曲して大きく張る器形を呈し、沈線文で区画を行う。

131は頸部がやや括れ、内折する口縁部が開く器形を呈し、口縁部に沈線文を巡らす。口縁部は突起を持ち、突起部に盲孔を穿ち、盲孔を囲む様な多条弧線文を施す。胴部には対向U状沈線で区切られた、多条のH状沈線文が垂下し、斜位の3本沈線で連結する構成を採る。推定口径34.2cm、現存高20cmを測る。

136～138は2本単位の沈線懸垂文を、横位、斜位の沈線文で連結するモチーフを描く。139は垂下する多条の沈線文間を、上下対向のU字状沈線文で区切り、H状の懸垂文を構成する。

以上、堀之内1式土器でも、新旧の様相を持つ土器群が含まれている。

第3類 (140～187)

140～170は口縁部が開く深鉢形土器で、磨消縄文による幾何学的な区画文を施す土器群である。140～146は口縁部に隆帯区画の無いものである。140は口縁裏に太い沈線を巡らせ、口縁部から多条沈線による縦位区画を含めた三角形区画を施す。器面が荒れているため、地文縄文は不明である。141は口縁部が直線的に開き、内面にやや太い沈線を巡らし、帯状の磨消縄文で区画する。142は口縁部がやや内湾し、内面に沈線は持たない。平行沈線で口縁部を区画するが、器面が荒れているため、胴部文様は不明である。143は口縁部に突起が付くらしく、裏面に盲孔が穿たれる。143～146は磨消縄文の三角区画文を施すが、145、146はやや曲線的な区画を持つ。

146～151は口縁部に隆帯区画を持つものである。

147、148は口縁下にあまり間隔を置かずに隆帯を施文するもので、押圧状の刻みを施す。149は口縁部のかえりの部分を持たず、口唇下に隆帯を巡らし、隆帯に沿って沈線を施す。胴部は幅狭の文様帯で、区画は整然としていない。

150、151は口縁直下に隆帯を巡らし、口縁部に浅い沈線文を施す。口縁部の上端に細かな刻みを施し、隆帯上にも押しつぶす様な刻みを施す。口唇部は角頭状を呈する。

152、153は上下左右対向の三角区画文を施すもので、152は区画自体を多条沈線で行い、153は区画内に沿って多条の沈線を充填施文する。三角区画は、非常に細かい磨消縄文単節LRで施文する。154～167は三角区画を施すが、155は曲線的な区画が、159は縦位の区画線が想定される。168～170は胴部に、円形もしくは渦巻き状のモチーフを描くものである。191は胴部に磨消縄文の入組み渦巻文を施文するもので、推定口径26cm、現存高9.2cmを測る。

172は頸部で括れ、胴部が開く器形の深鉢形土器で、頸部区画沈線上にまで、刻みを施す隆帯を口縁部から垂下し、隆帯の先端が8字状貼付文と連結する。胴部モチーフは、この貼付文を半円文で取り囲み、さらに対向の集合弧線文で取り囲む構成を採る。173、174は同種の胴部破片で、対弧状または曲線状に多条沈線文を施文する。両者とも地文に縄文を施しており、153は単節LR、174は不明である。175～177は多条沈線文を垂下するもので、177は地文縄文単節LRを施文する。178～190は条線文の土器で、178は異方向の斜線、179は蛇行状、180は渦巻文状のモチーフを描く。

183～185は口縁部に沈線文を巡らすもので、183、184は地文縄文を持ち、185は粗い横位の整形痕を残すものである。181、182は口縁部が開く無文土器で、横位の強いナデ整形を残す。186、187は縄文を施文する破片で、186は単節LRを異方向に施文して羽状構成を採る。187は単節LRを横位施文する。

第5類土器 (188)

1点のみの出土であるが、やや内湾して開く口縁部

に、3条の横位沈線を施文し、口唇部から押圧を施した縦位の貼付文を施文する。後期後葉の曾谷式土器に比定される。

土製の蓋 (171)

171は椀状を呈する蓋と思われ、約5割程が現存する。無文の口縁部を2本沈線で区画し、上面を十字状に区画した後、区画内に沈線文を重ねて施文する。推定系約9.6cm、現存高4.2cmを測る。

土偶 (189)

189はかなり扁平化した山形土偶であり、額と顎の部分に隆帯が貼付され、鼻は額の隆帯から直接垂下する。目は隆帯内に刻み込まれており、口は顎の隆帯上に浅い押圧で表現している。耳穴はやや低い位置に貫通している。後頭部には弧状の2本沈線を施文し、沈線間に刺突文を施す。右耳の上部に剥落痕が見られ、頭髮の表現があった可能性もある。第5類の曾谷式土器に伴う土偶と思われる。縦4cm、横6.3cm、厚さ2.1cmを測る。

土製勾玉 (190)

鯉節状を呈し、中央部に貫通する小穴が穿たれる。縦3.9cm、横1.2cm、幅1.3cmを測る。

弥生時代の遺物 (192～602)

N・O-38、O-39グリッド帯では、2点の玉類とともに多数の弥生土器が集中的に出土した。縄文時代後期の包含層の直上にあたる黒褐色土中に含まれ、遺構は確認されなかった。層位的な分離ができなため、とりあえず相対的に遺存状態が好く、器形の復原が一部でも可能な資料から順に図示し報告する。

193は小型の有文甕である。破片2点から推定復原した。緩やかに膨らむ胴部から、短い頸部が直立気味に立ちあがる。口縁単部は面取りされ、直下は沈線1条で区画される。頸部は無文帯となり、肩部以下胴上半部にわたり磨消縄文と工字文を組み合わせた文様帯をもつ。縄文は単節LR。復原口径22cm。色調にぶい橙色。

192は接合せず2点の大型破片に分かれるが、諸特

徴の一致から同一個体の有文甕とみなす。上半は直線的でゆるく内傾して立ちあがる。口縁直下に断続する沈線1条が横走し、頸部は無文帯となる。最大径部上位を横走沈線2条で区画し、直下に1条ないし2条沈線による三角文と菱形文が連続するとみられる文様帯をもつ。192bは文様帯が最大径部下位に及ぶ点で192aと異なっており、本来相互に離れた位置にあった可能性が高い。両者の直結は見合わせ、それぞれの破片にもとづく復原図を示しておく。口縁部は遺存部位がわずかだが、ゆるい波状とみられる。192bの上端は、口縁端部直下にあたるだろう。外面頸部以上は平滑なナデ仕上げ、文様帯以下はやや雑で凹凸が認められる。内面調整は雑で接合痕を随所残す。311、312、316～318が同一個体とみられる。復原口径28cm、同最大径32cm。色調褐灰色。

194は、有文甕である。口縁部を欠くが、遺存部直上でゆるく屈曲外反し、広く短い頸部から口縁部が短く立ちあがる器形と推定される。肩部に幅狭な沈線区画縄文帯が1段横走する。文様帯を境に上部は無文で、口縁部直下から頸部にかけては無文帯になるとみられる。下部は底辺にかけて横位条痕をもつ。底部には、僅かに網代痕が認められる。344、350、351が同一個体とみられる。最大径32cm、現存高40cm、推定高45cm前後。色調にぶい黄橙色。

195、197も、頸部が短く口縁部がわずかに外反する甕である。195は、口縁部直下から肩部にかけて、単沈線波状文の上下に工字文を組み合わせる文様帯をもつ。摩滅が顕著だが、ごく一部に縄文が認められる。胎土は緻密で細礫が多く混入するのが特徴的である。色調浅黄橙色。復原口径22cm、同最大径29cm。274の口縁部破片は、同一個体の可能性がある。197は無文で、復原口径29cm。色調浅黄橙色。

200は、肩部の張りが弱く、口縁部は直線的に外反する条痕甕である。頸部は屈折する。口縁部は平滑なナデ仕上げ、頸部以下は横位条痕。復原口径27cm。色調浅黄橙色。204も似た器形とみられるが、外面は雑なナデ仕上げである。復原口径26cm。色調明赤褐色。

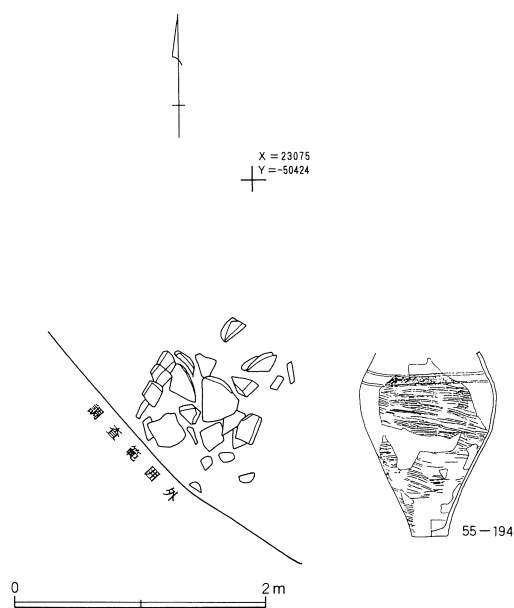
201は、壺である。頸部はゆるく外反しており、残存部下端からほどなく肩部に接合する、広頸の器形と推定される。口縁部は折返しにより肥厚し、単節LR縄文を地に、棒状工具による幅広な斜行沈線を並列させる。頸部には、やはり幅広で断続する横走沈線を重畳させる。縦方向にほぼ同位置で分断され、5単位ほどで1周するとみられるである。復原口径21cm。色調浅黄色。

203は、小型の深鉢である。表面の摩滅が著しく詳細不詳だが、縄文を地文とし、口縁部直下から最大径部直下にかけて磨消による工字文系モチーフの文様帯をもつ。口縁部は波状である可能性がある。復原口径12cm、同最大径13.5cm。胎土は細礫多く色調黄灰色。灰色を基調とする例は出土例中僅かである。

206は、全体が直線的に大きく開く器形で、蓋もしくは浅鉢である。ここでは前者として図示した。単節LR縄文を地文とし、口縁直下は2条の平行沈線で区画された無文帯とする。遺存状況は断片的だが、単独で穿孔された2孔の存在が確認できる。直径を隔てて向き合うと推定しておく。復原口径25cm。色調灰白色。

205は壺の頸・肩部である。強く張った肩部から頸部は直立気味に立ちあがる。頸部下端を1条沈線で区画、直上に2条平行沈線の波状文が廻る。器面の摩滅

第54図 11区0-38グリッド弥生土器出土状況



が顕著だが、縄文は頸部文様帯と一部肩部にも認められ、胴部にかけて広がるとみられる。肩部には楕円の中に横一文字を加えた流水文風の単位文を散在的に配置する。色調浅黄橙色。

207～221は底部のみの資料である。207は縦位条痕と底面に網代痕をもつ。色調灰白色。208は器肉が厚く鈍重なつくりで、指頭によるとみられる押圧痕が側面を埋める。底面に網代痕あり。色調明褐灰色。211、215、220は底辺付近まで縄文をもつ。

前2者は底面に網代痕あり。ともに色調灰褐色。209、213、218も底面に網代痕をもつ。210、214、216、217は、底面に木葉痕が確認される。

222以下は、法量不明の破片資料である。

222～240、242～246、248～299は口縁部である。

222～233は端部直下以下条痕が施され、234～237は無文である。形状はわずかに外反するものが多いようだが、内湾気味に立ちあがる222、232、234なども確認される。222は端面に指頭押圧を連続させ波状とし、直下に水平条痕をもつ。色調にぶい赤褐色。226、232、233も端面に小ぶりの刻み目をもつ。

242～244は、端部直下を1条の沈線で区画する。

238～241、245、246は端部直下に掘りの深い複数沈線による文様帯をもつ。239、240は同一個体で、縄文を含む変形工字文系の文様帯か。色調にぶい黄橙色。240は内面に1条の沈線が廻る。245、246は端部が切立ち、直下に縄文が廻る。

248～253、268は、やはり端部直下に押圧・刺突文が廻る。248～250は縁部が僅かに肥厚し、そこに半裁竹管状工具により上方から刺突を加える。251～253、268はいずれも指頭による押圧とみられ、丸い凹部の中央に爪形の溝が残る。

254、264～267は、棒状工具によるスリット状の縦沈線文が廻る。266では、頸部にかけて同一工具による縦あるいは斜行沈線が廻るとみられる。

271は口縁端部とその直下に刻み目、275は端部直下に刻み目と平行沈線3条の構成である。

255～263、267、269は縁部を肥厚もしくは沈線区

画し、そこを縄文帯とする。256、267ではさらに縦沈線が加わる。255、256は頸部に横位条痕が認められる。259は器面の摩滅が顕著だが、下端に2条の沈線が廻り、頸部は無文帯になる。

274は、壺である。頸部から口縁部が直線的に大きく開き、端面は抉りを連続させて波状とする。屈折部内面には突出した突帯が廻り、口縁部外面にも低平な突帯が廻る。前者の頂部には切り込みに近い幅狭な刻み目、後者には幅広な押圧が連続する。内外面に条痕をもち、外面は突帯に沿った平行条線と波状条線で文様帯を構成する。色調淡黄色。

276は甕とみられるが、端部直下の刻み目は、薄く鋭利な工具による細く鋭い切り込みである。

270、277～282、288、290～294はその他沈線文をもつものである。270、280、282、281、286、293は縄文を地文とする。280は、小片だが端部直下に1条沈線区画+2つのL字形コーナーが向き合う文様構成で、方形文様の一部だろう。沈線内に赤彩が残る。286は206に似るが、細部の相違から別に扱った。浅鉢として図示したが蓋の可能性はある。

282は小型鉢である。端部は向かって右方向からの刺突による刻み目をもつ。単節LR縄文を地文とし、横走沈線1条+2条沈線連続山形文+曲線文である。色調にぶい浅黄橙色。内面端部直下に2孔1対の貫通しない小孔をもつ。復原口径12cm。

291は端部を押圧により波状とし、外面は状態が悪く判然としないが浅い沈線による楕円状文様を複数段配するとみられる。293は向かって左破断面内側が鱗状に突出し、何らかの部位が接合していた可能性がある。文様は不明瞭だが口縁部直下の2条沈線は接合面付近で閉合し、さらに下位には斜行沈線が認められる。

293、294は浅鉢である。293は縄文と曲線文で、沈線の上下にも部分的に縄文が認められる。色調赤褐色。393が同一個体の可能性がある。294は沈線区画横走縄文帯の上下を丁寧な磨消し文様帯を強調する。内面端部直下に沈線が廻る。

283～285、287～289、298は縄文のみを文様とする。

286は端部直下が屈折気味に外反し、単節LR縄文を施文する壺、298は鉢である。

295～297は蓋の縁部とみられる。いずれも小孔をもち、296は2孔の並列が確認される。296、297はともに外面調整が比較的雑で、同一個体の可能性がある。

300以下は、口縁端部を含まない破片である。

301は、甕の頸・肩部とみられる。頸部下端に明瞭な段をもつ。調整不明瞭だが頸部にはミガキ等平滑な仕上げが認められる。色調にぶい橙色。

302～305は、1条の幅広な横走沈線のみ確認される。302は甕の頸・肩部である。幅広な沈線を境に段差をもち、沈線は段差の強調ともみられる。外面平滑、内面は段差裏面に接合痕を明瞭に残し雑な仕上げ。胎土は細礫含むが緻密、292に似る。色調赤灰色。304は深鉢、305は甕で、ともに沈線は口縁端部直下にあたるとみられる。

306以下411にかけては、複数の沈線により文様帯を構成する。

307～309は変形工字文系の文様の一部とみられる。308以下は縄文をもつ。325、327、332、343は、地に条痕をもつ。338は、とりわけ浅く幅広な横走沈線を重畳させ、上下似た位置で食い違いによる断続がみられる。201に似たモチーフである。354は幅狭な沈線区画縄文帯が横走し、その上部は無文帯である。355は、細頸壺口縁部である。上端は端部を区画するとみられる水平沈線に沿って破断している。縄文を地文とし、沈線区画の無文帯が連弧文状に廻ると推定される。

362～364は壺頸部である。多条の横走沈線下に縦沈線がスリット状に並ぶ。367、373、374なども、横走沈線+曲線+縄文で飾られる細頸壺の頸部である。369は壺肩部で、横走沈線2条の間に縄文を充填した三角形とみられる単位文を配する。色調明褐灰色。383、384も壺肩部で、多条横走沈線が同縦沈線を挟み込む構成である。色調淡赤橙色。380は筒形土器とみられ、単節LR縄文を地文とし、3条の横走沈線が廻る。色調黒褐色。410は壺胴部下半であるが、撚糸文を地文とし、最大径部付近とみられる上端に曲線文が確認され

る。色調浅黄橙。

413～414は細い沈線による波状文をもつ。413は壺肩部とみられるが、横走沈線1～2条に区画された単沈線波状文帯が2段まで確認される。色調浅黄橙。414も壺肩部で、単節LR縄文を地文とし櫛描波状文を施す。色調褐灰色。415は壺胴部中位とみられる。単節RL縄文を地文とし、斜行沈線を施文後、やはり斜行する単沈線波状文を重ねる雑然とした構成である。色調黒褐色。

417、420、422は細頸壺の頸部である。420は、多条の横走沈線下に単沈線波状文が配されるとみられる。422も、小片だが沈線文と刺突の充填が認められる。刺突充填文が確認された唯一の例である。色調浅黄橙色。

416は浅鉢である。7条の沈線が横走し、最上段と第3段の区画は縄文帯となる。

424～445は縄文が認められるものである。

446～586は条痕のみのものである。斜位条痕をもつ壺・甕胴部下半の資料が多いようだが、455、462は壺頸部とみられる。

581～590は、8区出土の資料を一括した。

591、592は玉類である。

591は管玉である。黒色の粘板岩製で、長さ35.5mm、径17mm。孔に沿ってはほぼ半分に破碎されており、破断面から孔の側面を直視できる状態である。火をうけて碎けた可能性もある。外面は丁寧な磨かれており、整った円筒形である。両側から穿孔されており、中央部に明瞭な食い違いが認められる。内孔径は2.3mmである。

592は、ヒスイ製の白玉である。端面の磨きは雑で凹凸が顕著に残る。厚さ3.15mm、径8.7～8.9mm、孔径2.0～2.9mm。

古墳時代の遺物 (第70図)

0～39グリッドからは、縄文・弥生土器とともに古式土師器が少数ながら出土している。図は17区古墳時代遺物集中部出土の土器と一括し、89ページ第70図に掲げた。

2は、底部を欠くが台付柑と推定される。器壁は厚く、軟質で鈍重な作りである。口縁部内面に斜位の細かなミガキが残る。推定口径18cm。色調浅黄橙色。

1、8は高杯脚部とみられる。2とは胎土が異なり別個体である。残存部位からは透孔の存在は確認できない。1は外面をタテハケ調整後ミガキ仕上げとみられるが、部分的にハケメが残る。色調浅黄橙色。8は外面を丁寧なタテミガキで仕上げ赤彩される。色調灰白色。

3、6は高杯もしくは小型器台の脚部である。3は3個の透孔が確認できる。色調橙色。6は外面に赤彩が残る。色調橙色。

5、10は台付甕脚部、4は同じく底部である。5は器壁が厚くやや大型で、外面タテハケ、内面もヨコ・ナメハケ調整である。色調灰白色。10は外面タテハケ、内面はヨコ・タテハケ調整である。色調にぶい黄褐色。4は外面タテハケ、内面は平滑なヘラナデ調整である。色調にぶい橙色。

7は、有段口縁壺の口縁部と推定される。器壁は厚く、口径は30cmを越える大型品である。口縁端部はナデ調整で面取りされ、摩滅がひどく判然としないが、端部上端は摘み上げ状に突出していた可能性がある。内外面ともヨコミガキ仕上げである。色調浅黄橙色。

9は壺の底部である。内面ヨコハケ調整である。胎土、色調は7に似ており、同一個体の可能性がある。

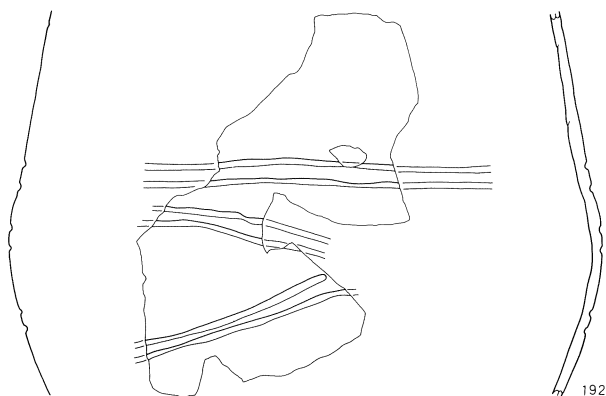
第55図 11区遺構外出土遺物(4)



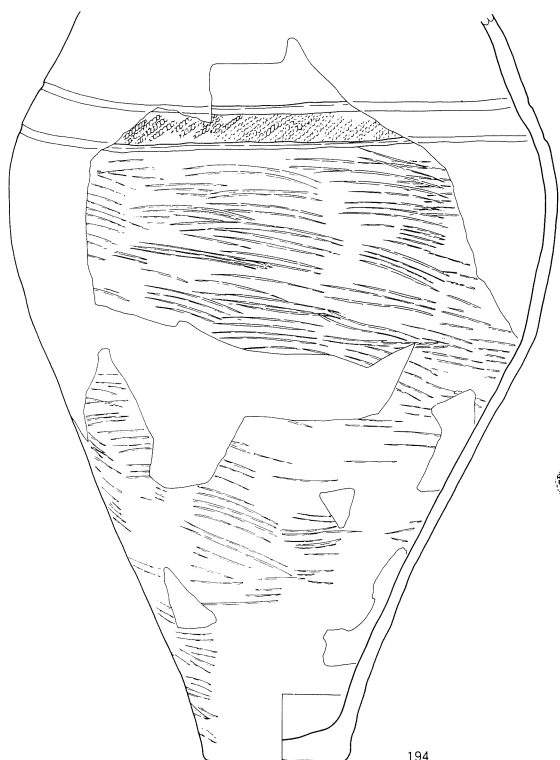
192a



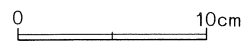
193



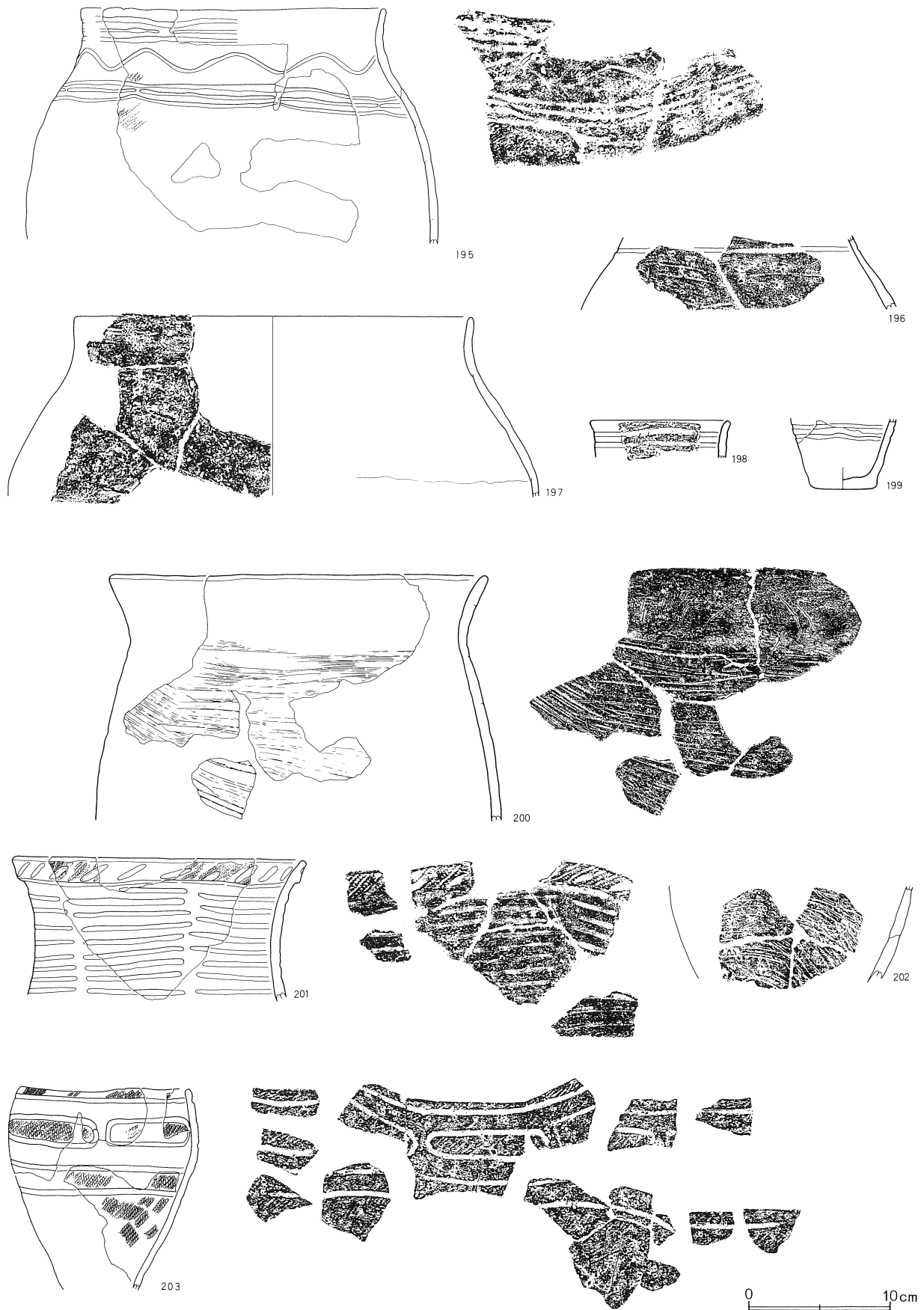
192b



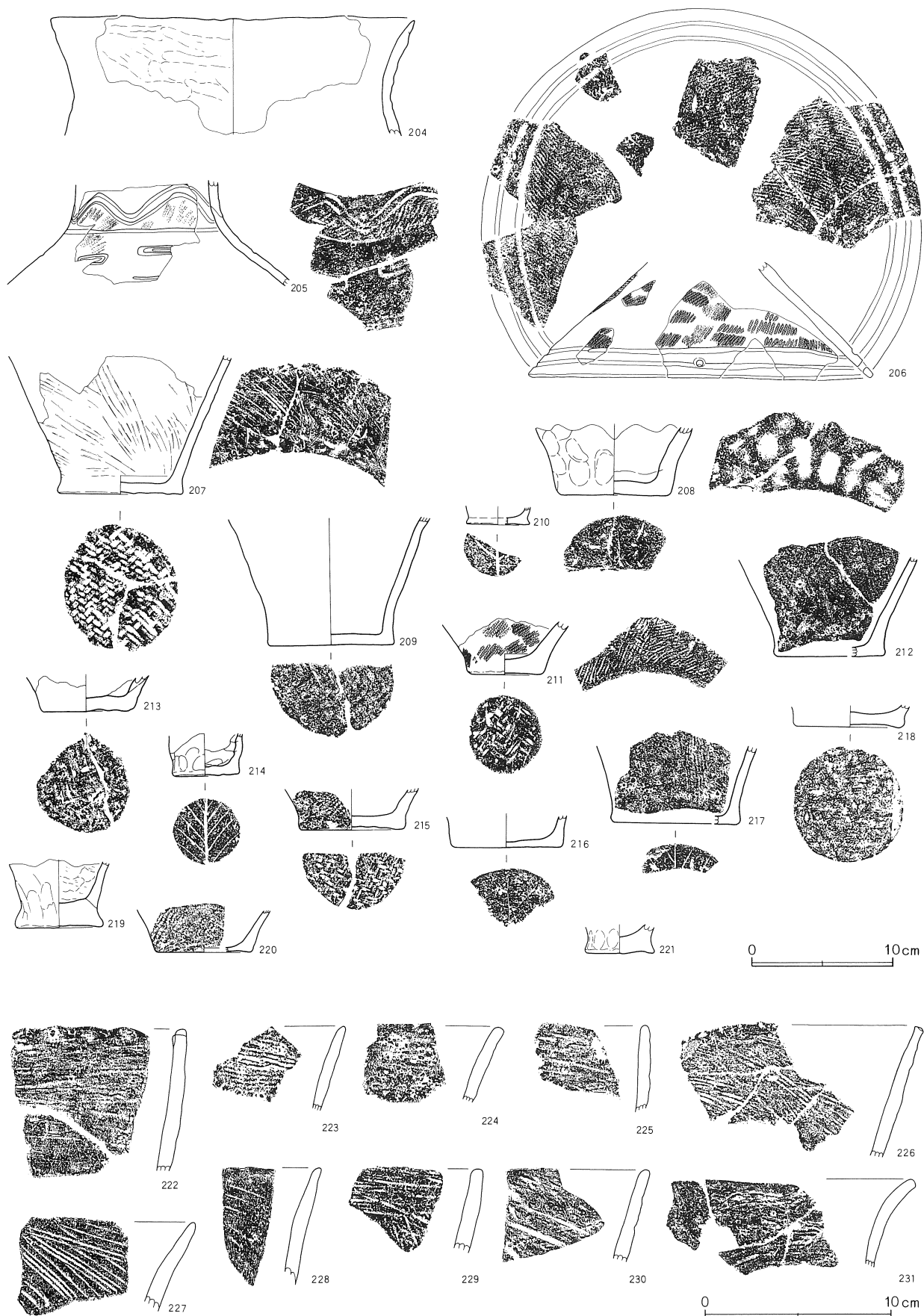
194



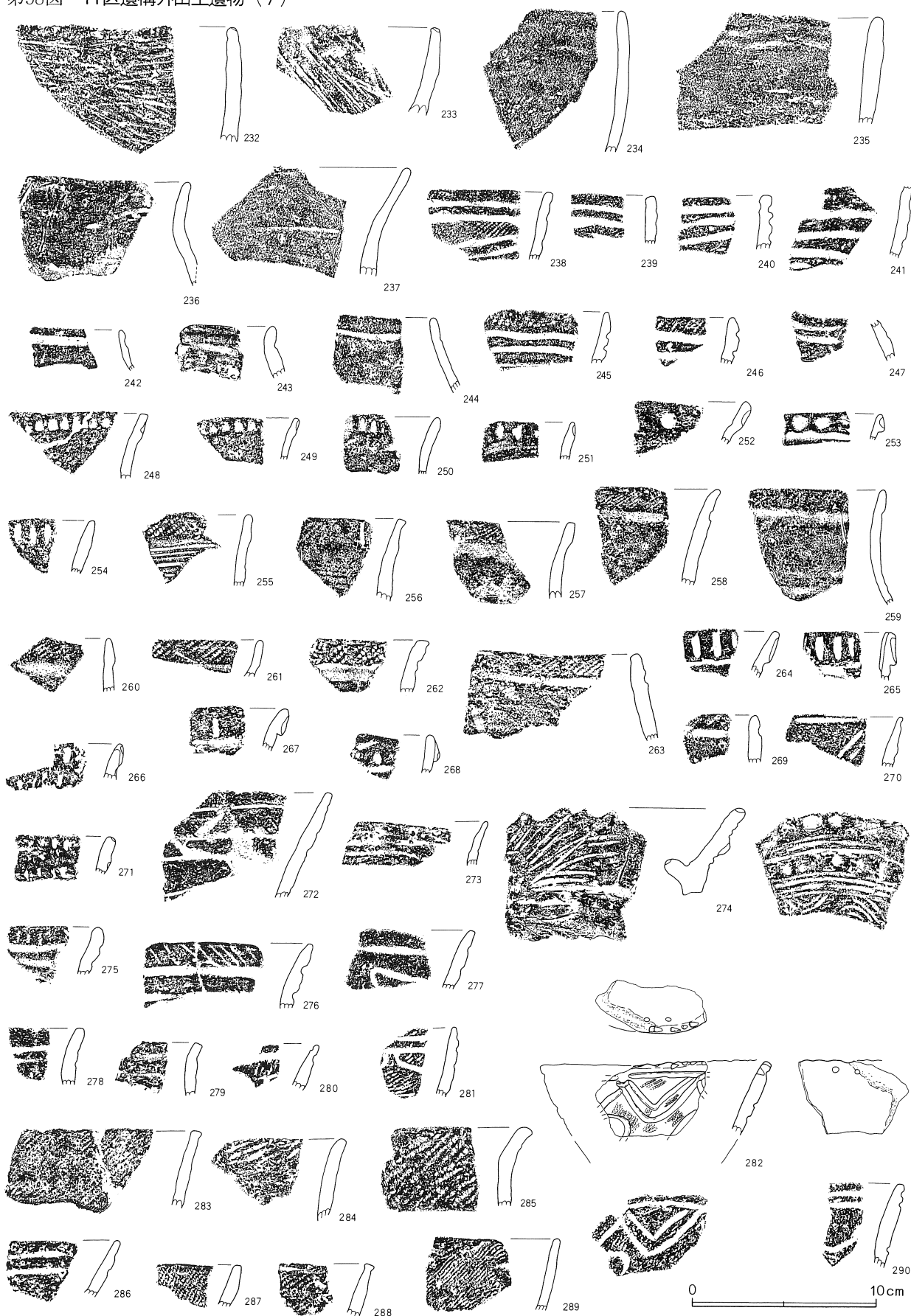
第56図 11区遺構外出土遺物（5）



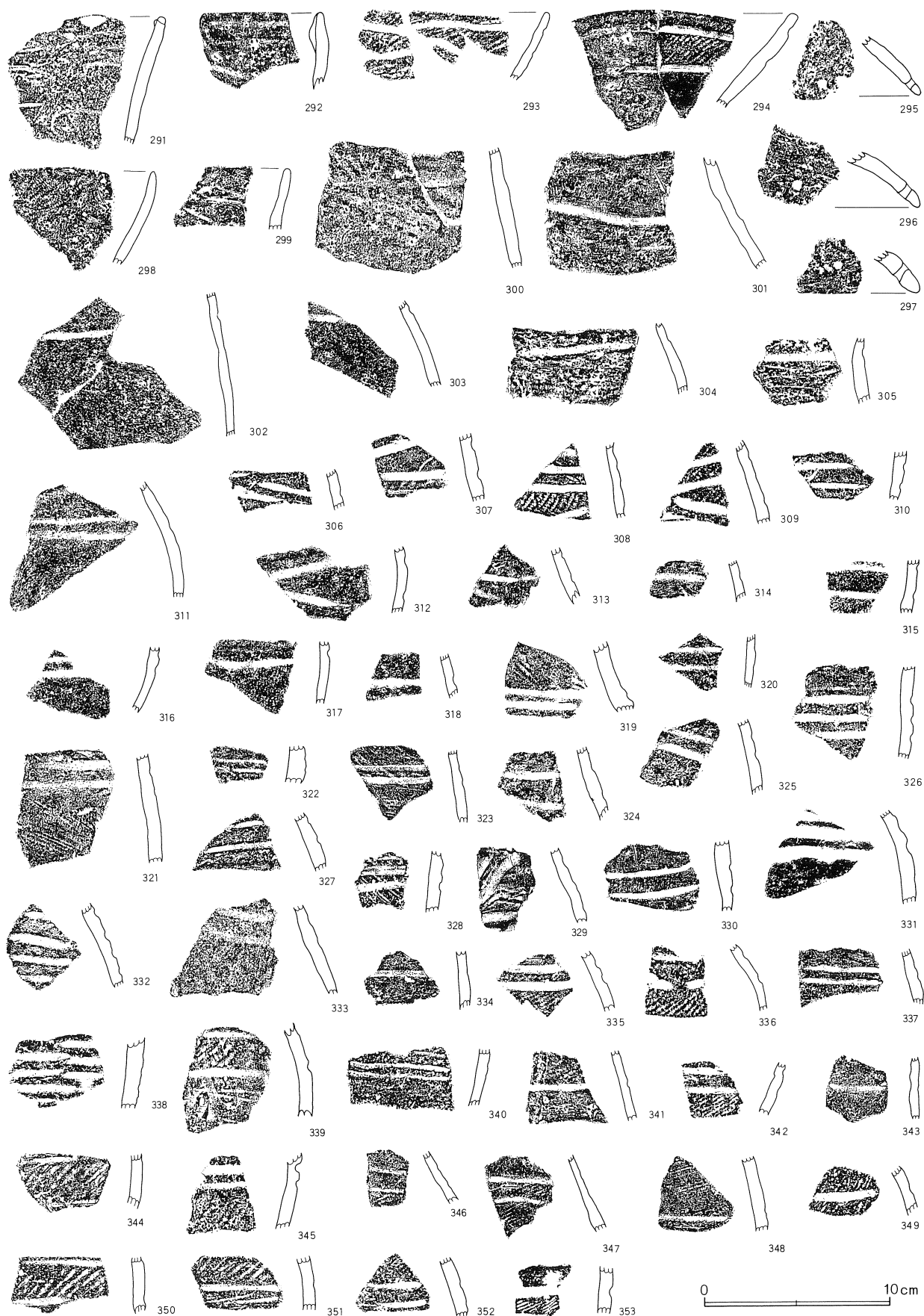
第57図 11区遺構外出土遺物(6)



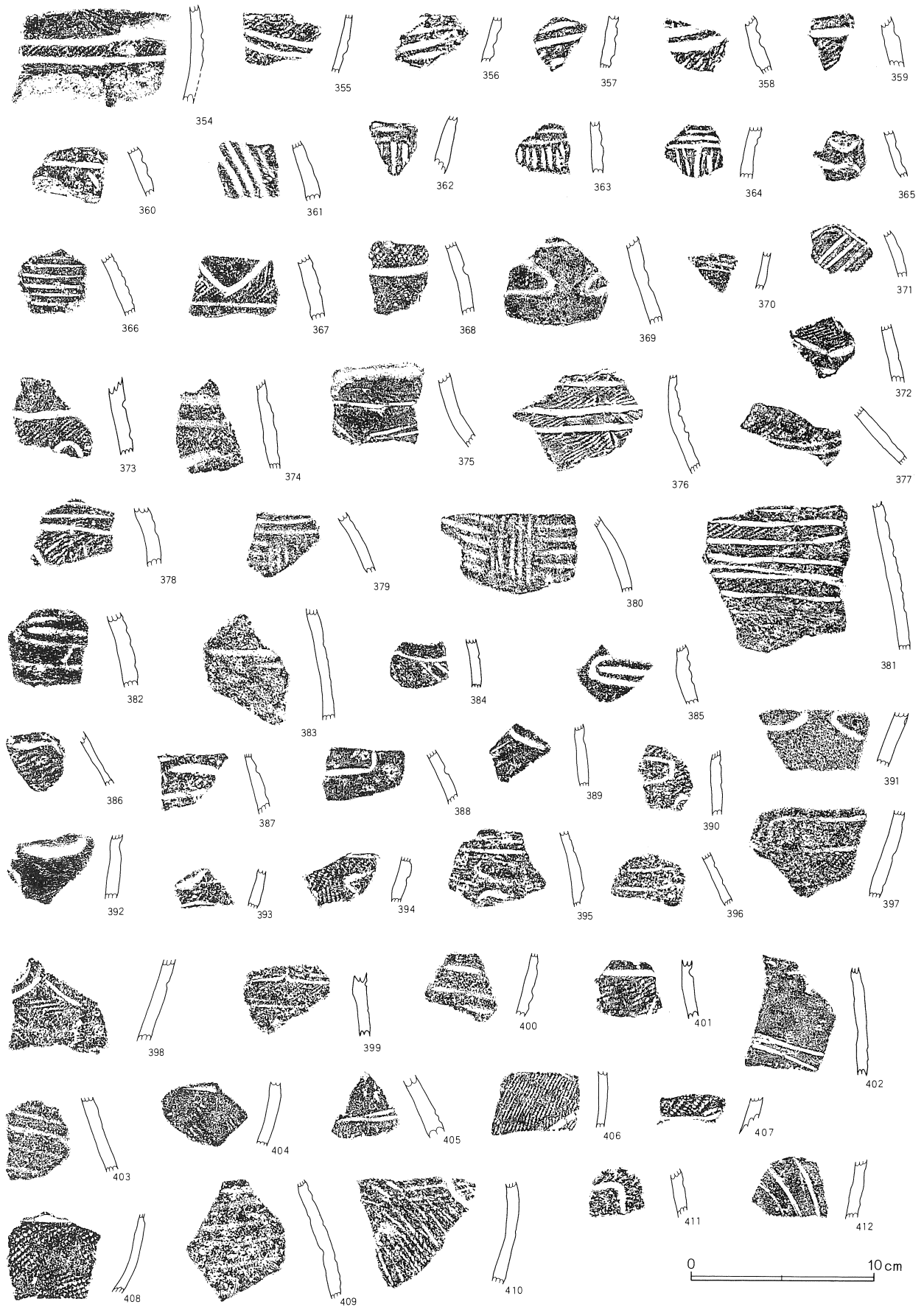
第58图 11区遺構外出土遺物(7)



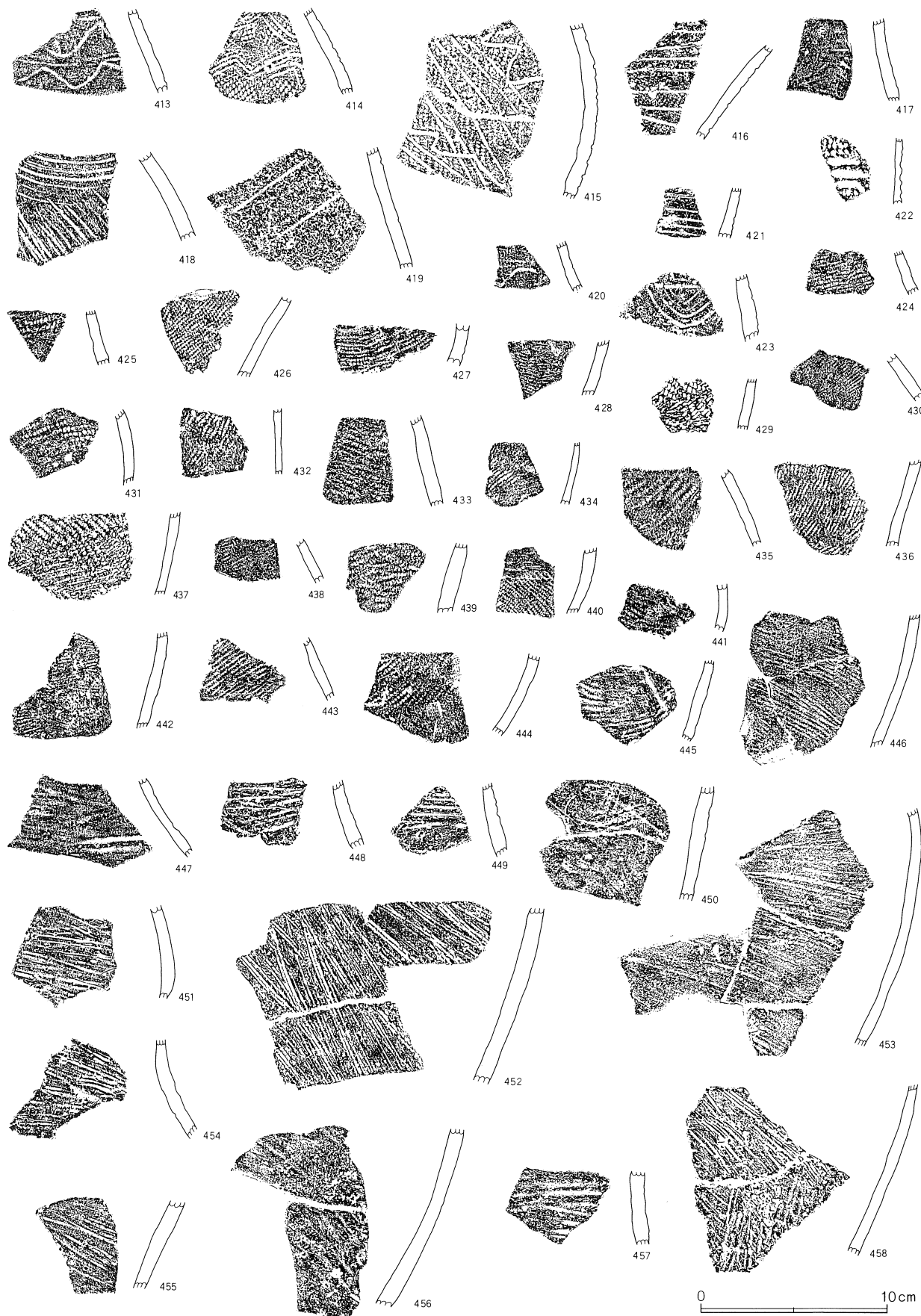
第59図 11区遺構外出土遺物(8)



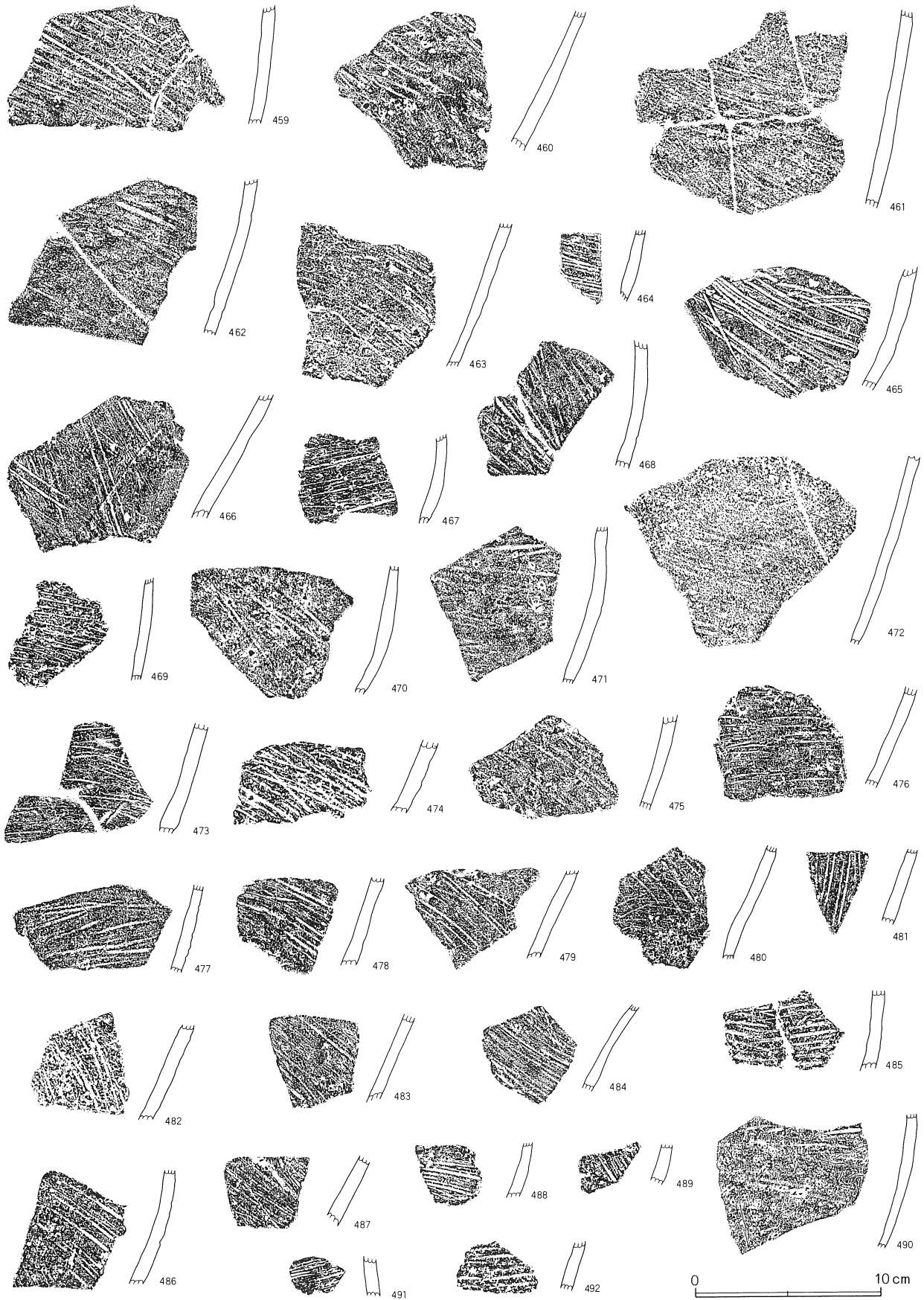
第60图 11区遺構外出土遺物(9)



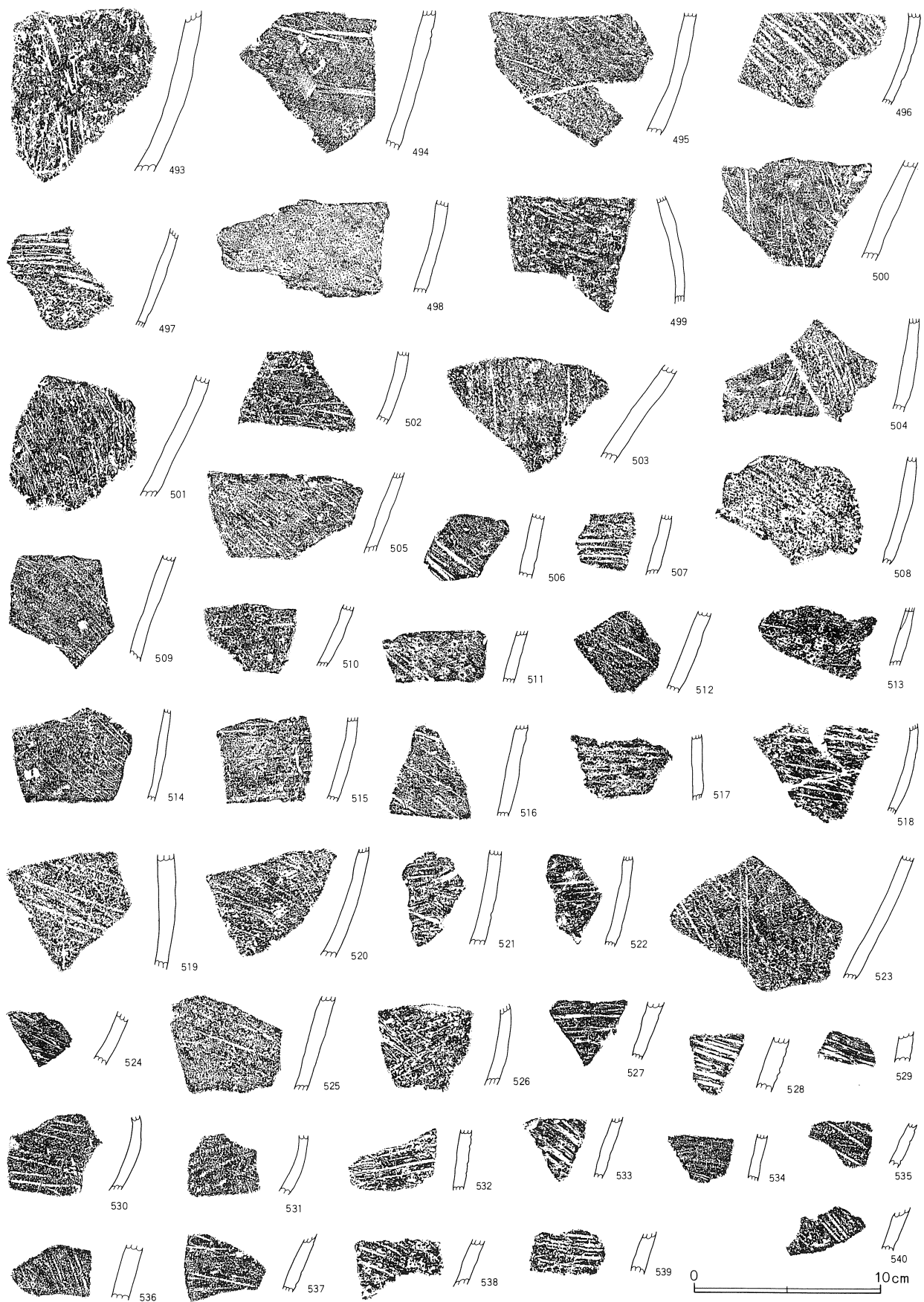
第61図 11区遺構外出土遺物(10)



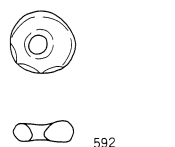
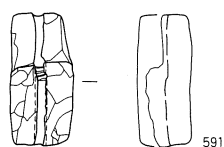
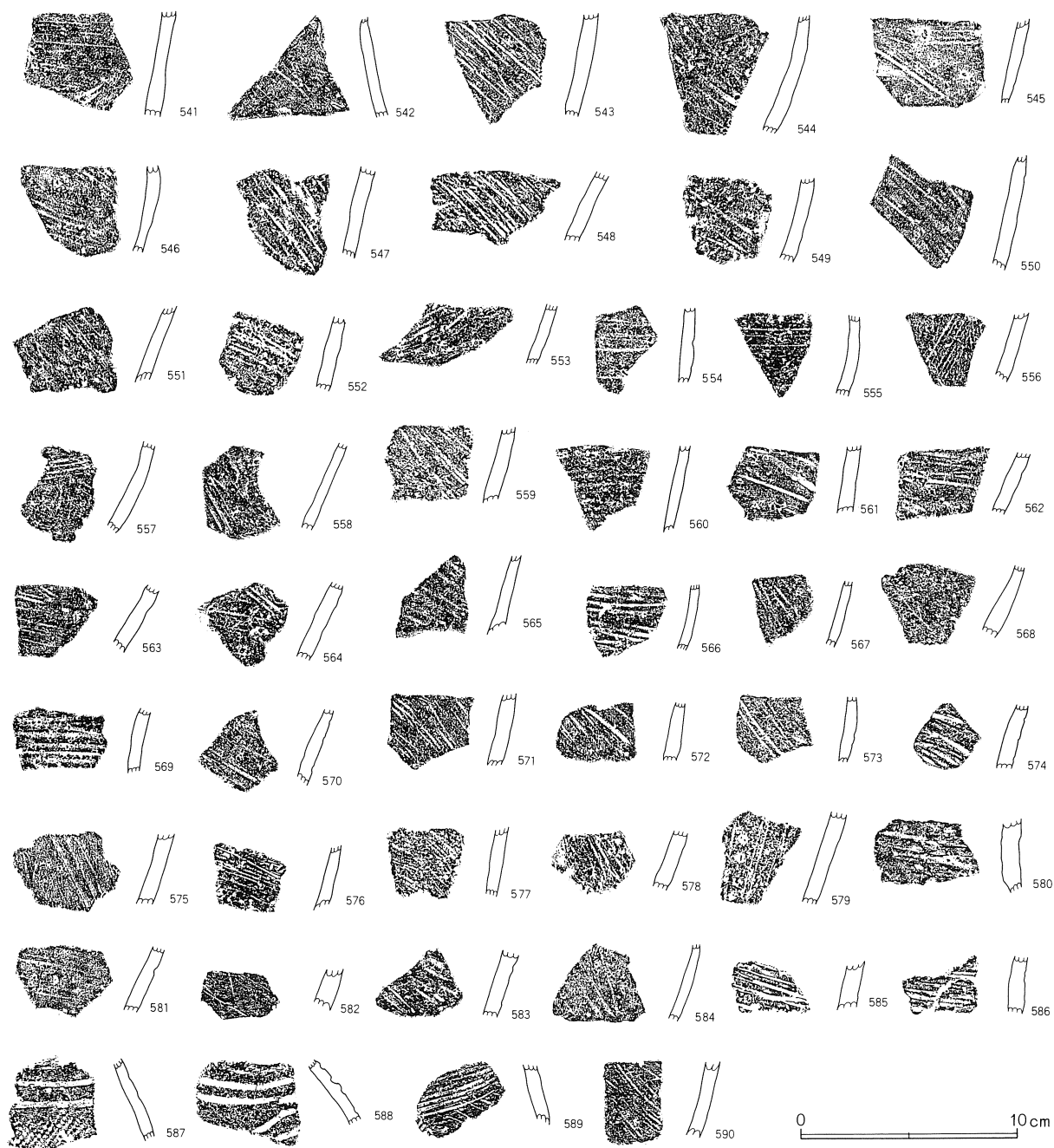
第62图 11区遺構外出土遺物(11)



第63図 11区遺構外出土遺物(12)



第64図 11区遺構外出土遺物 (13)



4. 12～18区の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

第7号住居跡<S J 7 (旧S J 9)> (第65・66図)

位置は、17区AK-54グリッドである。

壁は確認されなかったが、ピットが弧状に配列される。この状況から、平面形は埋甕炉を中央部にもつ径4.0m程の柄鏡形とも推定されるが、北東半は埋没した谷状地形にかかり確認できなかった。

炉は確認されなかった。

遺物は、図示した資料のほかに縄文土器片約60点である。

6は底部を欠損するが、ほぼ完形の第Ⅲ群第1類土器である。胴部が緩く括れるキャリパー形で、口縁部に水平の帯縄文を巡らせて無文帯を区画する。この帯縄文から、巻きの異なる上下2段の渦巻文を3か所に垂下させ、渦巻文間には縦位方向の区画文を3箇所配する。従って器面は、渦巻文と縦位区画文を3単位づつ、合計6単位に分割されている。展開図中央と右側の渦巻文間の縦位区画部分に乱れがあり、口縁部帯縄文から直接垂下する区画線が存在していない。地文は

単節LRの充填縄文である。口径39.5cm、器高51.2cm、推定底径約9cmを測る。

7は胴部下半の渦巻文部分の破片で、渦巻文外側の描線は閉塞せず、隣りと連結するモチーフとなる。地文は単節LRの充填縄文である。現存高11.5cmを測る。

1は連鎖状隆帯が胴下半にまで垂下する破片で、沈線区画内に充填縄文が施されていたかどうかは不明である。2、3はJ字状文内に充填縄文を施し、5は刻みを施す隆帯が垂下する。

遺構の帰属時期は、縄文時代後期初頭である。

石器は2点出土している。8は磨石の破片で、平坦な表裏面を磨面として使用している。長さ6.5cm、幅5.3cm、厚さ1.9cm、重さ75g、石質は安山岩である。9は大形の石棒の破片で、上部の破損面は磨面として再利用されている。残存する長さ7.2cm、幅13.0cm、厚さ9.4cm、重さ1400gで、石質は安山岩である。

(2) 土壇

第20号土壇<S K 20 (旧S K 28)> (第67・68図)

位置は、14区Y-44グリッドである。

平面形は0.5×0.45mの楕円形で、深さ0.2m。

遺物は、甕棺とみられる大型深鉢が横位の状態で出土した。ほぼ完形。図示した資料の他に縄文土器片が約10点ある。

1は、ほぼ完形の甕棺である。やや肥厚して内湾する口縁部が開き、頸部で括れる器形を呈する。口縁部には加飾がなく、条線で頸部を区画し、区画線から大柄の格子目文を条線で施文する。頸部の区画線や、格子目文は一度に施文されるものではなく、何度か継ぎ足しながら施されている。第Ⅲ群第2類土器である。

2は口縁部に隆帯区画を持つ深鉢形土器で、隆帯には刻みを施す。3は太いU字状の沈線を施文し、刺突文を充填施文する。4は磨消縄文の区画を施すもので

あるが、器面が荒れているため構成は不明である。

遺構の帰属時期は、縄文時代後期初頭である。

第21号土壇<S K 21 (旧S K 23)> (第67図)

位置は、15区AF-54グリッドである。

平面形は0.8×0.6mの長方形で、深さ0.1m。

遺物は縄文土器小片2点である。時期不詳だが縄文時代の遺構と推定される。

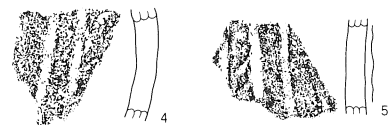
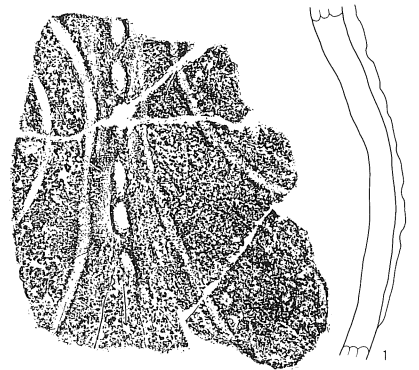
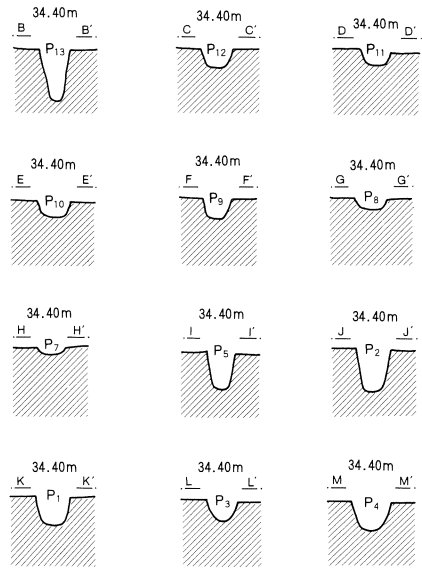
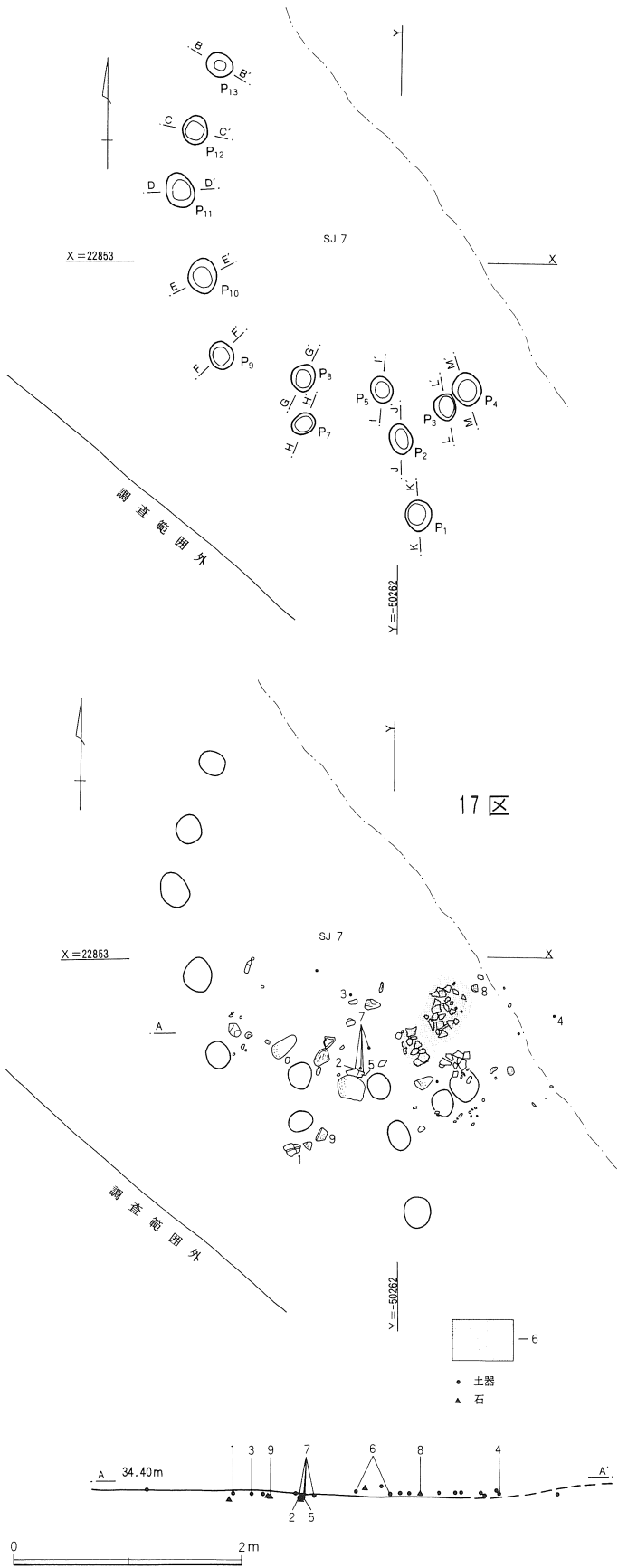
第22号土壇<S K 22 (旧S K 24)> (第67図)

位置は、15区AF-54グリッドである。

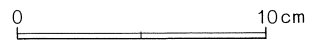
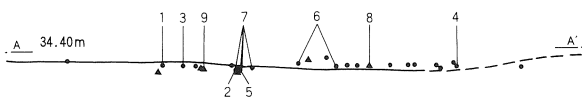
平面形は直径約0.9mの円形で、深さは約0.2mである。

遺物は、縄文土器小片4点である。時期不詳だが縄文時代の遺構と推定される。

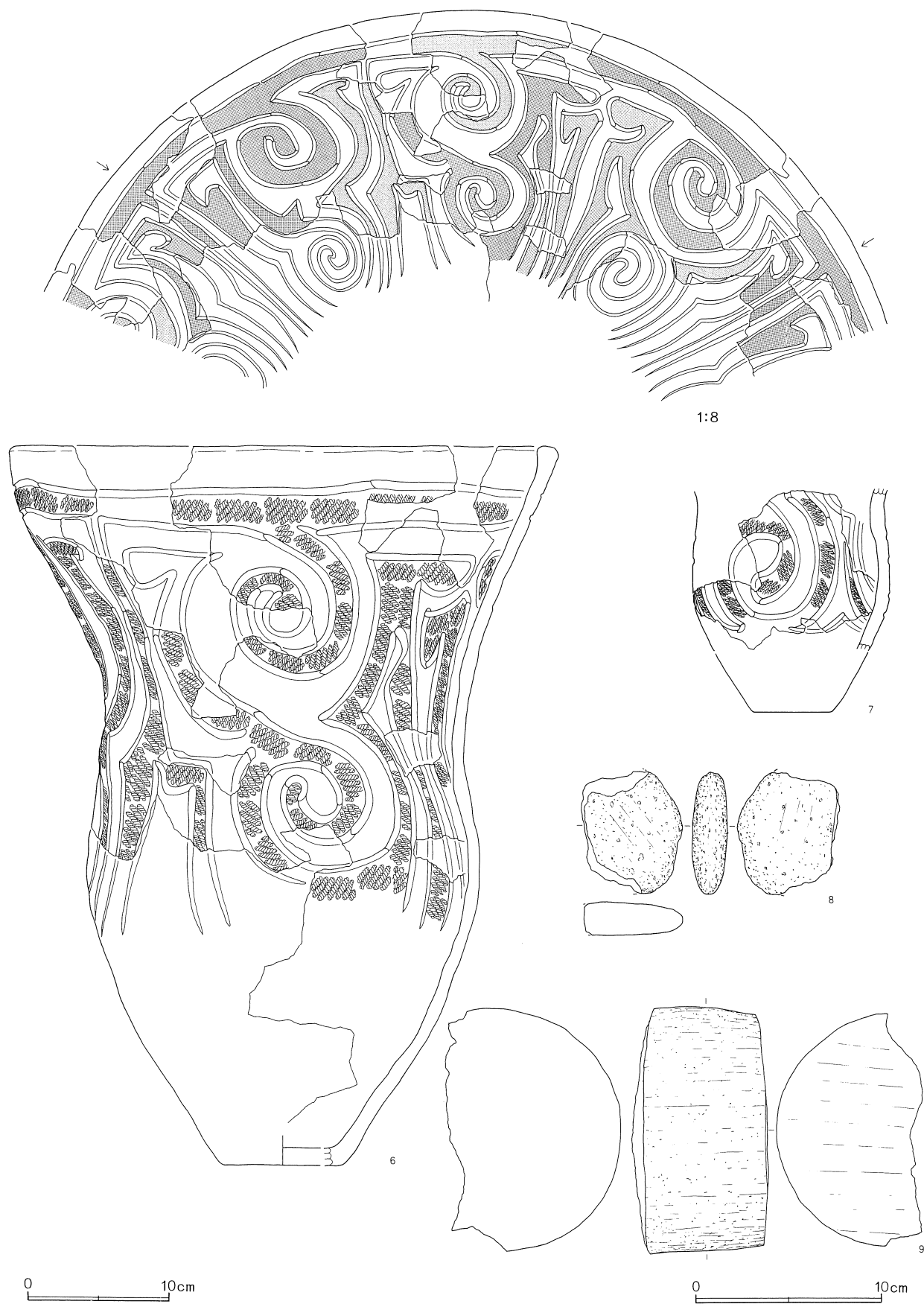
第65図 第7号住居跡と出土遺物（1）



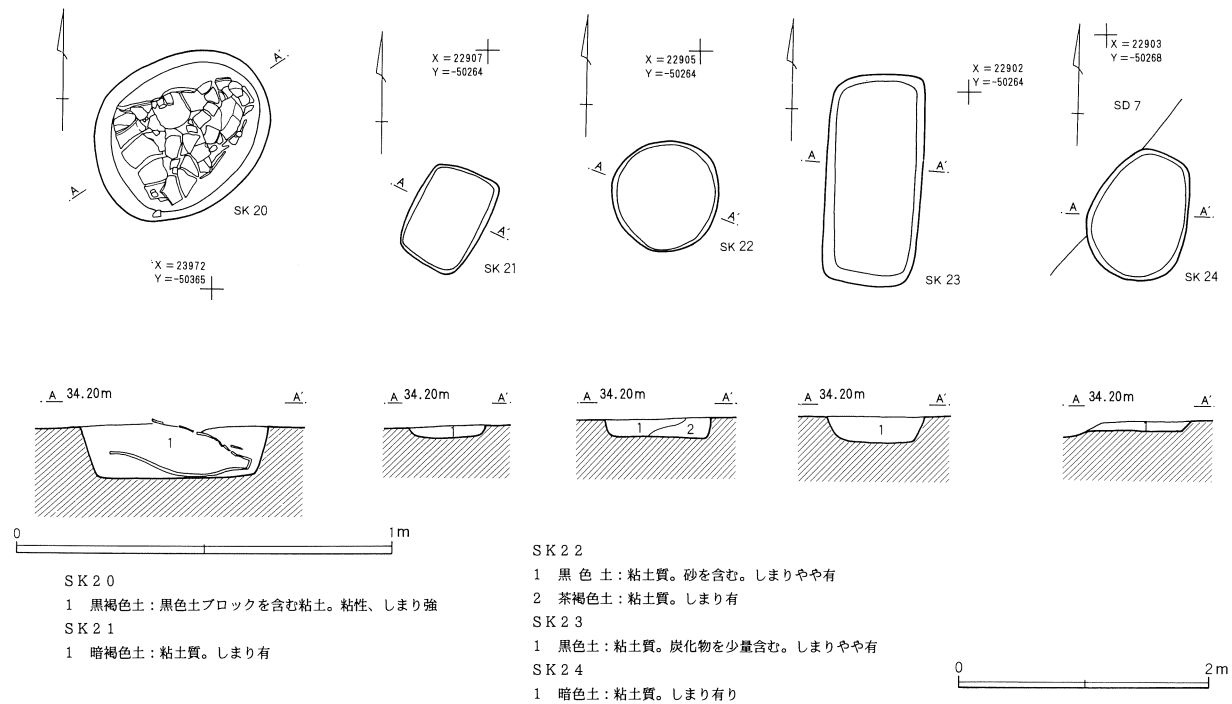
- 6
- 土器
- ▲ 石



第66図 第7号住居跡出土遺物(2)



第67図 12~18区土壌



第23号土壌<SK 23 (旧SK 25)> (第67・68図)

位置は、15区AF-54グリッドである。
平面形は0.8×1.7mの長方形で、深さは約0.2mである。

遺物は、図示した資料の他に土器片約30点である。
1は内折する口縁部がやや開く器形で、口縁部から2本沈線による縦位展開のモチーフを施文する。器面の荒れが著しく不明瞭であるが、区画内に充填縄文を施文している様である。第Ⅲ群第1類土器である。3、4は縦位の沈線文を垂下する構成で、第1類か第2類かは判断が付かない。2は沈線の渦巻文を施文するもので、充填縄文を施す。第2類の中でも新しいもので

ある。5は風化が激しく、器面が観察されないが、隆起線でモチーフを描いている様であり、瓢形土器の可能性はある。

遺構の帰属時期は、縄文時代後期初頭である。

第24号土壌<SK 24 (旧SK 26)> (第67図)

位置は15区AF-54グリッドである。
平面形は0.8×1.1mの楕円形で、深さは約0.1mである。

西南側でSD 7と近接する。

遺物は縄文土器小片5点で、時期不詳だが縄文時代の遺構と推定される。

(3) 溝跡

第5号溝跡<SD 5 (旧SD 11)> (第69図)

位置は、15区AD・AE-51~53グリッドである。
約19mにわたり検出された。SD 6・7にはほぼ直交する。方向はN-60°-Wである。幅約1.5m、深さ約0.3m。

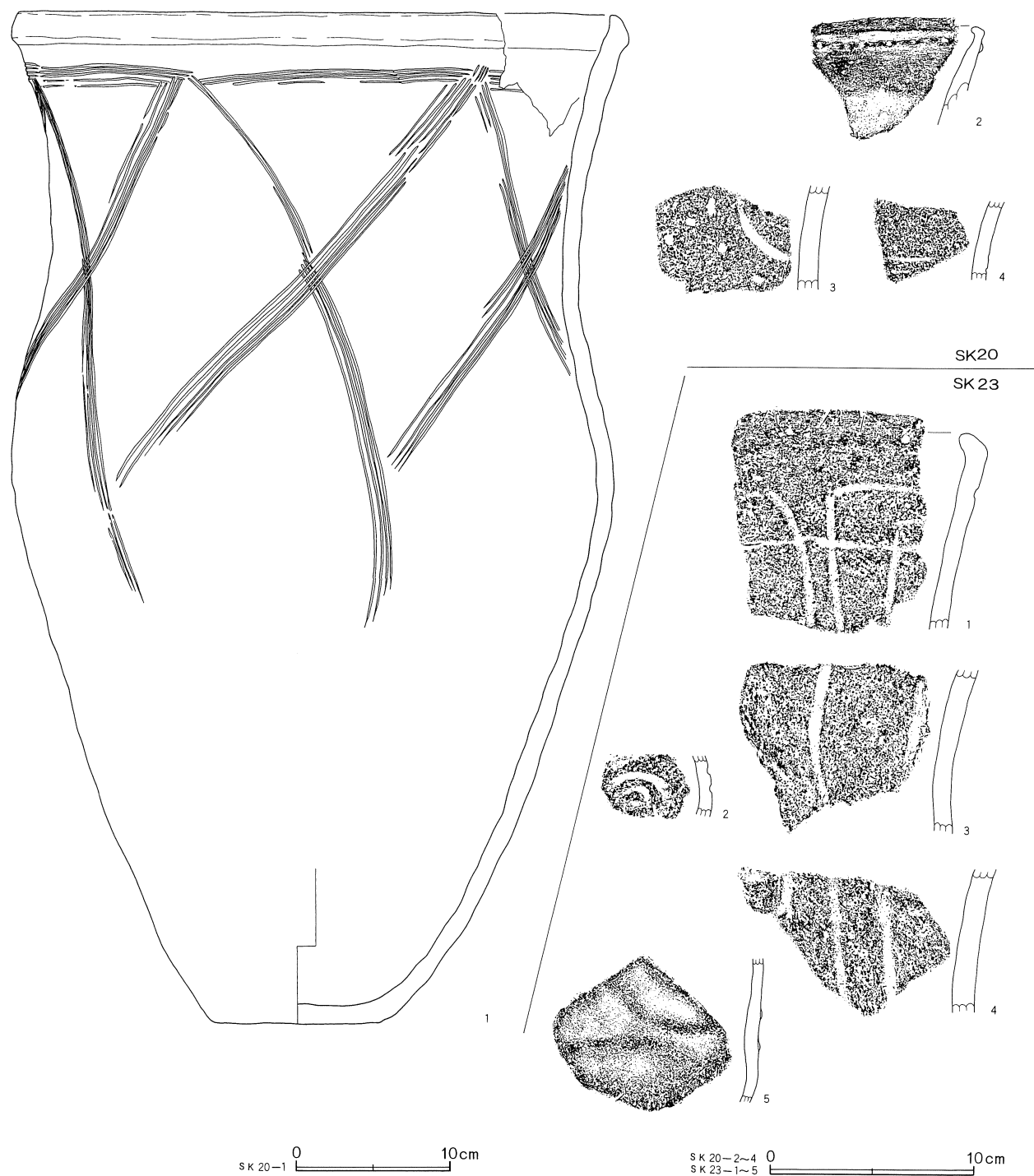
陶器などの遺物が出土しており、遺構の帰属時期は近世以降である。

第6号溝跡<SD 6 (旧SD 12)> (第69図)

位置は、15区AE・AF-53グリッドである。
約10mにわたり検出された。近接するSD 7と平行する。ほぼ直線的で、方向はN-35°-Eである。幅約1.2m、深さ約0.4m、断面形はU字形である。

遺物はないが、SD 7との関連から近世以降の遺構とみられる。

第68図 20・23号土壌出土遺物

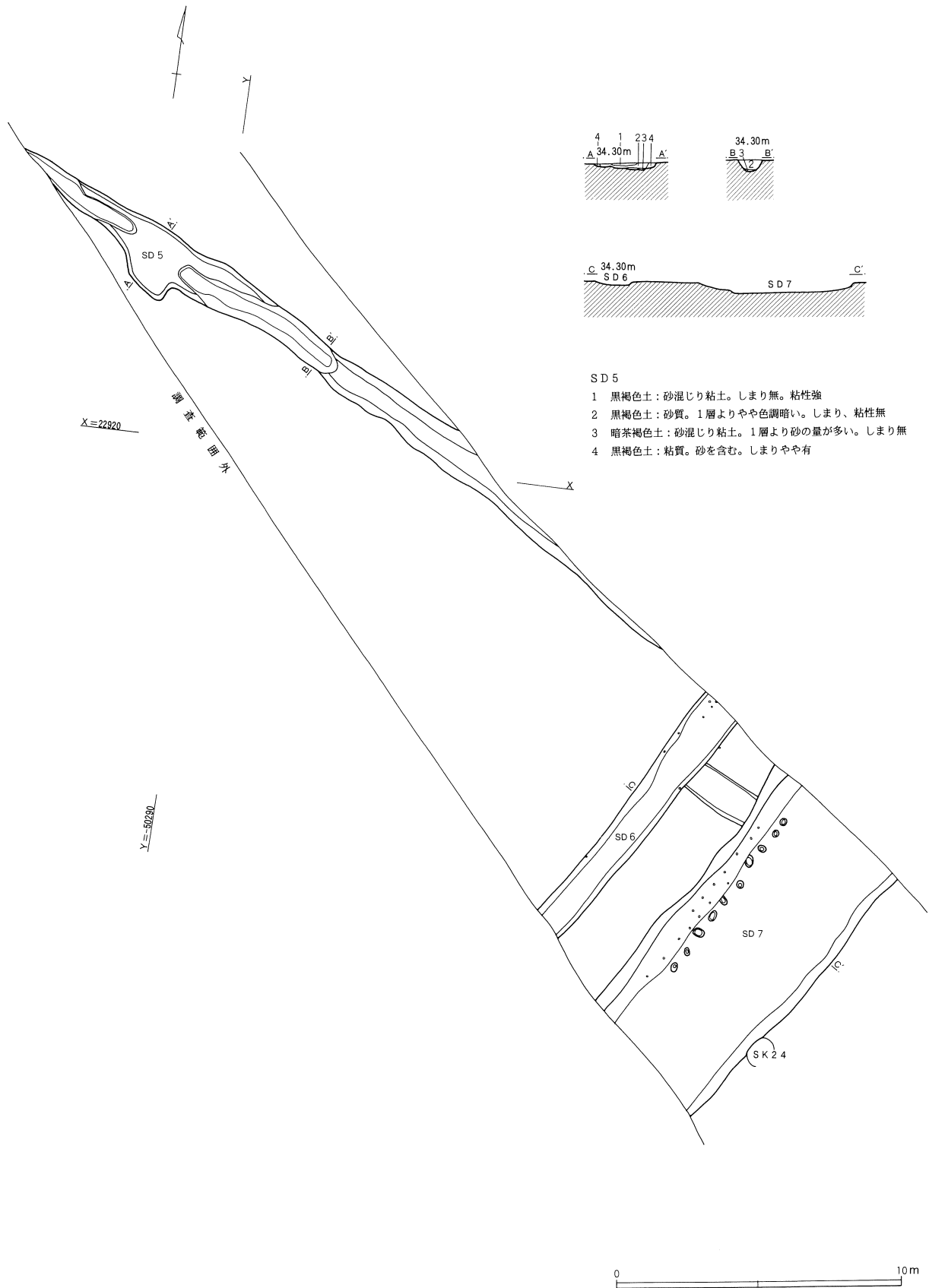


第7号溝跡<SD7 (旧SD13)> (第69図)

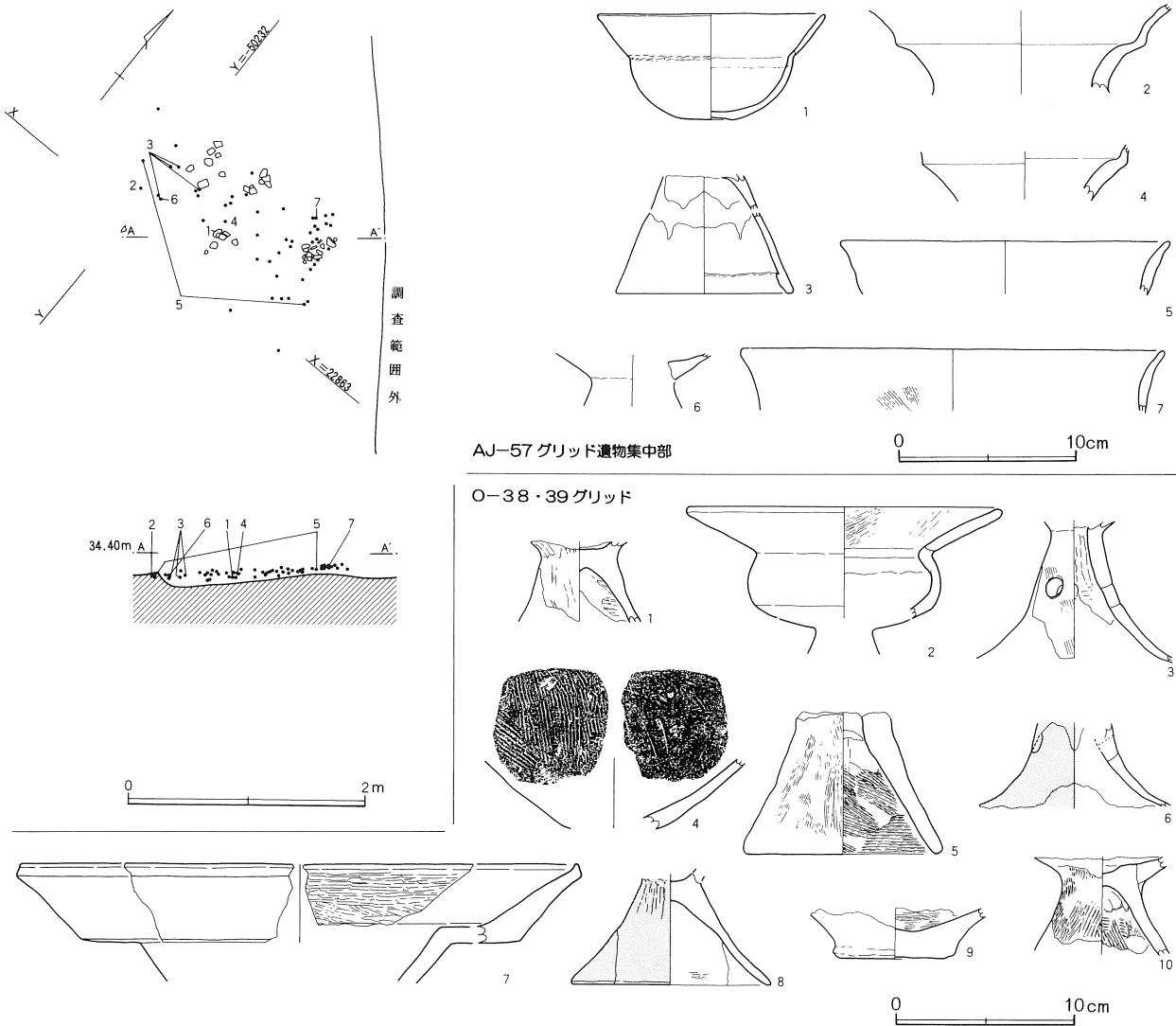
位置は15区AE~AG-53・54グリッドである。約11mにわたり検出された。近接するSD6と平行する。ほぼ直線的で、方向はN-35°-Eである。幅約5.5m、

深さ約0.5mで、検出された溝のうち最も規模が大きい。北西辺に杭列が認められた。遺物は、陶磁器や瓦などが出土しており、遺構の帰属時期は近世以降である。

第69図 第5～7号溝跡



第70図 古墳時代出土遺物



(4) 古墳時代遺物集中部

位置は、17区A J-57グリッドである。

不整形の掘り込みに伴って、古式土師器が出土した。当初竪穴住居跡とみなされ、調査時の旧名称はS J 8である。

遺物はいずれも破碎された状況で出土し、小片からかろうじて器形を復原し得た。

1は、小型丸底土器である。口縁部は直線的に開き、底部は小さな凹底である。器壁は薄く丁寧な作りとみられるが摩滅ひどく調整不明。胎土は精良だがやや軟質。復原口径13cm、器高6cm。色調浅黄橙色。

2、4は、有段口縁壺の頸・頸部とみられる。4は口縁部の器壁が薄く、2ほど大きく立ち上がらない可能性もある。ともに摩滅ひどく調整不明。色調赤褐色。

3は、裾を内面に折返す特徴からみてS字状口縁台付甕の脚部である。摩滅ひどく調整不明。色調浅黄橙色。6は台付甕の底部である。色調赤褐色。5、7は甕の口縁部である。5はナデ仕上げで色調橙色。7は外面下方に細かなハケメが残る。色調赤褐色。

これらの他、図示できなかったが赤彩された単純口縁壺と器肉の薄い壺もしくは高杯がある。

(5) 遺構外出土の遺物

12～17区を中心とした地域から出土した土器群を分けて説明する。第Ⅲ群第2類を主体とする土器群が出土している。

12区～14区遺構外出土遺物(第71～74図)

第Ⅱ群土器(1・2)

1は磨消懸垂文の垂下するキャリパー系土器で、第4類の加曾利E系土器である。地文に単節LRを縦位施文する。2は頸部を刺突文で区画する第4類で、加曾利式の影響が強い土器である。

第Ⅲ群土器

第1類(3～16)

対になる2本沈線でモチーフを描く土器群で、沈線間に縄文を施文するものと、列点を充填するものがある。3は口唇部が角頭状を呈し、口縁部裏に凹線状の窪みが巡り、沈線区画内に縄文単節LRを充填施文する。5～7も沈線文間に充填縄文を施すものであり、7は上下に反転する渦巻文を施文する。4は頸部がく字状に屈曲し、内折する口縁部が大きく開く器形を呈する壺形土器である。モチーフを描く沈線間には刺突文を施す。9、10は波状口縁部で、9は刻みを施す隆帯が波頂部から垂下し、10は沈線の円形モチーフから垂下する、円形刺突文を挟む沈線文で文様帯を分割する。12は捻りの把手が付く大きな波状部で、把手には円孔が開く。口縁部は内折して開き、口縁の波状に合わせて、口縁部区画線も波状となり、刺突文を施す。8、11、13～15は2本沈線文で様々なモチーフを描き、刺突文や列点文を充填施文する。

16は広口の壺形土器で、口縁部には隆帯の捻りを加えた渦巻文を持つ橋状把手が付き、内面が受け口状となる。胴部は、把手から続く隆帯で文様を施文するが、詳細は不明である。

第3類(17～41)

17は内折する口縁が開く器形で、頸部を横位の沈線で区画する。18は角頭状の口縁がやや開いて立つ器形を呈し、連鎖状隆帯で頸部を区画する。19は刻みを施す隆帯で頸部を区画し、区画線まで同種の隆帯が垂下

する。20～24は第1類の称名寺系のモチーフを沈線文のみで描くもので、モチーフの全体構成は不明瞭である。

25～28は口縁部が内折し、無文の頸部が開く器形の深鉢形土器で、25は口縁部に沈線を巡らせ、26は沈線と口縁部下端に刻みを施す。27、28は口縁部に2本沈線を施文し、沈線間に刺突文を施す。

29は肥厚する口縁部が内湾気味に開き、口縁部を4本の平行沈線で区画し、区画線から沈線文が垂下する。32は内折の弱い口縁部が開き、口縁部に盲孔列を巡らせ、胴部に条線の格子目文を施文する。32は蕨手状の懸垂文が、31は3本沈線のU字状モチーフを描く。

33は胴部で強く括れ、無文の頸部が多きく開く器形を呈し、口縁部裏に板状の隆帯を貼付して口縁部を形成する。口縁部には沈線文を巡らせ、細長い楕円区画文で頸部を区画する。34は胴部に対弧状の入組んだ沈線文を施文する。

35～37は多条沈線文でモチーフを描くものである。35は波状口縁を呈し、波頂部に2連の盲孔を施し、盲孔を繋ぐ沈線を巡らす。波頂部上端にも盲孔を施す。胴部は器面が荒れていて不明瞭であるが、波頂部から縦位区画を施し、異方向の集合沈線文を施文する構成と思われる。37もほぼ同様な構成と思われ、口縁部からは隆帯が垂下して、文様帯を分割する。36は口縁部の作りが33と共通しており、波状口縁を呈し、多条沈線の渦巻文を連結するモチーフを描く。38、39は頸部が無文となる土器で、波頂部に2～3の盲孔を穿ち、沈線で連結する。39は波頂部裏にも盲孔がある。40は頸部に垂下する隆帯で刻みを持ち、41は35同様のモチーフを多条沈線で施文する。

第2類土器は新旧の様相を持ち、第1類に近いものと、第3類に近いものがある。

第3類(42～46)

42は磨消縄文で区画文を描く土器である。区画はやや曲線的となる。43、44は頸部の括れ部を隆帯で区画し、胴部に多条沈線文を施文するものである。45、46

は条線で曲線的なモチーフを描く。

47～52は、縄文時代晩期終末から弥生時代中期前半にかけての土器である。47～52は12区、53～56は15区以南から出土した。点数が少ないため一括して報告する。

47は浮線文をもつ浅鉢である。浮線の接近部を抉りで結節させる。波状口縁である。48～52は条痕をもつ。53は幅広な沈線で重四角文風の文様を構成する。54は条痕、56は櫛描文か条痕、56は単節LR縄文と2条の沈線をもつ。

15～17区遺構外出土遺物

17区を中心とした調査区南端の地域から出土した土器群を一括する。

第Ⅲ群土器

第1類 (61)

61は沈線文間に列点文を施文するもので、第1類に分類したが、第2類の可能性もある。

第2類 (57～60、62～83)

57～60は捻りを加えた把手で、円孔や盲孔、盲孔を繋ぐC字状沈線を多用する人面状の把手である。第1類に分類されるものも含む可能性があるが、第2類として捉えた。

62、63は同一個体と思われるが、頸部で緩く括れ、内折する口縁部がやや開く器形を呈し、口縁部に突起が付く。突起下に2連の盲孔を穿ち、盲孔を繋ぐ沈線文を口縁部に施文する。口縁部下端には、刻みを施す。胴部は口縁部直下から沈線を垂下して縦位展開のモチーフを描き、幅広の沈線文間に複列の刺突文列を施文する。

64～66は無文の頸部が大きく開く器形を呈し、64は口縁部に円孔を抱く橋状把手を持ち、円孔脇に盲孔を穿ち、盲孔を繋ぐ沈線文を口縁部に巡らせる。65、66も口縁部に円孔を抱く橋状把手が付くが、65は口縁部に2本沈線を施し、66は円孔の周囲に多数の盲孔を配する。

67は口縁部に円孔の開く捻りを加えた突起が付き、

円孔から捻りの方向へと沈線が伸び、その部分の口縁部下端にのみ刻みを施す。口縁部は2本の沈線で区画し、区画線から2本単位の沈線文が、やや斜めに垂下する。68、69は同一個体で、口縁部に端部が連結する楕円区画文を施文し、沈線間に刺突文を施す。70は口縁部に2本沈線文を、73、74は1本の沈線文を巡らす。

71、72は胴部に渦巻文や円形文を連結するモチーフを描くもので、71は頸部区画線上の円形貼付文がモチーフの起点となる。72は3本沈線で渦巻文を連結する。77、81は渦巻文を多条沈線で描くものである。

78は波状口縁を呈し、79は口縁部に盲孔列を巡らせる。80は内湾してやや開く口縁部に、沈線を巡らす。口縁部直下から平行沈線文を垂下させる。83は無文の口縁が内湾気味に開く器形を呈する。

82は胴部がやや強く括れるが、口縁部から等間隔に条線文を垂下する。

第3類 (87～92)

87は器面の荒れが著しく不鮮明であるが、格子目文を全面に描く土器である。やや内湾気味に開く器形で、口縁部を沈線で区画し、口縁裏にも沈線を持つ。推定口径25.5cm、現存高17.5cmを測る。87～92は同一個体と思われ、口縁部が開き、文様帯下端で屈曲する器形を呈する。胴部は楕円の十字架状モチーフを幅狭の磨消縄文で描くもので、全体構成は不明である。充填縄文は僅かに認められる程度である。現存高16.2cmを測る。

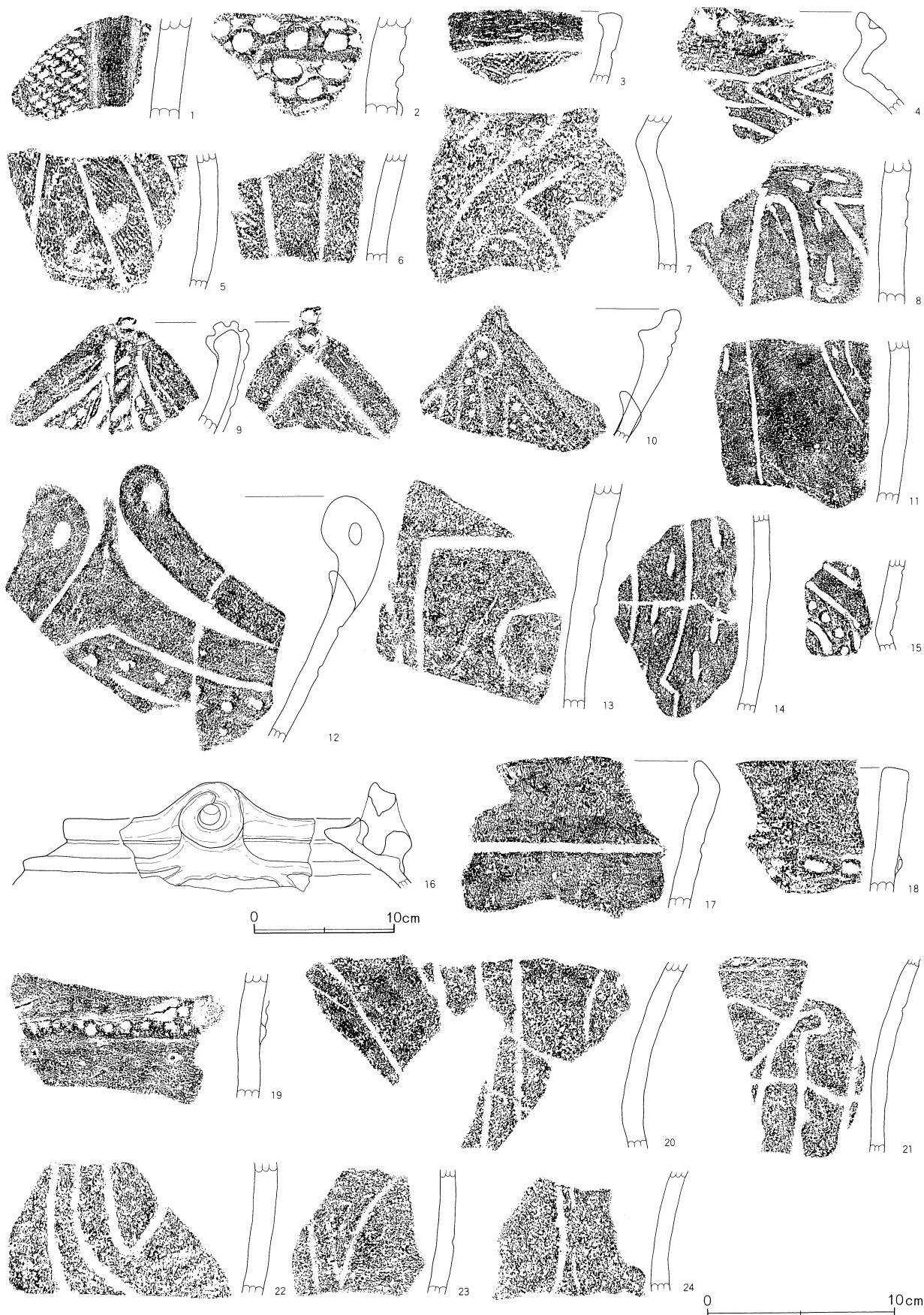
第4類 (86)

86は緩やかな波状で樽形の器形を呈する深鉢形土器である。無文の口縁部を隆帯で区画し、波頂下に盲孔を設け、盲孔から太いノ字状の沈線文を施す幅広隆帯を区画線上まで垂下する。胴部には単節縄文LRを、全面施文する。南東北系の綱取系土器である。推定口径35cm、現存高20cmを測る。

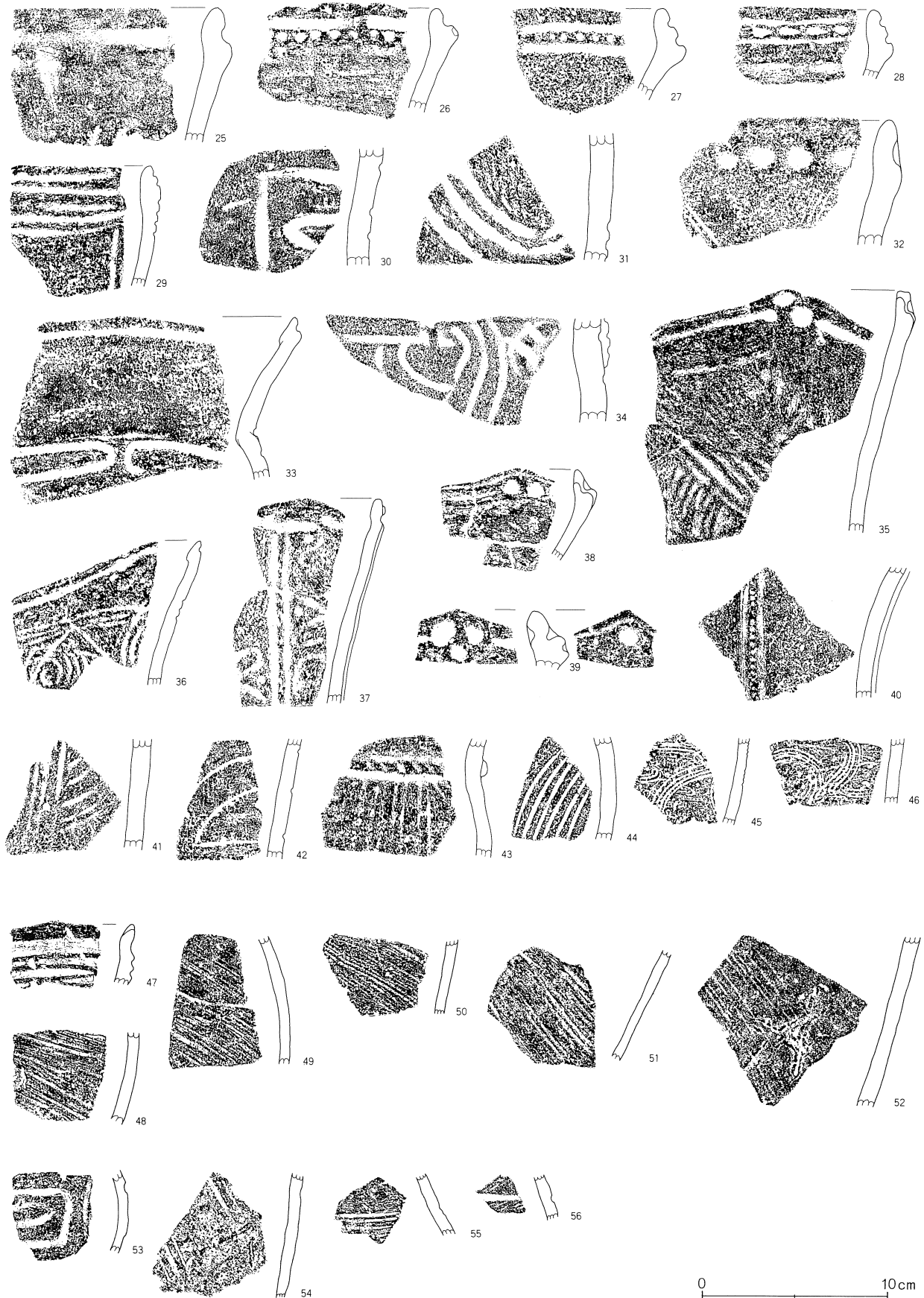
土製の蓋

85は摘み部分が剥落するが、ほぼ完形の蓋で、4箇所円孔を穿つ。長径4cm、短径3.5cm、厚さ1cmを測る。

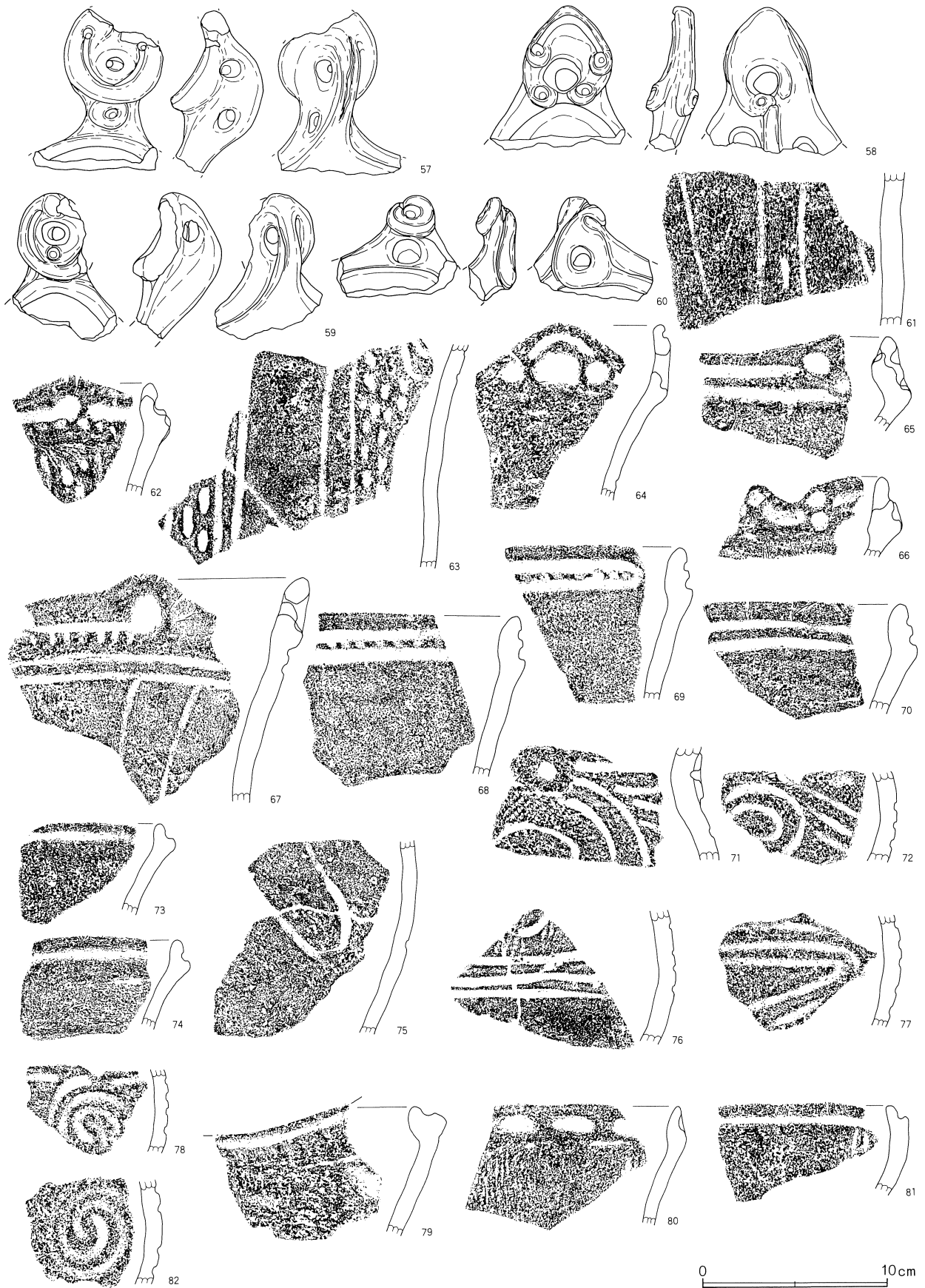
第71図 12~14区遺構外出土遺物 (1)



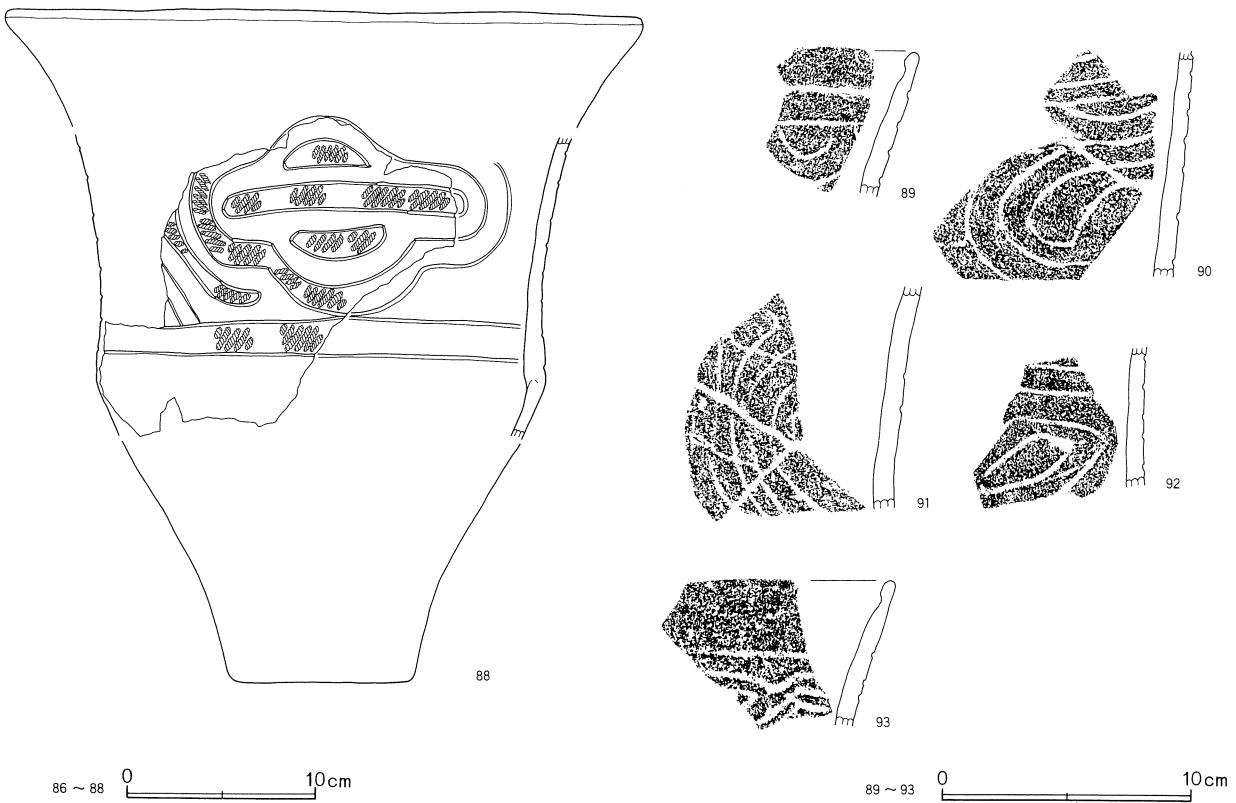
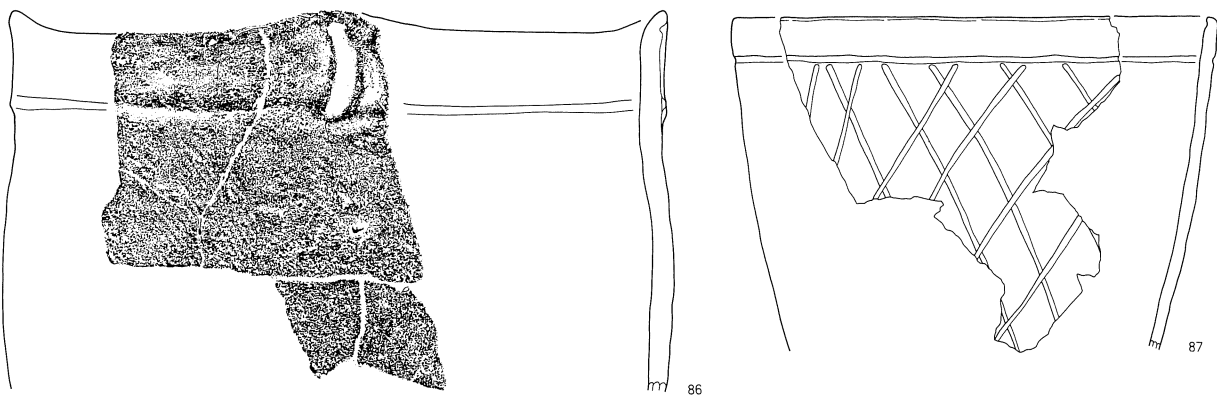
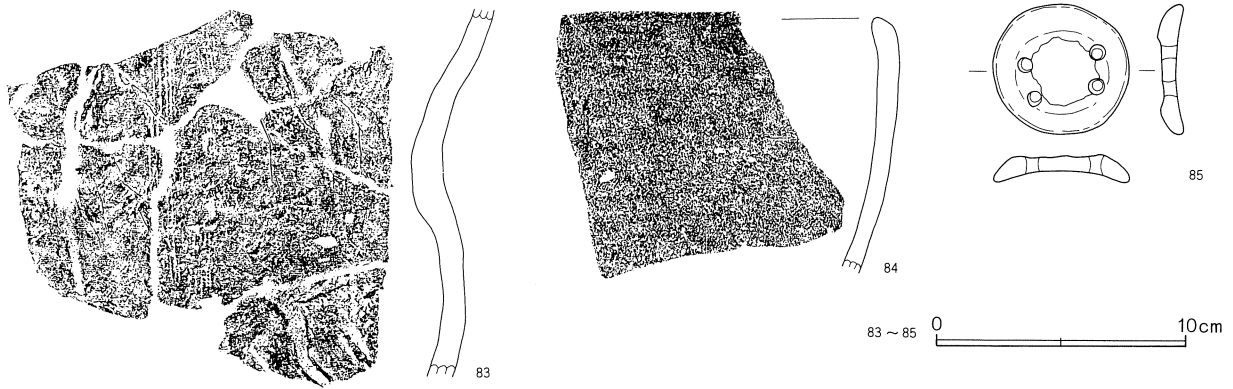
第72図 12~14区遺構外出土遺物(2)



第73图 15~17区遺構外出土遺物(1)



第74図 15~17区遺構外出土遺物(2)



5. 遺構外出土の石器

堀東遺跡の調査区は細長いもので、調査区も1区から18区に及んでいる。遺構外から出土した石器は、縄文時代中期の集石が検出される4区、縄文時代後期の住居跡や土壇が検出される8区、11区、17区からそのほとんどが出土している。遺構内出土の石器も合わせると、8区、11区からの出土が多い。

器種別では搔器、磨石類などは調査区全体からまんべんなく出土し、小形石棒、石錘は8区と11区に集中している。また石鏃、打製石斧、礫器は少なかった。

遺構外から出土した石器の個々の計測値などについては、石器一覧表に一括して表記してある。

ここでは遺構出土も含め、出土した石器の器種ごとの概要についてまとめることとする。

石鏃 (第75図1～4)

第6号集石から一点出土している。有茎のものは、3のみである。形状はそれぞれ異なっている。また第75図4は未製品と考えられる。石質はすべてチャートで、黒曜石製はなかった。

石錘 (第75図5)

1点が出土している。小形のものである。丁寧な調整で、基部を平坦に作り出している。

磨製石斧 (第75図6)

6は側縁部に粗割の後の敲打痕があり、また磨きもほどされていることから磨製石斧の未製品と考えられる。遺跡全体で、磨製石斧は他には出土していない。

石棒 (第75図7～11)

第7号住居跡出土の1点をふくめ、全体で6点が出土している。住居跡出土の大形石棒の破片であるが、遺構外出土はすべて小形のもので、やはり破損品である。遺構外出土の石棒は、8区から2点、11区から3点が出土している。また7は磨きの段階にあった未製品である。10は被熱のため、表面が赤色化している。

打製石斧 (第75図12～18、第76図19～22)

形状は遺構出土をふくめ大まかに、刃部に最大幅を持つもの(13～17)と、分銅形のもの(18～22)に分けられる。出土地点からも、そのほとんどが縄文時

代後期の所産と考えられる。ただ12の1点のみは形状や石質も違っており、出土地点からも縄文時代中期以前に溯ると考えられる。また第5号住居跡出土の打製石斧は、側縁から粗い調整を加える大形の未製品で、原素材に近いと考えられる。

礫器 (第77図25～27)

遺構外からのみ出土している。いずれも素材を横長に使用し、刃部を作り出している。

石匙 (第77図28)

第4号住居跡を含め、2点が出土している。いずれも剥片に最小限の調整を加えるのみで、柄部を作り出していることから石匙としたものである。

搔器 (第77図29～42)

遺跡内からは、多量の剥片が出土している。石器製作時に生じるものとも考えられるが、その多くの剥片の縁辺に刃こぼれなどの痕跡が認められた。また剥片と同じ石材を使用する打製石斧の数量にも見合わないため、使用するために多量の剥片が作り出されたと考えられる。そこで使用された痕跡が明らかな剥片については、搔器として一括することとする。またそれらの剥片は遺跡全体から出土し、出土地区の偏りは認められなかった。

29、30の2点は丁寧に作り出されたのもので、他とは形状・石材ともに明らかな相違が認められるものである。29は両側縁に調整を加えるもので、時期が縄文時代中期以前に溯る可能性がある。

31～42は母岩から割り取られた薄い剥片の縁辺に、刃こぼれの痕跡や、刃部を作り出すものである。縦長に使用するものはなく、横長に使用するものである。

裏面または背部に自然面を残しており、母岩から機械的に割り取る工程が推定できる。接合は認められず、製作時は今回出土した数倍以上に剥片が生じていたと考えられる。このような搔器類は、荒川上流域の県北部の遺跡に多く見られるものである。

磨石

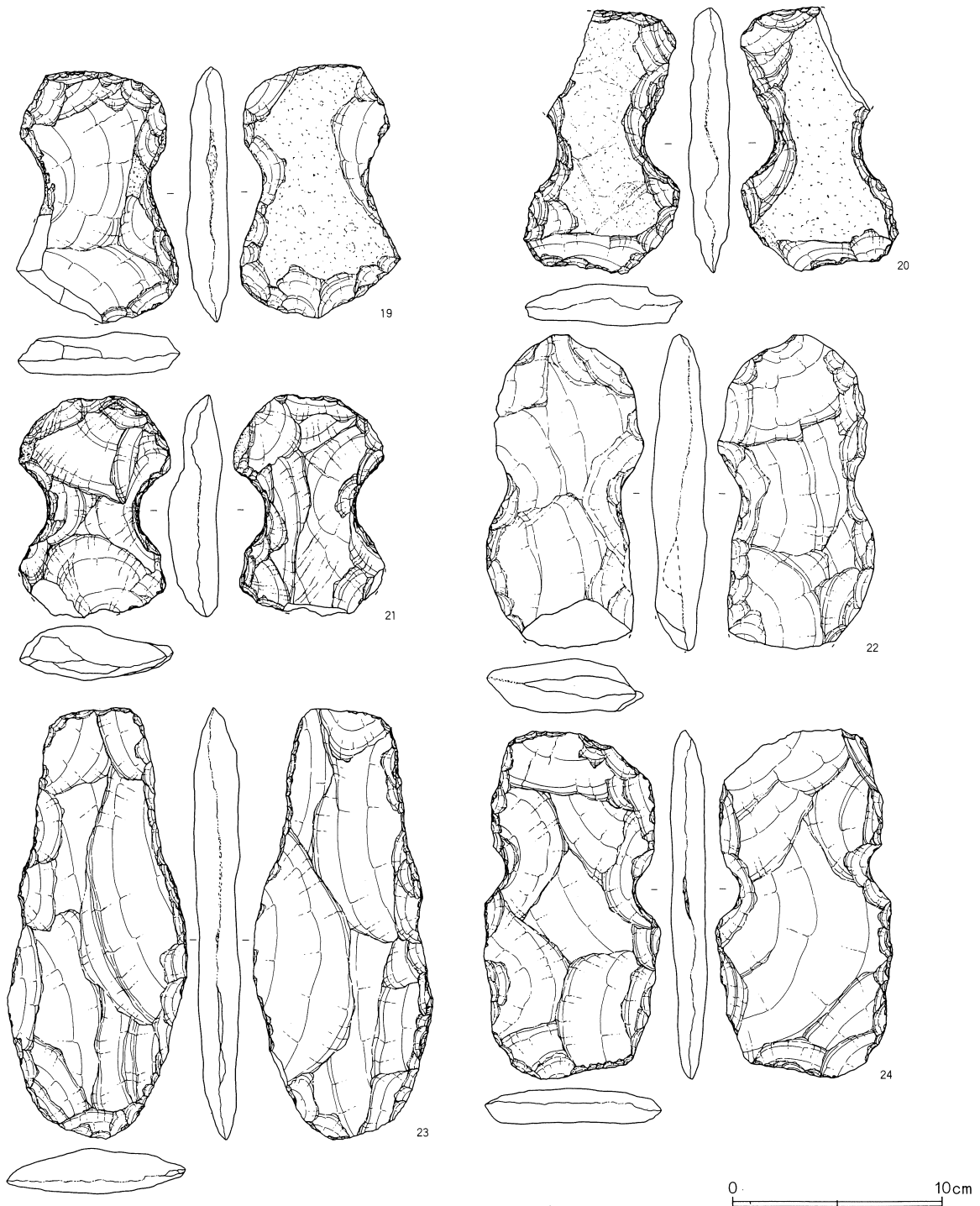
(第78図43～49、第79図52～54、56、57、第80図60)

図版番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	備考
第75図1	V-41	石鏃	(3.4)	(2.2)	(5.0)	(2.7)	安山岩	
第75図2	AJ-53	石鏃	3.0	1.9	0.4	1.6	チャート	
第75図3	表採	石鏃	(1.8)	(1.6)	(0.3)	(0.7)	チャート	
第75図4	F-32	石鏃	(2.8)	(2.0)	(0.4)	(2.2)	チャート	未製品
第75図5	試掘	石錐	3.6	3.7	1.1	12		
第75図6	F-31	磨製石斧	9.0	4.5	2.7	169	砂岩	未製品
第75図7	F-31	石棒	12.2	3.6	3.2	235	点紋緑泥片岩	未製品
第75図8	O-38	石棒	(7.8)	2.5	2.4	96	凝灰岩	
第75図9	O-38	石棒	(6.4)	2.3	2.0	38	絹雲母片岩	
第75図10	F-31	石棒	(9.2)	3.2	2.6	117	点紋緑泥片岩	
第75図11	N-38	石棒	(4.9)	2.3	2.3	33	点紋緑泥片岩	
第75図12	B-17	打製石斧	9.8	4.7	2.3	138	ホルンフェルス	
第75図13	B-16	打製石斧	9.7	5.5	1.9	88	ホルンフェルス	
第75図14	O-38	打製石斧	14.1	7.9	3.6	428	ホルンフェルス	
第75図15	F-31	打製石斧	(14.0)	(6.8)	3.3	(289)	ホルンフェルス	
第75図16	O-38	打製石斧	12.3	5.7	2.1	153	ホルンフェルス	
第75図17	H-32	打製石斧	15.7	7.5	2.3	326	安山岩	
第75図18	AD-52	打製石斧	9.5	5.9	2.5	171	安山岩	
第76図19	N-38	打製石斧	11.9	7.6	2.0	250	緑色片岩	
第76図20	SD-7	打製石斧	(12.4)	(7.5)	(2.0)	185	安山岩	
第76図21	AI-57	打製石斧	(10.3)	(7.2)	(2.6)	(186)	ホルンフェルス	
第76図22	AE-53	打製石斧	(14.3)	(7.0)	(2.5)	(328)	ホルンフェルス	
第76図23	O-39	石鏃	20.1	8.3	2.2	374	結晶片岩	
第76図24	O-38	石鏃	16.3	8.4	1.7	290	ホルンフェルス	
第77図25	表採	礫器	7.4	7.4	3.1	206	ホルンフェルス	
第77図26	F-31	礫器	5.5	8.9	3.6	195	ホルンフェルス	
第77図27	O-38	礫器	7.6	12.2	4.1	367	ホルンフェルス	
第77図28	H-32	石匙	6.8	5.8	1.2	40	ホルンフェルス	
第77図29	O-38	搔器	6.8	4.8	1.3	38	頁岩	
第77図30	F-31	搔器	7.2	5.4	1.6	58	凝灰岩	
第77図31	F-31	搔器	5.4	6.1	1.8	57	ホルンフェルス	
第77図32	O-38	搔器	8.4	9.3	2.6	213	砂岩	
第77図33	G-31	搔器	6.0	5.9	1.0	31	泥岩	
第77図34	G-31	搔器	4.6	5.0	1.6	35	砂岩	
第77図35	表採	搔器	6.6	9.1	1.6	112	凝灰岩	
第77図36	O-38	搔器	7.5	10.0	1.9	171	ホルンフェルス	
第77図37	V-41	搔器	4.0	7.3	2.0	87	ホルンフェルス	
第77図38	B-15	搔器	4.9	7.0	1.7	58	砂岩	
第77図39	SD-4	搔器	3.4	5.1	1.1	16	ホルンフェルス	
第77図40	AE-53	搔器	4.7	7.2	1.3	35	凝灰岩	
第77図41	SD-4	搔器	3.8	5.0	1.7	20	ホルンフェルス	
第77図42	B-15	搔器	3.6	4.9	0.7	13	凝灰岩	
第78図43	O-38	磨石	7.8	6.3	6.2	436	閃緑岩	
第78図44	SD-7	磨石	10.1	8.2	7.7	695	安山岩	
第78図45	B-17	磨石	8.3	8.4	6.5	508	安山岩	
第78図46	AK-54	磨石	9.5	5.9	3.9	341	安山岩	
第78図47	O-38	磨石	7.9	7.4	4.2	347	安山岩	
第78図48	B-14・15	磨石	13.4	9.3	4.4	798	安山岩	
第78図49	O-38	磨石	(10.7)	(8.4)	(6.5)	(827)	安山岩	
第78図50	N-38	敲石	12.8	6.1	5.3	592	閃緑岩	
第79図51	U-41	砥石	7.1	5.0	1.1	54	砂岩	
第79図52	AE-52	磨石	6.7	5.7	1.3	81	安山岩	
第79図53	表採	磨石	7.0	6.3	2.7	176	閃緑岩	
第79図54	X-43	磨石	9.2	8.2	1.3	136	安山岩	
第79図55	O-38	砥石	(13.9)	(6.3)	(2.6)	(342)	砂岩	
第79図56	O-39	磨石	(7.4)	7.0	4.5	(297)	安山岩	
第79図57	N-38	磨石	(7.6)	7.5	4.8	(390)	安山岩	
第79図58	O-38	凹石	12.6	6.4	3.6	423	砂岩	
第79図59	AL-56	凹石	11.5	7.1	5.4	693	安山岩	
第80図60	B-15	磨石	12.8	8.2	4.0	683	安山岩	
第80図61	N-38	凹石	8.6	7.0	4.7	483	安山岩	
第80図62	G-31	凹石	12.6	8.7	1.8	312	砂岩	
第80図63	F-31	石皿	(10.0)	(10.2)	(5.8)	524	安山岩	
第80図64	O-39	石皿	(22.8)	(15.0)	(6.5)	3610	点紋緑泥片岩	
第81図65	G-31	石錘	4.6	4.2	2.1	57	安山岩	
第81図66	F-31	石錘	5.8	4.8	1.3	53	結晶片岩	
第81図67	F-31	石錘	5.3	4.0	0.7	22	安山岩	
第81図68	F-31	石錘	6.2	4.2	1.2	39	雲母片岩	
第81図69	N-38	石錘	6.2	3.9	1.5	58	安山岩	
第81図70	F-31	石錘	6.2	3.8	2.1	71	安山岩	
第81図71	N-38	石錘	7.3	(2.6)	1.2	34	砂岩	

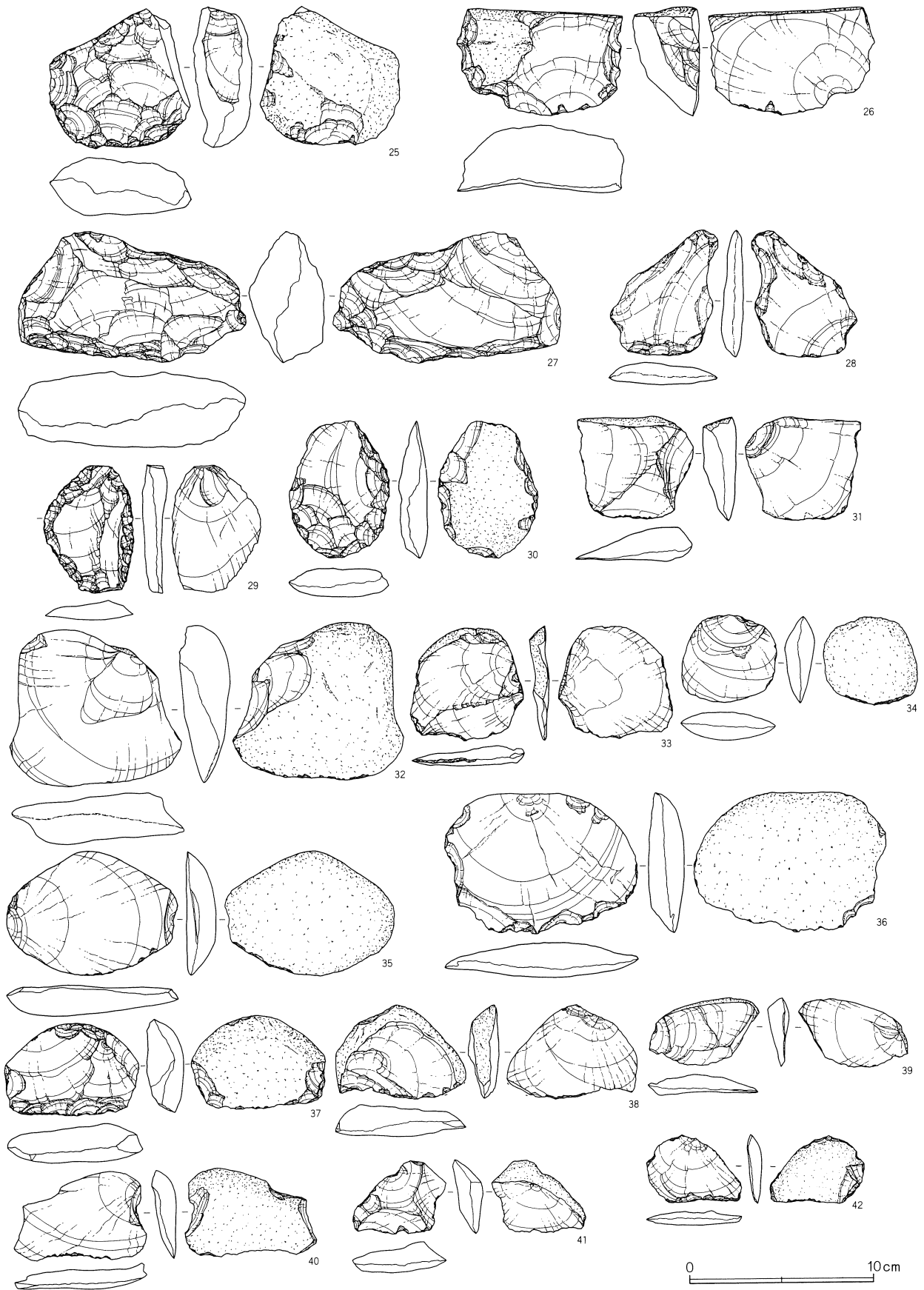
第75図 遺構外出土石器（1）



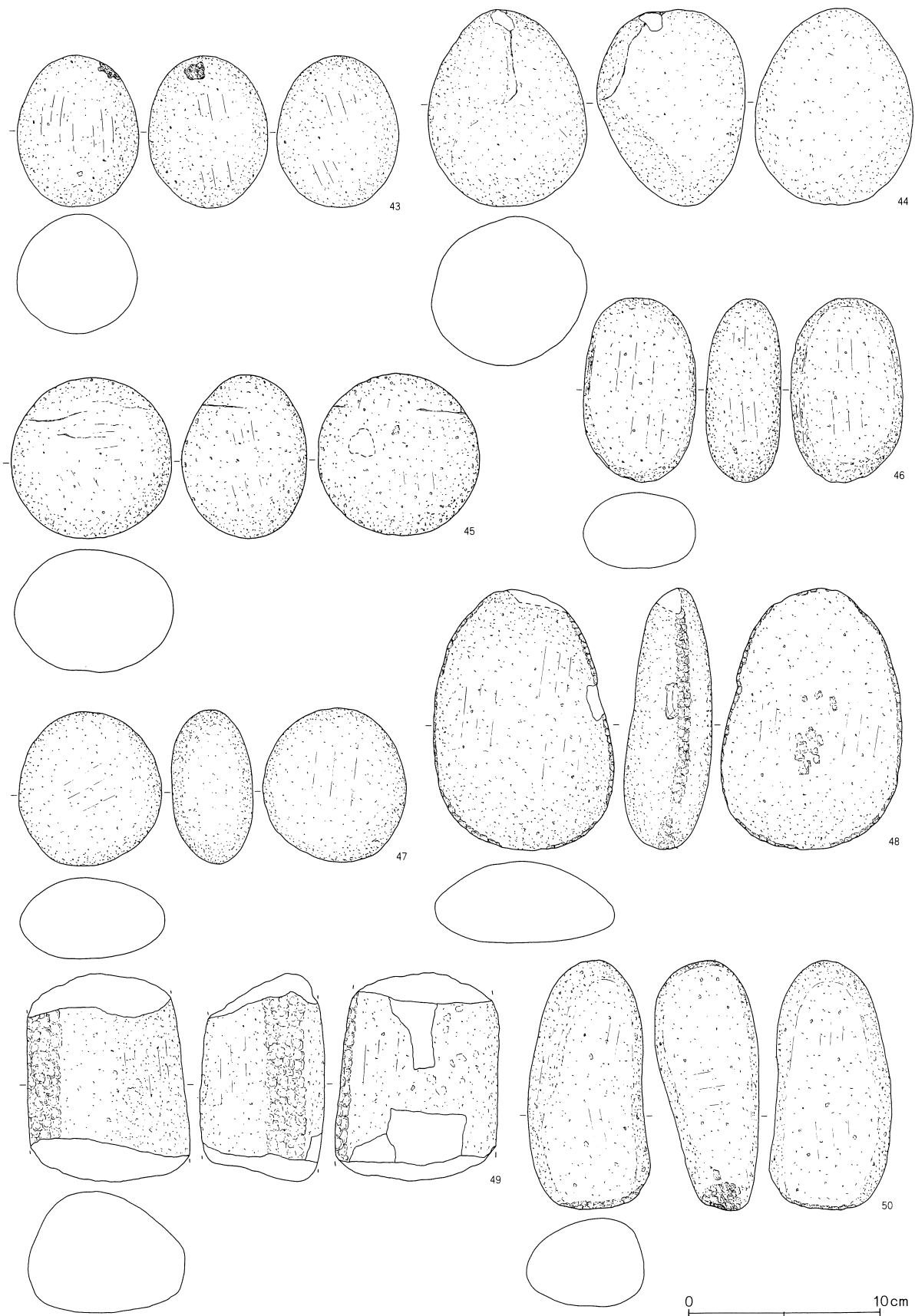
第76図 遺構外出土石器(2)



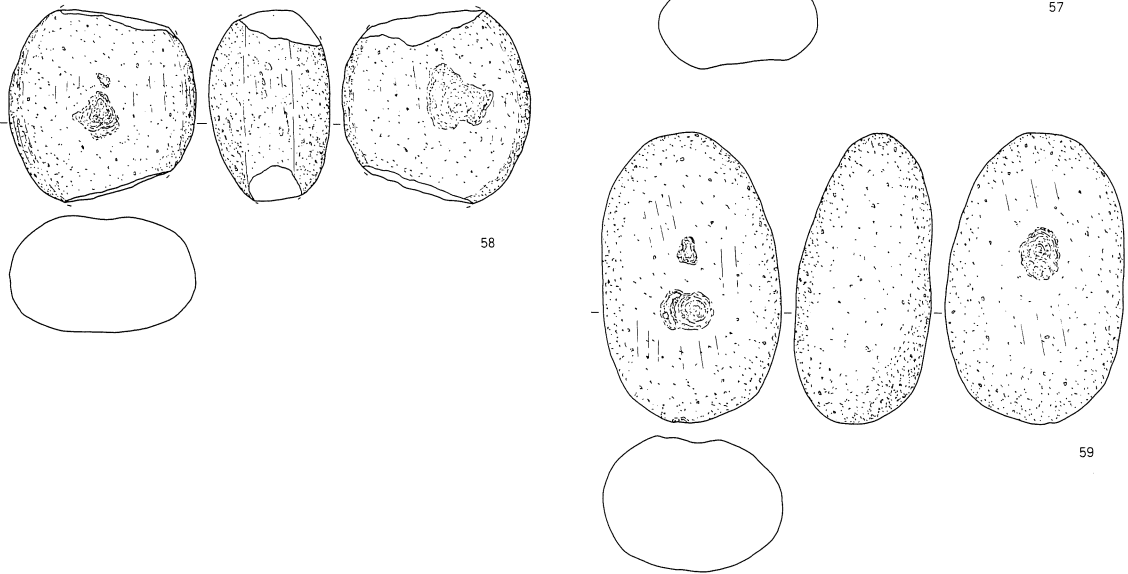
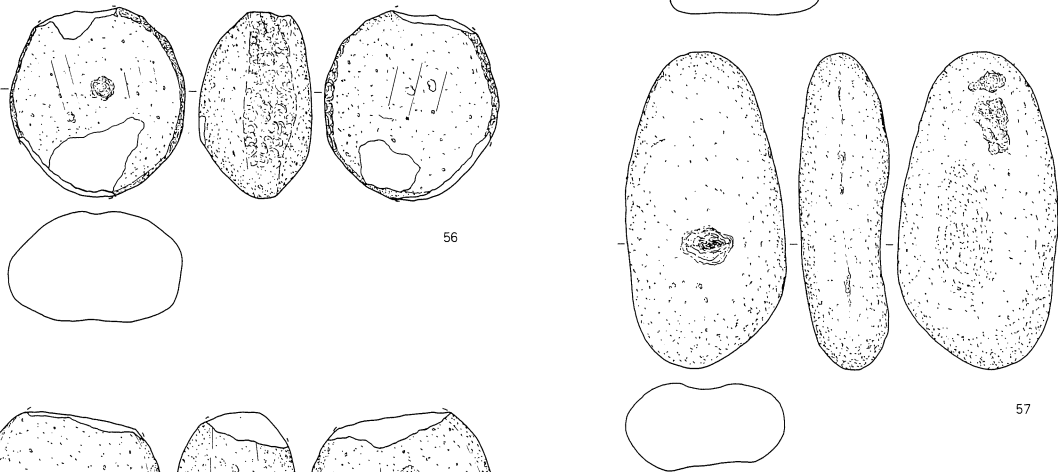
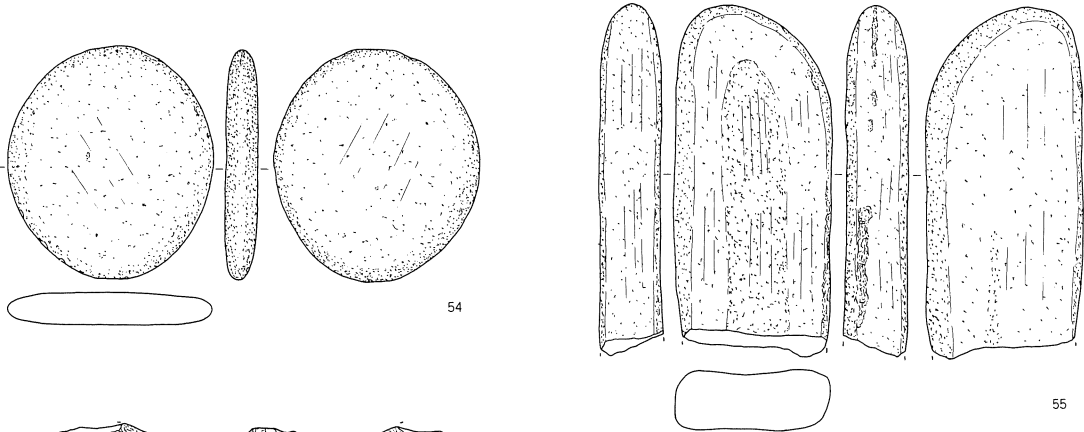
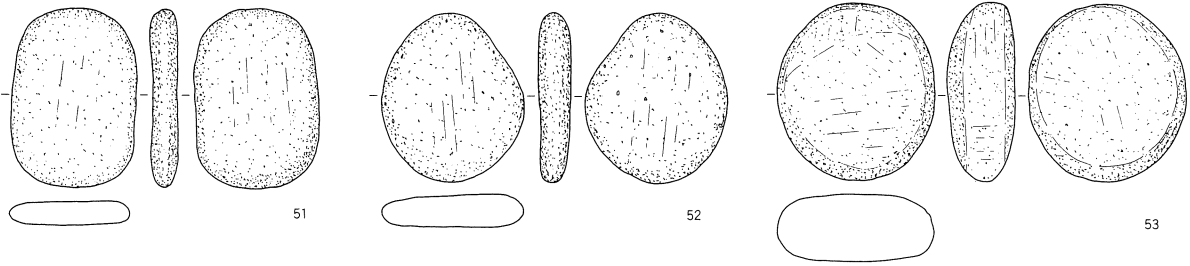
第77図 遺構外出土石器(3)



第78図 遺構外出土石器（4）

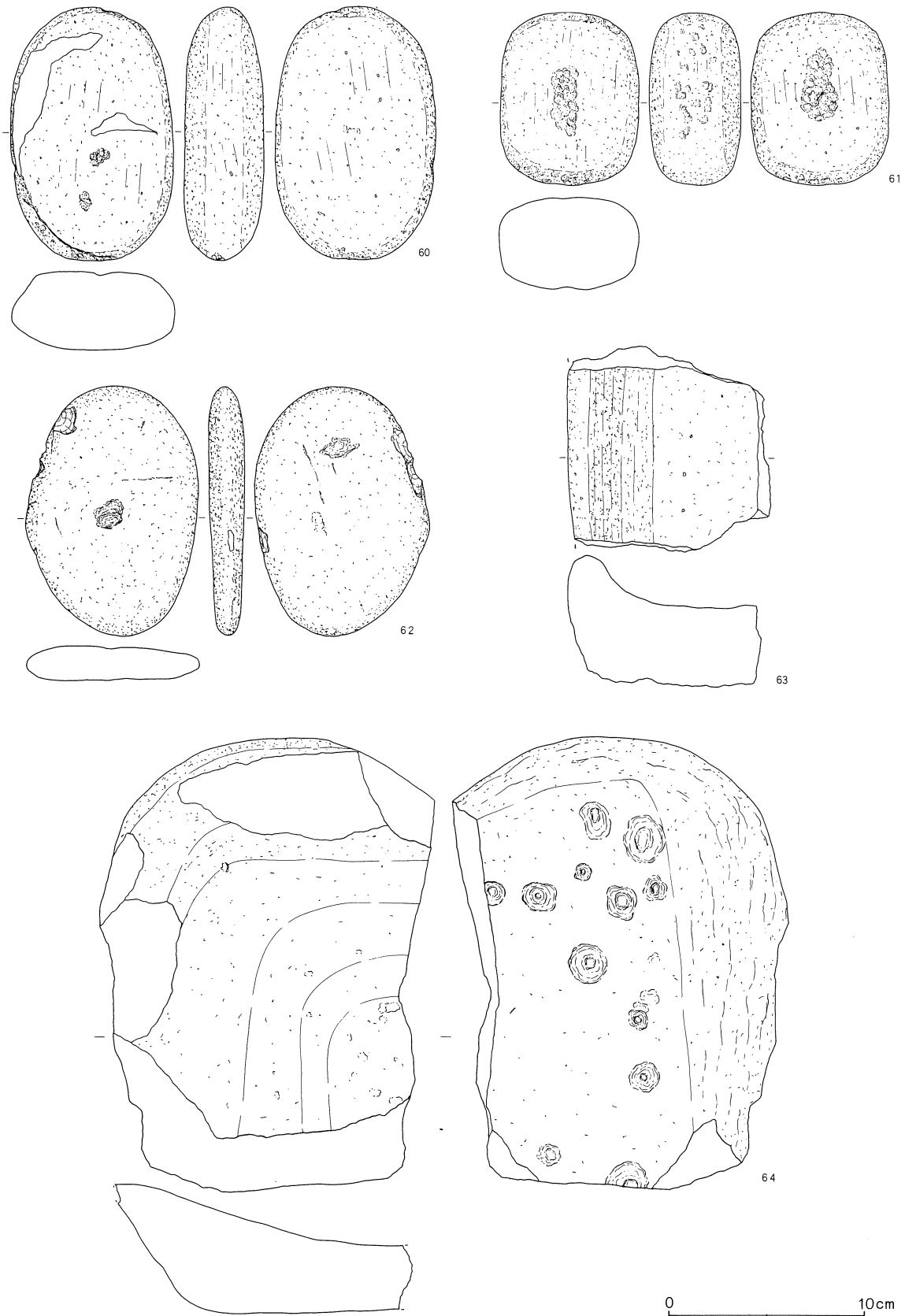


第79図 遺構外出土石器（5）

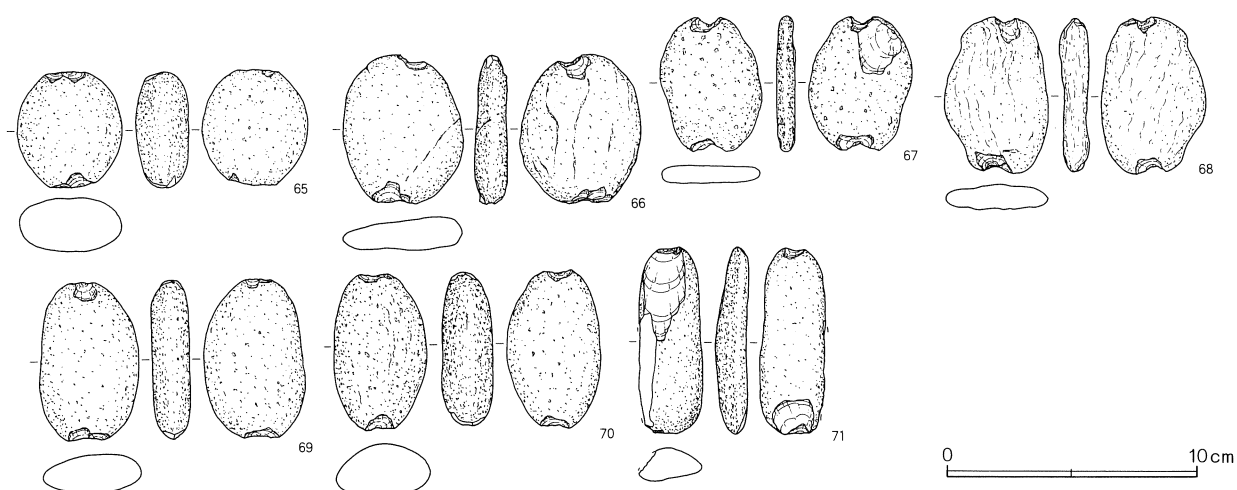


0 10cm

第80図 遺構外出土石器(6)



第81図 遺構外出土石器（7）



磨石、敲石、凹石は剥片を除けば、遺構内、遺構外ともに、遺跡からもっとも多く出土している石器である。それらは同一個体で、磨石、敲石、凹石として複数使用されている場合が多く、分別が困難な石器である。主体的な使用別で分けるのが理想的だが、判別困難な磨石と凹石の分別は、明確な凹部の有無で行った。

磨石は平面形が楕円の川原石を使用するものがほとんどで、大きくは断面が球状のものと、平らな面を持つ扁平なものに分けられる。扁平なものの中には、厚さがごく薄いものもある。

敲石（第78図50）

敲石として主体的に使用されたと考えられるものは、1点のみであった。

50は棒状のもので、先端部分には敲打痕が残る。平坦な表裏面と側縁部は磨面としても使用されている。

凹石（第79図58・59、第80図61・62）

凹部が、表面または表裏面の中央付近に1または2箇所認められるものである。そのほとんどが磨石としても使用されている。また側縁部に敲打痕が認められるものも多い。素材の形状をそのまま利用するが、61

は周縁部を面取りし、立方体状に作り出している。

砥石（第79図51、第79図55）

2点が出土している。いずれも砂岩製である。55は使用のため、中央部分が縦方向に窪んでいる。磨製石斧の未製品や、小形石棒の未製品が出土していることから、それらの製作に関連すると考えられる。

石皿（第80図62、63）

遺構内からも出土しているが、いずれも破片で全体の形状が明確なものが出土していない。また裏面などに複数の凹部を持つものがほとんどである。

石錘（第81図65～71）

7点が出土している。遺構内からは出土していない。8区ら5点、11区から2点が出土しており、出土地点は限られている。扁平な楕円形の石の両端に抉りを施すもので、長辺が6 cm前後のものが多い。

その他の石器（第76図23・24）

弥生時代の石器を一括するもので、石鍬と考えられるものである。23、24ともに剥離、調整が粗く施されるもので、厚さが比較的薄い。

Ⅳ 城西遺跡

1. 遺跡の概要

城西遺跡の所在地は、深谷市大字原郷536番地他である。深谷市街の北辺、J R高崎線深谷駅からは北東へ2 km弱の位置である。立地は櫛引台地の北縁部にあたり、北は妻沼低地に直面する。堀東遺跡からは福川の下流にあたり、約2 km東に隔たっている。

遺跡の範囲は、東西400m、南北320m、面積約103000 m²である。景観は遺跡北縁部を東西に横断する福川を境に異なる立地を反映し、遺跡の大半を占める右岸台地上は住宅地と畑地が混在する一方、左岸低位部は妻沼低地に広がる田園地帯に含まれる。

今回の発掘調査地点は後者にあたり、標高は33m前後、概ね平坦である。当事業団による発掘調査は、1993年度に実施された第1次調査に次いで今回が第2次調査となる。地点は福川に架る城西橋北詰を挟んで東西に分かれるが、中間部分については、トレンチ調査の結果、遺構、遺物の分布が認められなかったため面的な調査区を設定しなかった。調査面積は、1500m²である。

表土除去の結果、厚さ0.3m前後の耕作土直下に地山層が露出し、遺物包含層を含む自然堆積層上部は削平され既に失われていた。一帯で、かつて盛んに行われたレンガ原料土採取の結果らしい。そのため遺構の遺存状況は総じて悪く、検出された掘り込みは浅いものが多かった。

検出された遺構は、竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡5棟、溝跡5条、土壇8基、火葬墓1基、遺構外ピット21基である。これらは西調査区に集中し、東調査区は土壇2基、ピット4基に限られる。遺構分布の偏りは顕著である。いずれも共伴遺物が少ないため帰属時期を特定できないものが多いが、縄文土器を伴うP15を確実な例外とし、主体は平安時代にあるとみられる。

また、東調査区西半部に遺存していた黒褐色土層には、やや希薄ながら縄文時代後期土器の集中が認められた。

遺跡内容の概観にあたっては、近接する第1次調査区の内容を視野に含める必要がある。同調査で出土した遺構は、第2次調査東調査区の対岸に位置する東地区で縄文時代前期土壇2基、同中期住居跡1軒、古墳時代住居跡1軒、平安時代住居跡3軒、近世溝2条、第2次調査西調査区の西に接する西地区で平安時代掘立柱建物跡3棟、遺構外ピット3基である。

これら2次にわたる調査の結果を総じて見ると、縄文時代の遺構、遺物は、希薄ながら中央部を中心に点在している。主体となるのは平安時代集落で、東西に分かれて分布する。

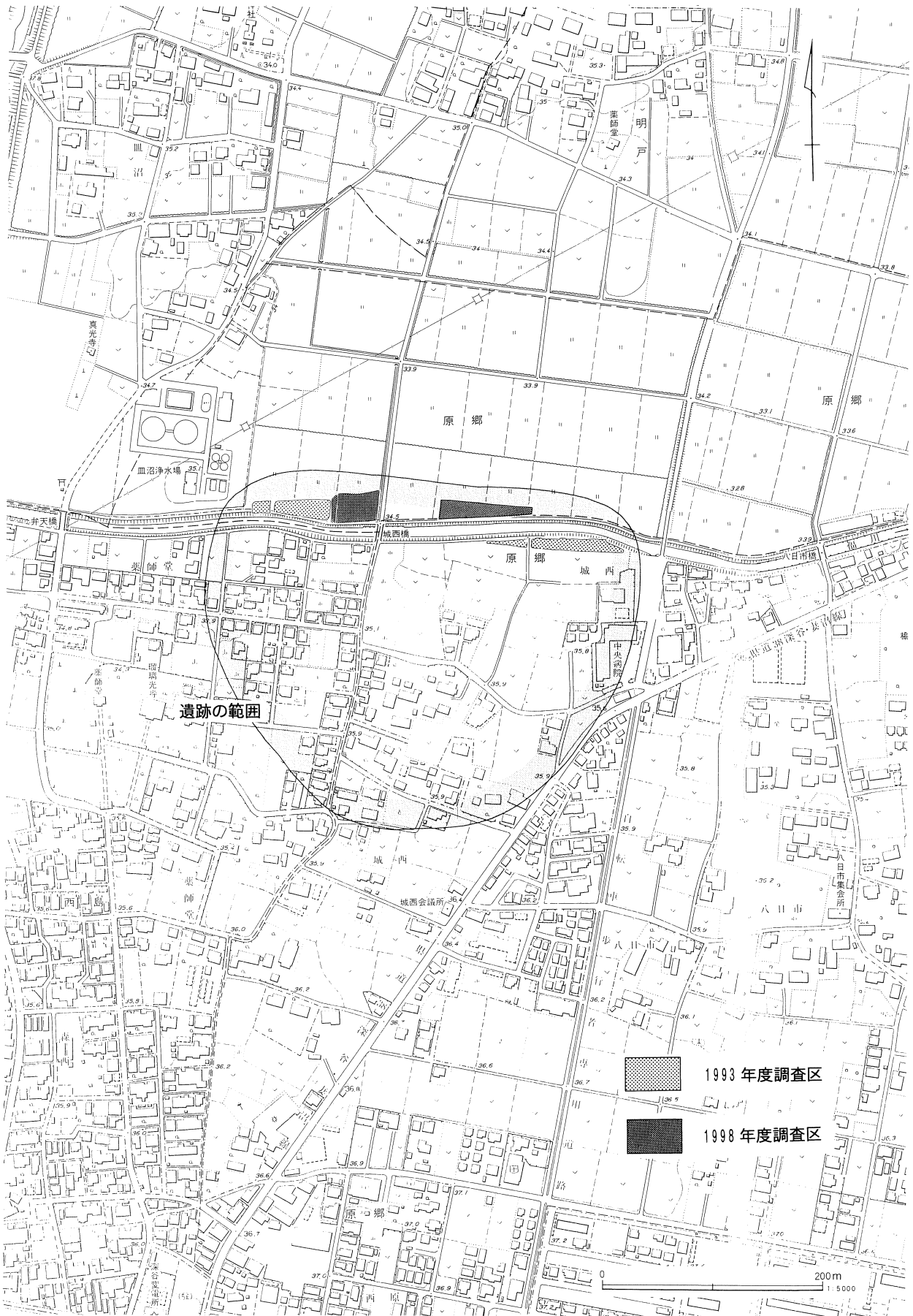
第1次調査にかかる東集落は竪穴住居跡の分布が知られるのみだが、S J 4からは「願恵」（僧侶の名）もしくは「願思」（願文）の墨書をもつ須恵器高台杯が出土している。付近には伝平安時代創建の瑠璃光寺が所在しており、それとの関連が指摘されている。

両次の調査にかかる西集落では、3軒の竪穴住居跡と8棟の掘立柱建物跡が確認されており、掘立柱建物跡の密な分布が特徴的である。遺構外ピットも多数分布することから、把握し切れなかった建物跡の存在も予想される。P 2・3・11、P 4～7のまとまりにその可能性が認められる。遺構は近接、重複が顕著で、また共伴遺物が乏しく帰属時期を特定できない場合が多いため、正確な景観の把握は容易でない。掘立柱建物跡柱穴出土の遺物から敢えて推定すれば、9世紀前半代を主体に展開したと推定される。また、溝跡は住居跡、建物跡の分布を方形に囲むようにも見え、時期を特定できないものの、集落構成の一部となっていた可能性が認められる。

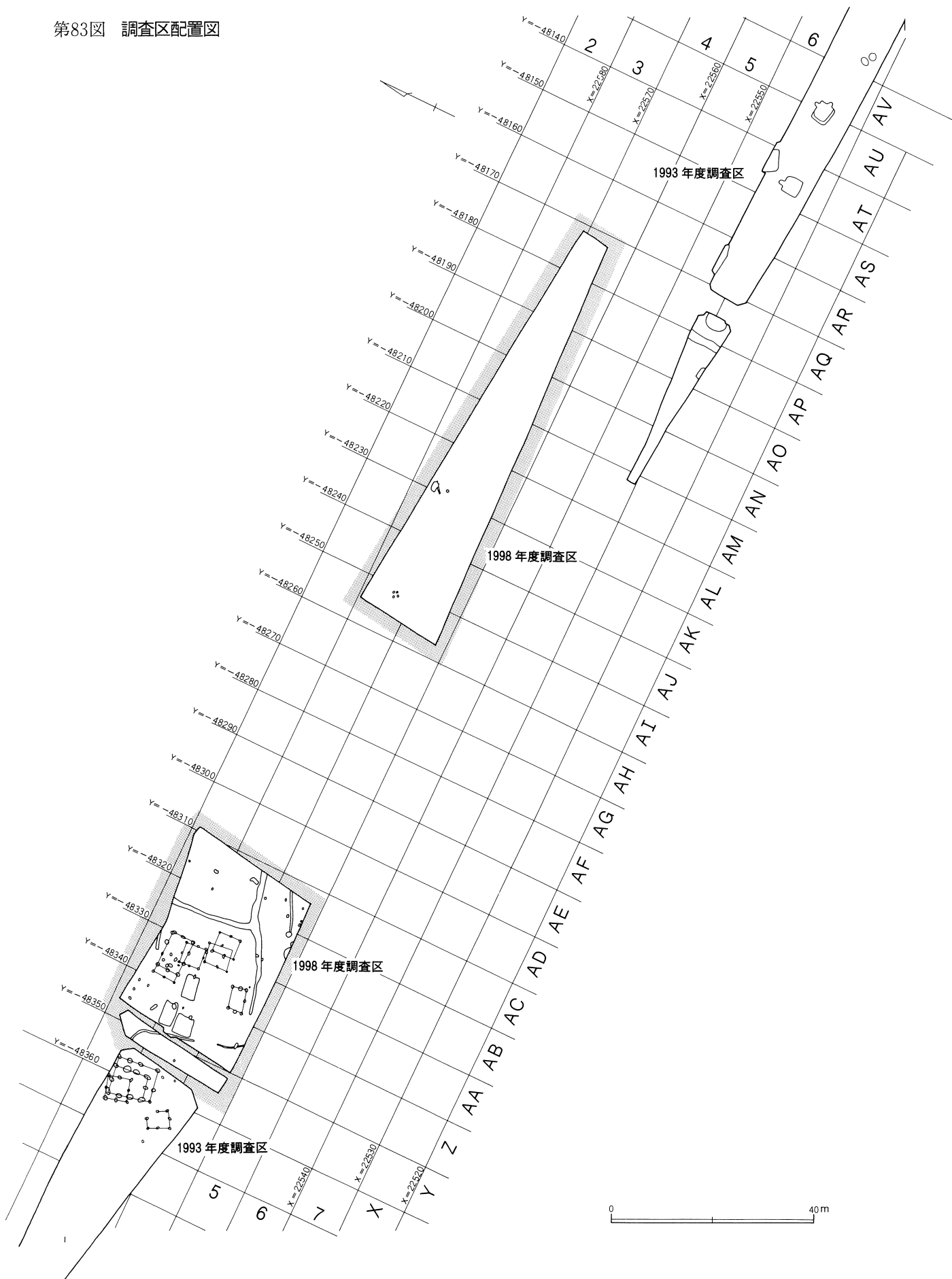
関連文献

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1995『宮ヶ谷戸／根岸／八日市／城西』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書172集

第82図 城西遺跡の範囲と調査区位置図



第83図 調査区配置図



第84図 西調査区詳細図



2. 遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

第6号住居跡<S J 6 (旧S J 1)> (第85図)

位置は、Z-3グリッドである。南側にはS J 7が近接する。

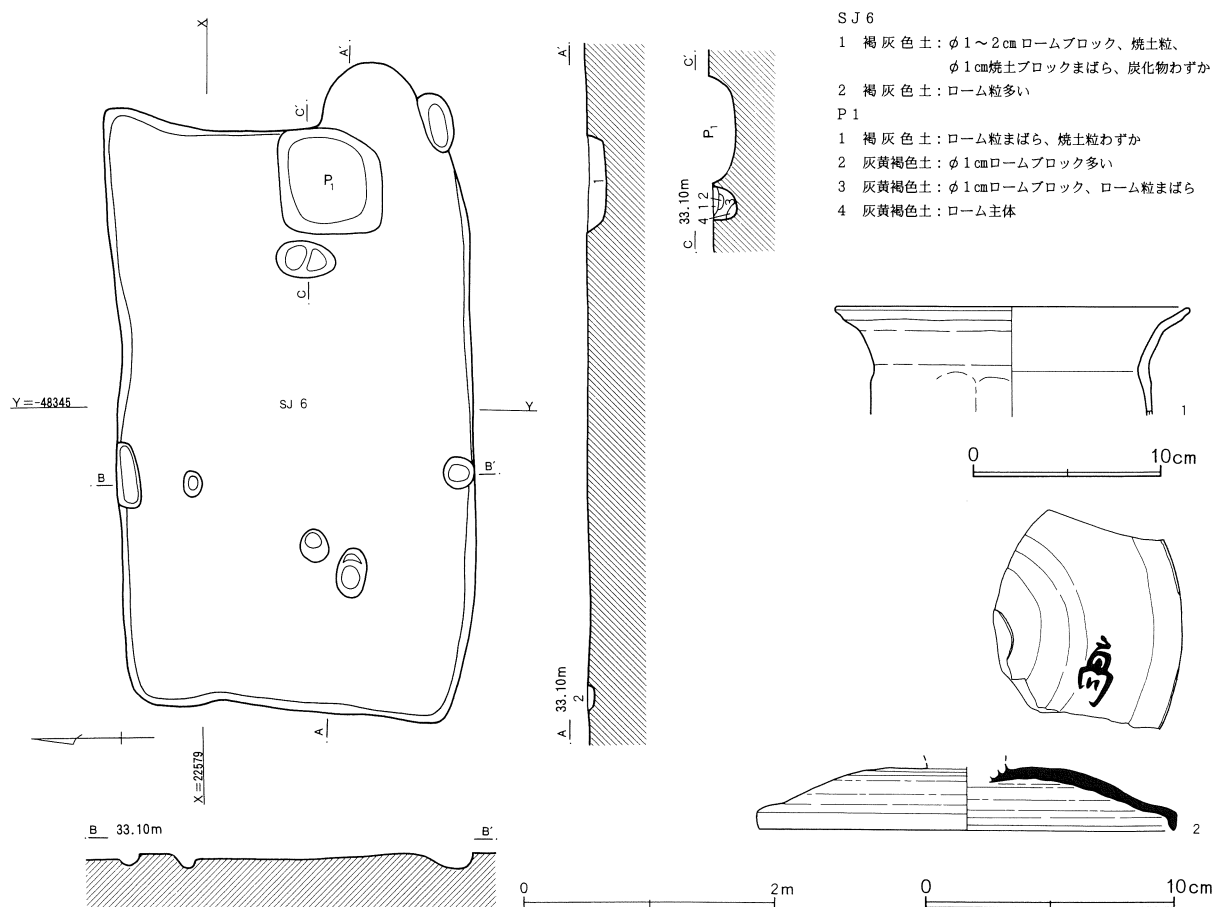
床の掘り込みは全面にわたり削平されており、遺構確認時には貼床構築土がかろうじて遺存している状況であった。

平面形は奥行き4.6m、幅2.9mの長方形で、床面積は13.6m²である。カマドは東壁南寄りに設置されたとみられ、中心軸方向はN-90°-Eである。支柱穴は確認されなかった。

遺物は、土師器・須恵器片約30点である。いずれも貼床構築土中からの出土である。1は土師器甕、2は須恵器杯蓋で「高」と不明1字の墨書が認められる。

これらの遺物から、遺構の帰属時期は平安時代と推定される。

第85図 第6号住居跡と出土遺物



第7号住居跡<S J 7 (旧S J 2)> (第86図)

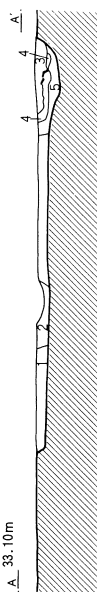
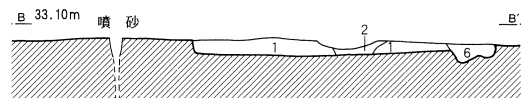
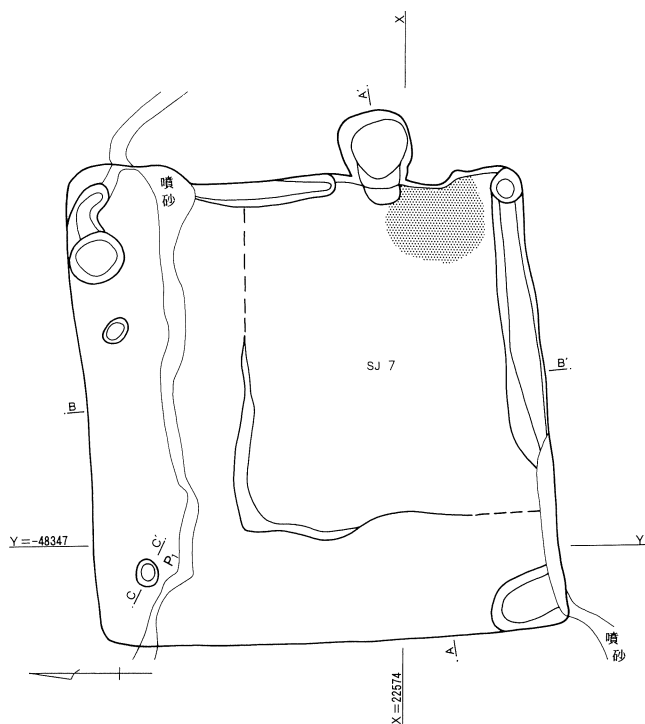
位置は、Z-3グリッドである。北側にはS J 6が近接する。

床の掘り込みは全面にわたり削平されており、遺構確認時には貼床構築土がかろうじて遺存している状況であった。

平面形は北辺部に噴砂による変形が認められるが、3.7m四方の正方形で、床面積は14.2m²である。カマドは東壁南寄りに設置されたとみられ、中心軸方向はN-87°-Eである。支柱穴は確認されなかった。

貼床構築土を除去し掘り方を検出した結果、南東隅寄りに拡張前の遺構とみられる方形の掘り込みが検出された。平面形は奥行き2.8m、幅2.3mの方形で、床面積は6.1m²である。カマドは拡張前後とも同位置である。カマド前面にあたる南東隅付近には燃焼面が認

第86図 第7・8号住居跡と出土遺物

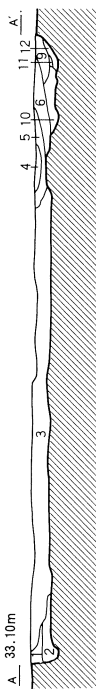
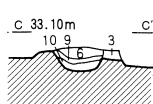
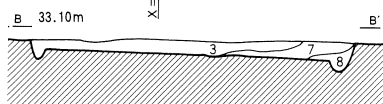
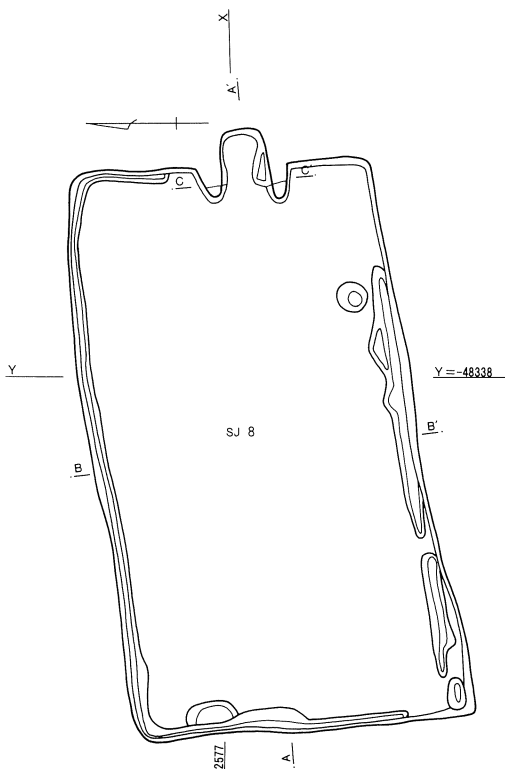
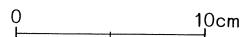
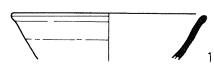


SJ 7

- 1 褐灰色土：φ3～6cmロームブロック多い
- 2 褐灰色土：ローム粒まばら(浅いピットか)
- 3 褐灰色土：ローム粒多く、焼土粒わずか
- 4 灰黄褐色土：φ1～2cm焼土ブロック多い
- 5 黒褐色土：灰多く、焼土粒まばら
- 6 褐灰色土：ローム粒多い

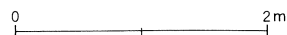
P 1

- 1 褐灰色土：φ3～5cmロームブロック多い



SJ 8

- 1 褐灰色土：ローム粒多い
- 2 にふい黄橙色土：φ3cmロームブロック主体
- 3 褐灰色土：φ2～5cmロームブロック主体
- 4 褐灰色土：ローム粒多い
- 5 褐灰色土：ローム粒多い
- 6 にふい黄橙色土：ローム主体、炭化物粒まばら、下層に焼土ブロックまばら
- 7 にふい黄橙色土：ローム粒多い
- 8 褐灰色土：φ2～3cmロームブロック多い
- 9 灰黄褐色土：ローム主体、まざりもなく、床面(住居内側)にむけて赤化
- 10 褐灰色土：灰と焼土ブロック主体
- 11 にふい黄橙色土：ローム主体、焼土ブロック含む
- 12 褐灰色土：焼土ブロック、灰、ローム主体



められ、上面には炭化物が密に遺存していた。

遺物は土師器、須恵器小片約40点である。1は須恵器杯である。

これらの遺物から、遺構の帰属時期は平安時代と推定される。

第8号住居跡<S J 8 (旧S J 3)> (第86図)

位置は、Z・AA-3グリッドである。

床の掘り込みは全面にわたり削平されていたが、貼

(2) 掘立柱建物跡

第4号掘立柱建物跡<S B 4 (旧S B 1)>

(第87・88・90図)

位置は、AA-2グリッドである。S B 5と重複するが、新旧関係は不明である。

規模は3×2間で、西側に庇を持つ。桁行7.0m、梁行約4.5mで、長軸方向はN-91°-Wである。柱穴は径0.8m前後、深さ0.4~0.6mである。柱痕は明瞭でないものもあるが、柱間距離は2.3mと推定される。

遺物は、土師器・須恵器少片約70点、刀子1点である。土師器杯1はP 4出土、同3はP 17出土、還元炎焼成須恵器杯2はP 5出土、4は刀子で、現存長15.9cm、P 8出土である。

これらの遺物から、遺構の帰属時期は平安時代である。

第5号掘立柱建物跡<S B 5 (旧S B 2)>

(第88・90図)

位置は、AA-2・3グリッドである。S B 4と重複するが、新旧関係は不明である。

規模は2×2間で、桁行、梁行とも4.2mである。柱穴は径0.5m前後、深さ0.3~0.4mである。

遺物は、土師器・須恵器片約10点である。須恵器杯1はP 1、同2はP 3出土。

これらの遺物から、遺構の帰属時期は平安時代である。

床構築土を除去した結果、直下からカマド、壁溝を伴うより古い床面が検出された。以下、この面の状況を述べる。

平面形は、奥行き4.5m、幅2.6mの長方形で、床面積は11.4㎡である。カマドは東壁に設置され、中心軸方向はN-82°-Wである。支柱穴は確認されなかった。周壁高は、0.1mである。

遺物は、土師器片約10点で、遺構の帰属時期は平安時代と推定される。

第6号掘立柱建物跡<S B 6 (旧S B 3)> (第89図)

位置は、AA・AB-3グリッドである。S B 7と重複するが、新旧関係は不明である。

規模は2×1間で、長軸方向は真北を向く。桁行4.5m、梁行4.0mである。柱穴は径0.3m前後、深さ0.1~0.3mである。

出土遺物はなく、遺物の帰属時期は不明であるが、平安時代以降だろう。

第7号掘立柱建物跡<S B 7 (旧S B 3)> (第89図)

位置は、AA・AB-3グリッドである。S B 6と重複するが、新旧関係は不明である。

柱穴の配列が不完全であるが、建物跡とみなしておく。

規模は2×2間と推定され、桁行4.7m、梁行4.1mである。柱穴は径0.3m前後、深さ0.1~0.3mである。

出土遺物はなく、遺物の帰属時期は不明である。

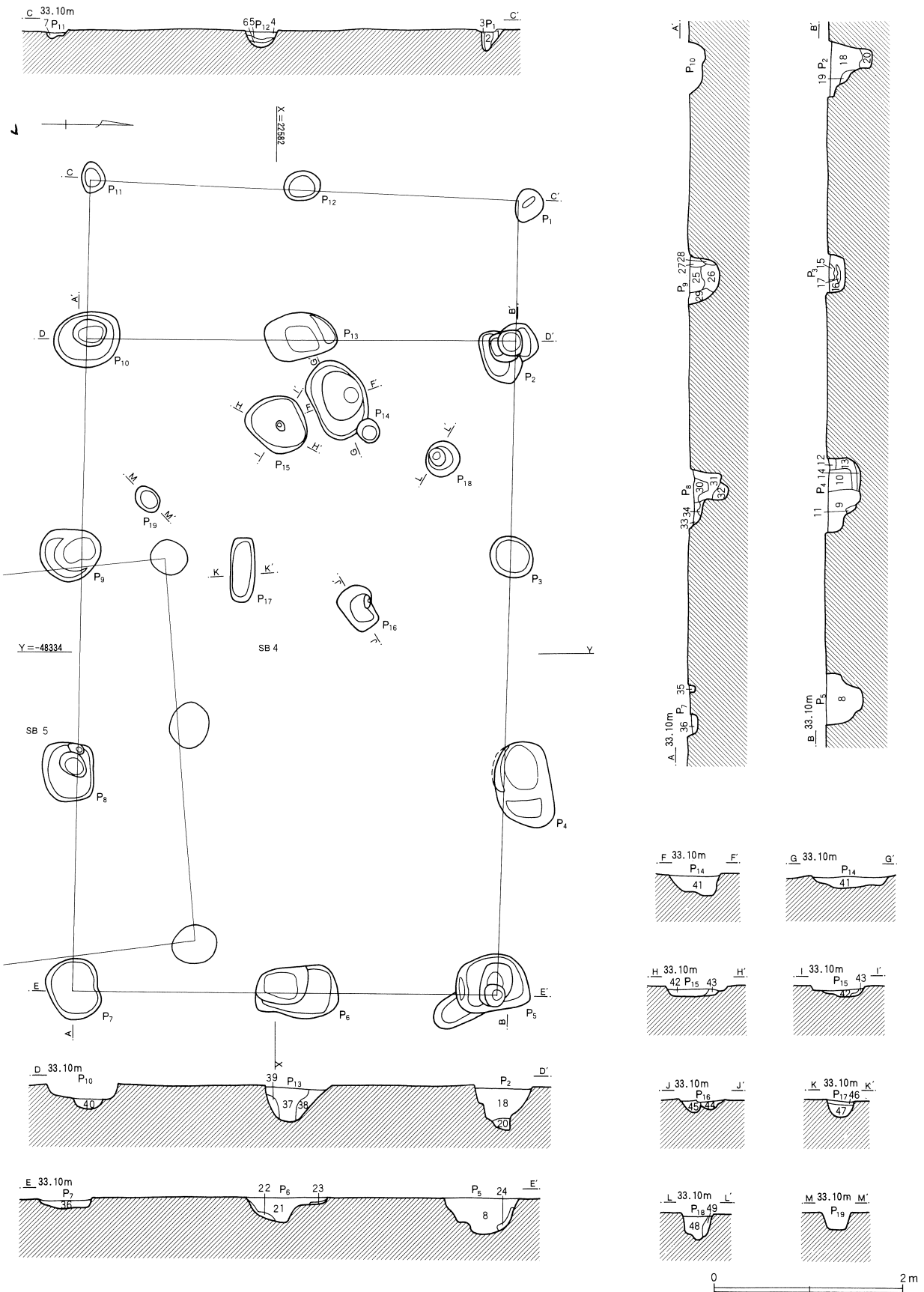
第8号掘立柱建物跡<S B 8 (旧S B 4)> (第90図)

位置は、AA-4グリッドである。

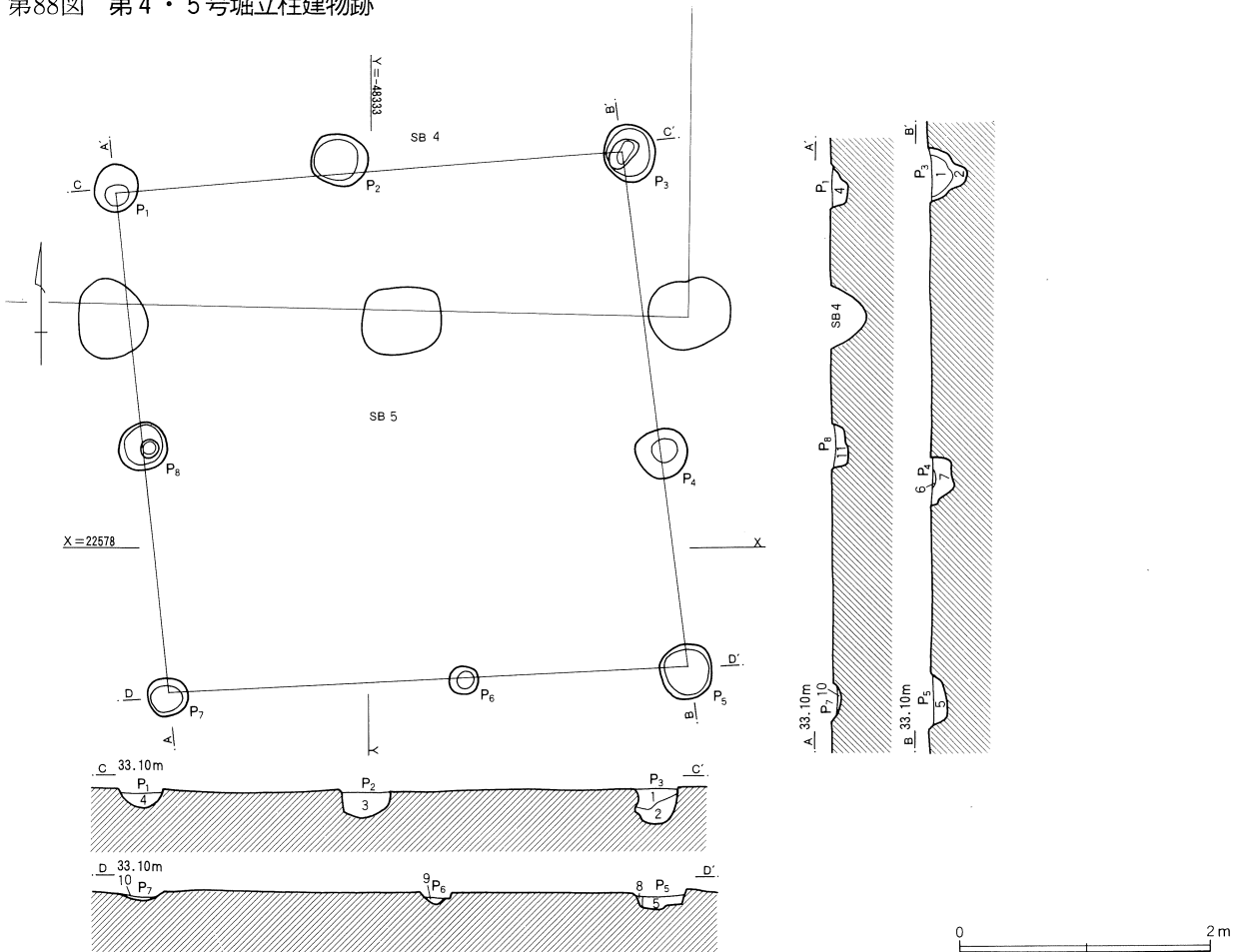
規模は2×2間で、桁行4.7m、梁行3.0mである。長軸方向はN-78°-Eである。柱穴は直径0.5m前後、深さ0.1~0.4mである。

出土遺物はなく、遺物の帰属時期は不明である。

第87图 第4号掘立柱建物跡



第88図 第4・5号堀立柱建物跡



SB 5

- 1 灰黄褐色土：ローム・マンガン粒まばら、焼土粒わずか
- 2 褐灰色土：ローム・マンガン粒まばら
- 3 褐灰色土：ローム粒、φ1cmロームブロックわずか、マンガン粒多い
- 4 褐灰色土：マンガン粒多く、φ1cmロームブロックまばら
- 5 褐灰色土：ローム・マンガン粒多い

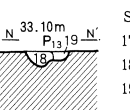
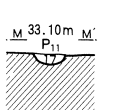
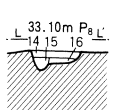
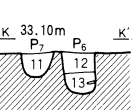
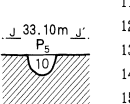
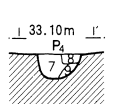
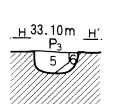
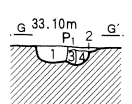
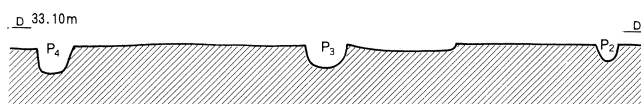
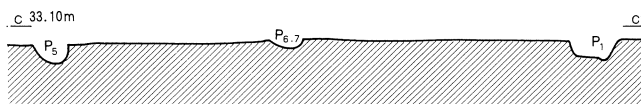
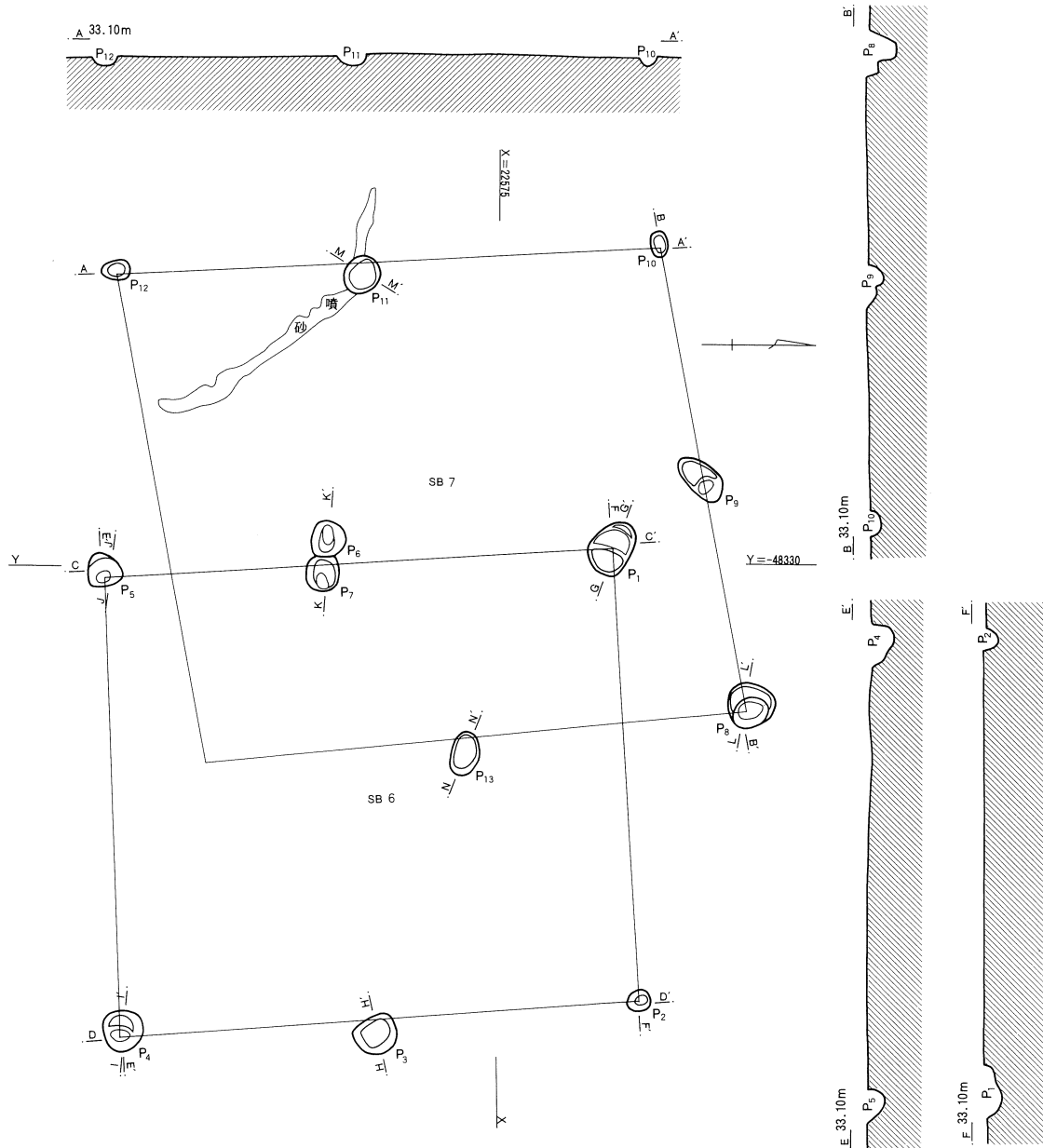
- 6 灰黄褐色土：φ0.5mm~1cm焼土ブロック集中
- 7 灰黄褐色土：ローム・マンガン粒まばら
- 8 におい黄褐色土：ローム地山のくずれ
- 9 褐灰色土：ローム粒多い
- 10 褐灰色土：ローム粒まばら
- 11 褐灰色土：ローム・マンガン粒まばら

SB 4

- 1 におい黄褐色土：ローム主体
- 2 褐灰色土：ローム粒まばら、焼土粒わずか。柱痕覆土？
- 3 灰黄褐色土：ローム粒多い
- 4 灰黄褐色土：ローム粒多く、マンガン粒まばら
- 5 灰黄褐色土：ローム多い
- 6 褐灰色土：ローム粒わずか
- 7 褐灰色土：ローム粒まばら
- 8 黒褐色土：ローム粒多く、マンガン粒まばら
- 9 灰黄褐色土：ローム粒わずか。しまっている（図左上にむかって柱ぬきとりか）
- 10 におい黄褐色土：ローム粒、φ1~2cmロームブロック主体
- 11 灰黄褐色土：ローム粒、φ1cmロームブロック多い
- 12 灰黄褐色土：ローム粒多い
- 13 灰黄褐色土：ローム粒、φ1cmロームブロックまばら
- 14 褐灰色土：φ1cmロームブロックまばら
- 15 褐灰色土：ローム粒まばら
- 16 灰黄褐色土：ローム粒、φ1~2cmロームブロック主体
- 17 褐灰色土：φ1cmロームブロックまばら
- 18 灰黄褐色土：ローム粒、φ1~2cmロームブロックまばら
- 19 におい黄褐色土：φ1~2cmロームブロック多い
- 20 黒褐色土：ローム粒まばら
- 21 褐灰色土：ローム粒、φ1~3cmロームブロックまばら、焼土わずか
- 22 におい黄褐色土：ローム主体
- 23 灰黄褐色土：ローム粒多い
- 24 灰黄褐色土：ローム粒多い

- 25 褐灰色土：ローム粒多い
- 26 褐灰色土：ローム粒、φ5mmロームブロックまばら
- 27 褐灰色土：ローム粒多い
- 28 灰黄褐色土：ローム粒多い
- 29 灰黄褐色土：ローム粒多い
- 30 褐灰色土：ローム粒多い
- 31 褐灰色土：φ1cmロームブロックまばら
- 32 褐灰色土：ローム粒わずか
- 33 褐灰色土：ローム粒多い
- 34 黄褐色土：ローム主体
- 35 褐灰色土：ローム粒多い
- 36 褐灰色土：ローム粒多い
- 37 褐灰色土：ローム粒、φ1~2cmロームブロックまばら
- 38 褐灰色土：φ2cmロームブロック多い
- 39 褐灰色土：ローム粒、φ1~2cmロームブロック主体
- 40 褐灰色土：φ1cmロームブロック多い
- 41 褐灰色土：ローム・マンガン粒まばら、焼土・炭化物粒わずか
- 42 褐灰色土：ローム粒多く、焼土・炭化物粒まばら
- 43 褐灰色土：ローム粒多い
- 44 褐灰色土：ローム粒多く、炭化物粒わずか
- 45 褐灰色土：ローム・炭化物粒まばら
- 46 褐灰色土：焼土粒多く、ローム粒まばら、炭化物粒わずか
- 47 褐灰色土：焼土粒まばら、ローム粒多い
- 48 におい黄褐色土：ローム主体
- 49 灰黄褐色土：φ1~3cmロームブロック多い

第89図 第6・7号堀立柱建物跡

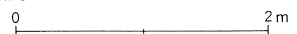


SB 6

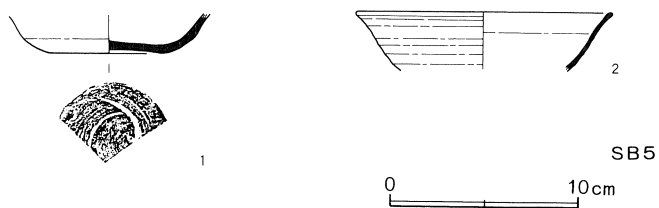
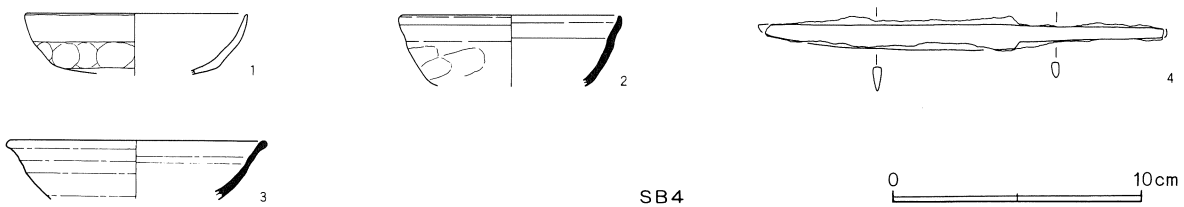
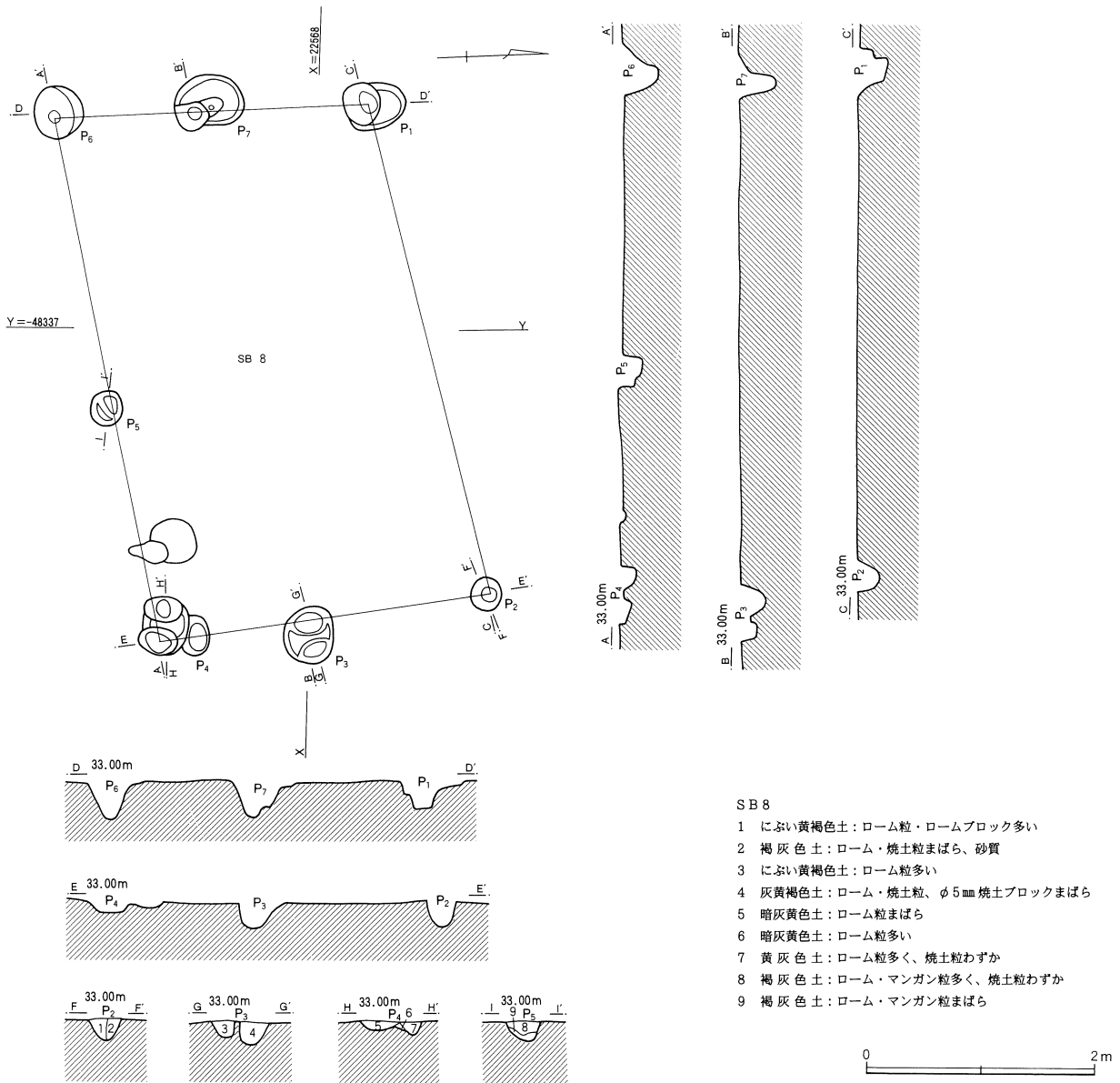
- 1 灰黄褐色土：ローム粒多い
- 2 褐灰色土：ローム・マンガン粒多い
- 3 にふい黄褐色土：ローム主体
- 4 褐灰色土：ロームブロック多い
- 5 灰黄褐色土：ローム・マンガン粒まばら、焼土わずか
- 6 褐灰色土：ローム粒多い
- 7 灰黄褐色土：砂質土
- 8 褐灰色土：白色バミス多い
- 9 黄灰色土：ローム粒多く、焼土粒まばら
- 10 黒褐色土：ローム粒多く、焼土粒・炭化物粒まばら
- 11 灰黄褐色土：ローム粒多い
- 12 灰黄褐色土：φ5mm焼土ブロック、炭化物まばら、ローム粒多い
- 13 灰黄褐色土：ローム粒多い
- 14 黄灰色土：ローム粒多く、マンガン粒、白色バミスまばら、焼土粒わずか
- 15 黄灰色土：ローム・炭化物・焼土粒まばら
- 16 暗灰黄色土：ローム粒多く、マンガン粒まばら、焼土粒わずか

SB 7

- 17 褐灰色土：焼土・炭化物粒まばら
- 18 灰黄褐色土：ローム粒多い
- 19 灰黄褐色土：焼土・炭化物粒まばら



第90図 第8号堀立柱建物跡と堀立柱建物跡出土遺物



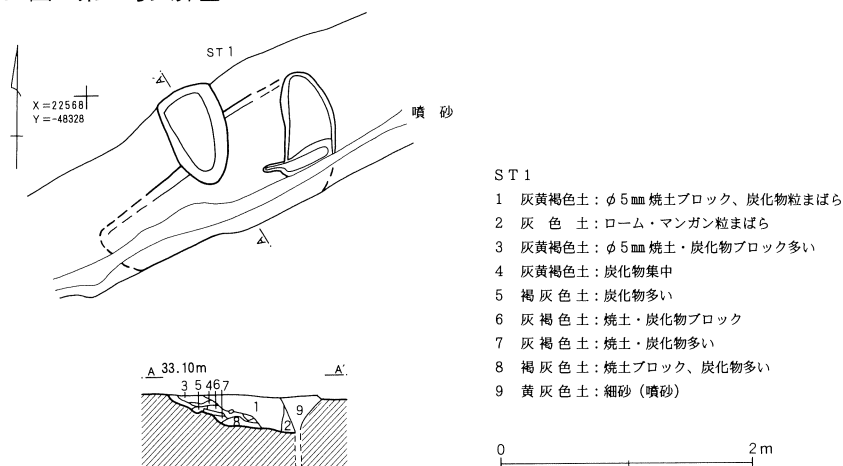
(3) 火葬墓

第1号火葬墓<ST1> (第91図)

位置は、AB-4グリッドである。SD4の覆土を掘り込んで構築されている。

SD4とともに噴砂による変形が顕著であるが、平面形は、概ね1.1×0.4mの長方形土壌の北辺に突出部

第91図 第1号火葬墓



を敷設したT字形と推定される。深さ約0.3mである。突出部は焼土と炭化物の堆積が顕著で、側壁は被熱により赤化していた。

遺物はなく、遺構の帰属時期は中世と推定しておく。

(4) 溝跡

第3号溝跡<SD3 (旧SD1)> (第93図)

位置は、AB-1・3グリッドである。15.6mにわたり検出された。南端でSD4に直交しており、一連の遺構と推定される。方向はN-5°-Wである。幅0.8m、深さ0.6m、断面形はU字形である。

遺物は土師器片4点で、遺構の帰属時期は平安時代以降である。

23.5mにわたり検出された。SK4に先行する。

方向はN-13°-Wで、南北端で屈曲が認められる。幅0.4m、深さ0.2m、断面形はU字形である。

遺物は、縄文土器・土師器・須恵器片7点で、遺構の帰属時期は平安時代と推定される。

第4号溝跡<SD4 (旧SD2)> (第92図)

位置は、AA~AC-3・4グリッドである。約28mにわたり検出された。SD3が直交して連結しており、一連の遺構と推定される。噴砂による変形が顕著であるが、ほぼ直線で、方向はN-67°-Eである。幅0.4~1.3m、深さ0.2~0.4mである。

遺物はないが、SD3と同時期と推定される。

第6号溝跡<SD6 (旧SD4)> (第92図)

位置は、AB・AC-4グリッドである。西端がSK4に先行する。8.4mにわたり検出された。

ほぼ直線で、方向はN-64°-Eである。幅0.4m、深さ0.2m。遺物はなく、遺構の帰属時期は不明である。

第5号溝跡<SD5 (旧SD3)> (第92図)

位置は、Y・Z-2~4グリッドである。4.5mにわたり途切れるが、南北一連の遺構とみなしておく。

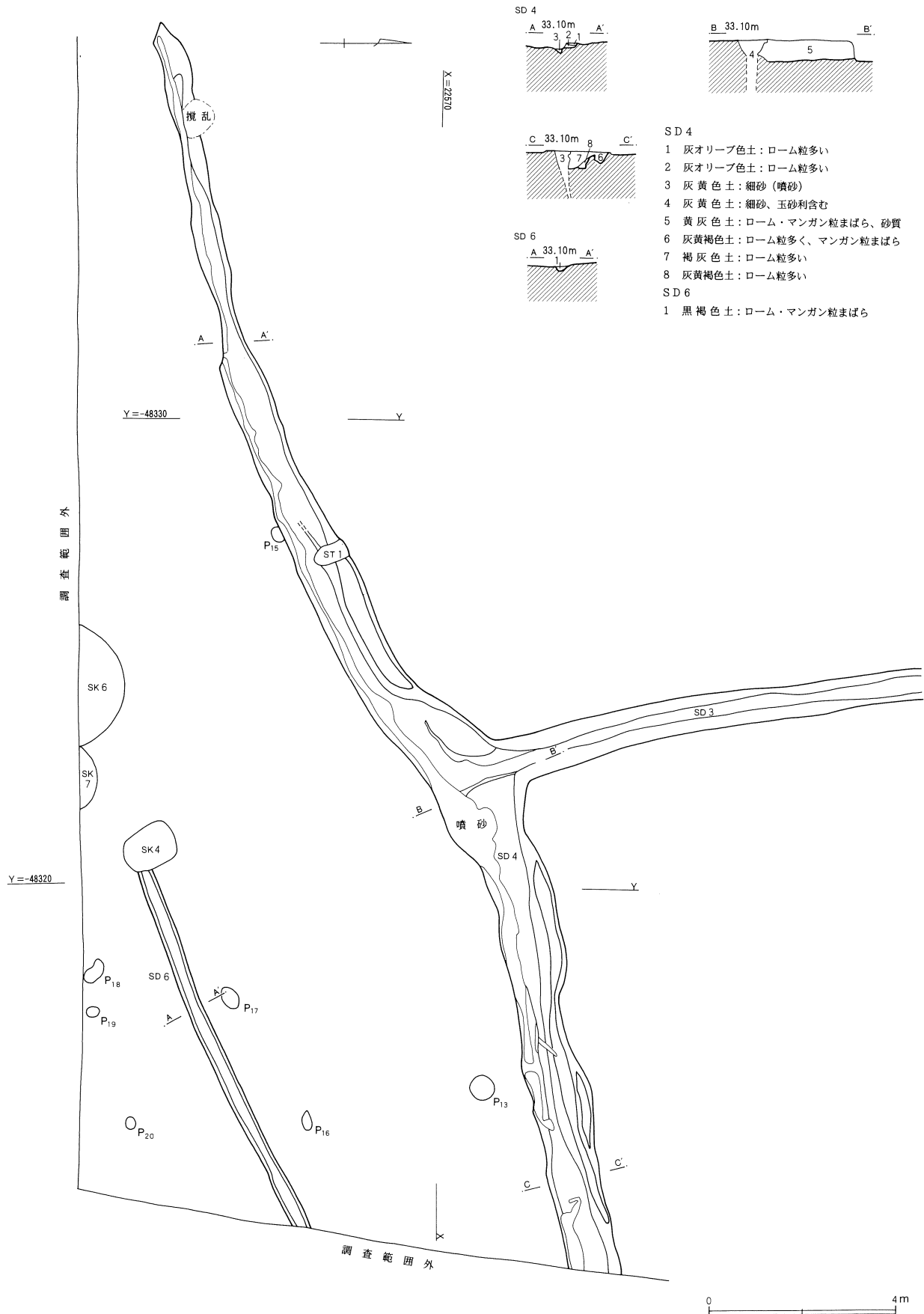
第7号溝跡<SD7 (旧SD5)> (第93図)

位置は、AA・AB-2グリッドである。4.6mにわたり検出された。

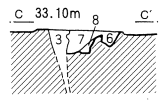
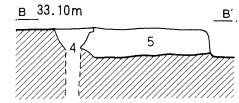
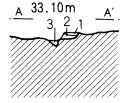
ほぼ直線状で、方向はN-80°-Eである。幅約0.5m、深さ約0.1m、断面形は浅い逆台形である。

遺物は土師器片1点で、遺構の帰属時期は平安時代以降と推定される。

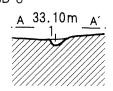
第92図 第4・6号溝跡



SD 4

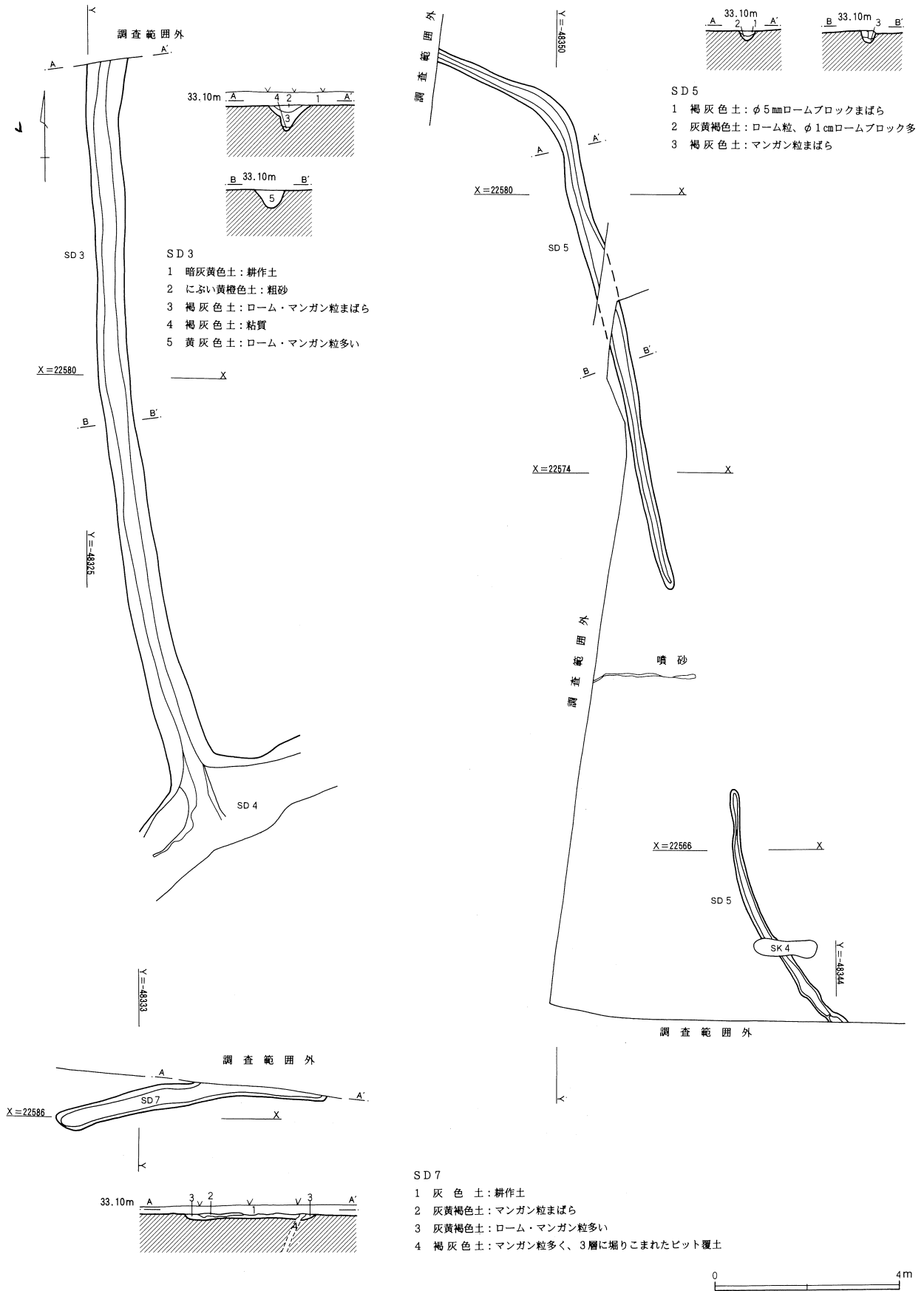


SD 6



- SD 4
- 1 灰オリーブ色土：ローム粒多い
 - 2 灰オリーブ色土：ローム粒多い
 - 3 灰黄色土：細砂（噴砂）
 - 4 灰黄色土：細砂、玉砂利含む
 - 5 黄灰色土：ローム・マンガン粒まばら、砂質
 - 6 灰黄褐色土：ローム粒多く、マンガン粒まばら
 - 7 褐灰色土：ローム粒多い
 - 8 灰黄褐色土：ローム粒多い
- SD 6
- 1 黒褐色土：ローム・マンガン粒まばら

第93図 第3・5・7号溝跡



(5) 土壌

第3号土壌<SK 3 (旧SK 1)> (第94・95図)

位置は、Z-4グリッドである。SD 5と重複し、より新しい。

平面形は、1.4×0.3mの略長方形で、深さ0.1m。底部にピット状の掘り込みをもつ。

遺物は、土師器・須恵器片約10点である。1、2は須恵器杯である。

これらの遺物から遺構の帰属時期は平安時代である。

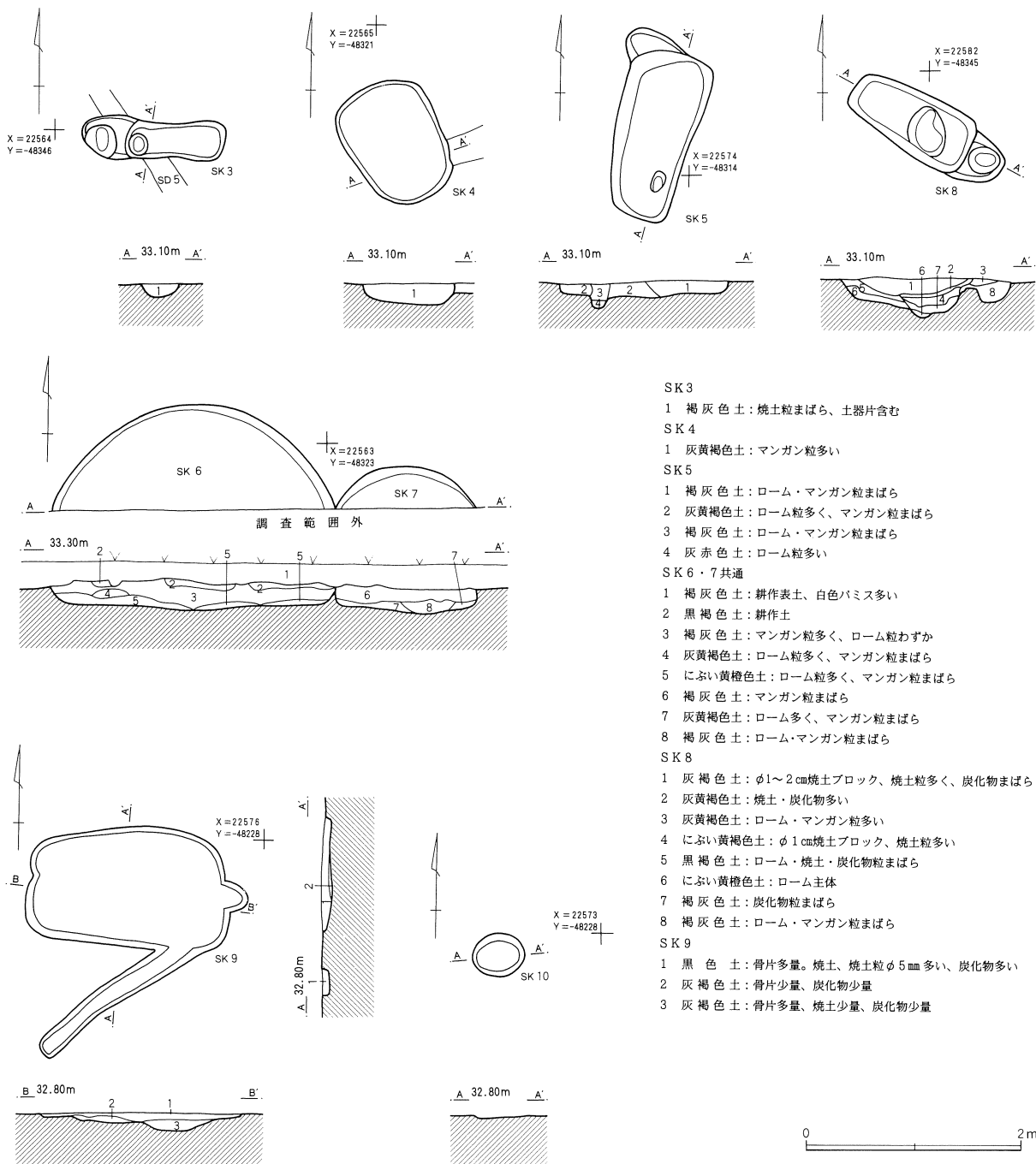
第4号土壌<SK 4 (旧SK 2)> (第94図)

位置は、AB-4グリッドである。SD 6と重複し、より新しい。

平面形は1.2×0.9mの略楕円形で、深さ0.2m。

遺物はなく、遺構の帰属時期は不明である。

第94図 土壌



- SK 3
- 1 褐灰色土：焼土粒まばら、土器片含む
- SK 4
- 1 灰黄褐色土：マンガン粒多い
- SK 5
- 1 褐灰色土：ローム・マンガン粒まばら
- 2 灰黄褐色土：ローム粒多く、マンガン粒まばら
- 3 褐灰色土：ローム・マンガン粒まばら
- 4 灰赤色土：ローム粒多い
- SK 6・7共通
- 1 褐灰色土：耕作表土、白色バミス多い
- 2 黒褐色土：耕作土
- 3 褐灰色土：マンガン粒多く、ローム粒わずか
- 4 灰黄褐色土：ローム粒多く、マンガン粒まばら
- 5 にぶい黄褐色土：ローム粒多く、マンガン粒まばら
- 6 褐灰色土：マンガン粒まばら
- 7 灰黄褐色土：ローム多く、マンガン粒まばら
- 8 褐灰色土：ローム・マンガン粒まばら
- SK 8
- 1 灰褐色土：φ1~2cm焼土ブロック、焼土粒多く、炭化物まばら
- 2 灰黄褐色土：焼土・炭化物多い
- 3 灰黄褐色土：ローム・マンガン粒多い
- 4 にぶい黄褐色土：φ1cm焼土ブロック、焼土粒多い
- 5 黒褐色土：ローム・焼土・炭化物粒まばら
- 6 にぶい黄褐色土：ローム主体
- 7 褐灰色土：炭化物粒まばら
- 8 褐灰色土：ローム・マンガン粒まばら
- SK 9
- 1 黒色土：骨片多量、焼土、焼土粒φ5mm多い、炭化物多い
- 2 灰褐色土：骨片少量、炭化物少量
- 3 灰褐色土：骨片多量、焼土少量、炭化物少量

第5号土壙<SK5 (旧SK3)> (第94図)

位置は、AC-3グリッドである。
平面形は、1.6×0.7mの略長方形で、深さ0.2m。
遺物はなく、遺構の帰属時期は不明である。

第6号土壙<SK6 (旧SK4)> (第94図)

位置は、AB-4グリッドである。東側でSK7に接するが、新旧関係は不明である。
南半は調査範囲外にあたるが、平面形は径2.7m前後の円形と推定される。深さ0.3m。
遺物はなく、遺構の帰属時期は不明である。

第7号土壙<SS7 (旧SS5)> (第94図)

位置は、AB-4グリッドである。西側でSK6に接するが、新旧関係は不明である。南半は調査範囲外にあたり、平面形は円形と推定されるが規模は不明である。深さ0.2m。
遺物はなく、遺構の帰属時期は不明である。

第8号土壙<SK8 (旧SK6)> (第94図)

位置は、Z-2グリッドである。
1.2×0.5mの長方形土壙と径0.3mのピットが複合

(6) 遺構外ピット

第4号ピット<P4 (旧P4)> (第96図)

位置は、Z-2グリッドである。
平面形は、0.4×0.6mの長方形で、深さ0.4m。形状、覆土の状況から柱穴とみられる。P4~P6は等間隔で直列の配置であることから、P7を含め掘立柱建物跡もしくは柵列等の一部である可能性が高い。

遺物は、土師器・須恵器片9点である。

第5号ピット<P5 (旧P3)> (第96図)

位置は、Z-2グリッドである。
平面形は0.5×0.3mの楕円形で、深さ0.2m。
遺物なし。

した形状である。SK5に類似する。深さ0.4m。

遺物は土師器・須恵器片約30点で、これらの遺物から、遺構の帰属時期は平安時代と推定される。

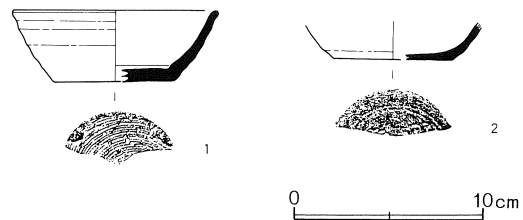
第9号土壙<SK9 (旧SK7)> (第94図)

位置は、AL-3グリッドである。
平面形は2.0×1.1mの長方形で、東辺に半円形、南辺に溝状の突出部を持つ。深さ0.2m。覆土には、多量の骨灰と少量の焼土・炭化物粒が含まれていた。
遺物は土師器・須恵器片1点で、遺構の帰属時期は平安時代以降と推定される。

第10号土壙<SK10 (旧SK8)> (第94図)

位置は、AL-3グリッドである。
平面形は0.5×0.4mの楕円形で、深さ0.2m。
遺物はなく、遺構の帰属時期は不明である。

第95図 第3号土壙出土遺物



第6号ピット<P6 (旧P1)> (第96図)

位置は、Z-2グリッドである。
平面形は径0.3mの略長方形で、深さ0.2m。
遺物なし。

第7号ピット<P7 (旧P2)> (第96図)

位置は、Z-2グリッドである。
平面形は径0.3mの円形で、深さ0.2m。
遺物なし。

第8号ピット<P8 (旧P1)> (第96図)

位置は、AC-2グリッドである。
平面形は直径約0.4mの円形で、深さ0.1m。

遺物なし。

第9号ピット<P9 (旧P3)> (第96図)

位置は、AC-2グリッドである。

平面形は径0.4mの楕円形で、深さ0.2m。

遺物なし。

第10号ピット<P10 (旧P2)> (第96図)

位置は、AC-2グリッドである。

平面形は2つの円形ピットが複合した形状であるが、覆土は切り合う状況を示していない。約1.0×0.6mで、深さ0.3m。

遺物なし。

第11号ピット<P11 (旧P1)> (第96図)

位置は、Y-3グリッドである。

平面形は径0.3mの楕円形で、深さ0.1m。

遺物は、土師器・須恵器片16点である。

第12号ピット<P12 (旧P1)> (第96図)

位置は、Z-3グリッドである。

平面形は0.4×0.5mの楕円形で、深さ0.2m。

遺物は、土師器片1点である。

第13号ピット<P13 (旧P1)> (第96図)

位置は、AC-3グリッドである。

平面形は径0.5mの円形で、深さ0.2m。

遺物はない。

第14号ピット<P14 (旧P3)> (第96図)

位置は、AA-4グリッドである。

平面形は径0.3mの円形で、深さ0.1m。

第15号ピット<P15> (第96・97図)

位置は、AB-4グリッドである。SD4に先行する。

平面形は径約0.3mの円形とみられ、深さは0.4m。

縄文土器が伴っており、縄文時代中期の遺構である。

1、2は縄文時代中期終末の浅鉢形土器である。1は口縁部の内湾がやや強く、沈線で口縁部を区画する。

2は口唇端部が面取り状を呈し、胴部に縦位の条線文を施文する。推定口径36cmを測る。

第16号ピット<P16 (旧P2)> (第96図)

位置は、AC-4グリッドである。

平面形は0.4×0.2mの楕円形で、深さ0.1m。

遺物はない。

第17号ピット<P17 (旧P1)> (第96図)

位置は、AC-4グリッドである。

平面形は0.5×0.4mの楕円形で、深さ0.2m。

遺物はない。

第18号ピット<P18 (旧P3)> (第96図)

位置は、AC-4グリッドである。

平面形は0.6×0.3mの略楕円形で、深さ0.1m。

遺物はない。

第19号ピット<P19 (旧P4)> (第96図)

位置は、AC-4グリッドである。

平面形は径0.3mの円形で、深さ0.1m。

遺物はない。

第20号ピット<P20 (旧P5)> (第96図)

位置は、AC-4グリッドである。

平面形は径0.3mの円形で、深さ0.1m。

第21～24号ピット<P21～24 (旧P1～4)>

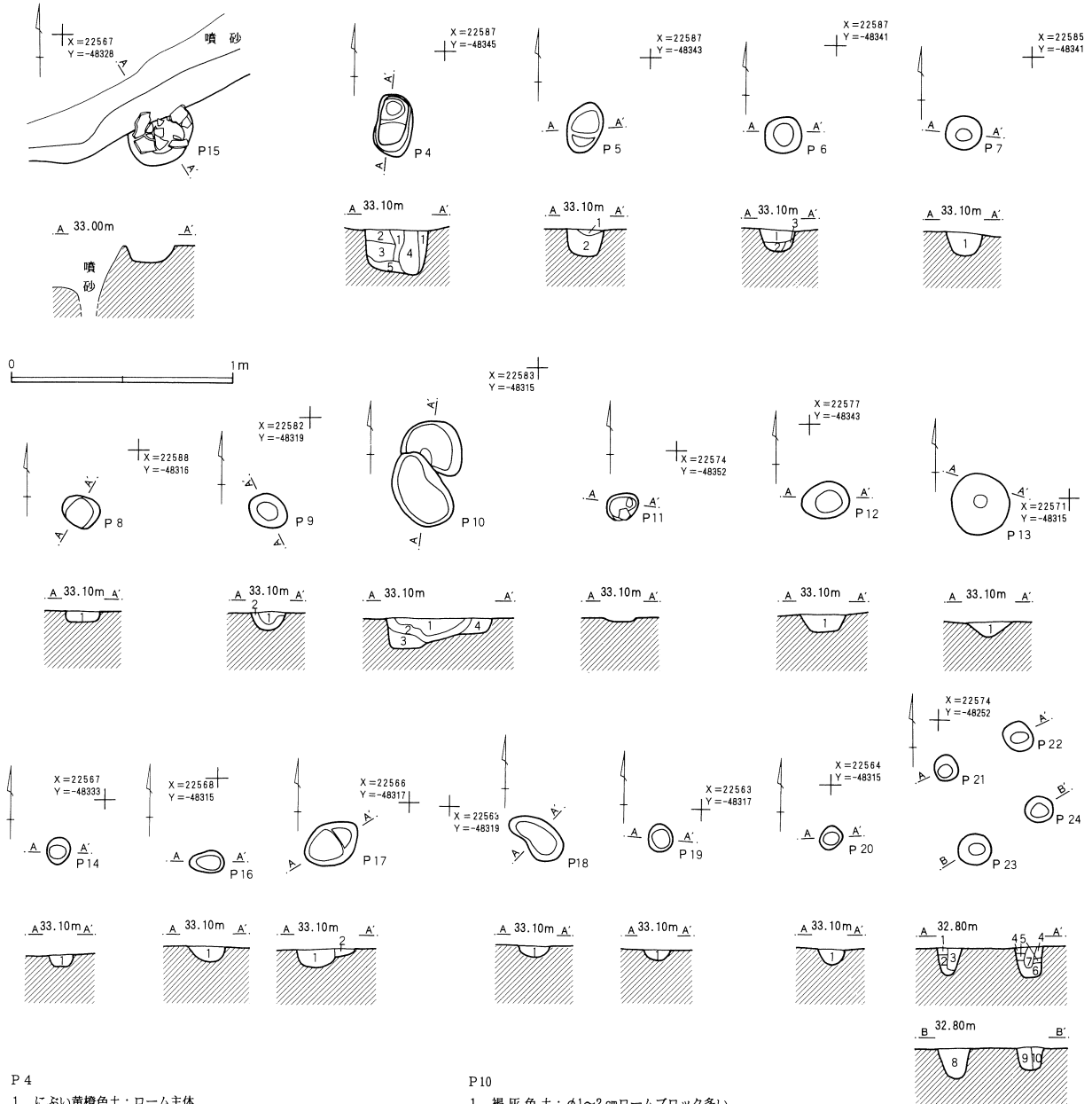
(第96図)

位置は、AI-3グリッドである。

平面形は、それぞれ径約0.2～0.3mの円形で、深さ0.2～0.3mである。配列・覆土の状況から、1辺0.8mの小型建造物跡とみられる。

遺物はなく、時期不明である。

第96図 遺構外ピット



P 4

- 1 におい黄褐色土：ローム主体
- 2 褐灰色土：1~2cmロームブロック多い
- 3 灰黄褐色土：ローム粒まばら、焼土粒わずか
- 4 黒褐色土：ローム粒まばら、焼土粒わずか
- 5 褐灰色土：ローム粒多い

P 5

- 1 におい黄褐色土：ローム主体
- 2 褐灰色土：φ1cmロームブロック、炭化物ブロック、焼土粒まばら

P 6

- 1 灰黄褐色土：ローム粒多く、焼土粒わずか
- 2 灰黄褐色土：ローム粒まばら、焼土粒わずか
- 3 におい褐色土：ローム主体

P 7

- 1 黄灰色土：ローム粒まばら、焼土粒わずか

P 8

- 1 褐灰色土：ローム粒多い

P 9

- 1 灰黄褐色土：φ1cmロームブロック多く、炭化物まばら
- 2 におい黄褐色土：ローム粒、φ1cmロームブロック多く、炭化物わずか

P 10

- 1 褐灰色土：φ1~2cmロームブロック多い
- 2 灰黄色土：ロームブロック主体
- 3 褐灰色土：φ2cmロームブロック多い
- 4 記録なし

P 12

- 1 褐灰色土：ローム粒多い

P 13

- 1 灰色土：ローム・マンガン粒多い

P 14

- 1 灰黄褐色土：ローム粒多い

P 16

- 1 褐灰色土：ローム・マンガン粒多い

P 17

- 1 褐灰色土：ローム粒まばら
- 2 灰黄褐色土：ローム粒多い

P 18

- 1 褐灰色土：ローム粒多い

P 19

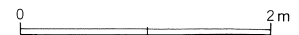
- 1 褐灰色土：ローム・マンガン粒まばら

P 20

- 1 褐灰色土：ローム粒まばら

P 21~24

- 1 灰黄褐色土：ローム粒主体
- 2 灰黄褐色土：ローム粒多い
- 3 灰黄褐色土：φ5mmロームブロックまばら
- 4 におい黄褐色土：ローム粒、φ5mmロームブロック主体
- 5 黒褐色土：ローム粒まばら
- 6 におい黄褐色土：ローム粒、φ5mmロームブロック主体
- 7 黒褐色土：ローム粒まばら
- 8 におい黄褐色土：ロームブロック主体
- 9 黒褐色土：φ5mmロームブロックまばら
- 10 黒褐色土：ローム粒、φ5mmロームブロック多い



(7) 遺構外出土の遺物

3～10は縄文時代後期の土器群である。3は非対称の波状口縁頂部から円孔を起点とする隆帯が垂下するもので、文様は沈線で描かれる。円孔を抱く波頂部上面は、隆帯の渦巻文が付き、片側の口縁部には沈線文が巡る。4は胴部に3本沈線が垂下する。

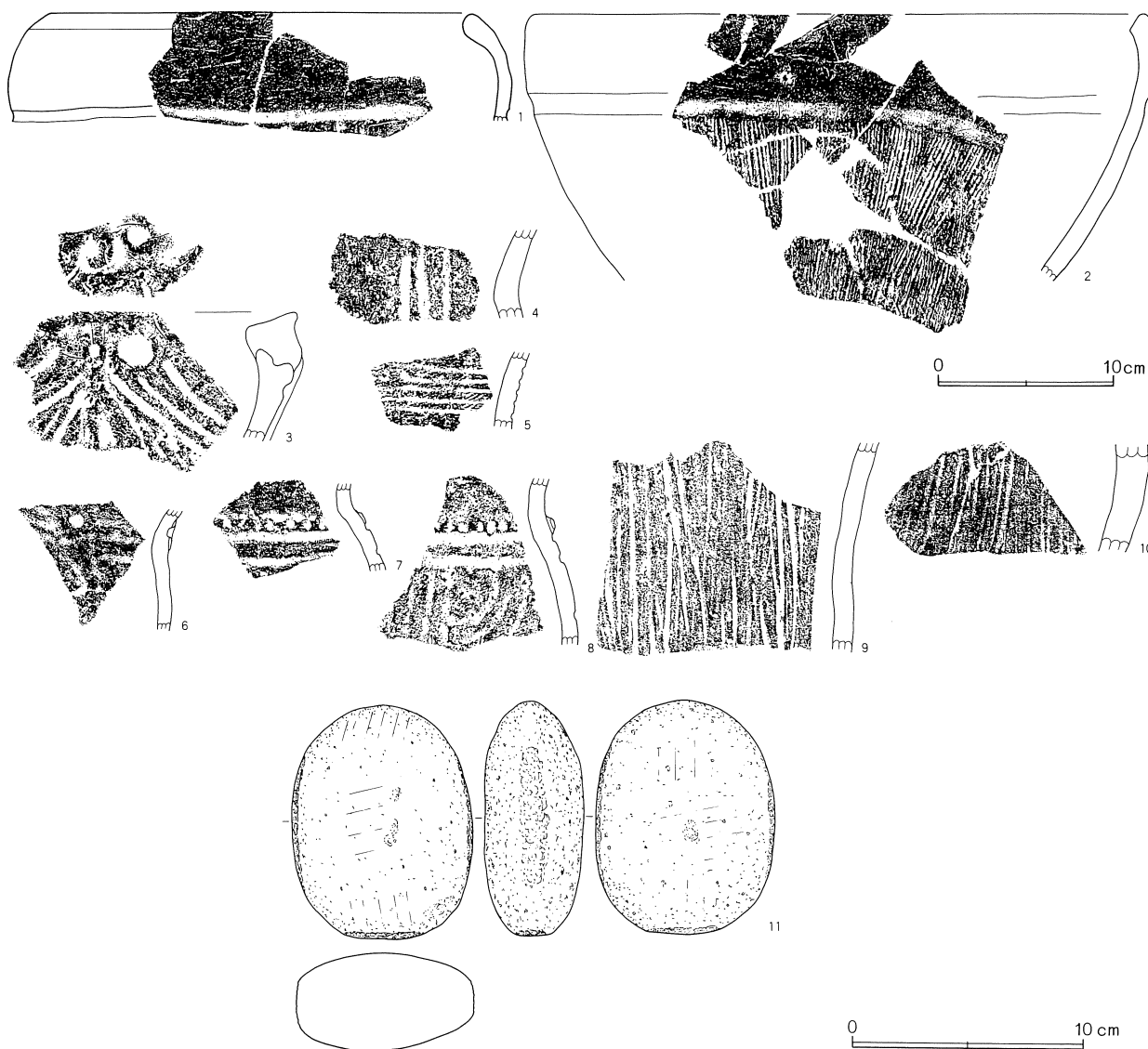
6～8は屈曲する胴部を沈線や隆帯で区画し、胴部に多条の沈線でモチーフを描くものである。6は区画沈線上に円形貼付文を施し、これを起点に胴部モチーフが展開する。7、8は同一個体であり、刻みを施す隆帯で胴部を区画する。区画隆帯下部に平行沈線を引き、

沈線文から多条沈線文の懸垂文が垂下し、更に弧状の多条沈線文を組み合わせる。9、10は縦位の粗い条線文を施文する。以上、堀之内式1～2式にかけての土器群である。

5は間隔の狭い平行沈線文を施文し、縄文LRを充填施文する。加曽利B式に比定されよう。

11は磨石である。側縁に敲打痕があり、両側にもわずかにある。磨面は両面をよく使用されている。最大径10.0cm、厚4.2cm、重さ431g。

第97図 第15号ピットおよび遺構外出土遺物



V 調査の成果

1. 堀東遺跡の縄文時代について

堀東遺跡は福川に沿って、全長600mもの長きに亘る遺跡範囲を持つが、細かく見ると幾つかの地点から成ることが理解された。福川河川改修の範囲の中には旧河川跡が蛇行しながら発見されており、台地の肩部では遺構が構築され、谷部では遺物包含層が発達していた。また、全く遺物が発見されない調査地点はないが、遺構、遺物分布の濃淡は明らかであり、本報告では1～6区、7～11区、12区～18区に分けて報告を行ったが、さらに細かな纏まりとして捉えることが可能である。

ここでは、1～18区をさらに6ブロックに分けて、地点の特徴を捉えつつ概要を把握し、合わせて、福川遺跡縄文時代全体が、どのような遺構で構成され、どのような時代的背景を持ちつつ推移してきたかを検討してみたいと思う。

まず、地点別に概要をまとめることにする。福川遺跡全体を遺構及び遺物検出状況から、2区、4区、5～8区、11区、12～14区、15～17区の6ブロックに分割する。

2区

後期前葉の堀之内1式初頭の一括土器群が出土した、第1号土壌が存在する。グリッドからも堀之内1式初頭の土器群が出土している。

4区

中期前葉の阿玉台Ⅱ式期の第1号住居跡と、中期中葉の勝坂式終末期の第1～8号集石土壌が存在する。グリッドからは、遺構の時期と同時期の土器群の他に、前期中葉の黒浜式、中期終末の加曾利E式、堀之内1式土器が若干出土している。

5～8区

遺構の殆どが堀之内式の所産で、堀之内1式期では第2号住居跡、第5・6・8・9・11・12・13号土壌が、堀之内2式期では第3・4号住居跡、第14・15号土壌が存在する。グリッドでは堀之内1式の古段階～

新段階の土器群が主体的に出土しており、堀之内2式土器がやや少なく、加曾利E系で後期段階の土器群が少量出土している。遺構数の割には堀之内2式土器の総出土量が少ない感じを受ける。

また、5区の第4号土壌からは堀之内段階にまで落ちるとされる称名寺系の土器群が出土しており、また、グリッドからは後期中葉の加曾利B1式土器が出土している。4区と5区の間には浅い谷が存在するため、4区とは地点が異なるものと思われるが、6・7区ともやや距離を置いており、5区がさらに細かな地点別として区分される可能性もある。

11区

称名寺Ⅱ式期の第5号住居跡、堀之内1式期の第6号住居跡、堀之内2式期の第17、18、19号土壌が存在する。グリッドからは称名寺終末期の土器群、堀之内1式古～新段階の土器群、堀之内2式土器、加曾利E系の土器が若干出土している。第5号住居跡のある台地上面では称名寺系土器が多く、土壌の集中する斜面部では堀之内2式土器が纏まって出土しており、その上層に、弥生式土器が層位的に出土している。また、1点ではあるが曾谷式土器が出土しており、土偶を含めて、後期後半の遺物が存在することは特筆される。

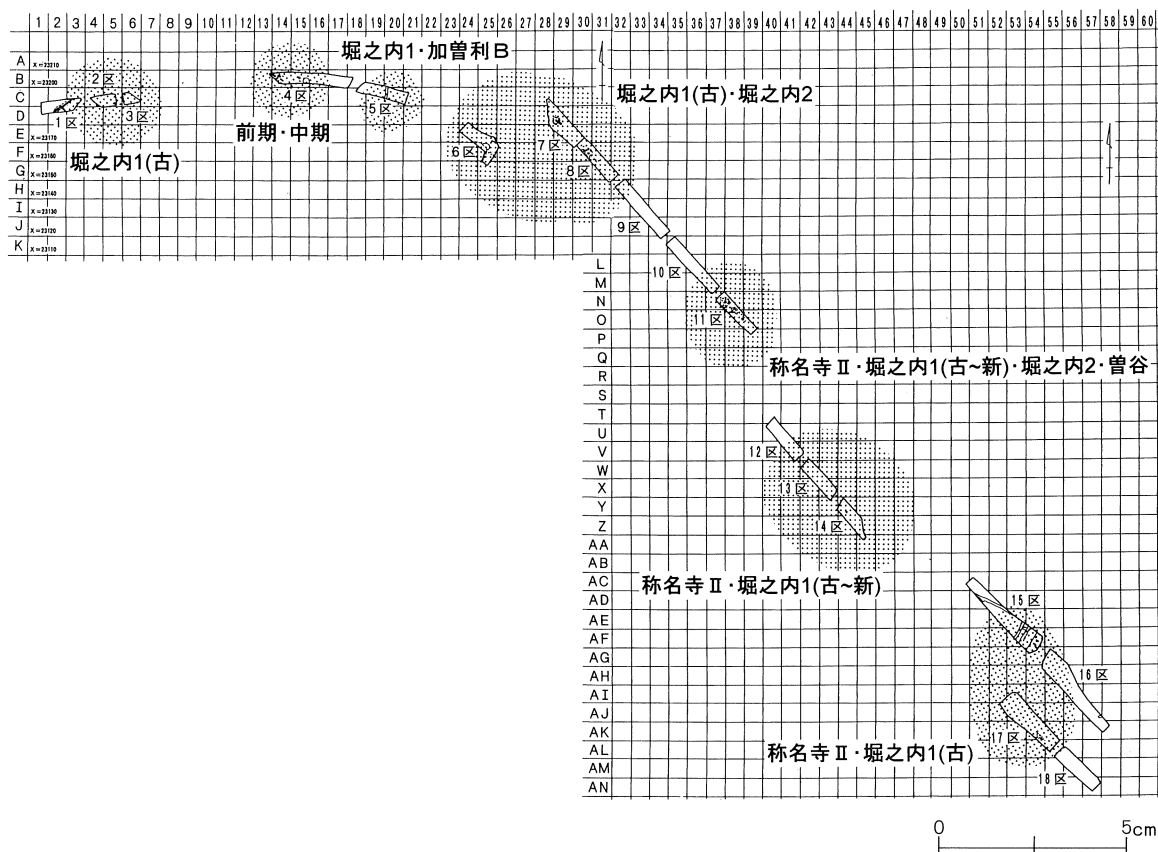
12～14区

14区に堀之内1式期の埋甕（甕棺）を持つ、第20号土壌が存在する。12・13区は谷部の遺物包含層に当たり、14区の土壌が乗る部分は低台地斜面部となっている。グリッドからは称名寺終末から堀之内1式が主体的に出土しており、加曾利E式土器と堀之内2式土器が若干出土している。

15～17区

17区に称名寺Ⅰ式期の住居跡が存在し、15区に第21～24号土壌が存在するが、土壌は殆どが時期不詳で遺物は流れ込と判断される。グリッドからは17区を中心にして、堀之内1式土器が主体的に出土しており、堀之内2式の大形破片が2個体分出土している。15区の

第98図 堀東遺跡地点別時期別分布図



南側、16区の北側から縄文土器が僅かに出土しているが、17区の北側部分を中心にして土器群が出土している。

以上の、地点別に捉えられた様相を時期別に整理し、堀東遺跡を時系列別に概観し直してみる。

前期

遺構は検出されていないが、4区で第Ⅰ群土器第1類とした繊維土器の黒浜式土器、第2類とした無繊維土器の諸磯b式土器が少量出土している。4区西側部分は南側から続く台地の肩部に当たり、遺物は殆どが沖積面の黒色土層中から出土しているため、台地上からの流れ込みと考えられる。黒浜式土器は並行沈線文間に爪形文を施す有尾式形の土器片も存在するが、口縁部に平行沈線文で菱形状文や平行線文を描くものが多く、有尾系の影響を強く受けている土器群で構成されている。

中期中葉Ⅰ期（阿玉台Ⅱ式期）

第Ⅱ群第1類とした時期である。中期の遺構は、第4区西側部分のみに限られる。南側から続く台地は耕地整理の際に削平を受けており、その際に多量の土器片と翡翠の大珠が出土したと言われている。第1類段階である中葉Ⅰ期の遺構としては、第1号住居跡が1軒のみ存在する。台地肩部に構築され、ほぼ円形のプランを呈する。住居跡は浅い皿状を呈し、4本主柱で、2度の建て替えを行っている。中央部には炉跡がなく、1個のピットを設けている。主柱の内側の中央部に1段浅い掘り込みが存在し、所謂阿玉台式の古い段階で特徴的に見られる2段掘状の住居跡（石塚1986）である。通常、方形か長方形のプランが多いが、埼玉県北部という地理的な条件も加味されなければならないが、勝坂系の住居様式に阿玉台系の住居要素が複合しているものと理解される。出土土器は阿玉台Ⅱ式を主体とし、新道式新段階の土器群（第10図25）を少量伴っているが、阿玉台Ⅱ式は断面三角状の隆帯による幅狭の

楕円区画帯を持つ等、雲母を多く入れるものの、モチーフ構成などに勝坂的な変容が窺われ、折衷化の様相が看取される。

中期中葉Ⅱ期（勝坂式終末期）

第Ⅱ群第2類とした勝坂式終末の、所謂中峠段階の時期である。住居跡は検出されなかったが、4区西側先端部で台地肩部から堆積する沖積面の黒色土中に、集石土壌が集中して構築されていた。集石土壌は第1～8号の8基で、チャートを主体とする焼礫が、土器片と共に覆土中に詰まっている。集石土壌は黒色土中に掘り込まれており、そのプランを確定することは大変困難なことで、遺物の出土範囲から推定せざるを得ないことが多かった。その中でも第6号集石土壌は掘り込みがローム面まで達しており、その全貌を掘むことができる良好な遺構であった。土壌は円錐形のロート状を呈し、底面には整然と組み石状に石が並べられ、覆土にも被熱した礫がびっしり詰まっており、総量224kgの礫を検出した。皿状を呈する土壌は多いが、ロート状の形状を呈する集石土壌は珍しいと言えよう。やや近い形状のものとして、東京都国分寺市恋ヶ窪南遺跡（実川1987）の第9号集石土壌が挙げられる。

出土土器に、幾つの特徴が見られる。第1号集石土壌出土の第13図1は、無文の口唇部が立ち、球形状の口縁部を持つ所謂中峠式段階のキャリパー形深鉢形土器の典型例であるが、口縁部を無地文、胴部を縄文地文とする点に特等がある。背割れの隆帯で横S字状文を配する構成は花園町台耕地遺跡（鈴木1983）第34号住居跡出土土器（報告書第55図4）や、伊奈町原遺跡（村田1997）第13号住居跡出土土器（報告書第143図2）があり、第1号集石土壌出土土器は口縁部文様帯を無地文にする点で、台耕地遺跡例に近い。また、原遺跡例は地文縄文上に5単位の横S字状文を連結するが、第1号集石土壌例はS字状文を4単位の配しており、一部小さなS字状文で連結する部分がある。これを入れると、都合5単位となる。この小さなS字状文の連結の仕方は台耕地遺跡例と類似するもので、余白

に充填する三叉状沈線文の要素も類似する。本遺跡、台耕地遺跡、原遺跡例はほぼ同時期として認識されるが、各地域における系譜の差や、地域性を相互に表わしているものと思われる。

さらに、第1号集石土壌例は、刻みを施した隆帯を垂下して胴部文様帯を5単位の分割している。一見すると口縁部の4単位と、胴部の5単位で不整合の様であるが、口縁部に小さな1単位を加えることで調整をとっているものと思われる。通常、この種の深鉢形土器は、胴部に地文のみで、文様を持たないものが多いが、本遺跡例は5単位の分割した胴部区画内の地文縄文上に、沈線文によるそれぞれ異なったモチーフの組み合わせを配する。垂下隆帯脇に沈線や蛇行沈線に沿わせる手法は勝坂的で、半月形、円形、菱形、楕円形等のモチーフの組み合わせで、相互に同一のものを配さない構成も勝坂的である。しかし、縦位分割と、それに組み合う上下対弧状のモチーフ構成は、勝坂的な装飾技法を採りながらも、その系譜を東北地方大木6式の胴部区画文に求めることができる。この点については指摘したことがあるが（金子1999）、大木6式の縦位区画内を上下対向のM字状文で横連結する構成は、北東関東中期前半の諏訪式等に受け継がれ、脈々と本土器へと系統しているものと思われる。また、沈線の半月形の区画が井戸尻式の櫛形文にも通じる要素であり、さらに横S字状文が大木系の要素である点からも、第1号集石土壌出土土器は多系統の要素が集約させて構成された土器と評価することができる。頸部から胴部への移行が比較的緩やかで、口縁部文様帯の横S字状文が5単位である点は、加曾利EⅠ式の渦巻文の単位数に近いこと、器形的に類似すること等、近似した様相として改めて認識される。従って、中峠式相当の土器群は、勝坂式の終末期の様相を持つ、加曾利EⅠ式以前の土器群で、各種の系統要素が複合された土器群で構成されていることが明かとなろう。

また、第3号集石土壌からは第15図4、6の第Ⅱ群第3類に分類される「焼町土器」系統の土器が出土している。焼町類型は、長野県御代田町川原田遺跡（堤

1997)では勝坂3式と明瞭に伴出しており、群馬県利根川上流域までは比較的安定して分布している様であるが、その分布域はほぼ利根川上流域までの様である(山口1991)。また、焼町類型は勝坂3式から加曾利E式初現期位にまで伴うようであるが、勝坂3式の型式範囲をどの様に捉えるかによって異なるが、堀東遺跡第3号集石土壙出土の焼町類型は所謂中峠式段階と判断され、利根川流域における分布範囲の南限も拡大したものと評価される。

後期初頭Ⅰ期(称名寺Ⅰ式期)

第Ⅲ群第1類とした時期で、その中でも前半期の後期初頭Ⅰ期の称名寺Ⅰ式段階では、古段階の遺構及び土器群は存在しないが、17区で称名寺Ⅰ式新段階の土器群を出土した第7号住居跡が1軒のみ存在する。第7号住居跡はピットのみ検出された住居跡で、柄鏡形と思われるが、削平が著しく全形を見極められない。

遺物はほぼ完形の第66図6の深鉢形土器が出土している。6は「縦位構成2段J字文」土器(石井1992)で、称名寺式5段階(鈴木1990a、1990b)の様相を持つ土器である。巻き込みの強いJ字文は2段構成を採り、無文部分が上下に連なり反転する構成を持つ。ネガ・ポジの反転した構成で、同様の渦巻状のJ字文構成は大宮市A-69遺跡(山形1991)、小室天神前遺跡第37号土壙(田中1973)等に見受けられるが、これ等は2段渦巻文を分割する縦位区画要素が発達しておらず、渦巻文主導型で本遺跡6よりもやや古相を持つ。

6は2段渦巻文が3単位に配されるもので、左右対称的な縦位区画文で分割されており、都合6単位となる。しかし、縦位区画モチーフは、口縁部の縄文帯から直接垂下する構成を採るが、1箇所のみ原則が崩れている。また、縦位区画モチーフの下端は、2段渦巻文を取り巻く多重線を構成し、渦巻文の下端部を解放する構成を採る。類似する描出法は、貝塚山遺跡第16号住居跡(笹森1985)出土土器に見られる。さらに、第7号住居跡出土の第66図7は、渦巻状J字文外側の描線が隣接する描線と連結しており、無文部が閉塞される

構成を採る。鎌倉公園遺跡(山形1984)で類似する構成を採る土器が出土している。この末端を閉塞する構成には、各種の系統要素が想定される。

以上、第7号住居跡出土土器は称名寺式の中段階である第5段階、もしくはIc段階(今村1977)頃に位置付けられる土器群であるが、その中でもやや新しい様相を持つものと判断される。

後期初頭Ⅱ期(称名寺Ⅱ式期)

第Ⅲ群第1類の後半の段階である、称名寺式の新しい段階では、11区の柄鏡形敷石住居跡と考えられる第5号住居跡が1軒、5区の第4号土壙、15区の第23号土壙が存在する。その中で、第23号土壙は流れ込みの遺物と把握され、縄文時代の土壙からは外しておきたい。また、5区のグリッドから称名寺式土器は出土しておらず、区画内に列点文を施文する堀之内Ⅰ式土器が検出されていることを考慮すると、第4号土壙出土遺物も時期判定が難しくなる。包含層では住居跡の存在する11区、13～14区から列点文を主体とする称名寺式新段階の土器群が出土している。従って、称名寺Ⅱ式期は11区、谷を挟んだ南側の13～14区が主な生活領域と判断され、15区南部にも若干の遺物分布が認められる。

第5号住居跡は床面に散漫ではあるが拳大前後の礫が敷き並べてあり、部分的には明らかに縁石状に大きな石が組まれていた。敷石は炉付近と、張り出し部分に顕著に見られたが、柱穴周辺では不明瞭となっている。当初流れ込みの礫と思われたが、住居跡周辺の調査区では殆ど礫が検出されないため、第5号住居跡が敷石住居跡と判断された。

第5号住居跡出土土器は、列点文系土器を主体として、縄文系土器も僅かに混じっている。縄文系土器はモチーフが簡素化し、単位文化する傾向があり終末期の様相が窺われる。また、列点文系土器もモチーフの大柄化、簡略化が窺われ、縄文系土器と同様に称名寺式終末期の様相を持つ土器群と捉えられる。

包含層出土土器では第51図111～119の様に、R字

状モチーフに列点文を施文する構成、第71図4～15の様に幅狭な併行沈線で捕らわれないモチーフを描き列点文を施文するなど、やはり終末期の様相を示している。口縁部が波状を呈するものが多く、第73図57～60の様な把手が付き、波状口縁土器では口縁部に沈線は巡らされない(鈴木1998)。しかし、第71図4の様な平縁土器では盲孔を繋ぐ沈線が施文され、口縁部文様帯が成立している様である。大半の土器群が称名寺式最終末の7段階に位置付けられるものと思われるが、沈線文描出のみの土器群が殆ど見られない。列点文も堀之内式初頭にまでダイレクトに継承されている。

また、第5号住居跡からは第35図2の壺形土器や、第36図17の胴部破片の様に、堀之内1式古段階の土器と区分し難い土器片も含まれている。2の壺形土器は円孔の開く把手を持ち、沈線が巡る口縁部文様帯が設置され、胴部が隆帯で区画されている。口縁部内面は受け口状を呈し、蓋受け部分が作り出されている。同様なものに第71図16がある。16は口唇部及び内面蓋受け部分がよりシャープに作られており、若干捻りの入る渦巻文が橋状の把手を構成し、把手部分から隆起線のモチーフが展開されている。第5号住居跡の2よりも古相を帯びているが、両者とも器形や隆起線描出、蓋の受け口が意識されるなど、瓢形土器からの口縁部変化(鈴木1992)と、北陸地方の三十稻場式との影響関係(阿部1990)が看取される。

以上、称名寺式終末期の土器群は、型式要素は称名寺式と認識されるものの、そのモチーフ構造の変容や、残存性等を考慮すると、堀之内式初頭期の土器群と大変区分し難い土器群であることが理解される。

後期前葉Ⅰ期(堀之内1式期)

第Ⅲ群第2類とした後期前葉の堀之内1式期は、現在4細分(阿部1987)や5細分(石井1993)が検討されている。本遺跡においても時間的な幅が看取されるが、明確な細分根拠を持つ一括資料がないため、ここでは「シンポジウム堀之内土器」(市川考古博物館1982、1983)の古・中・新の3細分に準拠しながら概観して

行きたいと思う。しかし、各時期において十分な内容を提示し得ず、大きく古・新段階の様相に分けて概観したい。

堀之内1式期の住居は、6区の第2号住居跡と11区の第6号住居跡が存在する。また、土壇では2区第1号土壇、8区第8・9・11・12・13号土壇、14区第20号土壇がある。第20号土壇は第68図1の大きな完形深鉢形土器が出土しており、台地の肩部に構築されていること等を考慮すると、甕棺を伴う土壇墓と思われる。これ等の遺構の内、最も古段階なものとして第1号土壇、新しい段階のものとして第2号住居跡、第9・11・13号土壇があり、他は概ね古から中段階に位置付けられよう。

包含層では各ブロックで堀之内1式土器が出土しており、広範囲に分布することから、堀東遺跡の主体的な時期と認識される。特に、6～8区は遺構、出土遺物が最も多く、中心的な地区と思われる。

さらに細かな時期で見ると、古段階の土器は5区、6～8区、11区、13～14区、15～17区で出土しており、堀之内1式の中でも最も主体となる時期である。新段階の土器群は出土量も少なく、11区、13～14区に纏まっている。

住居跡の検出状態は良好ではなく、プランは柄鏡形住居になるものと思われるが、第6号住居跡が炉体土器と一部の柱穴、第2号住居跡が方形のプランのみ検出されており、全体形を窺い知るものはなかった。第6号住居跡の炉体土器第38図1は、円孔を巡らす口縁部文様帯を持つ懸垂文系の土器で、概ね堀之内1式中段階の土器である。また、第2住居跡第11図2～4は同一個体と思われ、無文の頸部が開き、胴部に充填縄文を施し、懸垂文系のモチーフを描く小仙塚類型(鈴木1999)と思われる新段階の土器群である。

本遺跡出土の堀之内1式古段階の土器群は、包含層出土のものが多く、第1号土壇で良好な一括資料が出土している。第27図1は口縁部を欠損するものの、胴部文様帯のモチーフ構成が辛うじて把握される土器である。胴部には称名寺系のJ字文系のモチーフを4

単位で描き、モチーフ間に雨垂れ状列点文を施文する。J字状モチーフから閉塞しない平行沈線が垂下し、このモチーフ構成が列点文と共に称名寺式終末期のJ字文の構成から系譜するものであることは明らかである。綱取系のJ字状及び0字状文から垂下する銚先状文との構成からでは、垂下する沈線部分にS字状のアクセントを付けることから、これ等の系譜の違いは明らかであろう。良く類似し、基本的な構成を残す土器として、東京都稲城市平尾台原遺跡第1号土壙出土土器(小谷田1981)がある。この土壙からは、他に懸垂文系の土器やJ字文を3本沈線で横連結する系統の土器が出土しており、堀之内1式の中でも最古段階ではなく確定している段階の土器群であることは明らかである。また、本遺跡第1号土壙第27図2は沈線の巡る口縁部文様帯と、充填縄文上に3本沈線によるJ字文の横連結モチーフ構成を持つ土器で、称名寺式新段階とされる茂沢類型(鈴木1999)の系譜下にあることは明かで、環状貼付や小さなJ字文等を持つことから綱取I式との関連も窺える。

堀東遺跡の周辺では、深谷市明戸東第28号住居跡(磯崎1989)から、堀東遺跡第1号土壙に先行する称名寺式第7段階の良好な一括土器が出土している。沈線文のJ字文も構成が崩れており、把手の形状等も堀之内1式段階と区分し難いことから、かつてこの段階から堀之内1式が成立するのではと考えたことがある(金子1997)。この場合の堀之内1式の内容定義が難しいが、明戸東遺跡で伴っている茂沢類型土器の成立と東北系土器群の変革期を一つの基準とした。明戸東遺跡例は沈線が完全に巡らないまでも、口縁部文様帯が確立している様子が窺える。しかし、全体的に堀東遺跡より古相を持つことから、明戸東遺跡から堀東遺跡への変遷は明かであろう。従って、堀東遺跡を堀之内1式確立期、明戸東遺跡をそれ以前の混沌とした堀之内1式成立期と認識して置きたいが、今後、茂沢類型と関東東部及び東北南部の該期土器群との関係性が明らかになった段階で、堀之内1式土器の成立過程を再検討していきたいと考えている。

他の、堀之内1式古段階の土器群では、第32図52、第47図5～27、第71図20～28、第73図62～70の様な、口縁部文様帯を持ち、沈線文描出に列点文を持つような所謂下北原系の土器群が目立つ。J字文を横連結する土器群は第48図49～63に見られ、56～61はJ字文を縦位2段構成で描き、称名寺式茂沢類型との関連が強いものと認識される。懸垂文系土器は第6号住居跡の炉体土器第38図1、第12号土壙第40図9、第48図64～67等、量的に少ない。また、第49図71～79、第51図121～123の様な東関東的な縄文系の堀之内1式土器も非常に少ない。

さらに、量は少ないが第Ⅲ群第4類とした第32図48、第47図3、4、41、第74図86の様な綱取1式系の土器群が出土している。この綱取1式系土器がどの様な堀之内1式と、または、称名寺式終末期の土器群と伴うかが明らかになれば、堀之内1式土器の成立過程及び型式内容をより明らかにし得るものと思われる。

堀之内1式新段階は、朝顔形深鉢に多重沈線でモチーフを描く土器が13～14区で纏まって出土している。しかし、出土量が少なく、他に組成となる土器群も判然としない。第13号土壙や11区包含層出土の懸垂文系の第51図131、第52図136～139、箱状の把手を持つ同一個体の132、135は、中段階から新段階にかけての様相を持つ。いずれにしても量的に少なく、堀東遺跡で主体となる時期ではなく、次の堀之内2式への変化変遷が辿り得ない状況を呈している。

後期前葉Ⅱ期(堀之内2式期)

第Ⅲ群第3類とした堀之内2式の段階である。堀之内1式同様、堀之内2式土器も各氏が細分案を提示し(今橋1980、石井1984、小川1984、阿部1998)、3～4細分が大方の認知を受けているようであるが、ここでは3段階の変遷を意識しつつ土器群を検討していくことにする。しかし、やはり階梯差を保証し得る様な一括性は乏しく、型式学的な判断に頼らざるを得ない点が多い。

堀之内2式期の住居跡は、7区の第3号住居跡、8

区の第4号住居跡が存在し、土壌は8区第14・15号土壌、11区の第17・18・19号土壌が存在する。特に、第17～19号土壌は無文の大形土器が、土壌底部付近から出土していることや、纏まって台地の肩部に存在することなど等、堀之内1式段階の第20号土壌と同様相を呈し、甕棺を伴う土壌墓と認識される。

堀之内2式土器も1式同様比較的分布範囲が広く、数片までを含めれば、包含層の6～8区、11区、13～14区、15～17区で出土しているが、7～11区の遺構が検出されている地区に限定される様である。

第3号住居跡はピット及び掘り方部分のみ存在し、炉の位置から柄鏡形住居跡の全形が確定された。遺物は殆ど無く、堀之内1式新段階の口縁部破片と、2式土器が出土している。また、第4号住居も同様相を呈し、炉と周辺のピットから住居跡を復元したものである。遺物は炉より出土したもので、堀之内1式土器も含むが、堀之内2式土器の朝顔形深鉢土器が出土している。

堀之内2式段階で問題となるのは、墓壙と認定した第17～19号土壌の土器組成である。この土壌が存在する地点は、当初住居跡を想定して調査を進めたが、床面レベルの不一致や、大形破片の出土状況から土壌群の群在状態が判明した。従って、明確な伴出関係を掴むことが難しく、土器群の混在をも含めて報告せざるを得ない状況に至った。土器群の出土状態は第41図に示した通りで、報告の中ではかなり広い範囲の土器群が混在してしまっている。ここでは土壌範囲として推定したプラン内の土器群について、改めて型式学的な検討を行いたいと思う。

第17号土壌出土土器は、第42図1、2、6、8、9、10、15、23～25である。1の無文土器以外、破片資料で、時期を決定できる土器群が存在しない。15、23は1式か、2式でも古い様相を持つ。朝顔形深鉢でも2、6、8の様に、それぞれ様相が異なり時期を決定できない。8の様に口唇裏に内文を持つ土器は、終末的な様相を持つ。

第18号土壌出土土器は、第43図1、2、5、6であ

る。また、同図3、4、8は隣接して纏まって出土している。土壌内共伴としても良い出土状況であるが、土器群に若干の差異が認められるため、分けて考えることにする。第18号土壌では無文土器5、入組み渦巻文土器1、6、崩れた三角区画文土器2が出土していることになるが、いずれもモチーフ構成が崩れている点が特徴となる。1は口唇上と口唇外端部に沈線を巡らし、口唇直下に細かな刻みを施す隆帯を配して、角頭状を呈する口唇上に斜位の細かな刻みを施す。口縁部区画隆帯が口唇部近くまで迫り上がる点や、口唇部上への刻み、モチーフの乱れ等から、2式でも新しい段階に位置付けられる特徴を持つものと思われる。同じ渦巻文を持つ6は区画隆帯を持たず、角頭口唇部裏に断面の丸い沈線を巡らしており、やはり新しい段階に位置付けられよう。口縁部における同様な特徴は、三角区画文の乱れたモチーフ持つ2にも見受けられる。従って、第18号土壌出土土器群は、堀之内2式の新しい段階に位置付けられるものと思われる。

第43図3、4、8は纏まりのある出土状態を示していたが、型式学的にも非常に近い関係にある。先ず、文様区画に縦位区画を持つ点が指摘できる。4は櫛状の縄文帯で上下左右に対向する三角区画を施すが、縦位区画を基準にすることで、このモチーフが成立する。8は胴部破片であるが、三角、菱形区画文の基調部分に縦位区画線が存在する。3は菱形と楕円モチーフを横位連結するモチーフ構成で、区画内に一筆書き状の多重沈線を沿わせて施文する。また、口縁部と文様帯区画隆帯が一体化しており、口唇外端部に縦位の細かな刻みを施している。文様構成に縦位区画要素を残していること、区画内に多重沈線を施文することなどを考慮すると、堀之内2式でも中段階の様相を持つものと思われる。

第19号土壌出土土器に関しては、周辺との混じりは認められず、第44図1～10が相当する。遺跡全体を通して珍しいほど、小仙塚類型に近い土器群が出土している。1は朝顔形深鉢土器で、沈線の三角区画文を施すが、縄文は施文しない。2は頸部が括れ胴部が張

り無文の口縁部が開く器形と思われ、8字状貼付文を取り囲む多重沈線が、対称的に開くモチーフを描く。モチーフ間は、縦位の懸垂文が分割する。4は広口短頸壺の様な器形を呈し、胴部に口縁部から垂下す隆帯を中心とする半円形文と、捻りの加わった懸垂文とを組み合わせた対称的なモチーフを描いている。半円形文間に配される懸垂文は、U字状短沈線で連結され、第52図139の様な堀之内1式段階の懸垂文の系統要素として理解される。2、3とも捻りの入った対称的な構成を採り、主モチーフを3本沈線で描く点が類似し、懸垂文系のモチーフからの変化と思われるが、1の朝顔形深鉢の共伴を考慮すると、堀之内2式の中段階の位置付けが想定され、その中でもやや古相を示すものと判断される。

それでは、それぞれの土器群を他の遺跡事例と比較して位置付け等を検討してみたい。

まず、入組み渦巻文系の第43図1は口縁部の作りや、文様帯下端区画モチーフの不明瞭性等から、新しい段階に位置付けた。この渦巻文は堀之内1式終末段階からの系譜で捉える考え方(阿部1994)と、2式の中でもやや遅れて成立し、1式との間の疎通にけることを認める考え方(石井1984)がある。何れにしても、1式に見られる描線の曲線化と、円形ないしJ字状・渦巻き状のモチーフの相乗効果で渦巻文が生成されるものと思われるが、その背景に北陸の南三十稲場系の曲線化要素や、東北的十腰内系の渦巻連結構成法の影響が考えられ、在地系の要素を交えて広範囲に亘る土器群相互の影響関係の中で、堀之内2式の渦巻文構成が成立しているものと考えておきたい。本遺跡の渦巻文は、2式古段階の土器群が存在しないため、その在地的成立過程を検討し得ないが、遺跡内においては出土量が多く、第49図84～90の様に中段階的な様相を持つが、第45図18は口縁内面に2本沈線を巡らす様な新しい段階の土器群も存在している。

深谷市明戸東遺跡(磯崎1989)第22号住居跡からは、2式でも最古段階ではないにしても古い様相を持つ良好な一括土器が出土している。渦巻文土器と、菱

形区画内多重沈線充填文土器、縦位区画を伴う三角区画文土器で、連携渦巻文の注口土器も出土している。第22号住居跡の渦巻文は縄文こそ施文しないが、3本沈線の整然とした構成を持ち、堀東遺跡第18号土壙とは時間差が看取される。また、菱形区画内多重沈線充填文土器は堀東遺跡第43図3と同様相を持ち、明瞭な時間差を指摘し得ない。第43図3、4、8の纏まりは、縦位区画を持つこと等から、若干の差異はあるものの明戸東遺跡第22号住居跡出土土器と同段階に位置付けられる可能性がある。区画内に多重沈線を施文する構成は、東関東的な要素であり、2式の新しい段階にまで系統するかは不明瞭であるが、古から中段階位に見られることが多い。第45図16、第49図80も同様に中段階位までの段階に位置付けられよう。

この菱形文を連結する構成は、区画内充填沈線文が抜けると、大宮市御蔵山中遺跡(山形1989)第44号土壙出土土器の構成となり、間に楕円文を挟む構成は群馬県境町北米岡遺跡(谷藤1990)で出土している土器へ系譜するものと思われる。御蔵山中遺跡第44号土壙では口唇部に襞状の押圧を施す土器が出土しており、堀東遺跡第49図83と類似する。

堀東遺跡第19号土壙の第44図4は、同図2と持ち合わせている要素を合わせると、所謂小仙塚類型となる。4には充填縄文が施されるが、口縁部が短く成形されている。口唇部上から垂下する鎖状の隆帯は、幅広口縁部に垂下する隆帯の名残りと思われ、無文の口縁部が短く整形されるのは、朝顔形深鉢の口縁部の影響下にあるものと判断される。朝顔形深鉢の幅広無文口縁部に口唇上から短隆帯が垂下する構成は、騎西町修理山遺跡(吉田1995)第231号土壙出土土器に見られる。この短隆帯が口唇部上から垂下する様相は、第43図4の縦位区画文を持つ朝顔形深鉢の8字状貼付文が口唇上に跨ると同様相として把握される。従って、時間的に近い位置付けが可能となろうか。修理山遺跡例も、文様帯に縦位区画を持っている。また、この短隆帯は、8字状貼付文と共に、2式の新段階に見られる口縁部の2本隆帯間を繋ぐ隆帯へと変化するものと思われる

る。この2本隆帯の最も古い段階は、原出口遺跡（石井1995）第20号住居跡覆土から出土している。垂下隆帯は口縁部の突起下、もしくは区画の起点部に施されており、胴部文様の配置や起点を規制している様である。

第44図4は文様構成が貝の花貝塚（八幡1973）第28号住居跡出土の小仙塚類型の土器に類似し、本来の器形もこの様な器形が想定される。県内では桶川市狐塚遺（金子1993）跡第53号土壙から、2式古段階の小仙塚類型土器が出土している。

以上、土壙出土土器群は、第43図3、4、8の纏まり、第19号土壙が中段階でもやや古相を持つ段階、第18号土壙が新段階もしくは、中段階でも新相を持つ段階に位置付けることが可能となろう。

さらに、第74図88は堀之内2式の中でも興味の持たれる土器であり、楕円区画を挟み、上下に対称的なモチーフ構成は、横位突出文（石井1984）を祖形とするもので、縦位区画文が消失した段階の土器として位置付けられよう。

堀東遺跡の堀之内2式土器は、朝顔形深鉢を主体とし、少量の小仙塚類型を持つもので、所謂下北原式系の懸垂文系土器が殆ど見られなくなる。地域的、もしくは段階的な特徴なのであろうか、県内東部地域の修理山遺跡等との相違も少なからず存在している。

後期中葉期（加曾利B式・曾谷式期）

引用参考文献

阿部芳郎1987「縄文時代後期前葉型式群の構造と動態—堀之内1式と東北地方の型式群の関係について—」『駿台史学』第71号

阿部芳郎1990「北陸北半地域による後期前葉土器型式の再検討—三十稻場、南三十稻場式の構成と変遷—」『信濃』第42巻第10号

阿部芳郎1998「堀之内2式土器の構成と地域性—下総台地における堀之内2式土器成立期の様相—」『縄文時代』第9号

石井 寛1984「堀之内2式土器の研究（予察）」『調査研究集録』第5冊 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団

石井 寛1992「称名寺式土器の分類と変遷」『調査研究集録』第9冊 横浜市ふるさと歴史財団

石井 寛1993「牛ヶ谷遺跡・華蔵台南遺跡」港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告XIV

第Ⅲ群第5類とした時期である。遺物量はごく少量で、全体からすれば1%にも満たないであろう。

加曾利B式は5区のみから出土している。とても様相を把握できるほどの量ではなく、本遺跡の堀之内2式からの系統性は不明な点が多い。時間的断絶が存在するのか、在地的堀之内2式の上に加曾利B式が被さる形で浸透してくるのか、今後の資料の増加を待つ末部分が多いが、本遺跡の堀之内2式終末段階では、文様帯が幅狭の1帯系になるものや、楕円区画を施すものの、内文の発達したもの、突起の発達したもの等は殆ど出土していないことから、若干の時間的断絶が想定される。

また、曾谷式段階では、11区で深鉢の口縁部が1点出土したのみである。遺跡の整理に際して、土偶の帰属を推測する土器片を探していたが、土偶と時期のあう土器片が1点のみ存在した。土偶の出土地点も11区であることから、土偶の時期は曾谷式段階と推定される。

以上、堀東遺跡の縄文時代について、時期別に概観してきたが、遺構の様相と土器群の様相を分けて説明を加える予定であった。土器群については関連資料を図示する予定であったが、時間と紙面の都合で叶わなかった。大変解りにくいまとめとなってしまったが、堀東遺跡のあらまは解説できたと思う。出土土器群については、後日、機会を改めて検討したい。

- 石井 寛1995「川和向原遺跡・原出口遺跡」港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告X IX
- 石塚和則1986「縄文時代中期中葉の住居形態」研究紀要1986 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 磯崎 一1989「新田裏・明戸東・原遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第85集
- 市川考古博物館1982「シンポジウム堀之内式土器資料集－各地の堀之内式土器とその変遷－」
- 市川考古博物館1983「シンポジウム堀之内式土器の記録」
- 今橋浩一1979「中妻貝塚出土の堀之内2式土器について」『取手と先史文化』上巻
- 今村啓爾1977「称名寺式土器の研究（上・下）」『考古学雑誌』第63巻第1・2号
- 小川和博1984「堀之内2式土器編年の課題」『奈和』15周年記念論文集
- 金子直行1993「狐塚遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第124集
- 金子直行1997「戸崎前遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第187集
- 金子直行1999「縄文前期終末土器群の関係性－十三菩提式土器と集合沈線文系土器群の関係を中心として－」『縄文土器論集』縄文セミナーの会
- 小谷田政夫1981「平尾台原遺跡」稲城市遺跡調査会
- 笹森健一1985「貝塚山遺跡発掘調査報告書－第2地点－」富士見市遺跡調査会調査報告第24集
- 実川順一1987「恋ヶ窪南遺跡発掘調査概報I」国分寺市遺跡調査会
- 鈴木敏昭1983「台耕地（I）」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第27集
- 鈴木徳雄1990a「称名寺式土器に関する交流研究会の記録」『調査研究集録』第7冊横浜市埋蔵文化財センター
- 鈴木徳雄1990b「第4回縄文セミナー縄文後期の諸問題」縄文セミナーの会
- 鈴木徳雄1992「縄紋後期注口土器の成立－形態変化と文様帯の問題－」『縄文時代』3
- 鈴木徳雄1998「称名寺式の文様変化と論理－称名寺式と堀之内1式の文様構造－」東海大学校地内遺跡調査団報告
8
- 鈴木徳雄1999「称名寺式関沢類型の後裔－堀之内1式期における小仙塚類型群の形成－」『縄文土器論集』縄文セミナーの会
- 田中 信1981「小室天神前遺跡」伊奈町天神前遺跡調査会
- 谷藤保彦1990「第4回縄文セミナー縄文後期の諸問題」縄文セミナーの会
- 堤 隆1997「川原田遺跡」御代田町埋蔵文化財発掘調査報告書第23集
- 村田章人1997「原／谷畑」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第179集
- 山口逸弘1991「『新巻類型』と『焼町類型』の文様構成」『土曜考古』第16号
- 山形洋一1984「大宮公園遺跡発掘調査報告」大宮市遺跡調査会報告第9集
- 山形洋一1989「御蔵山中遺跡I」大宮市遺跡調査会報告第26集
- 山形洋一1991「A-69号遺跡」大宮市遺跡調査会報告第31集
- 八幡一郎1973「貝の花貝塚」松戸市文化財調査報告第4集
- 吉田 稔1995「修理山遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第158集

2. 堀東遺跡出土の弥生土器について

堀東遺跡の調査における主たる成果の一つとして、11区を中心に出土した弥生土器があげられる。弥生時代に属する遺構は、今回の調査では確認されておらず、これらの遺物はいずれも遺物包含層から一括で出土した。ゆえに層位的分別の手がかりは得られないが、それらは概ね弥生時代前期末から中期中葉にわたる型式内容を含んでいる。本節では、これまでに提示された土器編年の枠組みに照らしつつその概況を確認するととどめる。全体にわたる詳細な分析は、今後の研究に委ねることを許されたい。

なお、文中アラビア数字が断りなく主語となる場合は、それらは本書第55～64図にかけて使用した遺物番号である。

関東における当該期土器の研究は、1980年代以降、今日的枠組みを形成してきたといえるだろう。その中で石川日出志は、群馬県吾妻町岩櫃山遺跡出土土器の細分とその編年の位置付けを眼目としつつ、甕（「岩櫃山・須和田系甕形土器」＝「甕形土器A」）と変形工字文の型式変化を軸に、前期最新段階から中期前半にかけての土器を3期区分した（石川1985）。「第一期」（甕A1・A2）－「第二期」（甕A3・A4）－「第三期」（甕A5（－）A6）である。

甕A1・A2を指標とする石川編年第1期は、浮線文土器群に後続し、前期最新段階にあたる。岡部町四十坂遺跡、美里町如来堂C遺跡、藤岡市沖Ⅱ遺跡などが相当する。本遺跡出土資料では、いずれも下半を欠くが、192、193は甕A1、195、197は甕A2に分類されるだろう。193の変形工字文帯は浮線文のモチーフを好く伝えており、浮線文土器直後の位置付けと矛盾しない。対象資料中、明らかな古相を示す例だろう。192の胴部文様帯は三角形連繋文が基本形になるとみられるが、下辺の一部は斜傾し、結果、三角形と菱形が連繋するとみられる文様帯は胴径部以下に及んでいる。そこに文様帯の拡張傾向を見出すならばやや降った位置づけが視野に入るが、第1期としておきたい。

195の文様構成は、第1期としては異例と映る。波

状文を含むことから、やや新しく位置付けられるだろうか。ともあれ前期末に位置づけられる一群の存在を確認しておく。

第2期は中期前葉・畿内第Ⅱ様式併行期であり、甕A3・A4が対応する。岩櫃山遺跡、神川町前組羽根倉遺跡が相当する。194は頸部以上を欠くが、磨消縄文手法の文様帯は胴径部より上位に位置し、甕A3と推定される。260などのような、縄文施文の肥厚した口縁部をもつだろう。頸部文様帯は有無を含め特定できないが、前組羽根倉遺跡第1号再葬墓No4土器（書上他1985）に類似点を認めることができる。

甕A5・A6と確定できるものではなく、甕Aの組列に沿って第3期に至ることはできない。しかし本期にあたる上敷免遺跡、続く池上遺跡出土の土器に類する資料は、断片的ながら見出される。壺201は口・頸部のみだが、折り返し口縁の縄文＋沈線文、頸部の横位重畳沈線からなる文様構成は、縦位羽状文が見られないものの上敷免遺跡第5号墓壙P2（関論文実測図3）に近い（関1983、青木1999）（註1）。縦位沈線を横位沈線で挟む379、380、両者を上下に組み合わせる362～365なども、上敷免遺跡1970年代出土資料に認められるモチーフである。203もそれらに伴うだろう。

2条沈線による波状文と流水文風の区画文をもつ壺205は、直接的な類似資料は見出せないものの、池上遺跡出土土器に対応すると思われる。細片だが細頸壺頸部とみられる422もここに含めておく。

420～422などは、より降った位置付けが可能だろう。

近年、石川は、宮ノ台式期前半以前について、第1期（前組羽根倉）－第2期（上敷免・出流原）－第3期（池上・小敷田）－第4期（御新田）とする新たな中期編年案を示した（石川1996）。

堀東遺跡出土資料は、前期末から、時期により多寡はあるものの、概ねその全期にわたる内容を含んでいるといえるだろう。断片的ながら多彩な内容の集積は、付近に継続的集落域が存在することを示唆している。

一点ではあるが12区からは浮線文土器が出土していることも、ここで改めて注目しておきたい。流れを遡上すると縄文時代晩期に至る可能性がある。

また、破碎された管玉を含む玉類は、再葬墓との関連をうかがわせる。それが調査区直近に存在するか、あるいは194など、出土土器のいずれかがそれに付随するかもしれない。

周囲に目を向けると、従来再葬墓出土土器が中期中葉の標識的資料として知られてきた上敷免遺跡は、東方2kmに位置している。1985～87年にかけての発掘調査では包含層から多数の浮線文・浮線文系土器が出土し、またいわゆる「御新田式」土器を伴う住居跡（註2）が検出された。その西に接する上敷免森下遺跡では、1993年の発掘調査にかかり上敷免遺跡再葬墓資料に先行する土器が出土しており、上敷免遺跡一帯においても継続的な展開が認められる。堀東遺跡との関連は、相互の遺跡を理解する上で無視できない。

今回の調査成果は、初期弥生遺跡の分布に新たな一点を加え、沖積地の遺跡ネットワークを密にしたにとどまらず、今後、その動態を明らかにするための資料をもたらしたといえるだろう。

本書例言にも氏名を挙げさせていただいたが、当該期の研究に携わる各氏からは、遺物、図版を前に多くの教示、助言を頂戴した。主体的に対応できなかった筆者の不勉強を忸怩たる思いで実感したものである（註3）。また、それによる理解不足や誤解から、各氏

にとって質量ともに不本意な内容に行きついた恐れは拭いきれない。学恩に報いることは今後の課題とさせていただきます。

（註1）上敷免遺跡出土土器については、関義則による資料提示と分析が知られているが、1977年出土土器については、最近、青木尚久によって帰属遺構が特定され、共伴関係が明らかになった。遺構の名称は、青木によるものを用いた。

（註2）遺物の編年的位置付けは石川1996文献による。

（註3）書上は、北島遺跡出土資料を分析するにあたり、当該期の土器編年について再検討の要を示唆している。すなわち、第14地点③集中区において「大洞A'式の変形工字文の構成を比較的良く留めた」三角形連繫文をもつ甕と、谷口肇によって中期初頭に想定された段階（谷口1993・1996）の標識となる「貝殻原体の波状文プラス横位直線文の紋様帯」をもつ条痕文系の壺が出土していることについて、両者が「同一集中区で出土したことをどう考えるのかが大きな問題である。沖式の土器群が、概して安易に弥生時代前期末に位置付けられることへの警鐘として聞いておきたい。各遺跡土器群の再検討が早急に必要となろう。」（書上1999；513頁）としている。本書報告資料の編年的評価にもかかわる問題だが、何ら取り組むことができなかった。

引用・参考文献

- 愛知考古学談話会 1985『<条痕文土器>文化をめぐる諸問題—縄文から弥生—』資料編I
- 青木尚久 1999「深谷市上敷免遺跡出土弥生土器の共伴関係」『埼玉考古』34号
- 石川日出志 1985「関東地方初期弥生式土器の一系譜」『論集日本原史』
- 1996「東日本弥生中期広域編年の概略」『YAY!』
- 書上元博他 1985「神川村前組羽根倉遺跡の研究」『埼玉県立博物館紀要』12
- 書上元博 1999「縄文時代晩期末～弥生時代中期の土器」『北島遺跡IV』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告第195集
- 栗原文蔵・石岡憲雄 1983「四十坂遺跡の初期弥生式土器再論」『埼玉県立歴史資料館研究紀要』第5号
- 埼玉考古学会 1976『埼玉県土器集成4 縄文晩期末葉～弥生中期』

- 設樂博己 1982 「中部地方における弥生土器の成立過程」『信濃』第34巻第4号
関 義則 1983 「須和田式土器の再検討」埼玉県立博物館紀要10
谷口 肇 1993 「条痕紋系土器の東方への伝播と変容」『翔古論聚—久保哲三先生追悼論文集』
1996 「条痕壺覚書」『YAY！』

発掘調査報告書

- 藤岡市教育委員会 1986 『C11 沖Ⅱ遺跡』
埼玉県教育委員会 1984 『池守・池上』
埼玉県教育委員会 1980 『甘粕山』埼玉県遺跡発掘調査報告書第30集
深谷市教育委員会 1987 『上敷免遺跡』深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書
1994 『上敷免森下遺跡』深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第34集
財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1993 『上敷免遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告第128集

写真図版



8～10区全景(北から)



15～18区全景(北から)



1区全景(東から)



2・3区全景(西から)



4・5区全景(西から)



6区全景(東から)



7区全景(西から)



8～10区全景(北西から)



11区全景(西から)



15・16区全景(北西から)



第 1 号住居跡



第 2 号住居跡



第 3 号住居跡



第 5 号住居跡



第 5 号住居跡



第 6 号住居跡



第6号住居跡埋甕



第7号住居跡



第1号集石



第1号集石



第1号集石完掘状況



第2号集石



第3号集石



第4号集石



第6号集石最上面



第 6 号集石第 2 面



第 6 号集石第 3 面



第 6 号集石第 4 面



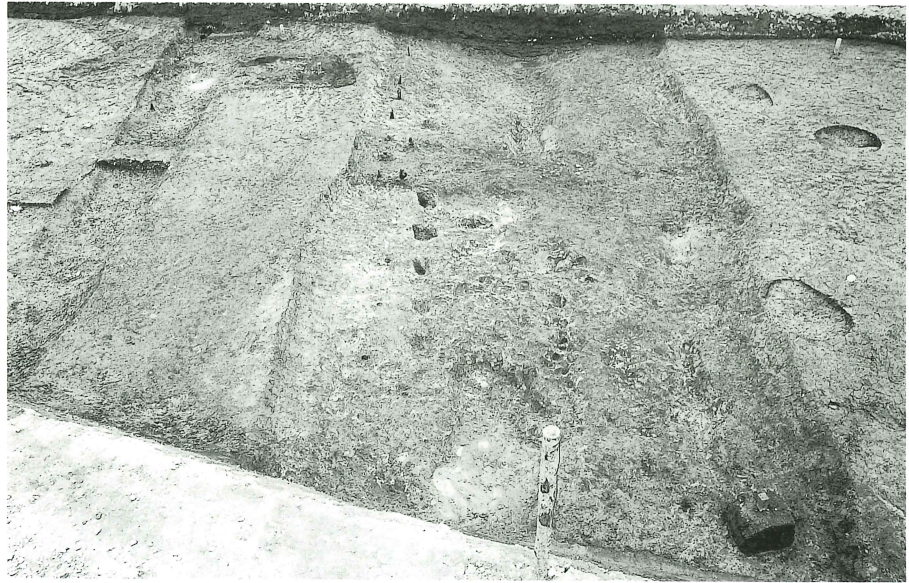
第 6 号集石完掘状况



第 1 号溝跡



第 4 号溝跡



第5・6号溝跡



4区噴砂



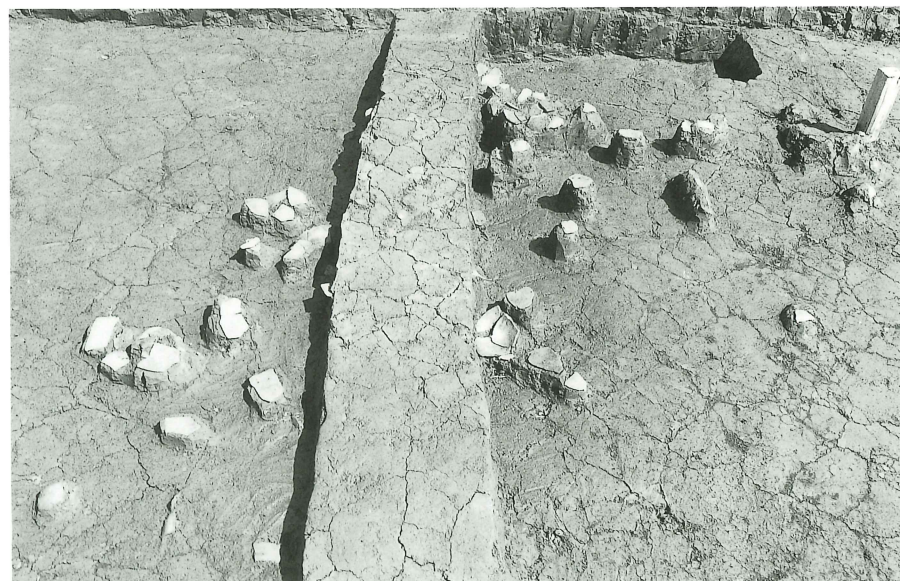
11区遺物出土状況



11区弥生土器（第55図—194）
出土状況



11区弥生土器（第56図—195）
出土状況



16区古墳時代遺物集中部



第17号土壙遺物出土狀況



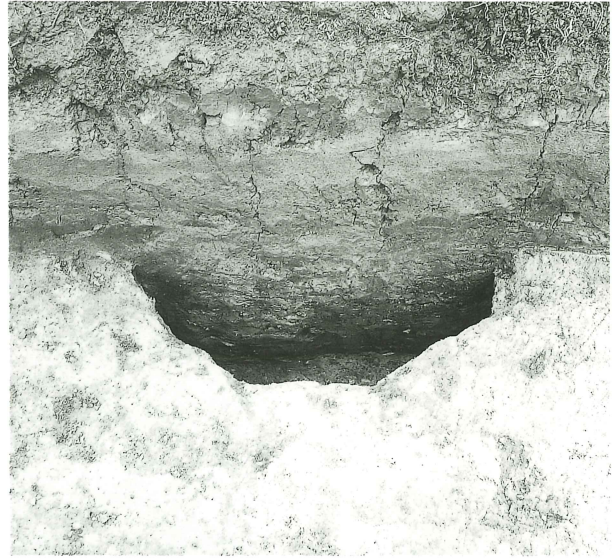
第18号土壙遺物出土狀況



第18号土壙周辺遺物出土狀況



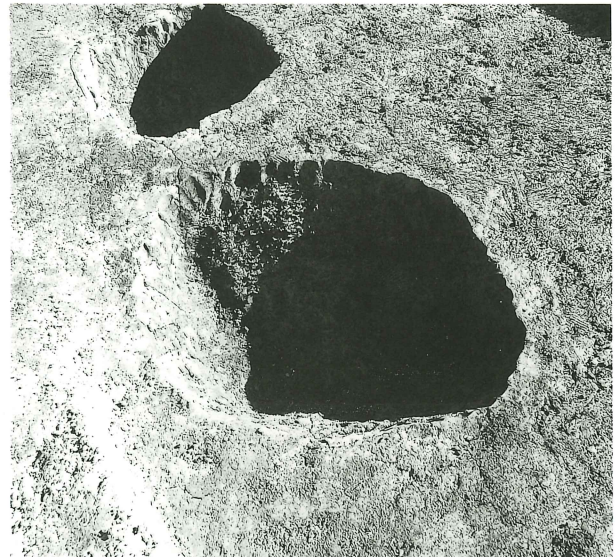
第 1 号土坑



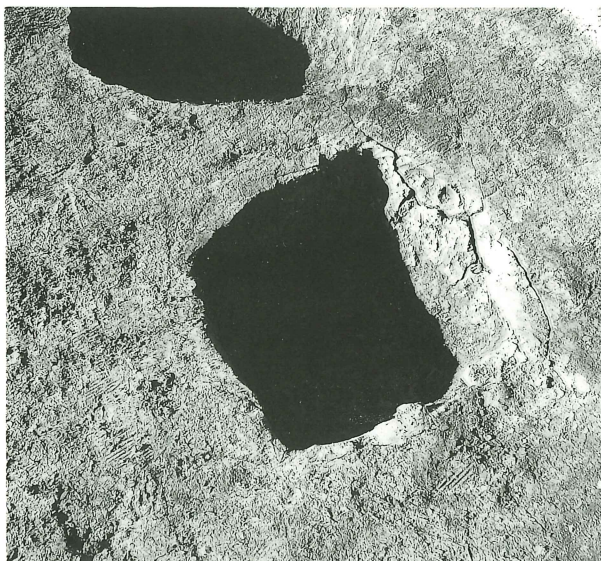
第 2 号土坑



第 4 号土坑



第 5 号土坑



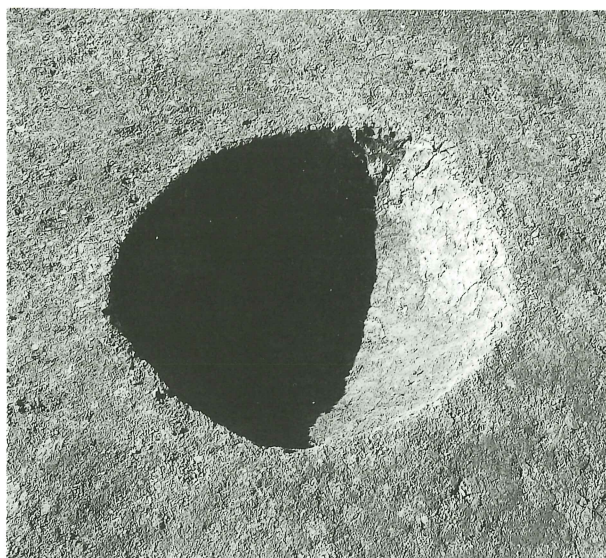
第 6 号土坑



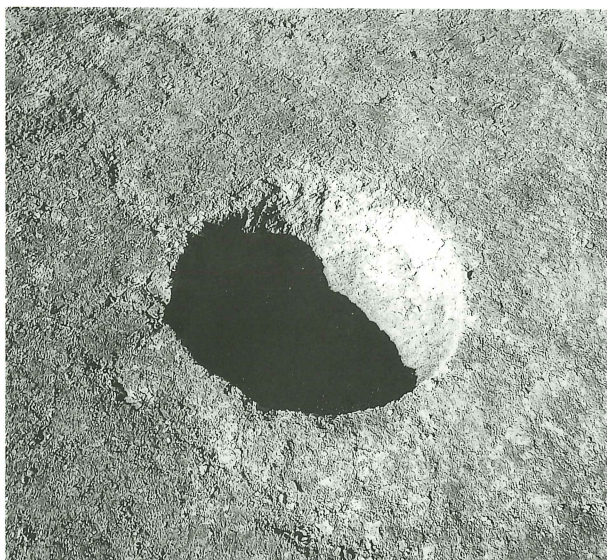
第 7 号土坑



第9号土坑



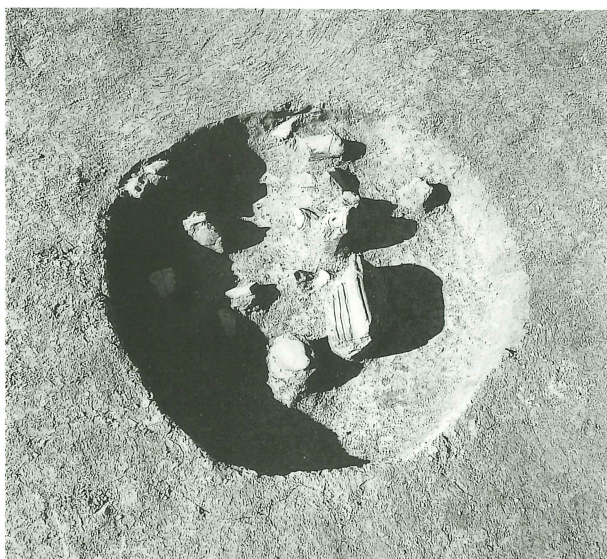
第8号土坑



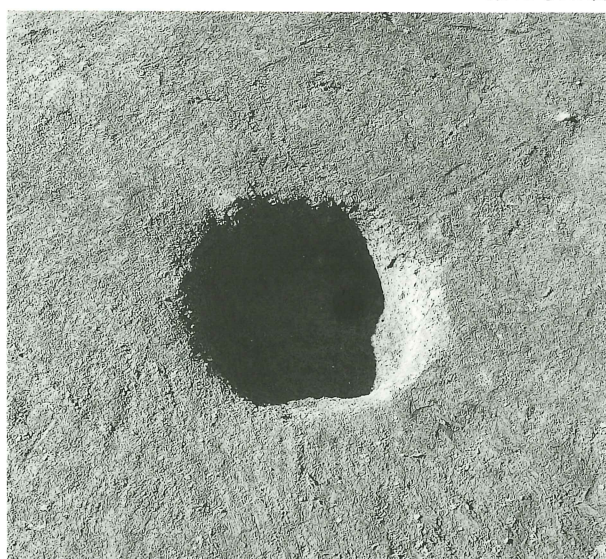
第10号土坑



第12号土坑



第13号土坑



第14号土坑



第15号土壤



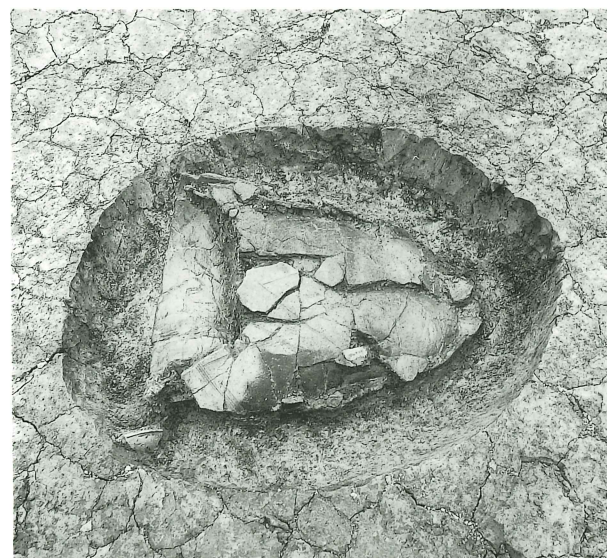
第17号土壤



第18号土壤



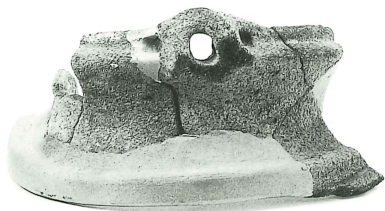
第19号土壤



第20号土壤



第21~24号土壤



第5号住居跡(第35図-2)



第6号住居跡(第38図-1)



第3号集石(第15図-1)



第3号集石(第15図-2)



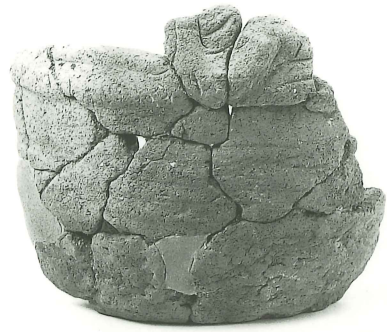
第3号集石(第15図-3)



第6号集石(第20図-1)



第 8 号集石(第24图- 2)



第 8 号集石(24图- 1)



第 1 号土壙(第27图- 1)



第 1 号土壙(第27图- 2)



第17号土壙(第42图- 1)



第18号土壙(第43图- 1)



第18号土壙(第43図-3)



第18号土壙(第43図-4)



第18号土壙(第43図-5)



第19号土壙(第44図-1)



第19号土壙(第44図-2)



第19号土壙(第44図-4)



B-14グリッド(第31図-18)



F-31グリッド(第49図-74)



O-38グリッド(第56図-203)



O-38グリッド(第57図-206)



N-37グリッド(第57図-207)



O-38グリッド(第64図-592・591)